佐賀県文化財調査報告書第163集

吉野ヶ里遺跡

－田手二本黒木地区弥生時代前期環壕出土の土器と石器－

2005年2月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第163集

吉野ヶ里遺跡

二〇〇五　佐賀県教育委員会

PRINTED WITH SOY INK この印刷物は「大豆油インキ」を使用しています。
R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています

1　吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区全景（上空から）

2　田手二本黒木地区　SD0001環壕西側部調査状況（北西から）

3　田手二本黒木地区　SD0001環壕（北から）

4　SD0001環壕土器集中部　出土状況①（東から）

5　SD0001環壕土器集中部　出土状況②（東から）

6　SD0001環壕2アゼ土層断面（南から）

7　SD0001環壕3アゼ土層断面（南から）

8　SD0001環壕4アゼ土層断面（南から）

9　SD0001環壕6アゼ土層断面（南から）

10　SD0001環壕7アゼ土層断面（南から）

11　SD0001環壕8アゼ土層断面（北から）

12　SD0001環壕出土太形蛤刃石斧

13　SD0001環壕出土石庖丁

14　SD0001環壕出土スクレイパー類

15　SD0001環壕出土砥石

序

吉野ヶ里遺跡の発掘調査は、神埼工業団地造成計画に伴い、昭和61年5月から開始しました。その調査では、国内最大規模の弥生時代環壕集落跡や銅剣を副葬した甕棺墓を内部主体に持つ墳丘墓、甕棺墓の列埋葬、巴形銅器の鋳型や中国製鏡片等、数々の遺構、遺物が発見され、大いに注目されました。遺跡には、全国から100万人を超える人々が訪れるとともに、遺跡の重要性から工業団地事業の中止と遺跡保存が決定されました。平成4年には、国の特別史跡として指定されたほか、国営公園として整備・活用されることが決定し、平成13年春には、『国営吉野ヶ里歴史公園』として開園し、多くの来園者で賑わっています。

また、吉野ヶ里遺跡の範囲や性格を確認するため、平成元年から今日まで吉野ヶ里遺跡の発掘調査を継続しています。この一連の調査で、大規模な環壕の中に二重の壕で囲まれた北内郭、南内郭と呼ばれる二つの内郭が同時に存在していたことが判明したほか、祭壇と考えられる盛土遺構の存在や青銅器鋳造関連遺構など新たな発見が相次いでいます。これらの発掘調査の成果は、吉野ヶ里歴史公園の整備にも反映されているところです。

吉野ヶ里遺跡は、弥生時代前期から終末期にかけて継続的に存続した遺跡ですが、主に弥生時代後期を主体として整理作業や公園整備を進めています。このため、弥生時代前期の様相については、これまで充分な検討が行われていませんでした。今回、吉野ヶ里遺跡の南部にある田手二本黒木地区の弥生時代前期の環壕から出土した土器や石器の分析を行いました。その成果を記したのが本調査報告書になります。今回の分析作業を通じて吉野ヶ里遺跡は、弥生時代前期から佐賀平野の拠点集落であることが改めて認識できたばかりでなく、土器や石器の使用方法から当該期における人々の暮らしの一端を垣間見ることができました。

本書が、吉野ヶ里遺跡のみならず、北部九州における弥生時代研究の一助になれば、幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたり適切な指導を頂きました文化庁はじめ、佐賀県文化財保護審議会の諸先生方、今回の調査報告書をまとめるにあたり、整理作業を進めていただいた作業員の方々、また、原稿にご執筆頂きました方々には、心から感謝申し上げます。

平成17年2月

佐賀県教育委員会

教育長　吉　野　健　二

例　　言

本書は、神埼工業団地造成に伴い昭和63年（1988）から平成元年（1989）にかけて発掘調査を実施した吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区Ⅱ区のSD0001環壕から出土した土器および石器に関する調査報告書である。

発掘調査は、佐賀県土地開発公社の委託を受けて佐賀県教育委員会文化課が主体となり、神埼町教育委員会、三田川町教育委員会の協力を得て実施した。調査にあたっては、文化庁、奈良国立文化財研究所（現独立行政法人奈良文化財研究所）、国立歴史民俗博物館等の機関及び国内の大学、地方自治体、考古学研究者の協力・助言を得た。

調査担当　佐賀県教育委員会文化課　七田忠昭・森田孝志・田島春己、神埼町教育委員会　桑原幸則・田代成澄、三田川町教育委員会　草野誠司

整理担当　七田忠昭・森田孝志・田島春己・細川金也・山口良弥・廣瀬雄一（佐賀県文化課）戸塚洋輔、天賀光広（文化課調査補助員）

なお、石器の石材鑑定や分類、土器の分類等、本報告書整理作業には、以下の方々の協力を得た。また、※がある方々には、本報告書の各項目の執筆を賜った。

石材の鑑定	藤井　厚志	北九州市立自然史・歴史博物館
※剥片石器・礫石器	敦賀啓一郎	北九州市立自然史・歴史博物館
※土器	中野　充	佐賀市教育委員会
※大陸系磨製石器類	能登原孝道	九州大学大学院
※石材・総括	梅﨑　惠司	財団法人　北九州市芸術文化振興財団
※石器のデータベース	天賀　光広	佐賀県文化課調査補助員

（協力者）

渋谷　格（佐賀県文化課）、森田孝志（九州陶磁文化館）、土屋みづほ（京都大学大学院）、城門義廣、渡部芳久、高瀬健太郎（九州大学大学院生・学生）

遺物の実測・トレース作業は、調査員・調査補助員・作業員で実施したが、一部の石器の実測図は業者に委託した。

実測図・トレース作成及び整理作業　秋吉京子、緒方恭子、野口孝子、原口晴美、御厨瑞枝、横枕栄子、戸塚洋輔、江副朋子、上滝光子、村里育子、伊東直子、吉江博子、石松澄子、井　節子、大柿珠美、羽田すま子、江口啓子、平野三枝子、竹下浩子、平石明子、百﨑正子、馬場里美、皆越弘子、鶴田啓子、奥　知恵子、増田好美。

凡　　例

本書で使用する吉野ヶ里遺跡の各地区は、下記の略号を与えている。

TDN　田手二本黒木地区、TDI　田手一本黒木地区、YGK　吉野ヶ里丘陵地区、YNG　吉野ヶ里地区、SYT　志波屋四の坪地区、SSO　志波屋三の坪乙地区、SSR　志波屋三の坪甲地区　SRT　志波屋六の坪甲地区

遺構については、遺構の種別を示すアルファベットの2文字を用いている。

SB…掘立柱建物跡　SD…環壕・溝跡　SH…竪穴住居（建物）跡　ＳＪ…甕棺墓　SK…土坑　SP…土壙墓　ST…古墳その他の遺構

遺構の法量は、m単位、遺物の法量は、cmを原則として用いた。

遺構配置図などの北方位や座標値は、国土座標（第Ⅱ系）を用いた。

本　文　目　次

第１章　調査の経過（細川）……1
　第１節　はじめに ……1
　第２節　調査にいたる経過 ……3
第２章　吉野ヶ里遺跡の環境と概要（細川）……5
　第１節　吉野ヶ里遺跡周辺の地理的・歴史的環境 ……5
　　（１）地理的環境 ……5
　　（２）歴史的環境 ……5
　第２節　弥生時代前期から中期にかけての吉野ヶ里遺跡の変遷（細川）……9
　　（１）吉野ヶ里遺跡における集落の変遷 ……9
　　（２）吉野ヶ里遺跡における墳墓の変遷……11
　　（３）小結……11
第３章　吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区Ⅱ区SD0001環壕（細川）……13
　　（１）田手二本黒木地区Ⅱ区の概要……13
　　（２）SD0001環壕の規模と内容……13
　　（３）SD0001環壕……14
　　（４）小結……17
第４章　田手二本黒木地区Ⅱ区SD0001環壕出土の土器（中野）……19
　第１節　田手二本黒木地区Ⅱ区SD0001環壕出土の土器の概要……19
　　（１）SD0001環壕上層土器集中部出土の土器……19
　　（２）SD0001環壕上層出土の土器……27
　　（３）SD0001環壕中層出土の土器……34
　　（４）SD0001環壕下層出土の土器……37
　第２節　小　結……43
　　（１）分析の方法……43
　　（２）器種組成……43
　　（３）出土土器の層位的変遷……44
　　（４）時間的位置付けと出土土器の様相について……48
第５章　田手二本黒木地区Ⅱ区SD0001環壕出土石器の概要（能登原・敦賀）……53
　第１節　大陸系磨製石器類（能登原）……54
　　（１）石庖丁……54
　　（２）石鎌……59
　　（３）石剣……61
　　（４）磨製石鏃……61
　　（５）太形蛤刃石斧……63
　　（６）縄文系石斧……72
　　（７）柱状片刃石斧……72
　　（８）扁平片刃石斧……74
　　（９）紡錘車……76
　　(10) 砥石……77
　第２節　剥片石器・礫石器（敦賀）……81
　　（１）はじめに……81
　　（２）打製石鏃……81
　　（３）スクレイパー……83
　　（４）二次加工のある剥片……90
　　（５）微細剥離痕を有する剥片……91
　　（６）楔形石器……92
　　（７）石核……92
　　（８）剥片……93
　　（９）磨石・敲石……93
　　(10) 石皿……94
　　(11) おわりに ……94
第６章　吉野ヶ里遺跡弥生時代前期環壕（SD0001）の石器組成について（能登原）……99
第７章　田手二本黒木地区Ⅱ区SD0001環壕出土石器の石材（梅﨑）……102
　　（１）吉野ヶ里遺跡周辺の地質 ……102
　　（２）岩石の名称 ……102
　　（３）岩石の生成過程毎の石器 ……103
　　（４）器種毎の石材 ……103
　　（５）石器生産地 ……103
　　（６）石材産地 ……103
　　（７）産地不明石器 ……104
　　（８）小結 ……106
第８章　まとめ（梅﨑）……108
　附　吉野ヶ里遺跡出土品データベースの作成　（天賀）……109

挿図目次

第 1図　吉野ヶ里遺跡調査区位置図（南部）……2
第 2図　吉野ヶ里遺跡周辺の主な弥生時代遺跡　…7
第 3図　吉野ヶ里丘陵上における集落・墳墓変遷図 ……10
第 4図　SD0001環壕土層断面図（1）……15
第 5図　SD0001環壕土層断面図（2）……16
第 6図　甕･壷の部位名称及び刻目分類図 ……19
第 7図　SD0001環壕2～3アゼ上層土器集中部①……20
第 8図　SD0001環壕2～3アゼ上層土器集中部②……21
第 9図　SD0001環壕2～3アゼ上層土器集中部③……22
第10図　SD0001環壕2～3アゼ上層土器集中部④……24
第11図　SD0001環壕2～3アゼ上層土器集中部⑤……25
第12図　SD0001環壕2～3アゼ上層土器集中部⑥……26
第13図　SD0001環壕上層出土土器①……28
第14図　SD0001環壕上層出土土器②……29
第15図　SD0001環壕上層出土土器③……31
第16図　SD0001環壕上層出土土器④……32
第17図　SD0001環壕中層出土土器①……35
第18図　SD0001環壕中層出土土器②……36
第19図　SD0001環壕下層出土土器①……38
第20図　SD0001環壕下層出土土器②……39
第21図　SD0001環壕下層出土土器③……41
第22図　「亀ノ甲タイプ」甕の形態変遷図　……50
第23図　石庖丁の各部位名称と背部断面形態・孔の穿孔法断面形態による分類……53
第24図　太形蛤刃石斧・柱状片刃石斧の各部位名称 …53
第25図　SD0001環壕出土石庖丁①……55
第26図　SD0001環壕出土石庖丁②……57
第27図　SD0001環壕出土石鎌 ……60
第28図　SD0001環壕出土石製武器類 ……62
第29図　SD0001環壕出土太形蛤刃石斧①……64
第30図　SD0001環壕出土太形蛤刃石斧②……66
第31図　SD0001環壕出土太形蛤刃石斧③……68
第32図　SD0001環壕出土太形蛤刃石斧④……69
第33図　SD0001環壕出土太形蛤刃石斧⑤・縄文系石斧 …70
第34図　SD0001環壕出土柱状片刃石斧・扁平片刃石斧 …73
第35図　SD0001環壕出土紡錘車・磨石・敲石 …75
第36図　SD0001環壕出土砥石①……79
第37図　SD0001環壕出土砥石②……80
第38図　剥片を構成する面と辺及び打面形状……81
第39図　SD0001環壕出土スクレイパー①……84
第40図　SD0001環壕出土スクレイパー②・二次加工のある剥片 …85
第41図　SD0001環壕出土スクレイパー③……86
第42図　SD0001環壕出土スクレイパー④……88
第43図　SD0001環壕出土スクレイパー⑤・微細剥離痕を有する剥片 …89
第44図　北部九州周辺の石器工房と石材分布位置略図 …105
第45図　田手二本黒木地区Ⅱ区前期環壕位置図…143
第46図　SD0001環壕付近遺構配置図 ……144

表目次

表 1　器種組成表……44
表 2　甕形態の層位別組成比率……45
表 3　甕の口径・底径個体数分布……46
表 4　壷形態の層位別組成比率……47
表 5　土器編年対照表……49
表 6　太形蛤刃石斧石材別の幅と厚さの相関……72
表 7　出土剥片の長幅比……93
表 8　SD0001環壕出土石器の組成 ……100
表 9　SD0001環壕下層出土石器の組成 ……101
表10　SD0001環壕上・中層出土石器の組成 …101
表11　吉野ヶ里遺跡にみられる石器の石材 ……107
表12　SD0001環壕出土土器一覧表 ……113
表13　SD0001環壕出土石器一覧表 ……122

巻頭図版

1　吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区全景（上空から）
2　田手二本黒木地区SD0001環壕西側部調査状況（北西から）
3　田手二本黒木地区SD0001環壕（北から）
4　SD0001環壕土器集中部出土状況①（東から）
5　SD0001環壕土器集中部出土状況②（東から）
6　SD0001環壕2アゼ土層断面（南から）
7　SD0001環壕3アゼ土層断面（南から）
8　SD0001環壕4アゼ土層断面（南から）
9　SD0001環壕6アゼ土層断面（南から）
10　SD0001環壕7アゼ土層断面（南から）
11　SD0001環壕8アゼ土層断面（北から）
12　SD0001環壕出土太形蛤刃石斧
13　SD0001環壕出土石庖丁
14　SD0001環壕出土スクレイパー類
15　SD0001環壕出土砥石

図　　版

1　SD0001環壕出土石庖丁①
2　SD0001環壕出土石庖丁②・石鎌・石剣
3　SD0001環壕出土磨製石鏃・打製石鏃
4　SD0001環壕出土太形蛤刃石斧①
5　SD0001環壕出土太形蛤刃石斧②
6　SD0001環壕出土太形蛤刃石斧③・縄文形石斧
7　SD0001環壕出土柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・紡錘車
8　SD0001環壕出土磨石・敲石・スクレイパー
9　SD0001環壕出土砥石
10　SD0001環壕出土剥片石器
11　SD0001環壕出土石核

第１章　調査の経過

第１節　はじめに

本報告書は、佐賀県教育委員会が昭和63年から平成元年にかけて実施した吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区Ⅱ区に係わる発掘調査報告書である。吉野ヶ里遺跡の発掘調査の成果は、すでに幾つかの報告書[1)]に掲載しているが、その内容のすべてについてまとまった報告は行なわれていない。このため、すでに整理作業が終了している地区や遺構を中心として報告を行なうものである。今回は、整理作業の終了している弥生時代の田手二本黒木地区弥生時代前期環壕（SD0001）出土の土器・石器の分析を通じ吉野ヶ里遺跡の成立期について報告する。

今回、試みの一つとして、前期環壕から出土した石器の器種構成や石材の同定を通じ、弥生時代の北部九州における石材の流通及びその取捨選択を考察することにある。吉野ヶ里遺跡の調査では、約10,000点の石器が出土している。その多くは、石器製作時に排出されるチップやフレーク類であるが、製品の数は約4,000点にのぼる。その多くが弥生時代のものであり、石器の一大消費地としての吉野ヶ里遺跡の性格を示す資料である。このため、存続時期が判明しているSD0001環壕跡出土の石器を対象に考察を進める。

また、SD0001環壕から出土した土器は、これまで環壕の時期を決定する一部の資料しか掲載していない。今回、出土した土器を層位ごとに分類し、組成を確認した。その組成や器種毎の比率の変化により、吉野ヶ里遺跡の土器の変遷だけでなく、佐賀平野の土器編年にも貢献できるものと思われる。

このSD0001環壕出土の石器・土器の整理分析については、佐賀県教育委員会の文化課職員の協力を得た他、北九州市芸術文化振興財団の梅﨑惠司氏をはじめ、北九州市立自然史・歴史博物館藤井厚志氏・同敦賀啓一郎氏、佐賀市教育委員会中野充氏、九州大学大学院能登原孝道氏、文化課補助員天賀光広氏に協力を頂くとともに、原稿を執筆して頂いた。本書が弥生時代の石器・土器の研究に供することができれば幸いである。

註

1）これまでに佐賀県教育委員会が刊行している吉野ヶ里遺跡に関する調査報告書は、下記のとおりである。

佐賀県教育委員会編「吉野ヶ里遺跡－佐賀県神埼郡三田川町・神埼町に所在する吉野ヶ里遺跡の確認調査報告書」佐賀県文化財調査報告書第100集　1990.3

佐賀県教育委員会編「吉野ヶ里－神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」佐賀県文化財調査報告書第113集　1992.3

佐賀県教育委員会編「吉野ヶ里遺跡」『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書4』佐賀県文化財調査報告書第123集　1994.3

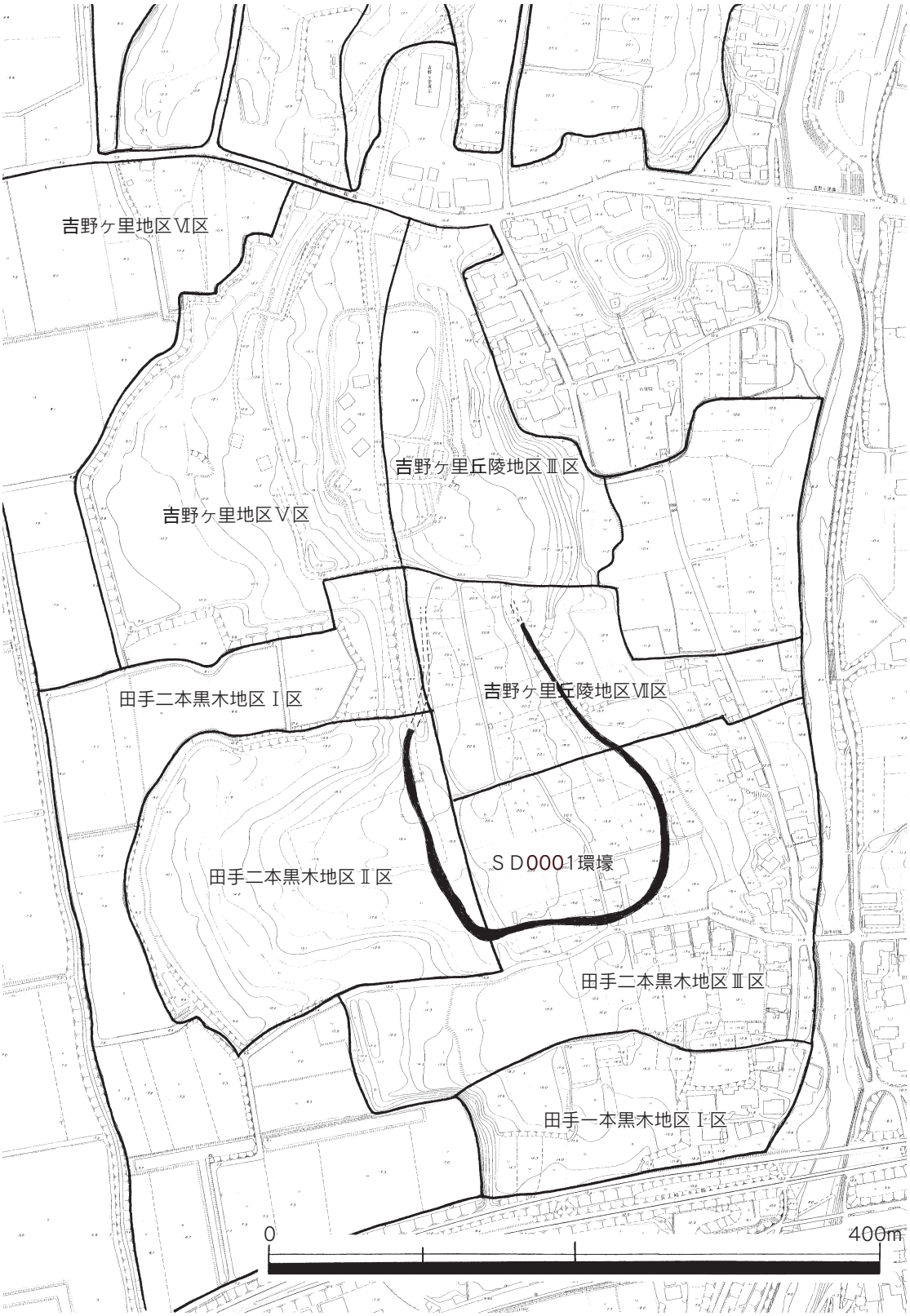
佐賀県教育委員会編「田手二本松遺跡」『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書5』佐賀県文化財調査報告書第136集　1998.3

佐賀県文化財調査報告書「吉野ヶ里遺跡－平成2年度～7年度の発掘調査の概要」佐賀県文化財調査報告書第132集　1997.3

佐賀県文化財調査報告書「吉野ヶ里銅鐸－吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区発掘調査概要報告書」佐賀県文化財調査報告書第152集　2002.3

佐賀県文化財調査報告書「吉野ヶ里遺跡－平成8年度～10年度の発掘調査の概要」佐賀県文化財調査報告書第156集　2003.3

佐賀県文化財調査報告書「吉野ヶ里遺跡－平成11年度～12年度の発掘調査の概要」佐賀県文化財調査報告書第160集　2004.3



第1図　吉野ヶ里遺跡調査区位置図（南部）（1/4,000）

第２節　調査にいたる経過

吉野ヶ里遺跡は、佐賀県の東部地区、神埼郡神埼町、三田川町、東脊振村にまたがる旧石器時代から近代にかけての大規模な遺跡である。この吉野ヶ里遺跡が、学会に取上げられた時期は古く、大正年間に松尾禎作や古賀孝[1)]らによって紹介されている。昭和に入り、七田忠志、三友国五郎[2)]らによって再度取上げられた。多量に出土した弥生土器や貝輪、甕棺などの出土品の報告を兼ねて吉野ヶ里遺跡付近一帯が、古代において生活の適地であることが述べられている。

その後、開墾や宅地造成などの小規模な開発に伴い、吉野ヶ里遺跡周辺の遺跡や遺物が報告されることもあったが、吉野ヶ里遺跡周辺で本格的な発掘調査が開始された時期は、昭和50年代に入ってからである。

昭和50年代に入ると、吉野ヶ里遺跡周辺で行なわれる農業基盤整備事業や導水事業、各種開発に伴う発掘調査が、佐賀県教育委員会、神埼町・三田川町教育委員会等によって実施されることになった。[3)] その後、吉野ヶ里遺跡を含む吉野ヶ里丘陵一帯が、工業団地造成計画の候補地に挙げられ、佐賀県庁内の開発部局などと協議を行なった結果、吉野ヶ里遺跡の範囲確認調査を実施し、遺構の濃密な地域を文化財保存緑地として取り込んだ総面積約80haに及ぶ工業団地造成のための発掘調査に着手した。

昭和61年5月、吉野ヶ里丘陵北部の志波屋四の坪地区から着手した発掘調査面積は約30ha、調査期間は、平成元年3月までの約3年間に及ぶ。

この工業団地造成に伴う吉野ヶ里遺跡の発掘調査では、弥生時代中期の甕棺墓の列埋葬、青銅器の製作を示す巴形銅器や銅剣などの石製鋳型の出土、奈良時代の道路遺構やそれに付随する駅屋と考えられる掘立柱建物跡や倉庫群を始めとして、旧石器時代から近代にかけての様々な遺構・遺物が検出された。なかでも、吉野ヶ里遺跡の弥生時代後期の環壕集落（現在の南内郭及び外環壕）の発見は、当時九州地方には存在しないと考えられていた大規模な環壕集落を明らかにしただけでなく、該期における集落構造の一端を垣間見ることができた。その一例として、環壕の一部を半円形に突出させ、その部分に掘立柱建物跡を配置する構造は、中国の史書である『魏志倭人伝』に記された「望楼」をイメージさせるとともに「邪馬台国」に代表される弥生時代の「クニ」の様子を示す遺跡として反響を呼んだ。

平成元年2月、吉野ヶ里遺跡の内容が新聞やテレビ等のメディアにより報道されると、吉野ヶ里遺跡を見学に訪れる人々が全国からあふれるように集まり、遺跡の保存活動も高まりを見せ始めた。

同年3月、吉野ヶ里遺跡の北部に位置する丘状の高まりは、古墳時代後期の円墳と考えられていたが、調査を開始すると、盛土内部から甕棺墓が発見され、甕棺墓を内部主体に持つ墳丘墓であることが判明した。墳丘墓甕棺の1基からは、柄まで鋳造された有柄細形銅剣1口とコバルトブルー色をしたガラス製管玉79点が副葬されていた。その後、次々と甕棺墓の副葬品である銅剣や青銅製把頭飾が見つかった。

この墳丘墓の発見を契機として、吉野ヶ里遺跡における大規模な環壕集落の存在や数少ない弥生時代の墳丘墓、銅剣や青銅器鋳型をはじめとする多種多様な出土品など、弥生時代における集落が発展していく過程を示す貴重な遺跡として保存が決定された。

こうして吉野ヶ里遺跡は、その重要性から平成3年には国の史跡、同4年に国の特別史跡と指定された。また、平成4年には、奈良県にある国営飛鳥歴史公園に次ぐ全国で2番目の国営歴史公園として整備されることが、閣議決定され、平成13年4月に改めて国営吉野ヶ里歴史公園として開園した。現在（平成15年度末現在）も年間50万人にものぼる見学者が吉野ヶ里遺跡に訪れている。

佐賀県文化課では、吉野ヶ里遺跡の保存が決定した後も、吉野ヶ里遺跡の性格と内容をより詳細に把握するため発掘調査を継続して実施している。これら一連の調査では、工業団地内の保存緑地として予定していた地区から、平面形がアルファベットの「A」の形をした特異な環壕集落（現在の北内郭）の存在や青銅器を鋳造し、その不要物を捨てた土坑、吉野ヶ里丘陵南西部の沖積地から出土した多種多様な木製品、「市楼」とされる大規模な高床倉庫群、九州初出土の銅鐸等、様々な発見が相次ぎ、吉野ヶ里遺跡が弥生時代における北部九州の拠点的集落であることを明らかにした。

これら一連の調査成果は、遺跡の整備・復元にも役立っている。現在、国営吉野ヶ里歴史公園には、二重の土塁と環壕で囲まれた北内郭を復元し、その内部には、祭殿と見られる大型掘立柱建物跡1棟、物見櫓3棟、竪穴住居1棟、高床建物3棟が復元されている。

さらに平成9・10年度に実施した南内郭の西側地区（吉野ヶ里地区Ｖ区）の調査では、100棟に迫る高床建物跡が見つかった。この地区は、倉庫が建つ場所であるとともに2間×3間の総柱建物跡を中国の画像石に記された「市楼」と想定し、『魏志倭人伝』に記されている交易や租税を保管する場所であるとして、高床建物や掘立柱建物からなる建物群を復元している。

吉野ヶ里遺跡のシンボルとなった南内郭には、平成元年に物見櫓2棟、竪穴建物4棟、環壕や土塁、城柵が復元された。これらの復元建物は、吉野ヶ里を訪れる人々が弥生時代の暮らしの一端を垣間みることのできる施設として復元されたもので、吉野ヶ里遺跡の公開が始まって以来、約1千300万人の人々が訪れた（平成13年度末現在）。ただし、この時に復元された建物等の施設は、仮整備の段階であったため、南内郭の遺構の状況を正確に復元したものではなかった。このため、弥生時代終末期の南内郭に建てられた竪穴住居などの建物の時期や構造を再度確認し、あらたに判明した建物20棟を復元している。この南内郭の建物群は、平成17年4月から一般に供用が開始され、吉野ヶ里遺跡では、北内郭・南内郭・西方倉庫群あわせて総数71棟の復元建物が立ち並び、壮大な弥生時代の「クニ」の姿をみせることになる。

註

1）藤谷庸夫・古賀孝・
松尾禎作　1925『古代東肥前の研究』

2）七田忠志　1934「佐賀県戦場ヶ谷遺跡出土弥生式有紋土器について」『史前学雑誌』6巻2号
三友国五郎　1934「佐賀県における合甕遺跡他」『考古学雑誌』24巻5号
七田忠志　1934「その後の戦場ヶ谷遺跡と吉野ヶ里遺跡」『史前学雑誌』6巻4号

3）佐賀県教育委員会編　1988「馬郡遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書』
三田川町教育委員会　1989『田手一本杉遺跡・田手二本杉遺跡』
佐賀県教育委員会編　1994「吉野ヶ里遺跡」『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書4』
佐賀県教育委員会編　1998「田手二本松遺跡」『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書5』　等

第２章　吉野ヶ里遺跡の環境と概要

第1節　吉野ヶ里遺跡周辺の地理的・歴史的環境

（１）地理的環境

吉野ヶ里遺跡は、佐賀県の東部に位置する神埼郡神埼町・三田川町・東脊振村にまたがっている。遺跡の北側には、花崗岩を基盤とする標高約500ｍから1,000ｍにかけての脊振山地が東西方向に連なる。この脊振山地から派生する丘陵が幾筋も南に延びている。丘陵の間には、田手川、城原川、寒水川などの中小河川が南流し、九州最大の河川である筑後川下流付近で合流の後、有明海に注ぐ。これら中小河川の周辺には、長い年月を経て形成された沖積地が広がる。現在沖積地の大半は、水田として利用されている。河川に沿って形成された自然堤防上には、弥生時代以降の集落跡がみられることから立地のよさがうかがわれる。

当遺跡が所在する丘陵は、「吉野ヶ里・志波屋段丘」と呼ばれ、東を田手川、西側を貝川及び三本松川が流れ、その侵食作用により形成された丘陵である。主に水田として利用されている沖積地上の標高は、6～8ｍ。畑地や果樹園として利用されている洪積地上は標高10～25ｍである。この丘陵は、中位段丘の礫層の上に赤褐色おがくず状ローム層（鳥栖ローム）とその下部にある淡黄色ローム層（八女粘土）がのっている。その上部には、褐色をしたローム層がのり、この部分が、主に遺構検出面となる。赤褐色おがくず状ローム層と淡黄色ローム層は、約9万年前に爆発した阿蘇4と呼ばれる火砕流[1)]が堆積したものである。

吉野ヶ里遺跡から北東5kmに位置する八藤遺跡[2)]（上峰町）では、この阿蘇火砕流によってなぎ倒された幹周り3ｍ、高さ30ｍを超えるモミ属の大木が見つかっている。この阿蘇4火砕流の威力を知る上で貴重な資料となっている。

この「吉野ヶ里・志波屋段丘」は細長く南に延びているが、細見すると3ヶ所の鞍部を持ちながら連なっている。南端は長崎本線建設の際、土取りによる掘削が行なわれているが、これまでに得られた所見では、長崎本線の南側約100ｍ付近まで続いていたとみられる。この中で、前期に形成された環壕は、標高約20ｍのやや平坦な丘陵南部に位置している。

佐賀平野の南側に位置する有明海は、干潮の差が最大約6ｍに及び、干潮時には「ガタ」と呼ばれる日本最大を誇る干潟が現れる。内海的な有明海は、波も静かな上、カキやハマグリ、アカガイなどの貝類、スズキやタイ、ボラ等の魚類等は現在も尚豊漁であり、風光とともに地域の活気ある生業となっている。

（２）歴史的環境

吉野ヶ里遺跡を始めとする佐賀平野東部地域には、地理的条件のよさから旧石器時代から近代にかけての遺跡が数多く見つかっている。ここでは、弥生時代の中でも田手川及び城原川流域の弥生時代早期（縄文時代晩期）から中期前半（以下弥生時代は略）の遺跡について述べる。

吉野ヶ里丘陵南端に位置する沖積地では、早期（夜臼期）と考えられる遺物包含層が三田川町田手二本松遺跡[3)]と神埼町田道ヶ里田二本松遺跡[4)]から確認されている。東脊振村の浦田遺跡[5)]では、集落跡が知られている。標高約38ｍの丘陵斜面に位置し、平面形が楕円状をした土坑8基や包含層が確認され、早期の土器が多数出土している。

前期に入ると吉野ヶ里遺跡を始め、周辺各地で遺跡数が増加する。田手川左岸の段丘上に位置する松原遺跡[6)]では、段丘の北東側を取り囲むように1条の環壕が巡り、環壕内部からは土坑数基が検出された。この松原遺

跡と小谷を挟んだ南側にある瀬ノ尾遺跡[7]は、前期から終末にかけての住居群と墓地群からなる。平面が円形の竪穴住居が多数検出され、丘陵頂部には、東側に陸橋を持つ径約20mの円形の環壕が認められた。同様の陸橋を持つ環壕は、近年、鳥栖市八並金丸遺跡でも見つかっており、内部に平面が円形の住居や貯蔵穴がみられることから、類似した集落とみられる。

田手川上流域に位置する西石動遺跡[8]は、田手川右岸の自然堤防上に位置し、前期後半から中期初頭の竪穴住居21棟、土坑21基、土壙墓8基、甕棺墓45基、木棺墓1基が調査された。また、昭和59年度以降に東脊振村教育委員会が実施した調査では、さらに前期末から中期初頭の竪穴住居16棟、土坑14基、土壙墓13基、甕棺墓12基が検出されており、吉野ヶ里遺跡周辺地域の大規模な集落の一つであることが明らかになっている。

上峰町一本谷遺跡[9]は、前期末から中期初頭の竪穴住居26棟、貯蔵穴53基からなる集落跡である。住居跡の保存状態が良好で、壁高が1mを測る住居も調査されている。また、佐賀県内では発見例の少ない焼失家屋3棟が検出されている。

田手川・城原川下流域では、沖積平野の微高地に集落が営まれる。千代田町託田上地遺跡[10]や同詫田西分遺跡[11]からは、早期（夜臼期）の土器が出土しており、集落の形成が比較的早い段階から始まっている。ただし、これら沖積地の遺跡が本格的に展開する時期は、前期末以降である。

詫田西分遺跡は、掘立柱建物跡や土坑、溝跡などから構成され、貝塚が確認されている。この貝塚は、主に中期に形成されたものであるが、スミノエガキやマガキ等のカキ類を主体としてハイガイ、サルボウ、ハマグリ、アカニシ、テングニシ、イボニシ、サザエ、アゲマキ、シジミ、タニシ等が混在している。魚類等には、マダイ、スズキ、ボラ、エイ類、サメ類がみられる。これらは干潟や近海の産物である。哺乳類では、イノシシ、シカ、ネズミの他に、イヌがみられる。鳥類はカモ類、カラス類が含まれていた。後者の哺乳類は、どちらかといえば山地に生息する類であることから、交換や交流を窺わせる。特にイヌの資料は、狩猟のみならず人の生活と密接な関係があることから、貴重な資料となっている。

有明海沿岸の、千代田町黒井遺跡[12]、同上黒井遺跡、同姉遺跡[13]からは、朝鮮半島に起源を持つ無文土器が弥生土器と共伴している。なかでも、姉遺跡からは、初期の細形銅矛や銅剣の青銅器鋳型2点が出土し、青銅器製作技術を持った集団が、当地に到達していたことを明らかにした。この初期の青銅器鋳型や無文土器は、吉野ヶ里遺跡においても確認されており、青銅器製作技術が、有明海沿岸及びその内陸部に比較的早い段階から流入していたことを明らかにした。

田手川・城原川下流域の墳墓は、前期末から確認されている。千代田町詫田西分遺跡[14]では、微高地上に前期末から中期にかけて甕棺墓および土壙墓からなる墓域が形成される。この墳墓から出土した人骨は、西北九州型弥生人骨（呼子町大友遺跡[15]や福岡県志摩町新町遺跡[16]等、玄界灘沿岸で発見される縄文時代の形質を持つ弥生人）が多数を占め、吉野ヶ里遺跡や三津永田遺跡[17]等、佐賀平野の内陸部付近に居住する弥生人（渡来系弥生人）と形質を異にする。

高志神社遺跡[18]では、狭い範囲に甕棺墓が集中して埋葬されている。その中の1基の大型甕棺墓からは、骨盤に銅剣の切先が刺さった人骨が埋葬されていたほか、その傍らには、長さ34cmの細形銅剣が絹織物に巻かれた状態で副葬されていた。この甕棺墓は、弥生時代中期前半の甕棺（汲田式）で沖積地においても戦闘により死傷者が生じていたことを示す資料といえる。

弥生時代前期末以降、佐賀平野東部の丘陵部や沖積部では、集落・墳墓の数が増加する。その理由として、玄界灘沿岸地域に較べ人口が少なく、未開発地が多く存在したこと、有明海沿岸地域の穏やかな気候が水稲耕作の適地として挙げられること等移住するための諸条件が揃っていたためではないかと推定されている。

1　田手二本松遺跡　2　田道ヶ里田二本松遺跡　3　馬郡遺跡　4　浦田遺跡　5　松原遺跡
6　瀬ノ尾遺跡　7　西石動遺跡　8　一本谷遺跡　9　上黒井遺跡　10　託田西分遺跡
11　黒井遺跡　12　姉遺跡　13　高志神社遺跡　14　下石動遺跡　15　荒堅目遺跡
16　本分遺跡　17　八藤遺跡

第2図　吉野ヶ里遺跡周辺の主な弥生時代遺跡（1/60,000）

弥生時代早期における中国大陸及び朝鮮半島から水稲耕作技術や大陸系磨製石器群、支石墓等の流入を第一波とすると、無文土器や青銅器鋳型の出土は、半島から新たな技術を獲得・保有した集団の第二波と言える。これらの遺物は、有明海沿岸の佐賀平野にも、すでに影響を及ぼしていたことを具体的に示す重要な資料である。

註

1）砥川隆二・山中直人編　1995「佐賀平野東部の丘陵」『佐賀の自然をたずねて－日曜の地学21』

2）上峰町教育委員会編　1994『佐賀平野の阿蘇4　火砕流と埋没林』上峰町文化財調査報告書第10集

3）佐賀県教育委員会編　1998「田手二本松遺跡」『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書5』佐賀県文化財調査報告書第136集

4）佐賀県教育委員会編　1997「田道ヶ里田二本松遺跡」『佐賀県文化財年報2』

5）佐賀県教育委員会編　1998「寺ヶ里遺跡・浦田遺跡」『佐賀県文化財年報3』

6）東脊振村教育委員会　1993「松原遺跡発掘調査現地説明会資料」

7）東脊振村教育委員会編　2001『瀬ノ尾遺跡』東脊振村文化財調査報告書第24集

8）佐賀県教育委員会編　1990「西石動遺跡」『西石動遺跡－九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（12)』佐賀県文化財調査報告書第97集

9）上峰村教育委員会編　1983『一本谷遺跡』上峰村教育委員会文化財調査報告書第1集

10）佐賀県教育委員会編　1982「詫田上地遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書1』

11）千代田町教育委員会編　1983『詫田西分貝塚』千代田町教育委員会文化財調査報告書第2集

12）千代田町教育委員会編　1987『黒井遺跡』千代田町文化財調査報告書第6集

13）千代田町教育委員会編　1985『姉遺跡Ⅰ』千代田町文化財調査報告書第3集

14）松下孝幸他　1984「佐賀県神埼郡千代田町詫田西分貝塚出土の弥生時代人骨」『解剖学雑誌』95

15）呼子町教育委員会編　1981『大友遺跡』呼子町文化財調査報告書第1集

16）志摩町教育委員会編　1987『新町遺跡』志摩町文化財調査報告書第17集

17）日本考古学協会編　1961「三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』

18）千代田町教育委員会編　2000『高志神社遺跡』千代田町文化財調査報告書第27集

第２節　弥生時代前期から中期にかけての吉野ヶ里遺跡の変遷

（1）吉野ヶ里遺跡における集落の変遷

吉野ヶ里丘陵周辺に人々の暮らしが明瞭になる時期は、弥生時代早期（縄文時代晩期）である。縄文時代中期末の「阿高式土器」や打製石鏃等も出土しているが、現段階では、縄文時代に遡る遺構は、確認されていない。この吉野ヶ里遺跡一帯では、弥生時代の開始と伴に生活空間としての利用が開始されると想定している。

吉野ヶ里丘陵南端周辺の沖積部微高地縁辺部の包含層から早期の土器（夜臼式）が発見されている。弥生時代前期初頭になると、吉野ヶ里丘陵南端に丘陵の先端部を東西に横断する条壕が出現する。その条壕の南側に集落が存在したと想定しているが、その想定地には、長崎本線や国道34号線が走っているため、該期の集落はいまのところ未確認である。

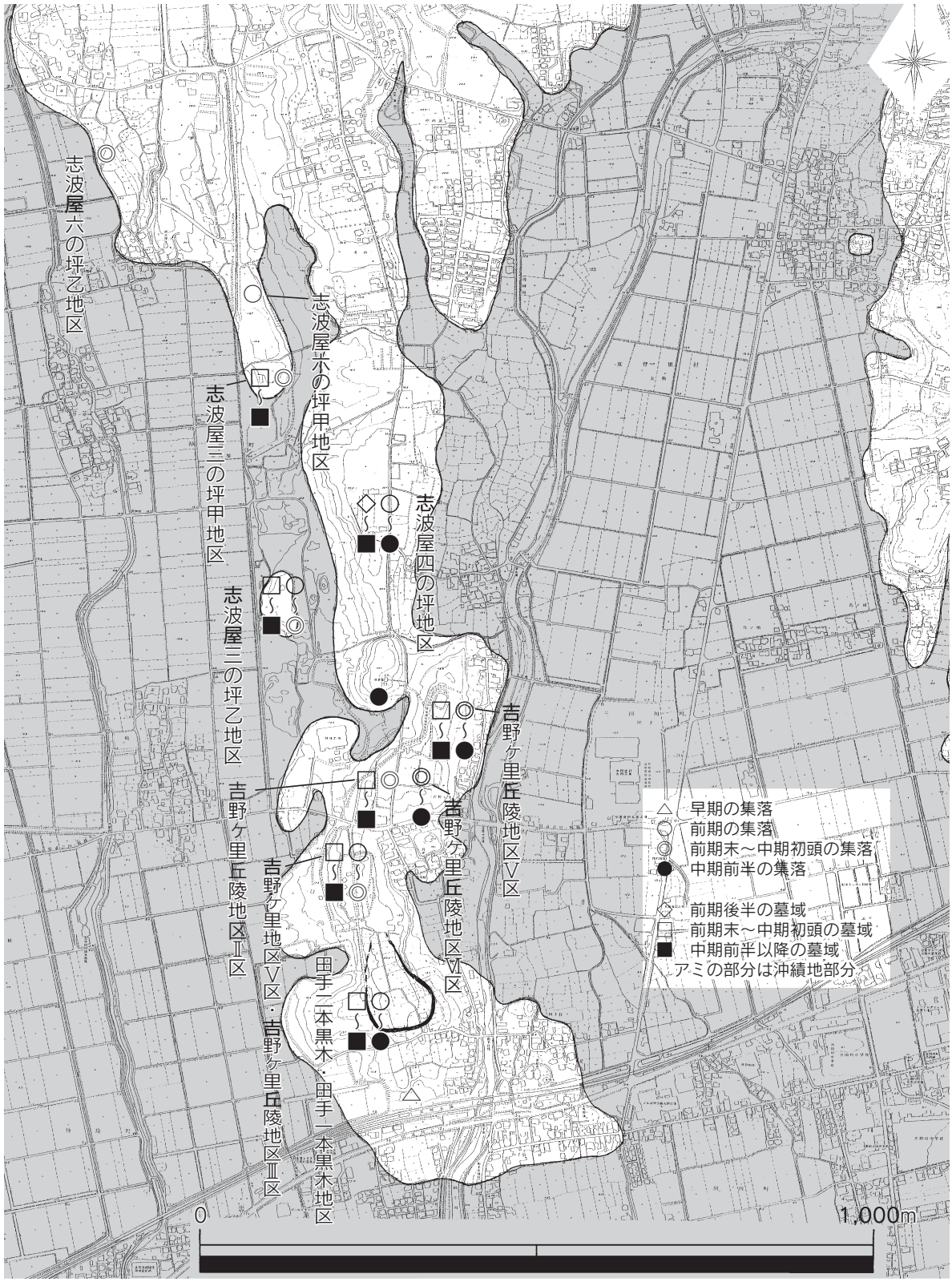
弥生時代前期に入ると、田手二本黒木・田手一本黒木地区と呼ばれる丘陵南部の平坦地を取り囲むように大規模な環壕（以下前期環壕）が巡らされる。この前期環壕は、平面形が先端の尖った卵形をしており、環壕の断面形はV字形をしている。前期環壕に囲まれた範囲は、約2.5ha、環壕の最大幅約4.6m、深さ2.2mである。この前期環壕の西側部分では、カキ殻を主体とする貝層にブタやキジ類、イヌなどの獣骨などが廃棄されている。また、その土層の堆積状況からは、一部に壕の掘り返しが認められる。

平成12年～16年にかけて実施した調査で、この環壕の内部には、弥生時代中期初頭頃（城ノ越式）以降の竪穴住居や貯蔵穴[1)]と見られる数多くの土坑が確認されている。この田手二本黒木・田手一本黒木地区では、前期にさかのぼる竪穴住居や土坑も存在するが、その数は、非常に少ない。ただし、弥生時代中期以降の遺構や包含層に混じって口縁部や胴部の屈曲部に刻み目を持つ甕や胴部に沈線や連弧文、山形文を持つ壺等の土器片が一定量出土することから、すでに失われている前期の遺構も数多くあったと推定している。

吉野ヶ里丘陵北部の志波屋四の坪地区では、前期に遡る竪穴住居が2棟検出されている。志波屋六の坪地区でも1棟の竪穴住居が見つかっている。ただし、吉野ヶ里遺跡では、この時期の竪穴住居跡は、非常に少ない。

前期末から中期初頭になると、吉野ヶ里遺跡の各地区において集落の数は増加する。この時期に集落が存在する地区は、志波屋四の坪地区、志波屋六の坪地区、志波屋三の坪甲地区、志波屋三の坪乙地区、吉野ヶ里地区Ⅰ～Ⅳ区、吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区、田手二本黒木地区などがある。特に、志波屋四の坪地区と谷を挟み西側に位置する志波屋三の坪乙地区では、10数棟の竪穴住居跡の周囲に貯蔵穴群が配置され、また、集落の南側には、前期末（金海式）から中期前半（汲田式）にかけての甕棺墓36基が位置する。この志波屋三の坪乙地区では、集落と貯蔵穴、甕棺墓がセットになり、完結する空間を持った集落と考えられる。このように集落と貯蔵穴、甕棺墓がセットになる集落は、志波屋四の坪地区、吉野ヶ里地区Ⅱ区、吉野ヶ里丘陵Ⅴ区等でも確認されている。

吉野ヶ里遺跡の各地区において、中期初頭（城ノ越式）までは、竪穴住居の確認が比較的容易であるが、中期前半（須玖Ⅰ式）の段階になると竪穴住居の確認例が減少する。一方、前期末に始まった志波屋四の坪地区や吉野ヶ里地区Ⅱ区、吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区等の甕棺墓群は、金海式、城ノ越式、汲田式、須玖式と継続的に形成されている。中期前半以降、大規模な墓域が継続して確認されることに対し、中期前半（須玖Ⅰ式）以降の集落[2)]は、判然としない。集落が再び確認されるようになるのは、弥生時代中期末以降になる。



第3図　吉野ヶ里丘陵上における集落・墳墓変遷図（1/8,000）

（2）吉野ヶ里遺跡における墳墓の変遷

志波屋四の坪地区では、前期後半（伯玄式）に遡る甕棺墓2基が確認されているが、この時期の墳墓は、数少ない。甕棺墓の増加する時期は、前期末（金海式）以降である。これは、吉野ヶ里丘陵全域に点在する墓地群にも共通することであり、吉野ヶ里遺跡での集落が盛行する時期と重なる。

吉野ヶ里遺跡の甕棺墓の特徴として、志波屋四の坪地区や吉野ヶ里地区Ⅱ区等で甕棺墓の列埋葬が挙げられる。この列埋葬は、墓道状の空閑地を持つ両側に甕棺を整然と配置する墓地である。この列埋葬は、汲田式期に開始され、立岩式期まで継続される。これと対照的に吉野ヶ里地区Ⅰ区では、典型的な列埋葬に隣接して中期初頭（城ノ越式）の墓域を踏襲し拡大するいわゆる「集塊状」の墓域も確認されている。この「集塊状」の墓域は、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区や吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区の墳丘墓の北側でも確認されている。

甕棺墓から副葬品が出土することは、比較的よく知られている。吉野ヶ里遺跡の甕棺墓も同様で、舶載または倣製の細形・中細形銅剣のほか、ゴホウラやイモガイといった南海産の貝製腕輪、鉄剣や鉄斧、刀子、舶載とみられる蝶番などの鉄製品、埋葬時に着装された絹や麻等の織物が副葬品として出土している。吉野ヶ里遺跡では、副葬品を有する墳墓は城ノ越期[3]から見つかっており、この時期には、すでに身分格差が生じていたと推定される。

ただし、織物や貝輪など劣化の進行が著しい遺物には、長い年月の間にすでに消滅してしまった副葬品が存在したことを考慮する必要がある。

吉野ヶ里遺跡のなかで、もっとも特徴的な墳墓に「墳丘墓」[4]がある。この墳丘墓は、後期の環壕に囲まれた最北端でもっとも高い尾根上に位置し、目立つ場所に築造されている。この墳丘墓は、平成元年と平成4・5年の2回の調査を実施し、中期前半（汲田式）から中期中葉（須玖式）にかけての甕棺墓計14基が発見された。そのうち8基から、細形銅剣6口や有柄細形銅剣1口、中細形銅剣1口、青銅製把頭飾2点、ガラス製管玉79点が出土している。この墳丘墓は、最初に埋葬されたSJ1006号甕棺墓を中心として反時計回りに埋葬が行なわれている。墳丘墓に埋葬された甕棺墓が他の甕棺墓と大きく異なる点は、推定南北約40m、東西約30mの範囲に盛土した墳丘のなかに、埋葬されている点である。また、墳丘墓から出土した個々の甕棺墓の大きさが他の墓域のそれと比べ格段に大きく、黒色顔料を用いて甕棺の内外面を黒く仕上げる黒塗りの甕棺であることなど、副葬品を持たない他の甕棺墓[5]に比べ質的に大きく異なる。

今回、墳丘墓の甕棺と同時期の甕棺の違いを詳述しないが、弥生時代中期前半には、墳丘墓に葬られる被葬者と集落の一般構成員との間にすでに階層差を生じていたことを示す資料と考えられる。

（3）小　　結

以上、吉野ヶ里遺跡における弥生時代前期から中期に集落及び墳墓の特徴について見てきたが、その特徴は下記のとおりである。

1　吉野ヶ里丘陵南部では、弥生時代早期ごろから集落が形成され始め、前期初頭には、条壕をもつ集落が出現する。

2　弥生時代前期には、吉野ヶ里丘陵南部の丘陵頂部を取り囲むように面積約2.5haの環壕が掘削される。

3　前期環壕の内外部には、前期から集落が営まれるが、その数は少ない。前期末から弥生時代中期初頭の時期になると集落を構成する竪穴住居や土坑の数が激増する。ただし、この時期の前期環壕は、一部を除き、その大部分がほぼ埋没している。

4　吉野ヶ里丘陵の北部地区である志波屋三の坪乙地区や志波屋四の坪地区等では、集落と墳墓がセットで構

成され、完結した集落構造をもつ。

5　吉野ヶ里遺跡の弥生時代墳墓は、前期後半に出現する。前期末（金海式）以降甕棺墓が主体となるが、中期後半（立岩式）段階になると足元に掘り込みを持つ土壙墓や木棺墓等の新たな墓制も出現する。

6　墓道状の空閑地を挟み、その両側に墓を配置する列埋葬と呼ばれる埋葬形態が、志波屋四の坪地区、吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区、吉野ヶ里地区Ⅱ区等でみられる。また、明確な墓道は持たないものの、帯状（列状）に配置される甕棺墓が吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区等で検出されている。

7　甕棺墓の中には、列埋葬の形態をとらず集塊状に配置される甕棺墓群が、吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区や吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区、吉野ヶ里丘陵Ⅴ区に位置する墳丘墓の北側等で検出されている。

8　墳丘墓には、一般的な甕棺墓よりも大きく内外面を黒色顔料で塗布した甕棺が埋葬される。この甕棺墓には、銅剣やガラス製管玉等が副葬されており、特別な階層に属する人物を葬るために築造された墳墓であると想定される。

註

1)　この竪穴住居は、平面形態が円形で、中央部に炉穴を持ちその両側に柱穴と考えられる2本のピットを配置する朝鮮半島南西部に起源を持つ「松菊里」型の竪穴住居が主流となる。土坑には、平面形態が長方形のものと、円形で断面がフラスコ形をした2者が存在する。

2)　須玖Ⅱ式段階の土器は、吉野ヶ里遺跡の各地区で多量に出土しているが、この段階の竪穴住居の検出例は少ない。このため、この時期の竪穴住居は、遺構が残りにくい構造であったと推定している。

須玖Ⅰ～Ⅱ式にかけて竪穴住居は、平面形が円形から長方形へと、貯蔵施設も地下の土坑から高床建物へと移行する時期にあたる。特に須玖Ⅱ式段階の集落構造は、どのような配置をしていたか不明な点が多い。

平成13・14年度に実施した吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区・田手二本黒木地区Ⅲ区（前期環壕の内部に相当する地区）の調査で当該期の竪穴住居や土坑がある程度存在していることが判明した。整理作業中のため、現段階では詳しい内容は今後の課題となるが、吉野ヶ里丘陵南部に前期の集落域を拡張するように須玖Ⅱ式段階の集落が広がっていたものとみられる。

3)　吉野ヶ里遺跡における最古の副葬品を持つ甕棺墓は、吉野ヶ里丘陵南部に位置する田手一本黒木地区SJ100号甕棺である。この甕棺からは、刃部に絹を巻いた細形銅剣1口が出土している。

4)　この墳丘墓は、版築技法を用いて性状の異なる土を互層状に積み重ねている。墳丘墓の下部には、すでに廃棄された竪穴住居が存在し、墳丘墓の築造されたおよその年代の手掛かりになる。この竪穴住居は、円形で径約10mになる大型の竪穴住居で、中期初頭頃とされる。

5)　ただし、吉野ヶ里遺跡の墳墓は、丘陵上にあるため、有機質の副葬品がみつかることはまれである。また、地山である丘陵は、火山灰が降り積もって形成されたローム層であるため、酸性度が強い。この土砂が甕棺内部に流入すると有機質の副葬品や人骨等のカルシウムまで溶かしてしまう。棺内になにも残らない状況がみられたとしても、必ずしも副葬品を有しないとは言えない。

第３章　吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区Ⅱ区SD0001環壕

（１）田手二本黒木地区Ⅱ区の概要

吉野ヶ里遺跡の田手二本黒木地区は、吉野ヶ里丘陵南部の丘陵部及び西側沖積地側にかけて設定された調査地区である。神埼工業団地造成に伴い昭和63年11月から平成元年3月にかけて丘陵上の約21,000㎡を対象に調査を実施した。この時の調査では、弥生時代前期の環壕1条、後期の環壕2条、前期末から後期にかけての竪穴住居21棟、中期初頭から中期前半にかけての甕棺墓約70基、前期末から中期前半の土坑200基、弥生時代後期の石蓋土壙墓1基のほか、中世の道路状遺構や土壙墓を検出している。

特に、弥生時代前期の環壕であるSD0001環壕からは、比較的まとまった数の土器と石器が得られたほか、マガキ、スミノエガキ、タニシ、アカニシ、アカガイなどの貝類が多量に廃棄され、環壕内に貝層を形成している。この貝層に伴ってイノシシ類（ブタ？）やマガモ、キジ等の獣骨類、シカの中手骨を加工した骨鏃など、丘陵上の遺構では遺存することが難しい遺物が出土している。また、環壕の内・外部から竪穴住居や貯蔵穴とみられる土坑が多数確認されており、吉野ヶ里遺跡は、弥生時代前期から始まる拠点集落であったことが、判明している。

この田手二本黒木地区は、平成元年3月末に吉野ヶ里遺跡の保存が決定されたため、調査終了後、遺構の埋め戻しを行い現在にいたっている。

（２）SD0001環壕の規模と内容

平成元年度から、吉野ヶ里遺跡の範囲の確認及びその性格を把握するための確認調査を実施しており、現在も発掘調査を継続している。このSD0001環壕が位置する田手二本黒木地区Ⅱ区・Ⅲ区についても同様の目的で数次に渡って調査を実施している。

平成元年度には、このSD0001環壕の南側部分（№29トレンチ）、東側部分（№17・25トレンチ）でその規模と範囲を確定した。その結果、この環壕は、丘陵南部の約2.5haの範囲を取り囲んでいることが確認された。

平成13年度の田手二本黒木地区Ⅲ区の調査（318区）では、SD0001（SD0336）環壕の面的な確認とトレンチによる掘下げを実施した。平成14年度の調査（345･346区）では、SD0001（SD0336）環壕の南東部分の面的な広がりをおさえるとともに深さなどの規模や環壕埋土の堆積状況等を確認した。この調査では、環壕の上層から擬朝鮮系無文土器の甕が、ほぼ、完形の状態で出土した。平成15年度の調査（367区）では、さらに環壕東北側の面的な繋がりを確認するとともに環壕内から滑石製勾玉のほか、銅滓と思われる青銅器生産関連遺物が出土した。

これまでの一連の調査により、このSD0001環壕は、北側の一部がどのように巡るか不明な点があるものの、ほぼ、丘陵南端の広く張り出した丘陵頂部を広範囲に取り囲む大規模な環壕であることが判明した。また、環壕下層から出土した土器は、前期（板付Ⅱa式新段階～板付Ⅱb式前半）頃と考えられ、甕棺墓や竪穴住居等との切り合い関係から環壕の埋没時期は、中期初頭の年代が与えられている。ただし、一部の調査区（田手二本黒木地区Ⅱ・Ⅲ区）では、中期初頭（城ノ越式）から中期前半（須玖Ⅰ式）の土器が環壕の上層にみられるため、このSD0001環壕は、いっせいに埋没したのではなく、部分的に窪んだ場所がいくつか点在していたものと推定される。

SD0001環壕の内外部には、前期段階の竪穴住居および貯蔵穴が存在しているが、その数は、わずかである。

集落の中心は、中期初頭（城ノ越期）から中期前半（須玖Ⅰ式）の竪穴住居及び貯蔵穴である。ただし、集落自体は環壕内部に集中する傾向があり、環壕の埋没後においてもその区画が意味を持つものであったと考えられる。

（3）SD0001環壕（第4・5・45・46図）

SD0001環壕は、田手二本黒木地区Ⅱ区、田手二本黒木地区Ⅲ区、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区にかけてまたがっている。環壕の平面形は先端の尖った卵形をしている。環壕の断面は、V字形をしており、最大幅は4m、深さ1.95mである。田手二本黒木地区Ⅱ区の環壕には、土層観察用のアゼを8ヶ所設け、北から1・2アゼ(以下略)と呼称している。このうち2から4、6から8アゼの土層について説明を行う。

2アゼは、最大幅3.85m、検出面からの深さ1.85mである。上層に土器が集中して廃棄されており、土器の集中部は、一部3アゼの手前まで続く。土層は、大きく4層に分かれ、上層は、有機質を多く含む暗褐色粘質土。中層は、土色の違いから2層に分かれるが、いずれも地山である褐色ロームを含む褐色粘質土。下層は、中層同様、褐色ロームやロームブロックを含む層である。この2アゼは、レンズ状の堆積を示し、掘り返しが行われた形跡はみられない。遺物は、上層に集中しているが、中・下層からも少量出土している。

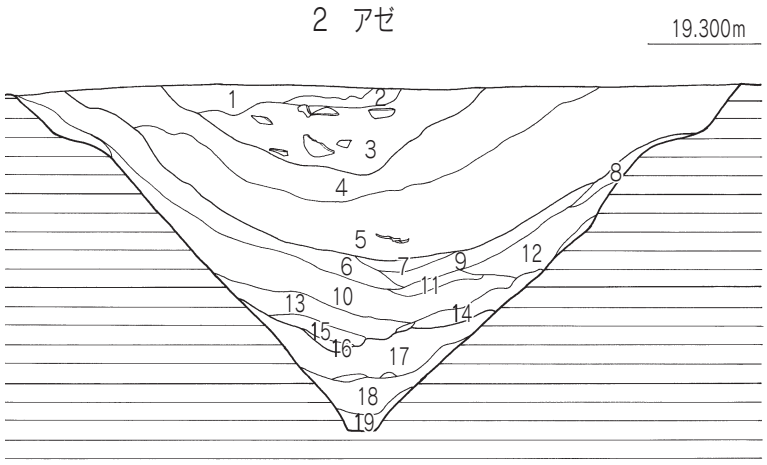
3アゼは、幅2m、深さ1.3mでこの調査区で最も幅が狭く、深さも浅い。この3アゼでは、2アゼの上層（土器集中層）に当る部分は、大部分が削平を受けている。3アゼの断面には、環壕に廃棄された貝の堆積がみえる。この貝の堆積は、2アゼの南側中程から3アゼの南付近まで約10mに渡って観察できる。3アゼは、大きく2層にわかれる。貝層が多量にみられる1～7層とそれより下部の8～9層である。この3アゼは、一見レンズ状の堆積を示しているが、中層と下層の間に不連続の層が認められることから、環壕の一部を掘り返した可能性も考えられる。また、この3アゼ付近がこの環壕の中でもっとも幅が狭く、浅いことや貝類や獣骨等の自然遺物がまとまって廃棄されていることから環壕西側に通じる出入り口が存在した可能性が考えられる。

なお、遺構の削平等を考慮すると、この3アゼの上層は2アゼの中層と対応し、下層は2アゼの下層に対応する。

4アゼは、幅約2.8m、検出面からの深さ1.65mである。この4アゼ付近の環壕の埋没後、掘り返しが一度行われている。下部にも土層の不整合面を持つが、明確な掘り返しとしては捉えられない。このため、この4アゼ付近での環壕の掘り返しは、環壕埋没後に1度行われたと考える。4アゼは、掘り返しを含めると大きく3層に分層できる。2・3、5～7層は、環壕の掘り返しに伴う埋土である。この層は、有機質を多く含む暗褐色粘質土で一部褐色ロームブロックを含む。1・4・8～17層は、褐色または赤褐色粘質土で主として地山である褐色ロームを含む。18～25層は、褐色粘質土を中心とする埋土である。この4アゼの1・4・8～17層は、2アゼの中層に相当し、18～25層は、2アゼ下層に対応する。

6アゼは、幅3.2m、検出面からの深さ2.1mである。土層図作成時にアゼ上部の一部が掘り下げられているが、土層断面を観察するには支障がない。土層は、大きく2層に分かれている。1～8層は、有機物を多く含んだ暗褐色粘質土で、一部地山ロームを含んだ褐色または赤褐色粘質土層が縞状に入り込む。9～13層は、地山である褐色粘質土を含んだ層で一部黒色粘質土が縞状に入り込む。この観察用のアゼでは、レンズ状の堆積を示しており、環壕の再掘削はみられない。6アゼの1～6層までは、2アゼの中層に対応し、7～13アゼは、2アゼの下層に対応する。

7アゼは、幅3.1m、検出面からの深さ1.68mである。この土層は、第2層である褐色粘質土を境に大きく二つに分かれる。1層は、有機物を含んだ暗褐色粘質土である。2層は、黄褐色粘質土で環壕内部からの流入土で

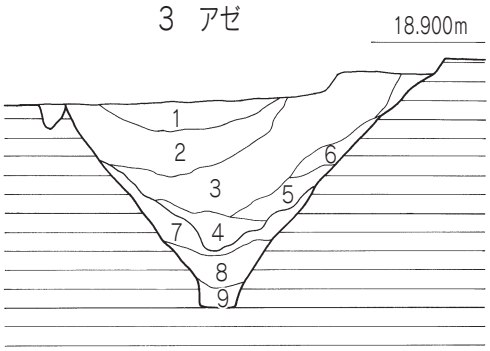


上 層
1 暗褐色粘質土
2 暗褐色粘質土
3 暗褐色粘質土

中層1
4 暗褐色粘質土
5 褐色粘質土

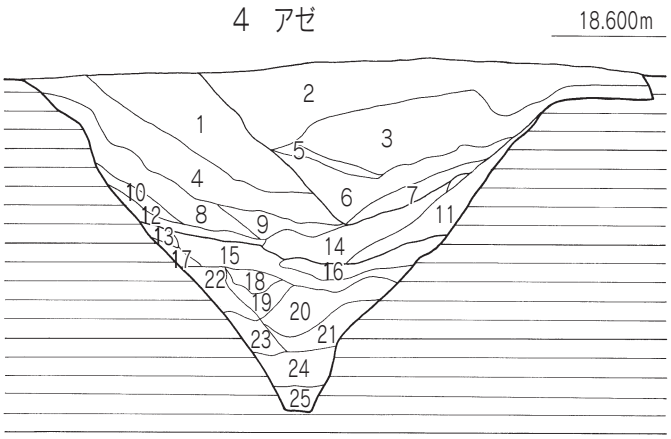
中層2
6 褐色粘質土
7 褐色粘質土
8 褐色粘質土
9 褐色粘質土
10 褐色粘質土
11 褐色粘質土
12 褐色粘質土
13 褐色粘質土
14 褐色粘質土
15 褐色粘質土
16 黄褐色粘質土

下 層
17 褐色粘質土
18 暗褐色粘質土
19 暗褐色粘質土



上 層
1 褐色粘質土
2 暗褐色粘質土
3 暗褐色粘質土
4 暗褐色粘質土
5 暗褐色粘質土
6 暗褐色粘質土

下 層
7 暗赤褐色粘質土
8 暗褐色粘質土
9 暗褐色粘質土



堀返し
2 暗褐色粘質土
3 暗褐色粘質土
5 褐色粘質土
6 褐色粘質土
7 褐色粘質土

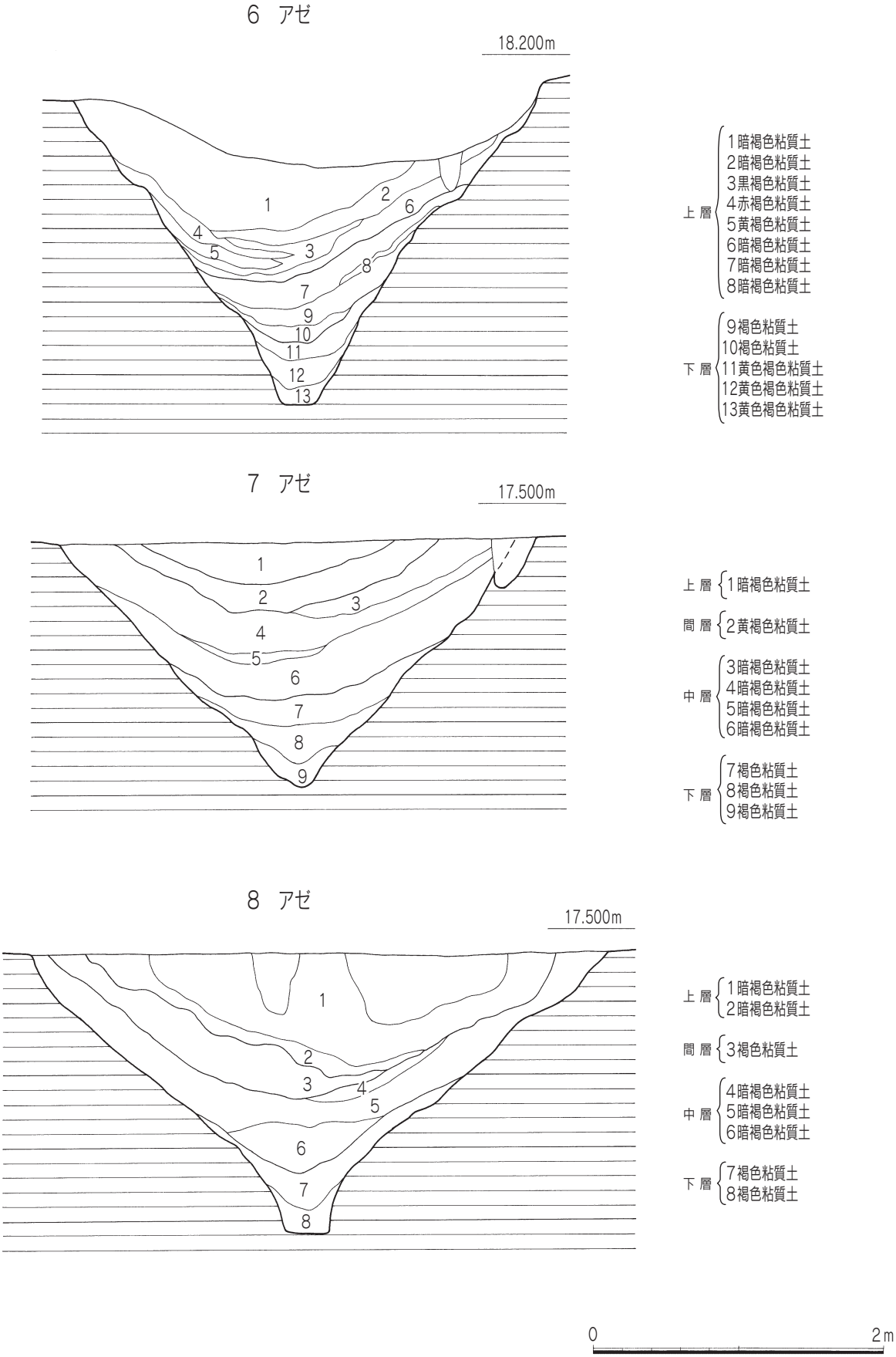
上 層
1 暗褐色粘質土
4 暗褐色粘質土
8 暗褐色粘質土
9 褐色粘質土
10 褐色粘質土

中 層
11 赤褐色粘質土
12 赤褐色粘質土
13 赤褐色粘質土
14 褐色粘質土
15 褐色粘質土
16 赤褐色粘質土
17 赤褐色粘質土

下 層
18 褐色粘質土
19 黄灰褐色粘質土
20 黄灰褐色粘質土
21 黄灰褐色粘質土
22 褐色粘質土
23 黄灰褐色粘質土
24 黄灰褐色粘質土
25 黄灰褐色粘質土

0　　2m

第4図　SD0001環壕土層断面図(1)（1/40）



第5図　SD0001環壕土層断面図(2)（1/40）

ある。下部は2層に分かれる。3～6層は、有機質を含んだ暗褐色粘質土である。7～9層は地山である褐色粘質土を含んだ層である。

この7アゼでは、第2層の取り扱いが問題になるが、次に述べる8アゼでも環壕内部側から地山である褐色ローム層が流入しており、上層と区別できる。7，8アゼに対応する褐色ローム層の流入が1～6アゼでは確認できないため、この二つのアゼだけに見られる現象と考えられる。

7アゼにおいて2アゼとの対応関係をみるとき、3～6層が中層に、7～9層が下層に対応するものとみられる。

8アゼは、幅3.96m、検出面からの深さ1.95mである。環壕の上層に一部新しい遺構が切り込んでいるが、層序そのものには影響を与えていない。環壕内部側から地山である褐色ローム層(第3層)が流入していることが確認できる。この8アゼの土層は、褐色ローム層を基準に大きく上下2層に分けられる。下層は、さらに2層に分けられる。1，2層は、有機物を多く含んだ暗褐色粘質土である。7アゼの1層同様、どの層に対応するかは不明である。4～6層は、有機物を多く含んだ暗褐色粘質土である。7・8層は、地山を主体とする褐色粘質土である。

（4）小　　結

SD0001環壕は、田手二本黒木地区Ⅱ区・Ⅲ区、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区にまたがる弥生時代前期の大規模な環壕である。この環壕内部の面積は、約2.5haと推定されており、前期の環壕としては国内でも大規模な環壕である。

これまでに判明したSD0001環壕の特徴として以下の特徴が挙げられる。

①土層観察用の各アゼは、大きく上層・中層・下層の3層に分けられるが、2アゼにみられた土器を多量に含む集中地点は、3アゼ以降の各アゼ間にはみられない。

②2アゼから3アゼにかけて土器及び貝類の集中廃棄が見られ、生活空間にもっとも近い場所とみられる。

③SD0001環壕は、弥生時代前期には、掘削され、中期初頭には埋没している。ただし、この環壕は一斉に埋まったのではなく、部分的には完全に埋没していない場所も存在した。

④3～4アゼにかけてSD0001環壕が、一部掘り返された痕跡を残すが、それ以外の場所では、レンズ状の堆積を示す。

⑤環壕の底は、3アゼのレベルが一番高く、北・南側に向かって勾配を持つ。環壕に溜まった雨水などは、3アゼから北と南側に流れていたと想定される。

⑥このSD0001環壕に土塁が積まれていたかどうかは、不明だが、7～8層で確認された褐色ロームが土塁の痕跡とすれば、土塁は、環壕の内部に存在していた可能性が考えられる。

⑦各層と出土土器の関係から、上・中層と下層の大きく2時期に分かれることが判明した。

⑥田手二本黒木地区に位置するSD0001環壕は、他の調査区にもまたがっており、引き続き整理作業を実施していく予定であるが、この整理作業には、かなりの時間が必要とされる。田手二本黒木地区のSD0001環壕の調査結果は、これが最後ではなく、整理作業の結果、新たな知見が判明した場合には、これまでの成果と合わせ公表を行なう予定である。

報告書抄録

ふりがな	よしのがりいせき
書名	吉野ヶ里遺跡
副書名	田手二本黒木地区弥生時代前期環壕出土の土器と石器
巻次	—
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書
シリーズ番号	第163集
編著者名	**編集**　細川金也・梅﨑惠司　**執筆者**　細川金也・梅﨑惠司・能登原孝道 敦賀啓一郎・中野充・天賀光広
編集機関	佐賀県教育委員会
所在地	〒840－8570　佐賀県佐賀市城内1－1－59
発行年月日	西暦2005年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よしのがりいせき 吉野ヶ里遺跡	さがけんかんざきぐんみたがわちょうおおあざたでぃあざにほんくろき 佐賀県神埼郡三田川町大字田手字二本黒木	413232	—	33° 18′ 23″	130° 23′ 33″	1988,11～ 1989,03	21,000㎡	神埼工業団地造成に伴う文化財調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉野ヶ里遺跡 田手二本黒木地区	集落跡 墳墓	弥生 古墳 奈良 中世	竪穴住居・環壕・土坑・甕棺	土器・石器・骨角器 獣骨・自然遺物等	弥生時代前期の環壕から出土した土器及び石器。 弥生時代前期における吉野ヶ里遺跡の土器・石器の組成

第４章　田手二本黒木地区Ⅱ区SD0001環壕出土の土器

第１節　田手二本黒木地区Ⅱ区SD0001環壕出土の土器の概要

（１）SD0001環壕上層土器集中部出土の土器（第7図～第12図）

環壕上層2-3アゼ間の上層ではコンテナ27箱に及ぶ多量の土器がまとまって出土した地点が存在した。

この地点から出土した土器は折り重なるように出土し、明瞭な間層が形成されてないことから、比較的短期間に廃棄された可能性が高いと考える。これらの土器群（以下、土器集中部出土土器）は、発掘中に出土状況を確認のうえ、記録図を作成した後に取り上げられている。

また、土器のほぼ全ては破片で出土し、接合作業後も器形の全容を知り得るものが少なかった。よって、ここでは、でき得る限り破片資料から出土遺物の様相を把握しやすいように、出土点数の多かった甕と壷について、特徴的な部位を取り上げて分類し、説明を述べていく。

甕と壷の口縁から体部にかけての器形と底部の形態について分類する。分類基準は以下のとおりである。

（甕）

突帯貼付位置や口縁部形態の違いからA～C類に分類する。各類ともに体部は若干の膨らみを有し、口縁部にむかって内湾気味又は直線的に立ち上がる。

甕A類　口縁部と胴部に突帯を貼付する。口縁部突帯の形状から細分が可能で、その中には、いわゆる「亀ノ甲タイプ」甕を含んでいる。

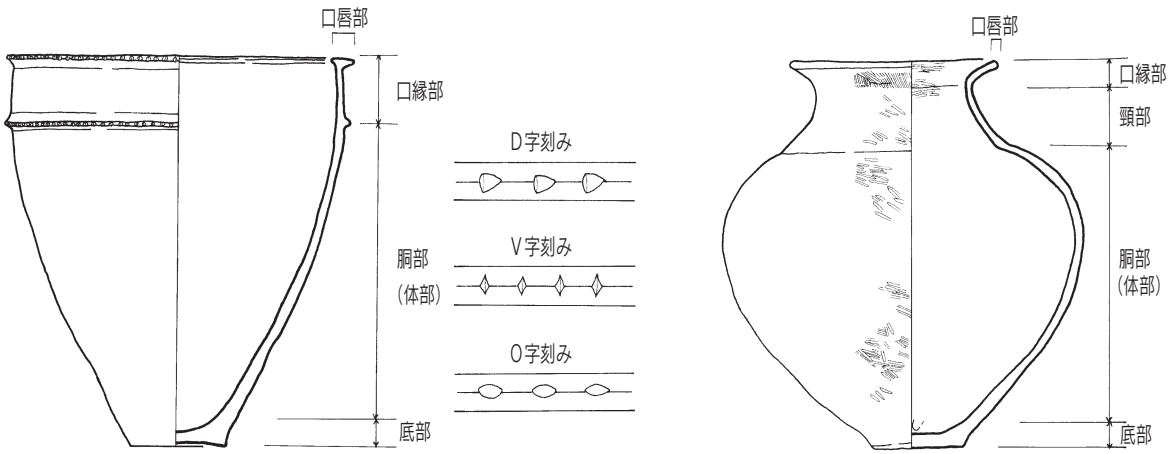
甕B類　砲弾型の器形で、口縁部に突帯を貼付する。

甕C類　如意形口縁または口縁が「く」字に屈曲する甕で、体部の突帯を貼付しない1類と突帯を貼付する2類に細分する。1類はいわゆる板付式の中で主体を成す甕。2類は、1類が甕A類の体部文様（突帯貼付）を取り入れた結果成立した形態である。

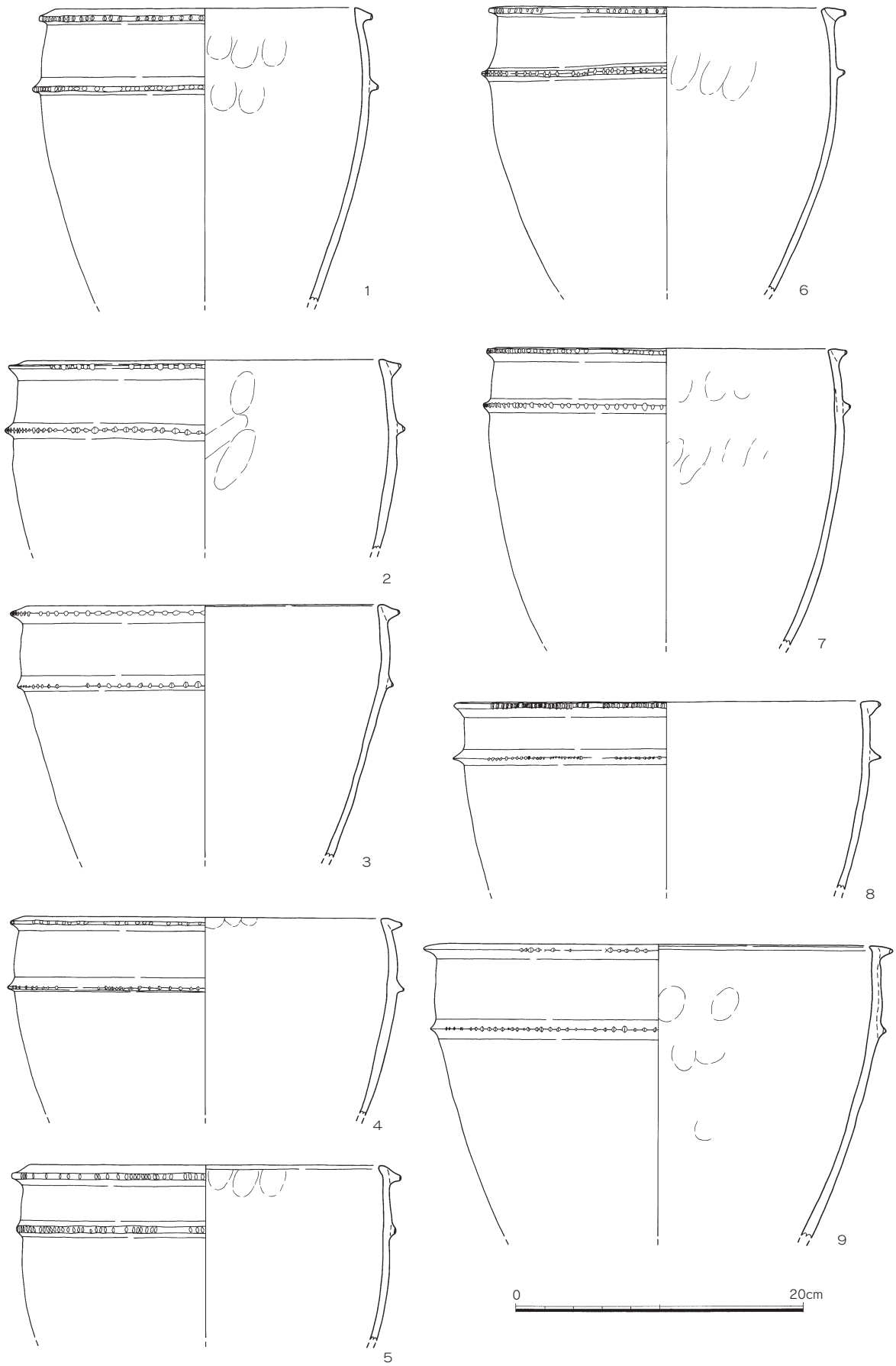
（甕底部）

底部a類　底部と胴部の境界は明瞭で、底面端部が外に張り出し断面台形状の形状。

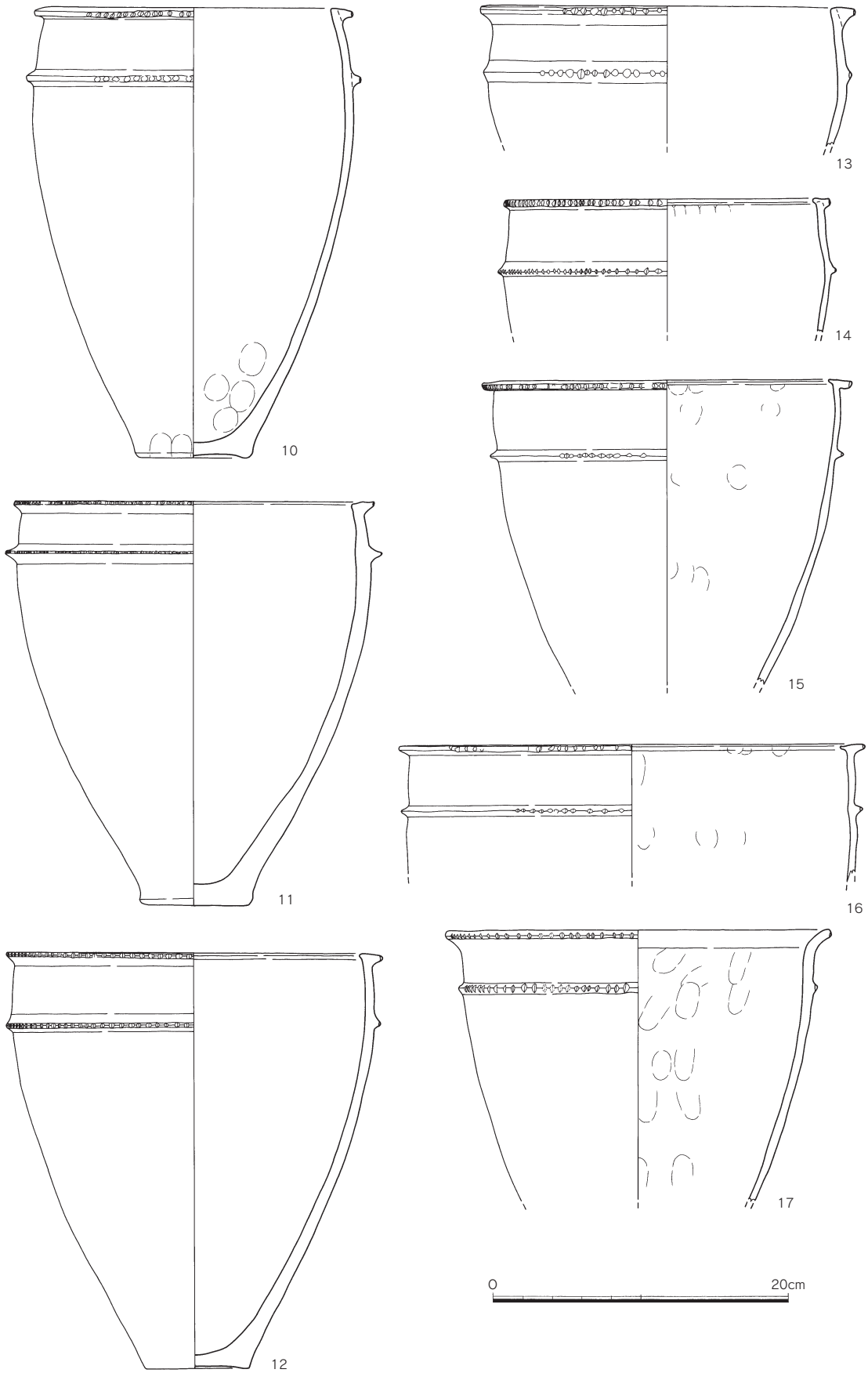
底部b類　底部と胴部の境界は明瞭で、底面端部は僅かに外に張り出す。



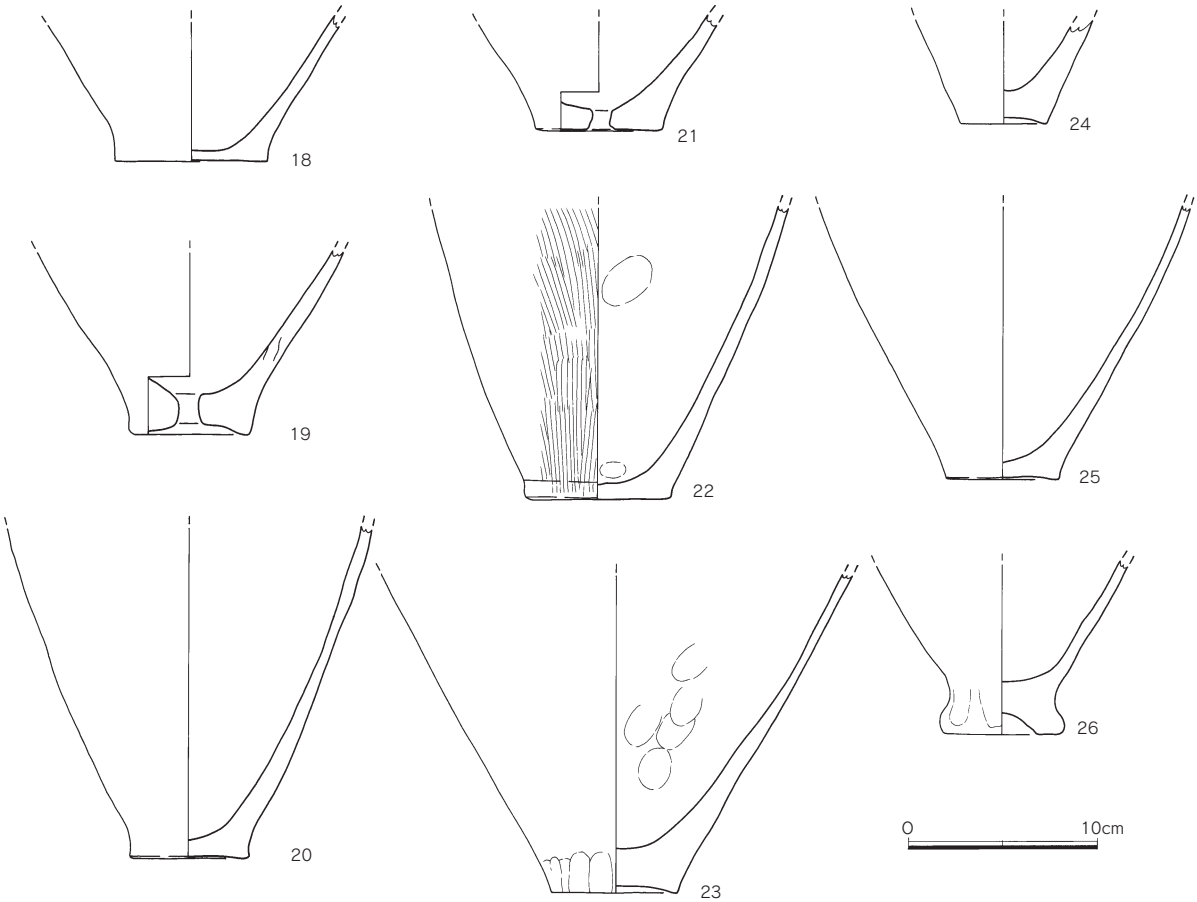
第6図　甕・壷の部位名称及び刻目分類図



第7図　SD0001環壕2～3アゼ上層土器集中部①（1/4）



第8図　SD0001環壕2～3アゼ上層土器集中部②（1/4）



第9図　SD0001環壕2～3アゼ上層土器集中部③（1/4）

底部c類　底部と胴部の境界に僅かにくびれを有する。底面端部は僅かに外に張り出す。

底部d類　底部と胴部の境界は不明瞭で、直線的に推移する。

底部e類　底部は厚手で、底面端部は帯状に張り出す。上げ底である。

（壷）

壷A類　口縁部が口唇に比較的近い位置で強く外反する。口頸部と頸胴部の境界は明瞭で、頸部は直線的に立ち上がる。口縁に粘土紐を貼付するものがみられる。

壷B類　口縁部が緩やかに大きく外反する。口頸部最小径位置がA類よりやや低い位置に下る。頸胴部の境界は不明瞭である。口唇端部を丸くおさめるものが多い。

壷C類　口縁部はB類より更に外反度が増し、朝顔形に大きく開くものも存在する。口頸部最小径位置が頸部中位程に下る。頸胴部の境界は不明瞭である。口唇端部は面状に成形することが多い。

（壷底部）

底部a類　底部と体部の境界が明瞭で、いわゆる円盤貼付け状の形状。

底部b類　底部と体部の境界がa類に比べてやや不明瞭となったもの。

底部c類　底部と体部境界は不明瞭で、直線的に推移する。底面が平坦な1類と、上げ底の2類がある。

甕（第7～9図　1～26）

1～17は口縁部から胴部、または器形の全体を復元でき得る比較的大きな破片である。

1～16はA類。

1～4は口唇部に肥厚した三角突帯を貼付する。1は内面に指頭圧痕有。1～2mmの砂粒を含んだ精良な胎土で、焼成良好である。2は内面に指頭圧痕有。1～2mmの砂粒を含んだ精良な胎土で、焼成良好である。3は、1～2mmの砂粒を含む精良な胎土で、焼成は良好である。4・5は口唇部に下垂れの突帯を貼付する。4は1～2mmの砂粒を含んだ精良な胎土で、焼成良好である。5は口縁内面に突帯貼付に伴う指押さえが強く行われており、このため口唇内端部が内屈する。1～2mmの砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。

6～13は口唇に肥厚した突帯を貼付し平坦に成形する。6は内面に指頭圧痕有。2mm以下の砂粒を含んだ精良な胎土で、焼成良好である。胴部下位に黒斑有。7は内面に指頭圧痕有。2mm以下の砂粒を含んだ精良な胎土で、焼成良好である。胴部内外面に煤付着。8は1～3mm程の砂粒を含んだ精良な胎土で、焼成良好である。外面の口縁部から胴部にかけて比較的大きな黒斑有。9は突帯貼付に伴い口唇内面に横方向の強いナデ調整を施したことにより、口唇先端が内面に張り出す。器壁の断面に擬口縁の可能性がある剥離痕跡が認められる。内面に指頭圧痕有。主に1mm程の砂粒を含んだ大変精良な胎土で、焼成良好である。胴部外面と口縁部内面に黒斑有。10の底部はc類。内底部に指頭圧痕有。2mm以下の砂粒を含んだ精良な胎土で、焼成良好である。胴部内外面に黒斑有。11の底部はc類。1～3mmの砂粒を含んだ精良な胎土で、焼成良好である。12の底部はd類。突帯貼付に伴い口唇内面に横方向の強いナデ調整を施したことにより、口唇先端が内面に張り出す。1～3mmの砂粒を含んだ精良な胎土で、焼成良好である。口縁部外面から胴部外面及び胴部内面に煤付着。13は1～3mmの砂粒を含んだ精良な胎土で、焼成良好である。

14～16は口唇部に蒲鉾形の突帯を貼付し、口唇部と突帯上面を平坦に成形する。口唇内面に強い横方向のナデ調整を施し、先端が内面に張り出す。14は口唇器壁上に突帯を被せるように貼付する。2mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。口縁部から胴部外面に黒斑有。15は内面に指頭圧痕有。3mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。16は口縁部に向かって直線的に立ち上がる。内面に指頭圧痕有。2mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。

17はC2類。

口唇部外端に浅く細い刻みを施す。内面には指頭圧痕が認められる。1～2mmの砂粒を少量含む精良な胎土である。胴部の内外面には煤が付着している。

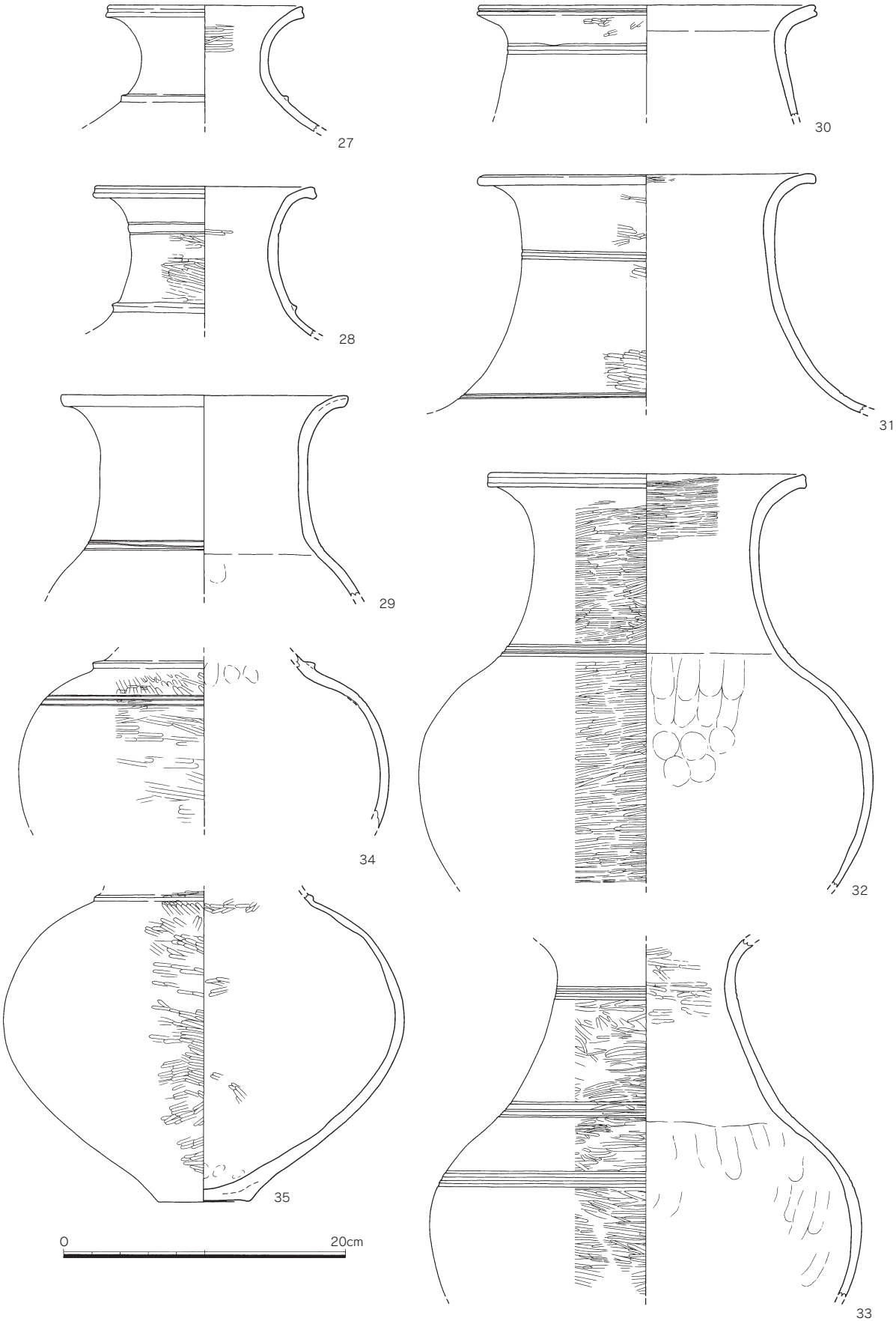
18～26は底部破片。

18～20はc類。

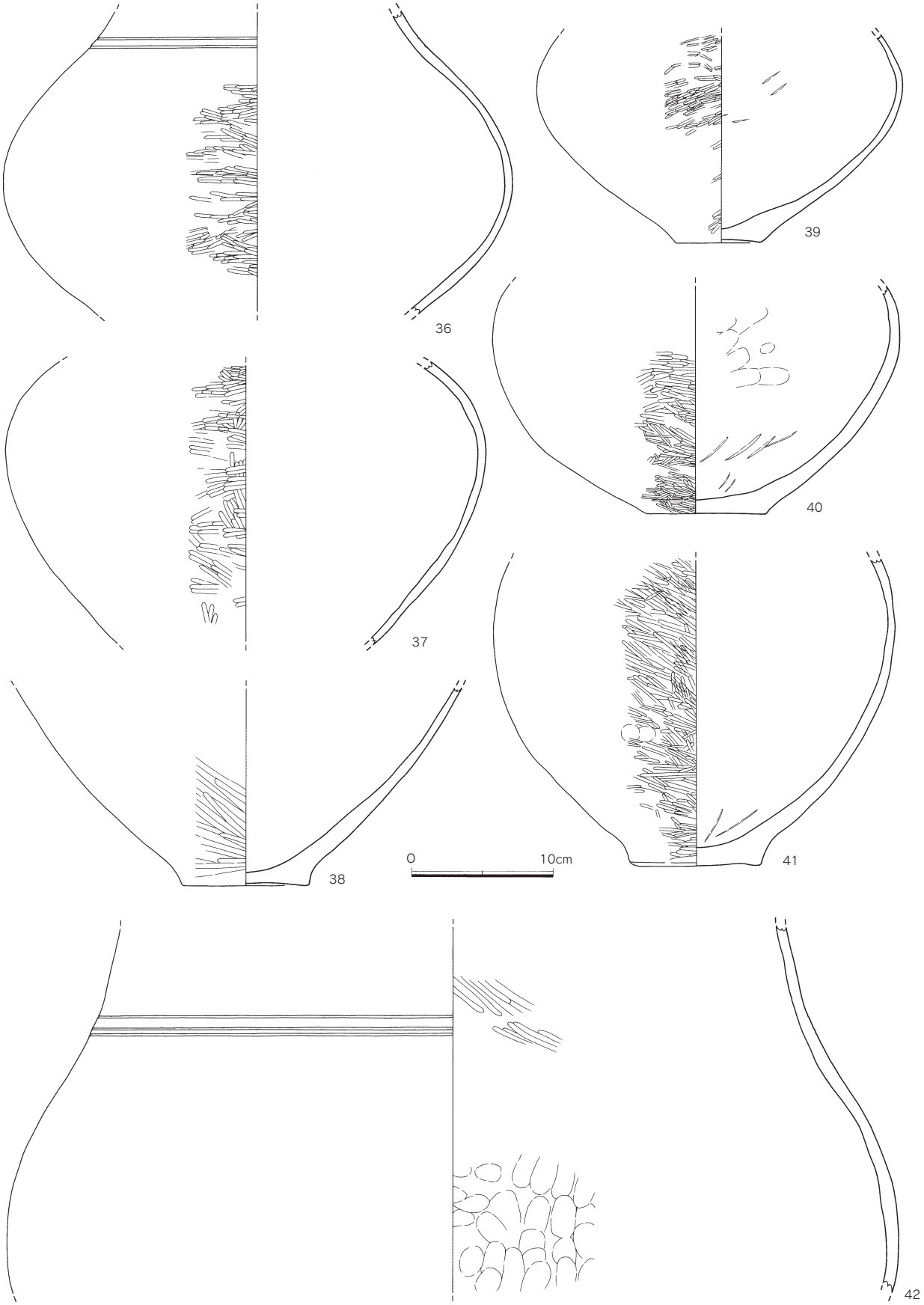
18の胎土は1～4mmの砂粒を含む。焼成は良好である。胴部及び底部外面に煤付着。19・20は小径の底部。19は底面が上げ底で、穿孔有。器壁断面に粘土紐接合痕が認められる。胎土は1～3mmの砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。20は1～2mm程の砂粒を少量含む精良な胎土で焼成良好である。底部内面に黒斑有。

21～25はd類。すべて小径の底部である。

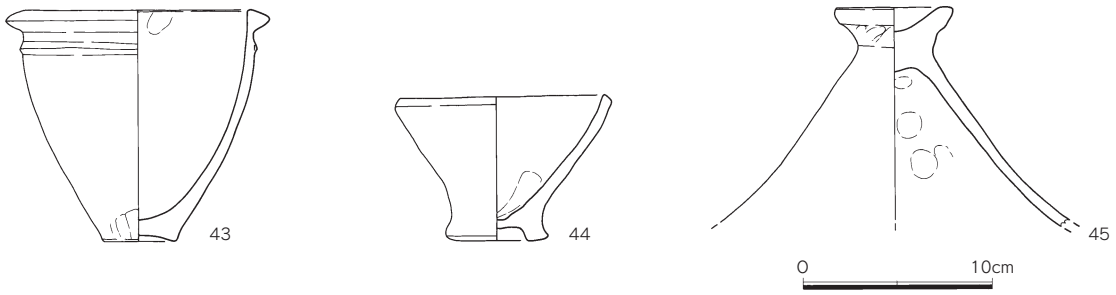
21は穿孔有。2mm以下の砂粒を多く含む胎土で焼成良好である。22は内面に指頭圧痕有。1～4mm砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。23は分厚い底部で、上げ底である。内面に指頭圧痕有。1～2mmの砂粒を多く含む胎土で焼成良好である。胴部外面に黒斑有。24は分厚い底部で、上げ底である。1～2mmの砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。25は2mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。



第10図　SD0001環壕2～3アゼ上層土器集中部④（1/4）



第11図　SD0001環壕2～3アゼ上層土器集中部⑤（1/4）



第12図　SD0001環壕2～3アゼ上層土器集中部⑥（1/4）

26はe類。外面に指頭圧痕有。胎土は1～3mm程の砂粒を含み焼成良好である。

壷（第10・11図　27～41）

27・28は小型壷

ともにD類。27は頸胴部に三角突帯を貼付する。細かい砂粒を若干含む大変精良な胎土で焼成良好。28は口頸部に2条の沈線を施し、頸胴部に三角突帯を貼付する。1～2mmの砂粒を多く含む精良な胎土で焼成良好。

29～41は中型の壷である。

29・32はC類。

29は頸胴部には3条の沈線を施す。粘土紐接合痕が口縁部断面に認められる。1mm程の砂粒を含む大変精良な胎土で焼成良好である。口縁部内面に棒状の黒斑が認められる。32は口唇部を面状に成形する。頸部は締まり丸く張り出した胴部との境界に3条の沈線を施す。1～2mmの砂粒を含む大変精良な胎土で焼成良好である。33は、丸く張り出す胴部から頸部へと緩やかに推移し、境界は不明瞭である。口頸部と頸胴部及び胴部にそれぞれ3条の沈線を施す。1～2mm程の砂粒を含む大変精良な胎土で焼成良好である。胴部から頸部外面にかけて黒斑有。

30・31はB類。

30は口唇部を面状に成形する。口頸部に2条の沈線を施すが、沈線は部分的に断絶する箇所が有る。器面は内外面にナデ調整であるが、外面には部分的に磨きの痕跡が残存しており、磨き調整後に最終調整としてナデ調整が行われたのであろうか。2mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。31は口頸部と頸胴部に2条の沈線を施す。3mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。

34～41は胴部から底部にかけての破片。

34は、胴部は丸く張り出し、頸胴部に三角突帯を貼付し、胴部に3条の沈線を施す。1～2mm前後の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。35は、胴部は丸く張り出し、頸胴部に三角突帯を貼付する。胴部最大径は胴高中位に位置する。底部はc1類。底部断面に粘土紐接合痕が認められる。2mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。36は頸胴部に2条の沈線を施す。3mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。37は、胴部最大径は胴高上位に位置する。内面ナデ調整。3mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。38は底部a類。1～2mmの砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。39は底部c1類。胴部と底部の境界は不明瞭で、僅かに上げ底である。内面に工具痕が残存する。2mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。

底面端部から胴部下位にかけて黒斑有。40は底部c1類。内面に工具痕及び指頭圧痕有。1mm程の砂粒を含む大変精良な胎土で焼成良好である。41は底部b類。底部は厚手に成形される。内底部に工具痕が残存する。1～4mmの砂粒を少量含む大変精良な胎土で焼成良好である。胴部から底部にかけて外面に大きな黒斑有。

42は甕棺（第11図42）

頸部から胴部にかけての破片。頸部が内傾しつつ立ち上がり、壷のなごりをとどめる。頸胴部に2条の沈線を施す。内面に指頭圧痕有。1mm前後の砂粒を含む比較的精良な胎土で焼成良好である。外面に黒斑有。

鉢（第12図43・44）

43は口縁部と胴部に突帯を貼付する。突帯上は摩滅のため刻みの有無は不明。底部は胴部との境界は不明瞭で、上げ底である。1mm程の砂粒を含む大変精良な胎土で焼成良好である。底面端部から胴部下位にかけて黒斑有。器面外面上位に一部煤付着箇所が認められるため、甕として使用された可能性が考えられるが、ここでは主に容量から鉢として報告しておく。

44は、口縁部が直線的に開く。底部は高台状の形状を呈する。2mmの砂粒を多く含む精良な胎土で焼成良好である。

蓋（第12図45）

摘み基部は抉れ、高台形を呈し端部は外方に張り出す。1～3mmの砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。

（2）SD0001環壕上層出土の土器（第13～16図）

ここでは、土器集中部以外で、環壕の上層から出土した土器（以下、上層出土土器）について報告する。

上層出土土器には、須玖式土器等の弥生時代中期以降の土器や古代・中世の土器が一定量含まれていたが、これらの土器は埋没最終段階に環壕上面に残存した窪みに堆積した埋土に含まれていたり、埋没後に上面へ掘削された遺構の土器ではないかと推測している。このような土器が比較的みられない2-3アゼ間で出土した74箱の土器を対象として以下に報告していくが、掲載している土器は、土器集中部で出土した土器群の様相を基準として任意に選別したことを記しておく。

甕（第13・14図1～19）

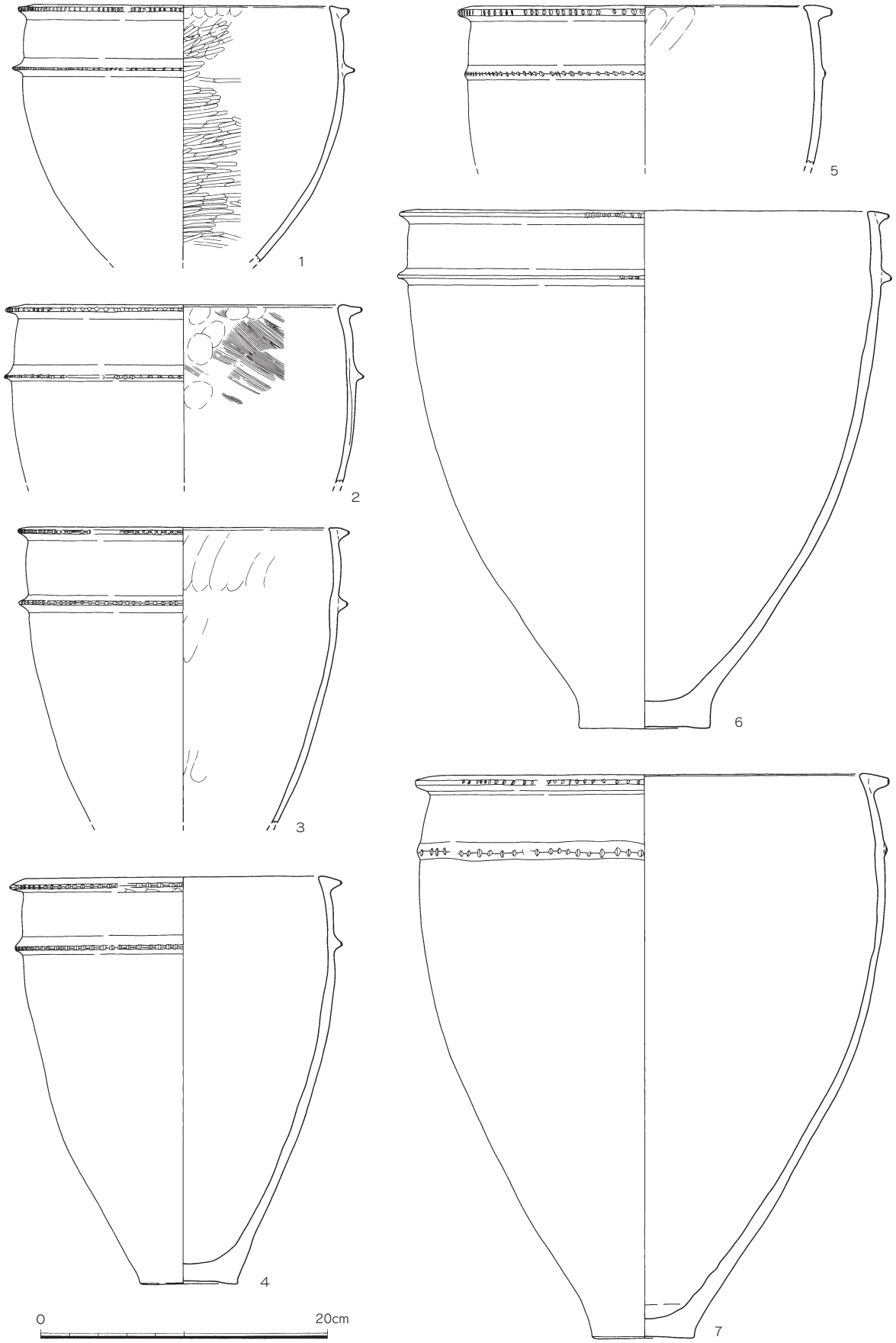
1～17は口縁部から胴部、または全体形を復元可能であった遺物である。

1～14はA類。

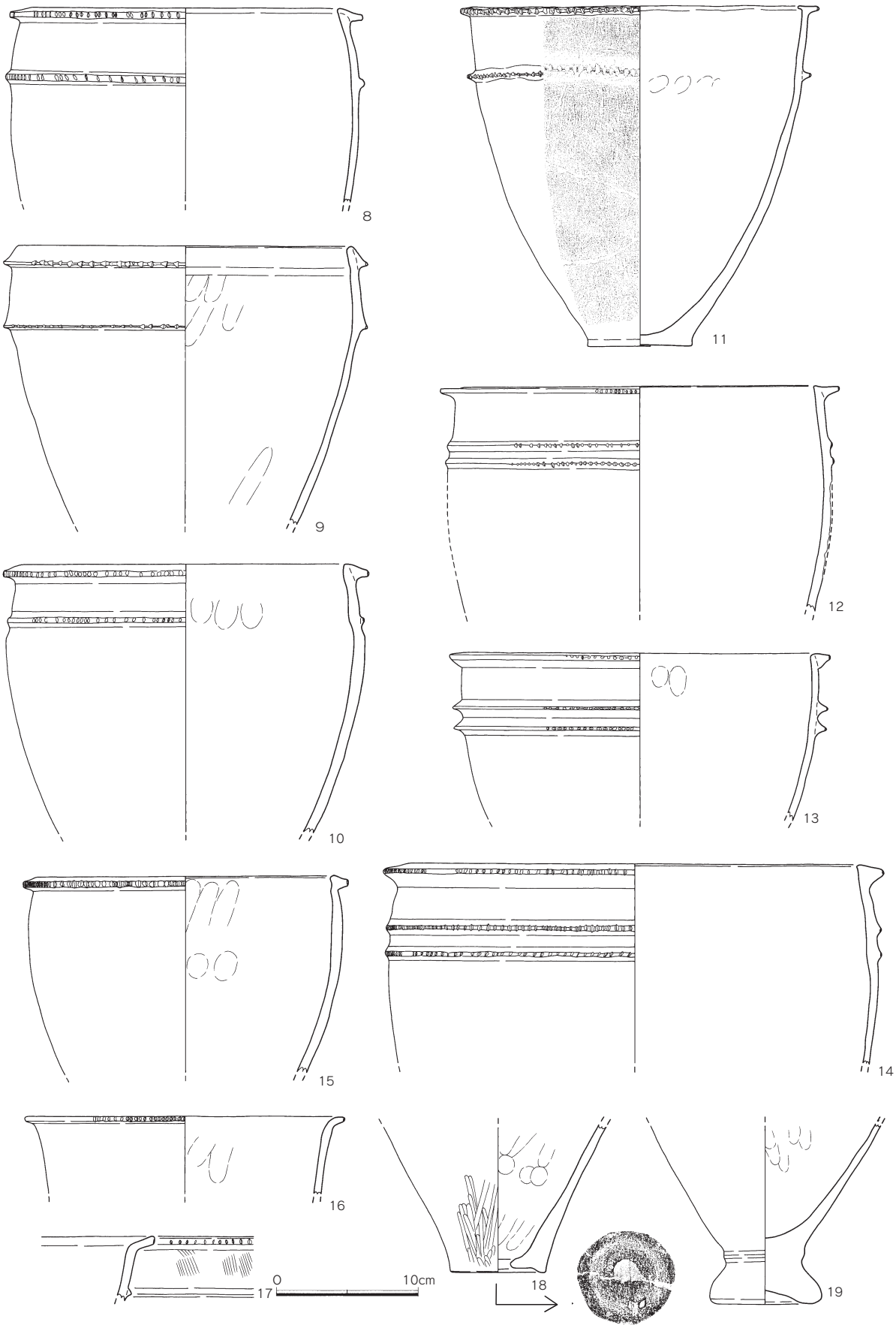
1～7は口唇部に肥厚した三角突帯を貼付する。1は3mm以下の砂粒を含んだ精良な胎土で、焼成良好である。口縁外面に黒斑有。胴部外面に煤及び炭化物付着。2は3mm以下の砂粒を含んだ精良な胎土で、焼成良好である。口縁部下位から胴部上位の内外面に黒斑有。3は微砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。胴部上位内外面に黒斑有。4は1～3mmの砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。胴部上位内外面に黒斑有。5は1mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。胴部外面に黒斑有。6は1～2mm程の砂粒を少量は含む精良な胎土で焼成良好である。7は2mm程の砂粒を多く含む精良な胎土で焼成良好である。胴部の外面には黒斑有。

8～10は口唇部に下垂れ形の突帯を貼付する。8の口縁部突帯を口唇器壁上面に被せるように、背の高い突帯を貼付する。1～2mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。9は細砂粒を少量含む精良な胎土で焼成良好である。胴部外面及び口縁部内面に黒斑有。10は1～2mmの砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。胴部外面及び口縁部内面に黒斑有。

11は口縁部に断面蒲鉾形の突帯を貼付する。口唇と突帯上面を水平に一体成形し、強くナデ調整を施すため、



第13図　SD0001環壕上層出土土器①（1/4）



第14図　SD0001環壕上層出土土器②（1/4）

口唇端が内面に張り出す。器面調整は縦及び斜位方向へ施しており、工具による調整痕が条線として確認できる。1～2mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。胴部上位に黒斑有。胴部内外面に煤付着。

12～14は胴部に2条の突帯を貼付する。12は口縁部に断面蒲鉾形のやや背の高い突帯を貼付する。口唇と突帯上面を水平に成形し、ナデ調整を一体的に施す。3mm以下の砂粒を多く含む概ね精良な胎土で、焼成は良好である。

13は口縁部にやや厚手の断面三角形の突帯を上向きに貼付する。口唇と突帯上面を水平に成形し、ナデ調整を一体的に施す。微砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。胴部外面と口縁部から胴部内面に黒斑有。14は1～2mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。

15はB類。口唇外面に突帯を貼付し、突帯貼付に伴う強い横ナデが口唇内面に認められる。1～4mmの砂粒を含む概ね精良な胎土で焼成良好である。

16はC1類。口縁は短く外反し、口唇中央から外端部にかけて浅い刻みを施す。細砂粒を少量含む精良な胎土で焼成良好である。

17はC2類。口縁は強く外反し、内面に稜が認められる。口唇中央から外端にかけて浅い刻みを施す。1～2mmの砂粒を少量含む精良な胎土で焼成良好である。

18・19は底部破片。

18はd類。底面が僅かに上げ底である。穿孔有。胴部外面には縦位に磨き調整、内面にナデ調整。底面はナデ調整。種子圧痕が認められる。圧痕は長軸6.50mm、短軸2.25mm。圧痕内部に種子の条線が確認できる。籾圧痕と思われる。

19はe類。胴部との境界には突帯を貼付している。器面は摩滅しているが、内外面ともにナデ調整と判断した。細砂粒を少量含む精良な胎土で焼成良好である。

壷（第15・16図　20～41）

20～27は小型壷。

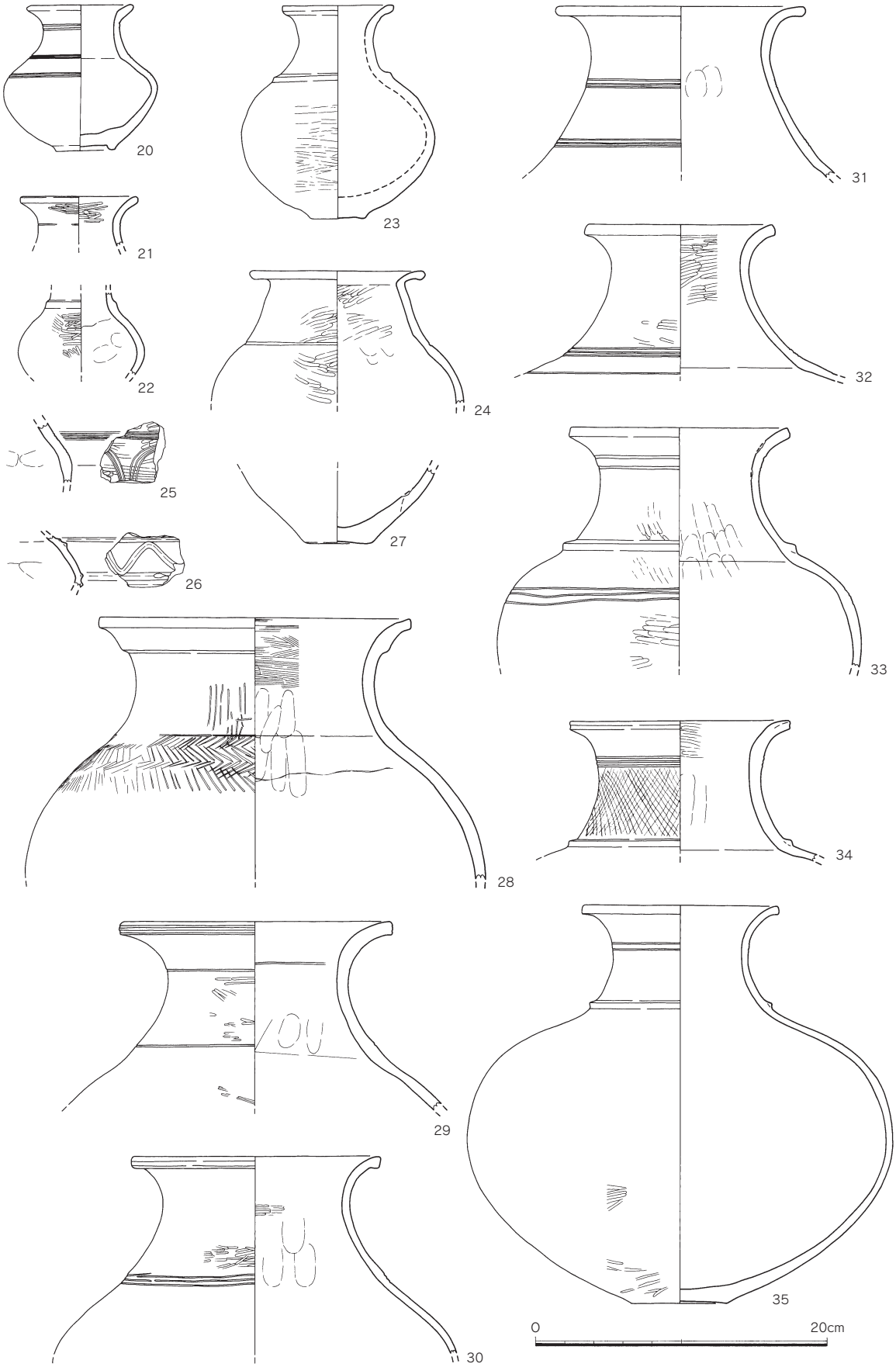
20・21はB類。20は口頸部及び頸胴部境界には沈線を2条施し区画する。口頸部内面にはやや不明瞭であるが稜が認められる。底部はb類。やや上げ底である。微砂粒を含む大変精良な胎土で焼成良好である。内面に比較的大きな黒斑有。21は大きく外反し、形態がC類に類似しつつある。口頸部には浅く細い沈線が1条認められるが、部分的に断絶する。器面内外面に磨き調整。細砂粒を少量含む大変精良な胎土で焼成良好である。

22は頸部から胴部にかけての破片。頸胴部境界に三角突帯を貼付する。丸く張り出した胴部で、頸部が締まった器形であったと考える。口頸部内面には粘土紐接合痕が認められる。細砂粒を含む大変精良な胎土で焼成良好である。

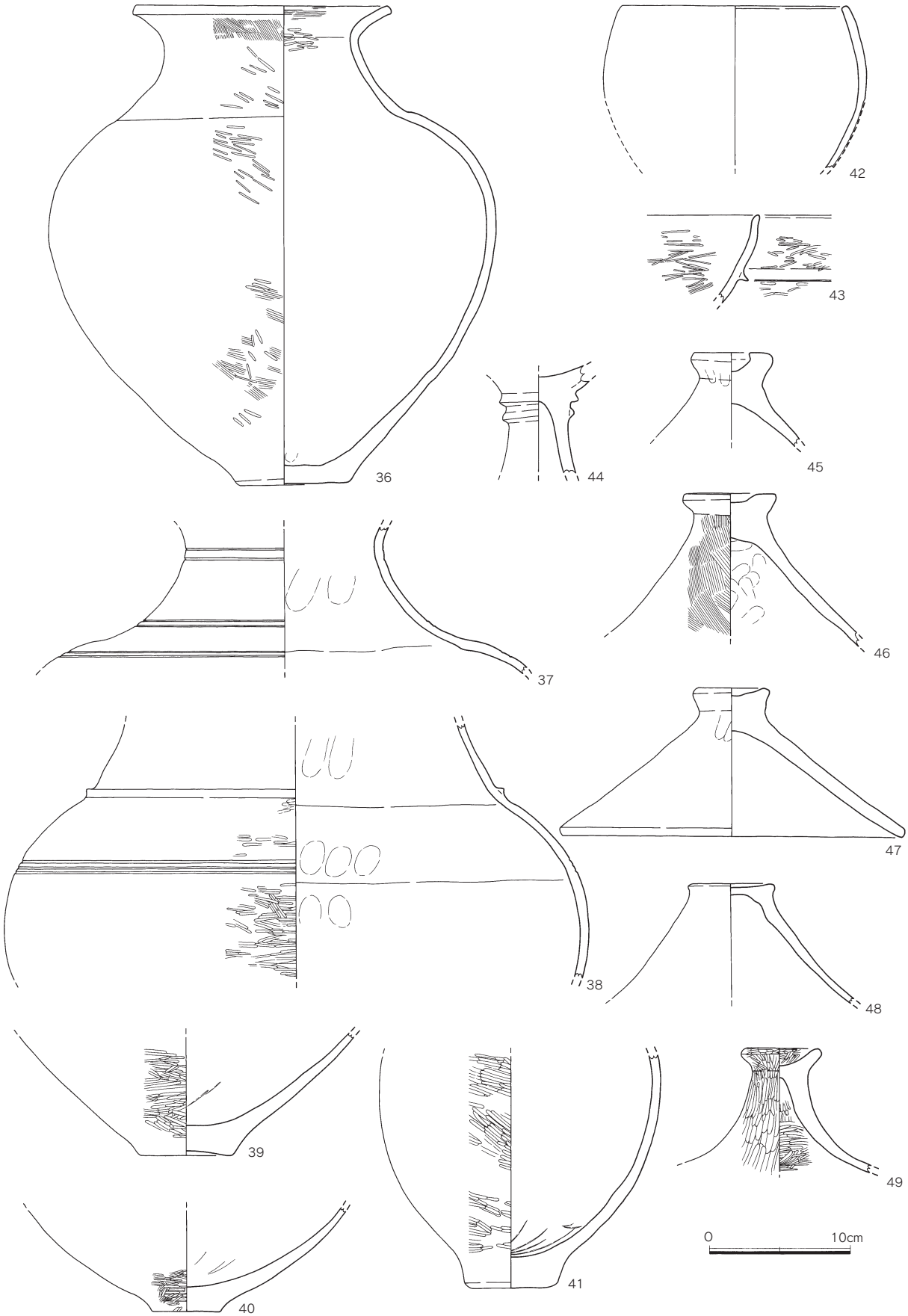
23はC類。丸く張り出した胴部から、頸部は締まり筒形に近い形状を呈する。頸胴部には三角突帯を貼付する。底部はb類。小砂粒を含む大変精良な胎土で焼成良好である。底面から胴部下位にかけて明瞭で比較的大きな黒斑があり、対象位置の胴部上位と口縁部内面にはやや不明瞭な黒斑が認められる。

24は丹塗土器である。口縁部は強く折れ、口唇は玉縁状に仕上げられる。頸胴部には沈線を施す。器面調整は外面から口縁部内面にかけて磨き調整、胴部内面にナデ調整。1mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成は良好である。

25・26は胴部破片。25は3～4条の浅い沈線により形成された重弧文帯の一部と考える。微砂粒から1mm程の砂粒を含む大変精良な胎土で焼成良好である。26は三角突帯により山形文帯を形成する。1mm程の砂粒を



第15図　SD0001環壕上層出土土器③（1/4）



第16図　SD0001環壕上層出土土器④（1/4）

含む大変精良な胎土で焼成良好である。

27は底部破片。c1類。断面に粘土紐接合痕が推定できる箇所が認められる。1mm程の砂粒を少量含む大変精良な胎土で焼成良好である。黒斑有。

28～36は中型の壷。

28はA類。口縁外面下位を肥厚させ段を形成する。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は面状に成形される。頚部に複数条の浅く細い平行縦沈線文を施す。頚胴部境界は沈線を施すことで区画されるが、一部で断絶し、沈線の幅も一定ではない。頚胴部内面に粘土紐接合痕と指頭圧痕がみられる。胴部には無軸羽状文による文様帯が形成されている。1～5mmの砂粒を含む精良な胎土で焼成良好。口縁部から頚部外面に黒斑有。

29～35はC類。

29は口縁部が大きく外反し、口唇部を面状に成形する。口頚部と頚胴部に浅い沈線を施し区画する。1～3mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。30は口縁部が緩やかに大きく外反し、口唇部を面状に成形する。頚胴部を浅い3条の沈線で区画する。沈線は部分的に断絶している。1～2mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。31は口縁部は大きく外反する。口頚部の最小径位置からB類の可能性も考えられる。口頚部及び頚胴部境界は不明瞭で、3条の沈線により区画される。内面に指頭圧痕有。2mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。32は口縁部が緩やかに外反し、口唇を面状に成形する。頚胴部内面には稜を有し、胴部は大きく張り出すものと考える。頚胴部には3条の沈線が施される。1～2mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。33は口縁部が緩やかに大きく外反し、口唇を面状に成形する。口頚部は2条の沈線で、頚胴部には三角突帯を貼付して区画する。胴部には沈線を3条施す。頚部内面に指頭圧痕有。3mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。34は丹塗土器。口縁部は緩やかに外反し、口唇を面状に成形する。口頚部は3条の沈線で、頚胴部には三角突帯を貼付して区画する。頚部には彩文により斜格子文を施す。口唇部断面に粘土紐接合痕が認められる。器面外面及び口縁部内面に磨き、微砂粒を含む大変精良な胎土で焼成良好である。35は口縁部が朝顔形に大きく開き、口唇部を面状に成形する。頚部は締まり筒形に近い形状を呈する。胴部は丸く大きく張り出す。頚胴部には三角突帯を貼付して区画する。底部と胴部の境界は不明瞭である。小砂粒を含む大変精良な胎土で焼成良好である。底部はc1類。底面から胴部下位及び口縁部外面に黒斑有。

36はA類。口縁部が長く外反し、口唇部は面状に成形する。頚胴部は有段。口頚部と頚胴部の境界は比較的明瞭である。胴部最大径は胴上位に位置する。底部はc1類。胴部との境界が不明瞭である。1～4mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。

37・38は大型壷の頚部から胴部の破片。

37は頚部が締まり、胴部は大きく張り出す器形と考える。口頚部と胴頚部には2条の沈線を施し区画する。口頚部内面には稜線が認められる。1～3mmの砂粒を多量に含む胎土で焼成良好である。38は口頚部に三角突帯を貼付して区画する。胴部には3条の沈線を施す。1～2mmの砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。胴部外面に黒斑有。

39～41は底部破片。

39はb類。底部はやや厚手で僅かに上げ底である。内底部に工具痕が残存する。1mm程の砂粒を僅かに含む大変精良な胎土で焼成良好である。

40は小径で底面が厚手。やや突出する形状を呈する。器面調整は外面が磨き、内面ナデ。内底部に工具痕が残存する。細砂粒を少量含む大変精良な胎土で焼成良好である。41は底面が厚手で突出する。内底部に工具痕が残存する。2mm以下砂粒や5mm程の小石を含む胎土で焼成良好である。

鉢（第16図42・43）

42は丹塗土器。胴部から口縁部にかけて内湾しつつ立ち上がる器形。器面は摩滅が著しく調整不明瞭であるが、内外面ナデ調整と判断した。1～2mmの砂粒を含む精良な胎土で焼成良好。43は口縁部が内湾しつつ直線的に立ち上がる。体部には三角突帯を貼付する。1～4mm程の砂粒を少量含んだ大変に精良な胎土で焼成は良好である。

高杯（第16図44）

44は高杯の杯脚接合部の破片である。三角突帯を2条貼付する。1～2mmの砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。

蓋（第16図45～49）

45・46は摘み基部は抉れ、高台形を呈する。45は基部の抉れが深い。細砂粒を少量含む大変精良な胎土で焼成良好である。摘み頂端部及び内面に黒斑有。内面煤付着。46は基部の抉れが45に比べて浅い。細砂粒を少量含む大変精良な胎土で焼成良好である。摘み頂端部及び内面に黒斑有。内面煤付着。

47は摘み高が低く、基部の抉れは浅い。器高が低く裾拡がりである。3mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。内面に黒斑有。

48は摘み頂部が平坦なもの。2mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。

49は摘み頂端部は丸みを有し、外方に大きく張り出す。1mm以下の砂粒を含む大変精良な胎土で焼成良好。

（3）SD0001環壕中層出土の土器(第17・18図)

中層からはコンテナ9箱の土器が出土している。以下、これらの土器について報告していく。

甕（第17図1～6）

1～6は、口縁部から胴部にかけての破片である。

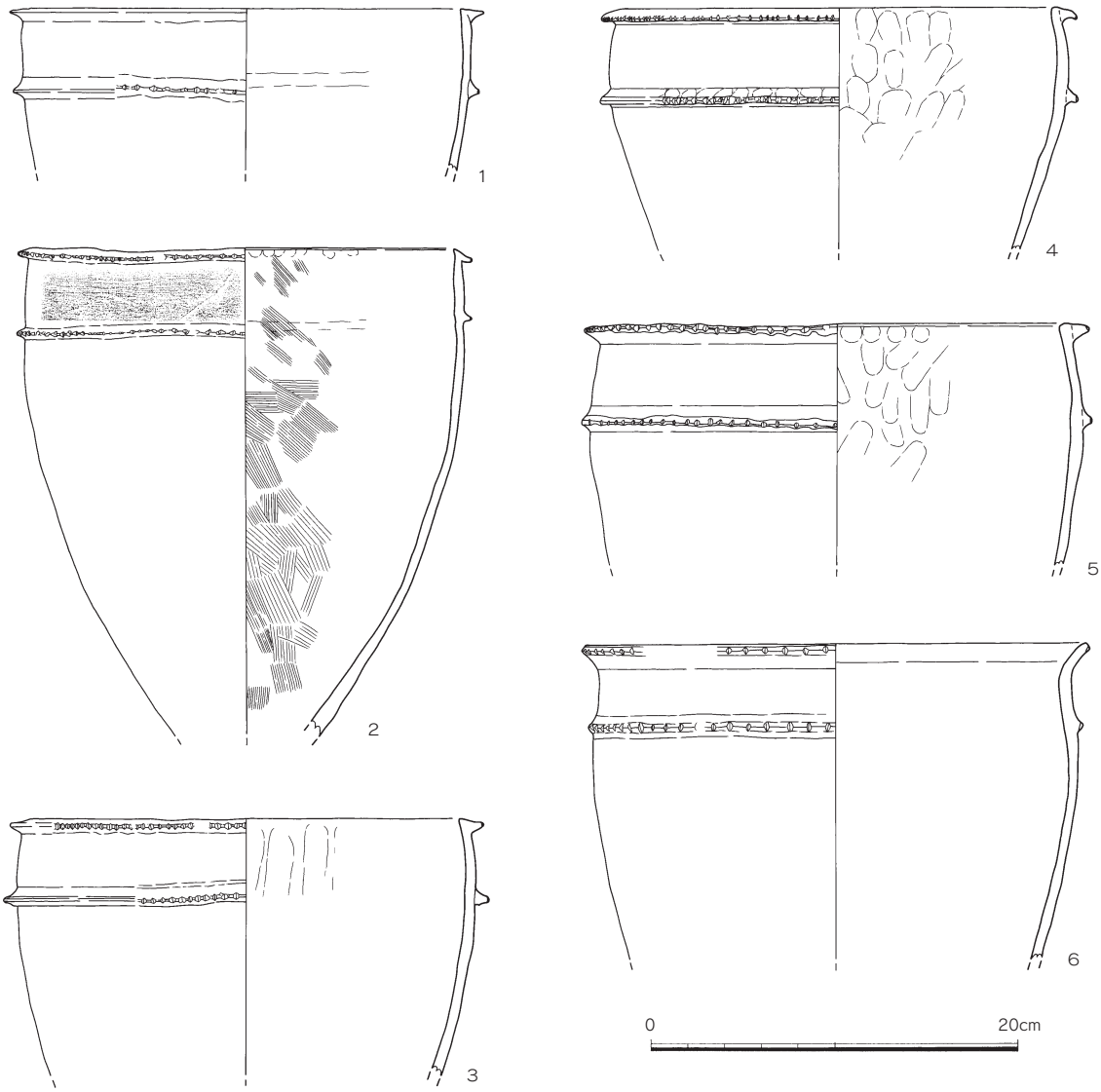
1～5はA類。

1・2は口縁部に向かって直線的に立ち上がる。1は口縁部に先端が尖った突帯を貼付する。内面に指頭圧痕が認められる。微砂粒を含んだ精良な胎土で、焼成は良好である。2は口縁部には下向きの三角突帯を口唇部に接して貼付している。3mm程の砂粒を多く含む精良な胎土で焼成は良好である。胴部の内外面に煤が付着している。

3～5は口縁部に向かって、やや内湾しつつ立ち上がる器形である。3は2mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。口縁部外面に吹きこぼれによる炭化物が付着し、胴部には煤がみられる。4は口縁部にはやや幅が広く、背の高い突帯を貼付している。微砂粒または1mm程度の砂粒を含む精良な胎土で焼成は良好である。5は口縁部に幅広の突帯を貼付する。微砂粒～1mm程の砂粒を多く含み焼成良好である。口縁部の外面に黒斑が認められる。

6はC2類。

口唇端部は僅かに角張った形状に成形する。1～2mmの砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。胴部外面に黒斑有。胴部下位に炭化物及び煤が付着する。



第17図　SD0001環壕中層出土土器①（1/4）

壷（第18図7～16）

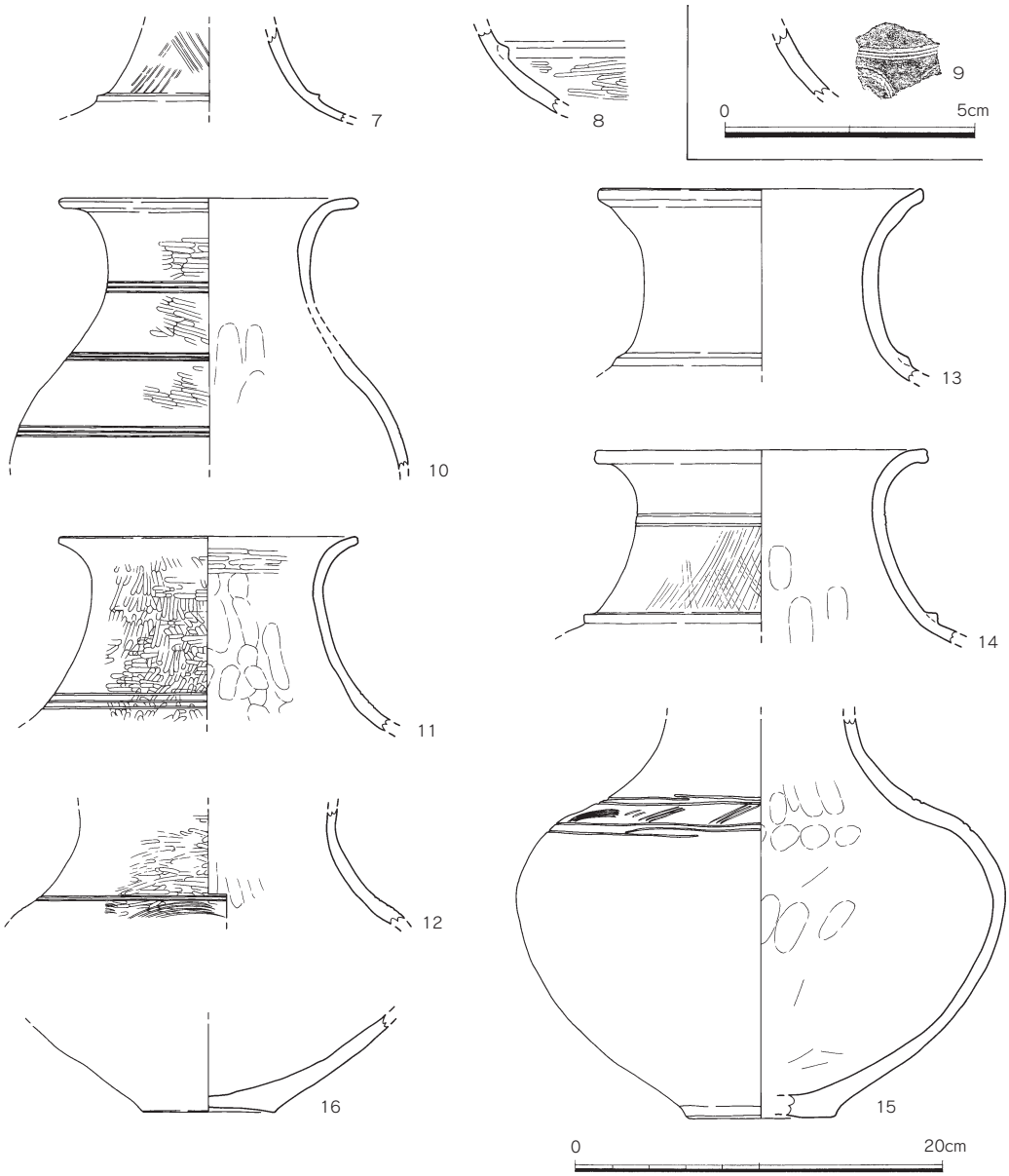
7～9は小型壷の頸部から胴部にかけての破片。

7は頸部が締まった器形で、頸胴部境界に突帯を貼付する。外面に黒色化がなされ、頸部に山形文の彩文の痕跡が残る。0.5mm程の砂粒を極少量含む大変精良な胎土で焼成は良好である。8は突帯を貼付する。外面磨き調整、内面ナデ調整。微砂粒～1mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。9は丹塗磨研土器。外面に赤彩の痕跡が残り沈線及び貝殻重弧文を施す。調整は外面磨き、内面ナデ。砂粒～1mm程の砂粒を含む大変精良な胎土で焼成良好である。

10～15は中型の壷の口縁部から頸胴部の破片である。

10・11、13・14はC類。

10は口頸部及び頸胴部境界は不明瞭で、浅い沈線を施すことで区画される。1mm前後の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。11はB類とC類の中間的な形態を呈する。口縁部が長く大きく外反し、口頸部最小径位置が比較的低い位置にあることからC類として分類する。口唇端部に軽い面取りを施す。頸胴部に浅い沈線



第18図　SD0001環壕中層出土土器②（1/3・1/4）

を3条巡らせる。磨き調整を、まず縦位に施した後、再度横位に調整する。1mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。13は頚胴部に突帯を貼付する。2mm以下の砂粒を多く含む精良な胎土で焼成良好である。14は口頸部に沈線を巡らし、頚胴部には突帯貼付する。頚部には彩文により斜格子文を施す。微砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。

12は頸部から胴部にかけての破片。2条の沈線と崩れた重弧文が施される。1～4mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。

15は頚部から底部まで残存している比較的大きな破片である。底部はb類。胴部は大きく膨んでおり、最大径の位置は胴部上位にある。頸胴部間には沈線により、山形文か重弧文と思われる文様帯が施されているが、沈線は随所で断絶または重複しており、文様の退化傾向が著しい。1mm程の砂粒を多く含む精良な胎土で焼成は良好である。

16は底部破片。ｃ1類。僅かに上げ底である。1～2mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。底面から体部外面及び内底部に黒斑有。

（4）SD0001環壕下層出土の土器(第19～21図)

ここでは、下層から出土したコンテナ19箱の土器を対象として報告をおこなう。

甕（第19図1～14）

1～11は口縁部から胴部にかけての破片。

1～6はA類。

1は内面に指頭圧痕が認められる。1～2mm程の砂粒を含んだ精良な胎土で、焼成は良好である。2は内面には指頭圧痕が認められる。2mm以下の砂粒を含む精良な胎土で、焼成は良好である。3はやや幅広で外下がりの突帯を口唇に貼付する。1mm程の砂粒を含む精良な胎土で、焼成は良好である。4は口唇部とほぼ水平に背の高い突帯を貼付する。内面には指頭圧痕が認められる。1～3mm程の砂粒を含んだ精良な胎土で焼成は良好である。5は口唇部と水平に断面蒲鉾形の突帯を貼付する。2mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。6は口唇端部をつまみ出して突帯状に仕上げている可能性が高い。2mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。胴部内外面に煤が付着する。

7・8はB類。

7はナデ調整を横位又は斜位方向に施す。微砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。外面に黒斑が認められる。8はナデ調整を、まず縦位に施した後に、再度横方向に調整する。1～2mmの砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。

9はC1類。

9は口唇先端に浅細な刻みを施す。胴部は膨らみを有する。2mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。内面に煤が付着している。

10・11はC2類。ともに口縁部は強く外反する。

10は口唇部全面に浅い刻みを施している。1～2mmの砂粒を含む精良な胎土であり焼成は良好である。11は10に比べて口縁が短く外反している。口唇部の全面及び胴部突帯に刻みを施している。胴部には刷毛目調整を縦位に施していた可能性があるが、摩滅のため断定できなかった。1～4mm程の砂粒を含んだ精良な胎土で焼成は良好である。

12～14は底部破片。

12は底部b類。微砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。内面に煤付着。

13は底部c類。底面に穿孔が有る。2mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。

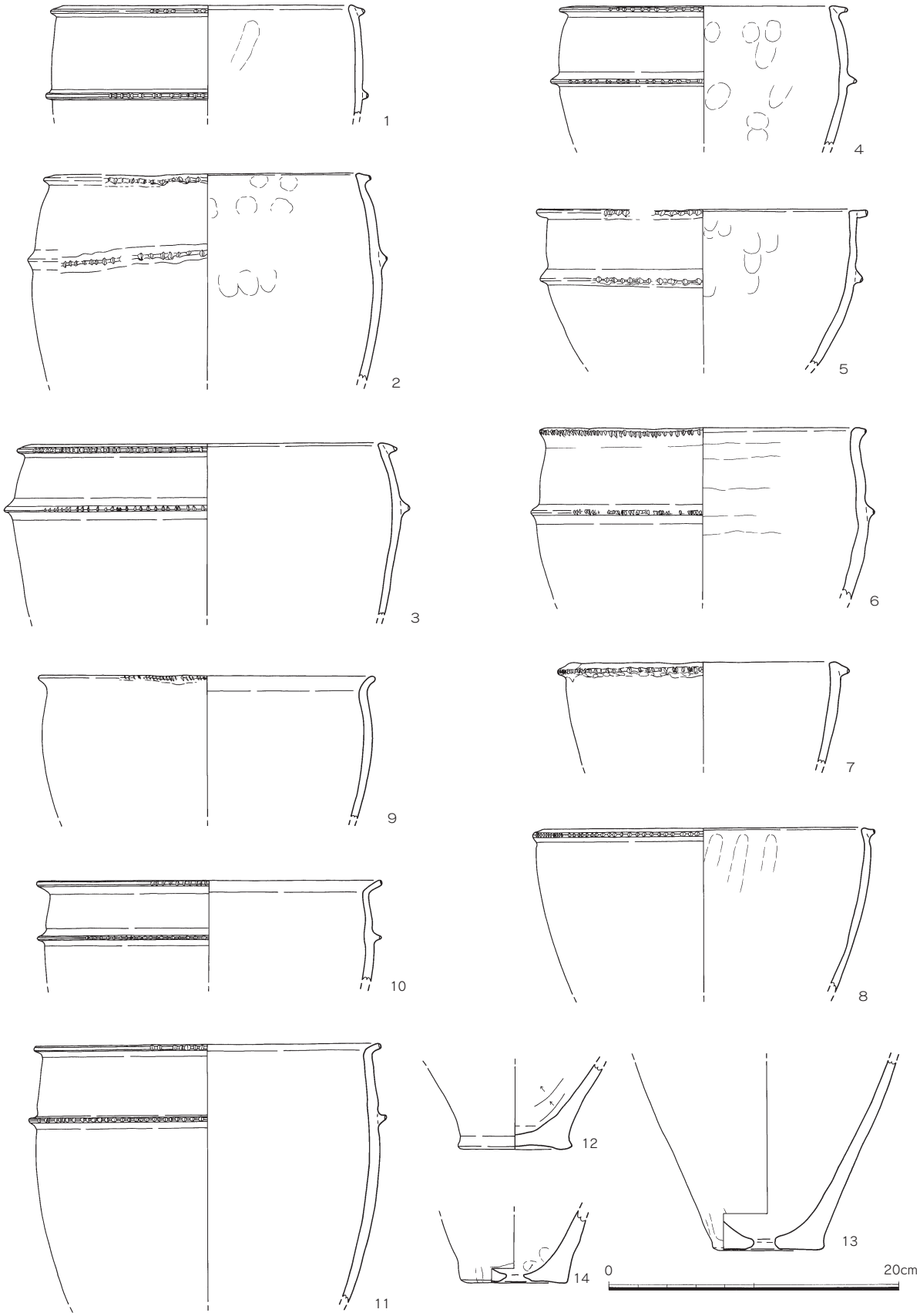
14は底部d類。底面に穿孔が有る。内外面に指頭圧痕が認められる。微砂粒から2mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成は良好である。

壷（第20図15～34）

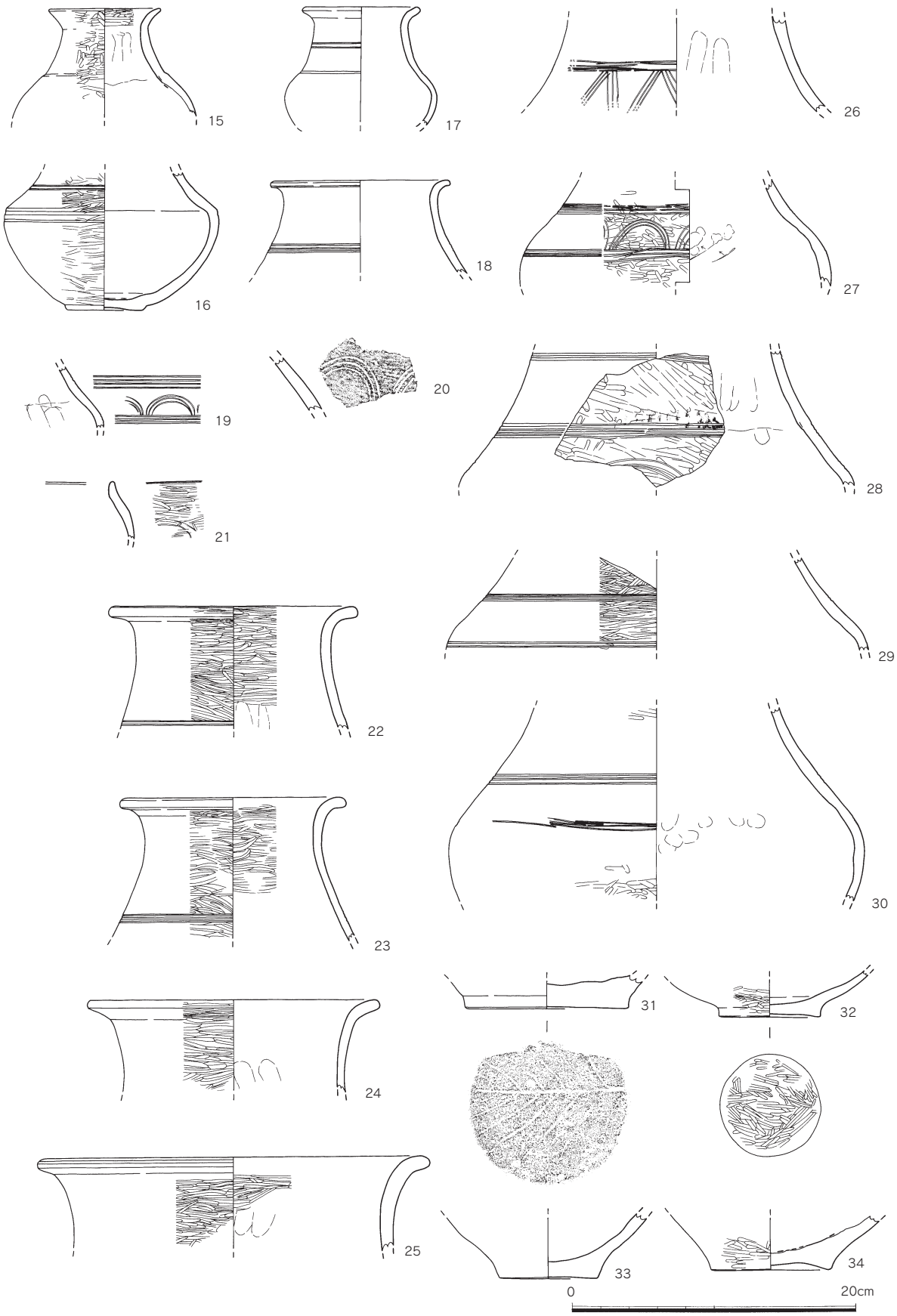
15～20は小型の壷。

15はA類。丹塗磨研小壷で、器面外面から頸部内面にかけて部分的ではあるが赤色顔料を塗布した痕跡がみられる。肩部外面には段を有する。微砂粒を含む大変精良な胎土で焼成良好である。胴部外面に黒斑有。

16は頸部から底部にかけての破片。底部はb類。胴部最大径が頸胴部に位置し、鋭角に屈折して頸部に接合する。頸胴部と胴部にそれぞれ2条の浅い沈線を施す。底部と胴部の境界には稜線が認められ、僅かに上げ底



第19図　SD0001環壕下層出土土器①（1/4）



第20図　SD0001環壕下層出土土器②（1/4）

である。微砂粒～2mm程の砂粒を多く含む精良な胎土で焼成は良好である。

17はA類。口頸部に2条の沈線を、頸胴部に1条の凹線を施す。1～3mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成は良好である。

18はB類。口頸部に3条の沈線を施す。微砂粒～2mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成は良好である。

19・20は頸部から胴部にかけての小破片。

19は丹塗土器小壷で、外面に赤色顔料を塗布する。3条沈線による重弧文帯が認められる。頸胴部内面に粘土紐接合痕及び指頭圧痕が残存する。20は胴部外面に貝殻重弧文を施す。微砂粒～2mm程の砂粒を含んだ精良な胎土で焼成良好である。

21は無頸壷。

口縁部から胴部にかけての小破片。重弧文と思われる文様が大変細い沈線により施される。器面外面は磨き調整、内面はナデ調整を施す。微砂粒～1mm程の大変精良な胎土で焼成は良好である。

22～30は中・大型の壷。

22～25はB類。

22は口頸部に沈線を施す。沈線は2条まで確認できる。微砂粒～2mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。23は頸部に沈線が3条施されている。微砂粒～2.5mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。24は頸部内面に指頭圧痕が認められる。微砂粒～1mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。25は口唇外端部に粘土帯を貼付する。頸部内面には指頭圧痕が認められる。微砂粒～2mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。

26～30は頸部から胴部にかけての破片である。

26は頸部に山形文帯を施されている。文様帯は3条の沈線により構成されるが、沈線には重複及び断絶する箇所が随所に認められる。また、この文様帯の上部には、彩文が横方向に施してあった可能性が考えられる。内面には指頭圧痕が残存する。1mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。27は頸部に重弧文帯を施されている。文様は3条の沈線により構成されるが、沈線は重複や断絶箇所が複数認められる。内面に指頭圧痕及び工具による成形痕が残存する。3mm以下の砂粒を含んだ精良な胎土で焼成は良好である。胴部外面に黒斑有。28は口頸部に沈線が2条まで確認できる。胴部には3～4条の沈線による重弧文帯が認められる。また頸部には、縦位に施された彩文が部分的に残存する。内面に指頭圧痕が残存する。2mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成は良好である。29は胴部に2～3条の沈線を施すが、沈線間に文様帯は存在しない。微砂粒～2mm程の砂粒を含んだ精良な胎土で焼成は良好である。30は胴部に3条の沈線を施す。沈線は一部で重複及び断絶する。沈線間に文様帯は存在しない。内面には指頭圧痕が残存する。微砂粒を含んだ精良な胎土で焼成は良好である。

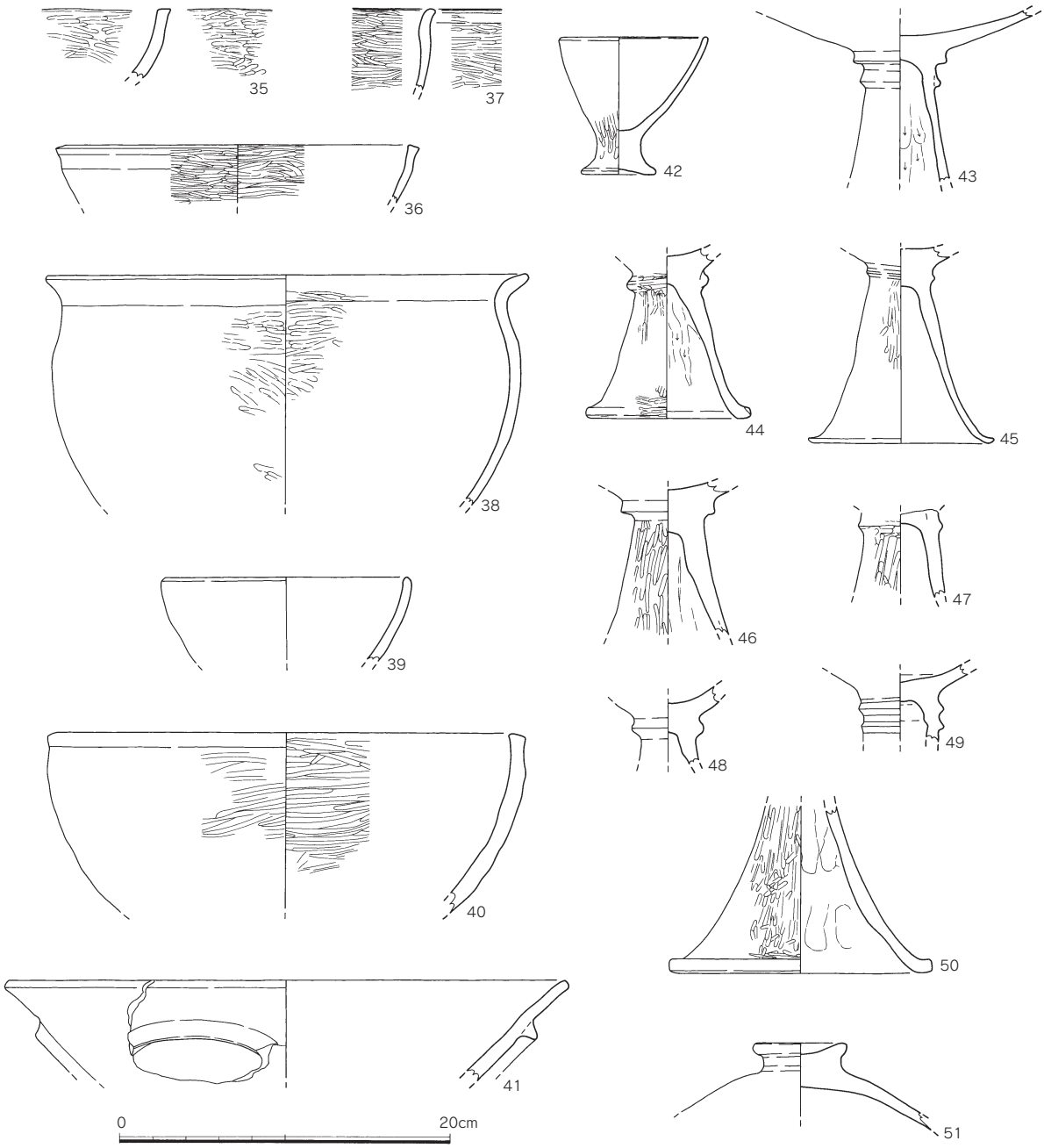
31～34は底部破片。

31・32は底部a類。

31は底面にはナデ調整を施すが、製作時に付いた葉脈痕が一部残存する。微砂粒～2mm程の砂粒を多く含む精良な胎土で焼成良好である。32は底面に磨き調整を施す。砂粒～2mm以下の砂粒を多く含む精良な胎土で焼成良好である。

33は底部b類。底面はナデ調整を施している。微砂粒～2mm程の砂粒を多く含んだ精良な胎土で焼成は良好である。

34は底部c1類、僅かに上げ底であるため、c2類とするべきかもしれないが、明瞭な上げ底ではなく、部分的



第21図　SD0001環壕下層出土土器③（1/4）

に平底の箇所も認められるためc1類として報告する。底面はナデ調整を施す。3mm程の砂粒を多く含む。

鉢（第21図35～42）

35・36は胴部が僅かに屈曲し、口唇部を面状に成形する。

35は、内面は黒褐色の色調を呈し黒色顔料を塗布してあった可能性が考えられる。1mm以下の砂粒を少量含む大変精良な胎土で焼成良好である。36は胴部及び頚部が僅かに屈曲する。微砂粒～1mm程の砂粒を多く含む精良な胎土で焼成良好である。

37・38は、胴部は丸味を有し、口縁部は外反する。

37は外面が黒色を呈しており、黒色顔料を塗布してあった可能性があるが、小破片のため断定するには至らなかった。内外面に磨き調整を施す。微砂粒～3mm程の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。38は内外面に磨き調整後に部分的にナデ調整を施してある。口縁部から胴部上位にかけて丹塗りの痕跡が確認できる。微砂粒から1mm程の砂粒を少量含む精良な胎土で焼成良好である。胴部内面は黒褐色を呈しており、焼成後炭化物付着による黒色化が行われた可能性が考えられる。

39・40は胴部から口縁部にかけて椀状に立ち上がる。

39は微砂粒～2mm程の砂粒を多く含む精良な胎土で焼成良好である。40は口唇部面取りを行っている。微砂粒から3mm程の砂粒を多く含む精良な胎土で焼成良好である。

41は小破片。ここでは鉢として報告するが、器形全体の判断できる類例がないため今後資料の増加を待って再検討の必要があると考える。体部には断面三角形の突帯を部分的に弧状に貼付している。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部は面状に成形を行っている。1～3mm程の砂粒を含んだ精良な胎土であり、焼成は良好である。

42は台付鉢。

口縁部へ向かって直線的に立ち上がる比較的小型の鉢に脚を接合している。脚底面は中央部が僅かに上げ底状である。胎土は微砂粒を含んだ精良で、焼成は良好である。脚部に縦位の磨き調整を施す。脚裾部から底面にかけて黒斑がみられる。

高杯（第21図43～50）

43・49は杯脚接合部に2条の突帯が認められる。

43は2mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好。杯内面に2次焼成による煤が部分的に付着する。49は杯脚。接合部内面に指頭圧痕が認められる。微砂粒を含む大変精良な胎土で焼成良好である。

44～48は杯脚接合部に1条の突帯を貼付する。

44は裾端部に粘土帯を貼付しする。微砂粒を含む精良な胎土で焼成良好。裾端部に黒斑がみられる。45の裾端部は器壁が薄く、跳ね上げるように仕上げられている。2mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成は良好である。46は1～4mmの砂粒を少量含む精良な胎土で焼成は良好である。脚部外面下位に黒斑がみられる。47は杯脚接合部に粘土紐接合面が認められる。2mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成は良好である。48は2mm以下の砂粒を含んだ精良な胎土で、焼成は良好である。

50は脚部破片で、裾端部の器壁は比較的厚く仕上げられている。内面に指頭圧痕が残る。2mm以下の砂粒を含む精良な胎土で焼成良好である。

蓋（第21図51）

摘み部の破片である。基部は抉れ、端部は丸く成形されている。2mm以下の砂粒を含んだ精良な胎土で、焼成は良好である。

第２節　小　　結

田手二本黒木地区SD0001環壕1-6アゼ間でコンテナ130箱に及ぶ多量の弥生時代前期の土器が出土し、層位的に取り上げが行われている。ここでは、これら出土した土器群の計量的な分析を行うことにより、その様相を理解していきたい。

（１）分析の方法

分析には比較的良好な状況で遺物が出土した2-6アゼ間の下層・中層及び2-3アゼ間上層の土器集中部で出土した土器群を対象として層位毎に個体数を算出し、器種組成や分類した形態の構成比等の分析に用いる。個体数計測にあたっては、器種の法量の大小により生じる誤差を減らすため、破片総数ではなく残存個体数を算出した。

その方法は、口縁部の器壁内端の直径（蓋のみ摘み頂部外端径）の判るすべての破片について残存率（残存する口縁周の長さ/復元口縁周の長さ）を求め、数値が不安定にならないように残存率が17%以上（六分の一以上）のものについてのみ数値を採用し、残存個体数を少数点第3位まで算出[1)]するというものである。

算出結果を個体数として表に掲載するにあたっては、それらを加算した後に四捨五入により小数点第2位で表示する。

さらに、算出した残存個体数から器種組成比率を百分率で求め、小数点以下を四捨五入して正数で示す。

（２）器種組成

上記の計測方法により、SD0001環壕では171.16点の個体が残存していたことが判った。

層位毎に各器種の組成比率をみてみると、甕の比率が最も高く下層で59%、中層が75%、上層で67%を占める。壷は下層が37%、中層は25%、上層では30%であった。

甕1点に対する壷の個数は、下層で0.61点であったものが上層では0.45点に減少しており、下層に対して上層では甕の比率が増加している。このことから、上層では貯蔵具が減少したとも考えられる。しかし、上層では、後述するように甕口径の個体数分布域が広がる傾向（表3）がみられ、様々な規格（容量）の土器が製作された可能性が考えられるが、その中に主に貯蔵用として使用された甕が存在した可能性は否定できない。特に、口径27cm以上の大型甕の器壁には、確認できた範囲であるが煤や炭化物は付着しておらず、加熱調理以外の機能（貯水等）を果たしたことも充分考えられる。このような例もあり、各器種の機能については慎重に判断する必要があるのではなかろうか。

高杯・鉢の比率は少なく、下層が3%、中層は0%、上層では1%に止まる、下層で出土した高杯・鉢の出土総破片数32点の中で、残存率17%以上で数値化できたものが8点のみであることから、破片総数により組成比を求めた場合は数値が若干変動すると思われる。ただ、中層及び上層では破片点数が少ないため、破片総数により組成を求めたとしても比率が大きく変動することはないものと考える。

甕の蓋は何れの層位においても比率が2%を上回ることはなく、破片総点数も極めて少なかった。蓋の内面には煤が付着することから、加熱調理に伴い使用されたはずである。ただ、蓋が甕よりも破損率が低く耐久性が高かったであろうことを考慮しても数が極端に少ない。このことから、蓋は何らかの限定的な機会や用途に使用されていたことが推測される。

出土層	項目	甕	壺	鉢・高坏	蓋	合計
下層	%	59	37	3	1	100
	個体数	53.68	33.3	2.4	1	90.36
中層	%	75	25	ー	ー	100
	個体数	10.59	13.5	ー	ー	14.09
上層	%	67	30	1	2	100
	個体数	42.91	19.3	0.5	1.17	63.88

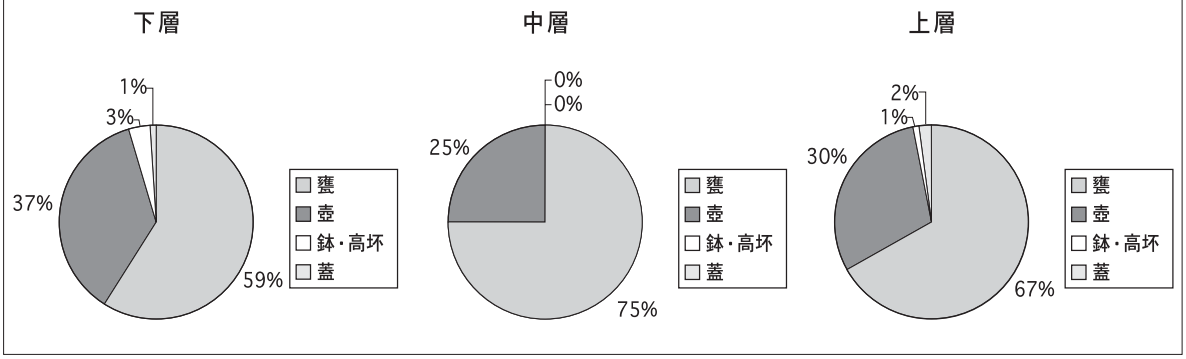


表1　器種組成表

弥生早・前期土器の器種組成については、山崎純男氏（山崎1980）、中島直幸氏（中島1982）、横山浩一氏・藤尾慎一郎氏（横山,藤尾1986）、石川日出志氏（石川1988）、小林正史氏（小林1992）ほか多くの研究者により検討が加えられ、縄文時代から弥生時代に移行する過程で、浅鉢の減少と壷の出現・増加傾向が明確化することが指摘されている。この傾向は、組成比率のうえで地域差はあるものの共通した特徴で、稲作農耕の受容に伴う生業又は土器使用方法の変化に起因すると考えられている。

今回算出した器種組成では壷の比率が下層と上層で30%を越え、鉢では形態に縄文的な様相を一部に残すものの組成比率は3%未満であり、縄文的器種組成とは大きく相違する。このような器種組成が当地域でいつ頃から成立するのかは、弥生早期や前期初頭の土器組成を欠くため不明であるが、少なくとも環壕の下層が埋没した段階には弥生的な器種組成が及んでいたと推察する。

以上の分析結果を基に、今後は他地域や周辺遺跡の土器器種組成との比較を広くおこなうとともに、土器の機能論や石器組成を視野に入れて考察を進めることが、当遺跡で環壕集落を営んだ集団の実態を把握することにつながると考える。

（3）出土土器の層位的変遷

出土土器については、第1節で甕と壷について形態分類[2)]を行った。この分類に基づき、形態識別が可能であった個体数を層位別に算出して構成比率を求め、表2・4にその結果を提示した。また、甕の口径と底径（底部外端径を基準に計測し、器種組成比率を求めた際と同様の方法で残存率を算出）について、その直径の分布域を残存個体数を基に算出して表3に示す。

まず、最初に、各器種の層位的な形態変遷について以下に説明を述べていく。

（甕）（表2）

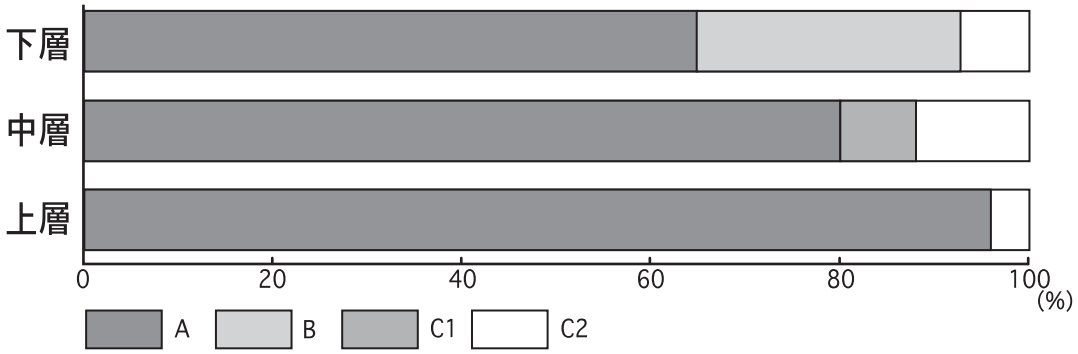
下層から上層に至るまで甕A類が主体を占める。下層で組成比が65%であったものが、中層で更に比率を増し、上層では97%に達する。A類は、「亀ノ甲タイプ」甕とこれに類する形態で、下層から上層に移行するにつれて次第に多くの比率を占めるようになり、在地的な形態として定着していく過程が見て取れる。

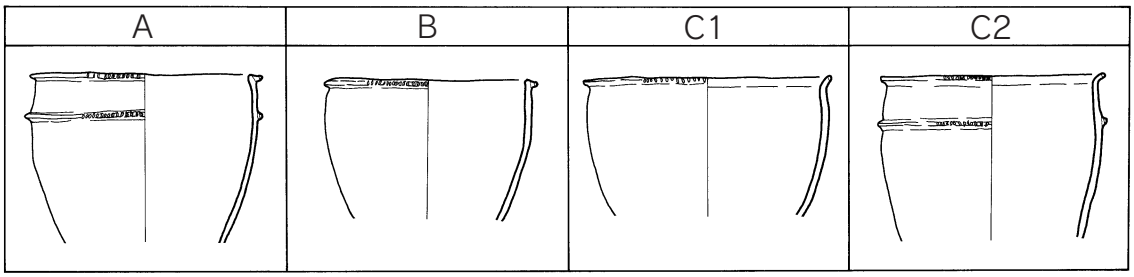
B類は下層では28%を占めるが、中・上層では組成比には表れてこない。ただ、個体数算出の対象としてい

甕

口縁・胴部

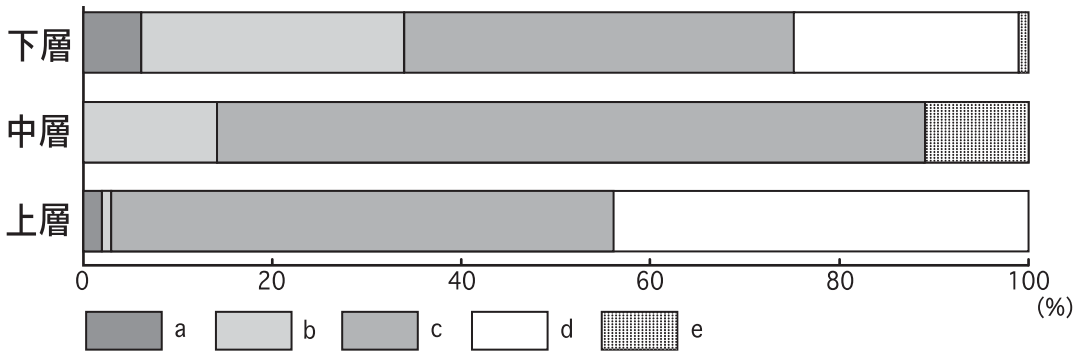
出土層	項目	A	B	C1	C2	合計
下層	%	65	28	—	7	100
	個体数	2.19	0.955	—	0.25	3.395
中層	%	81	—	8	11	100
	個体数	1.76	—	0.17	0.25	2.18
上層	%	97	—	—	3	100
	個体数	17.91	—	—	0.5	18.41





底部

出土層	項目	a	b	c	d	e	合計
下層	%	6	28	60	5	1	100
	個体数	3.08	13.43	29.27	2.67	0.33	48.78
中層	%	—	14	75	—	11	100
	個体数	—	1.24	6.58	—	1	8.82
上層	%	2	1	53	43	—	99
	個体数	0.5	0.33	14.17	11.5	—	26.5



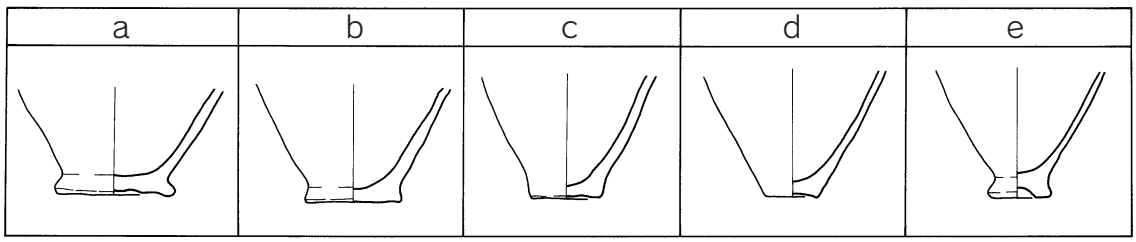


表2　甕形態の層位別組成比率

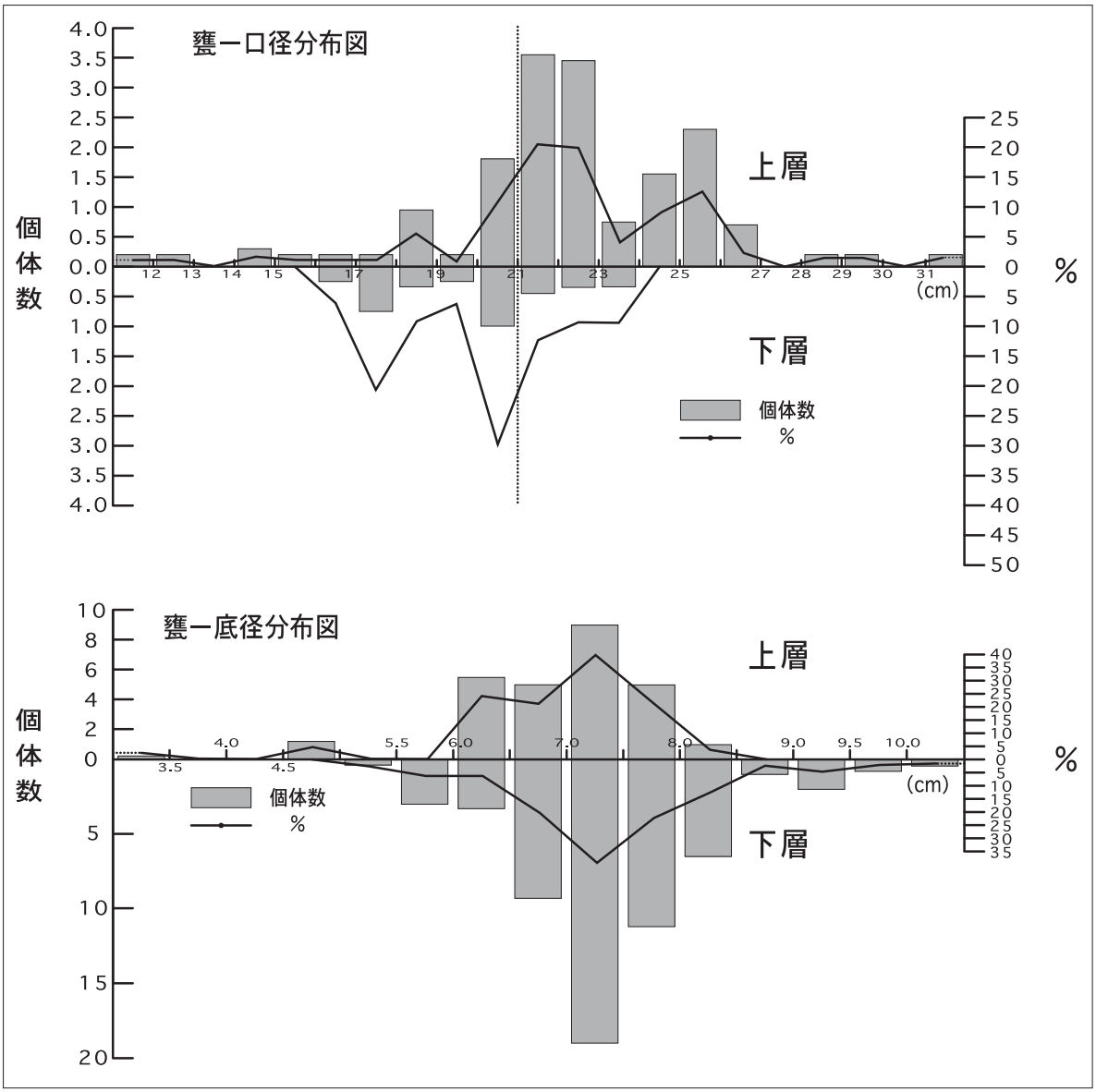


表3　甕の口径・底径個体数分布

ない土器群の中には第14図15のように少数確認されており、上層でも僅かではあるがB類が残存する。

またB類は、口縁部に突帯を文様として用いる点で、A類と共通した形態であり、A類にB類を加えた比率は、9割に達している。

C類は、C2類を主体に少量みられる程度であり、全ての層位でA・B類に対して客体的な存在である。C1類は「板付式甕」、C2類は「板付式甕」の体部にA類の文様要素（突帯の貼付）を取り入れた形態である。その中のC2類が少数ではあるが比較的安定して上層まで存在することは、当地域の特質の一つである。

底部は、c類が下層で60%、中層で75%、上層で53%と、常に各層で過半に達している。

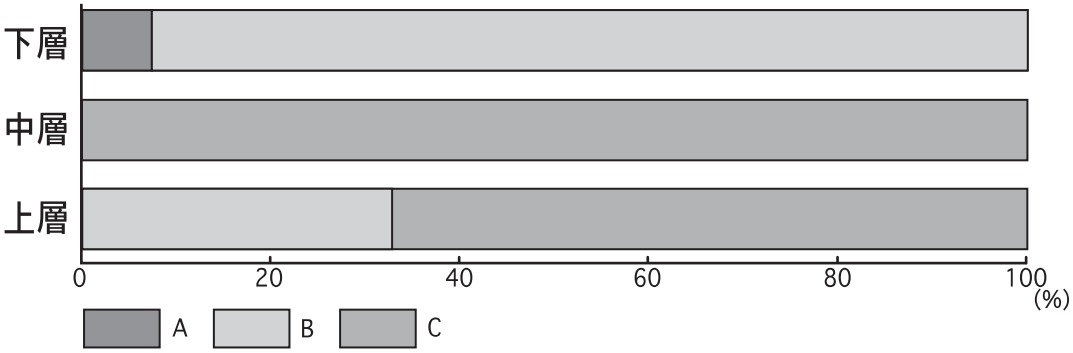
ただ、下・中層ではc類に次いでb類が多くみられるのに対し、上層ではd類が大幅に増加して43%みられ、c類と同様の比率を占めるようになる。

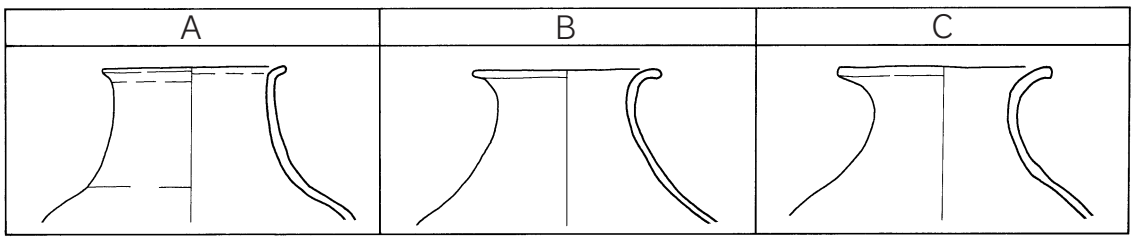
一方で、e類は下層で確認されているものの極めて少量（1%：0.33点）であり、その存在が明確になるのは中層からである。また、上層でも残存率17%以下（六分の一）の小破片はみられ、多数ではないが存在することを確認している。

壷

口頸部

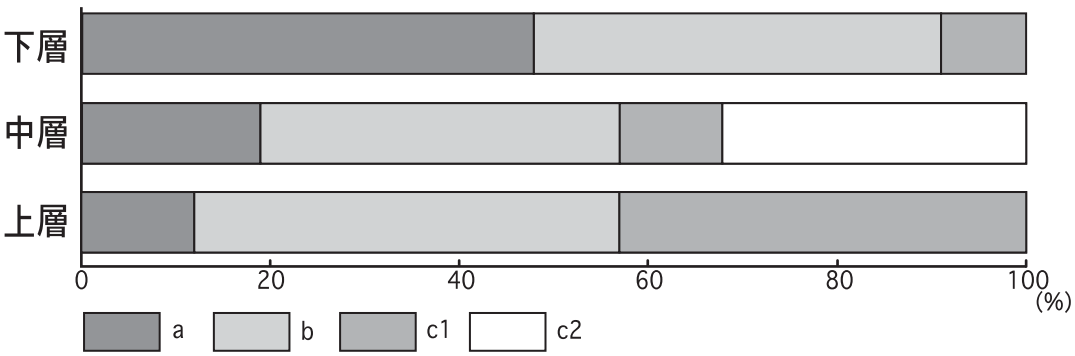
出土層	項目	A	B	C	合計
下層	%	7	98	—	100
	個体数	0.17	2.25	—	2.42
中層	%	—	—	100	100
	個体数	—	—	0.42	0.42
上層	%	—	33	67	100
	個体数	—	1	2.045	3.045





底部

出土層	項目	a	b	c1	c2	合計
下層	%	48	43	9	—	100
	個体数	14.75	13.35	2.74	—	30.84
中層	%	19	38	11	32	100
	個体数	0.58	1.17	0.33	1	3.08
上層	%	12	45	43	—	100
	個体数	1.66	6.34	6.01	—	14.01



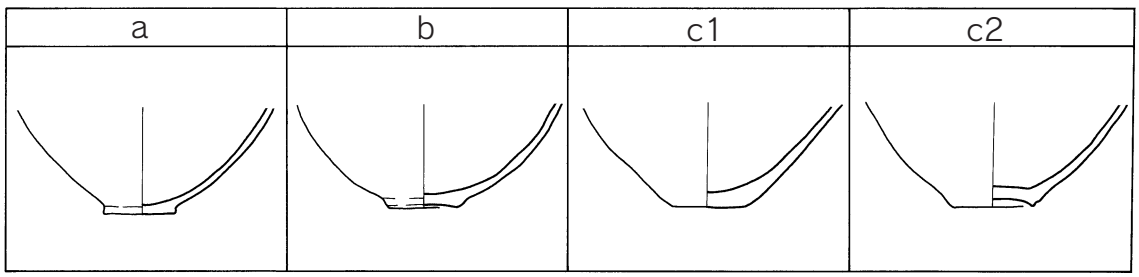


表4　壷形態の層位別組成比率

（甕口径と底径の個体数分布について）（表3）

表から、個体数が多く集まって分布する箇所が幾つか見られ、甕を製作する際の口径規格が単一でなかったことが読みとれる。上下層ともに、口径21cm前後へ個体数が最も集中するが、次いで多くの個体が分布するのは、下層ではやや小口径の17～18cm程であるのに対し、上層では比較的大口径の25～26cm程である。

また、上層では、少数ではあるが11～13cm程の極めて小口径の甕や、27cm以上の極めて大口径の甕がみられるようになり、個体数の分布域が広範囲に及ぶようになる。

このような甕の口径分布が、土器製作集団に想定されていたであろう器の容量を反映すると仮定するなら、上下層を通じて異なった容量の甕が意図的に製作され、中でも比較的大型（口径21cm以上）の甕を製作する比率が下層から上層に移行する過程で高まるとともに、多様な容量の甕が製作されるようになった可能性が考えられるのではないだろうか。

底径は、下層では7.0～7.5cmを頂点として個体数が集中し、そこから大小径の個体がほぼ対称的(僅かではあるが大径方向へ偏っている)に分布する。

これに対して上層は、7.0～7.5cmを個体数の頂点とする点は下層と同様だが、そこから小径方向に個体数の分布が偏っており（特に底径6.0～7.0cmに個体数が多く集まる）、下層に比べて底径の小型化傾向が顕著である。

（壷）（表4）

下層では、B類が93%と大半を占め、その他A類が少量存在する。一方、上層ではB類は33%に著しく減少し、下層にみられないC類が67%と過半を超えるようになる。中層は資料点数が少なく比較対象として適さないが、下層と上層の形態変遷は比較的明瞭である。

底部は下層ではa類、中層と上層ではb類が主体を占める。また、中層から上層に移行する過程で、a類は減少してc類が増加し、b類とほぼ同比率を占めるようになる。

c類の中で、底面が上げ底を呈するc2類は中層で出現するが上層では構成比に表れていない。ただ、残存率17%以下（六分の一）の破片は確認されており、継続して存在するものと考える。

（4）時間的位置付けと出土土器の様相について

SD0001環壕2-6アゼ間から出土した土器群について器種組成や形態変遷、甕の口径と底径の個体数分布について分析を行った。ここでは、分析を行った資料の時間的位置づけと、出土土器の様相を把握するために当地域の弥生前期土器を特徴づける「亀ノ甲タイプ」甕について、学史を踏まえたうえで簡単にまとめてみたい。

佐賀平野の位置する西南部九州には、弥生時代前期に「亀ノ甲タイプ」と総称される甕が広く分布する。本遺跡で分類した甕の形態A類は、この「亀ノ甲タイプ」甕及びそれに類する形態で、下層から上層に至るまで一貫して出土土器の主体を占め（下層：65%　中層：81%　上層：97%）ている。

「亀ノ甲タイプ」甕の存在は、当初、福岡平野で板付式土器とともに少量出土したことが森貞次郎氏、岡崎敬氏（森,岡崎1961）により注目され、板付遺跡の報告の中で「甕形土器E類」に分類され、夜臼式土器や中期土器の甕との関係が指摘された。その後、筑後地域に所在する亀ノ甲遺跡でこれらの土器が甕の主体的な形態として出土し、小田富士雄氏（小田1964）によって「甕形土器C類」として報告された。その内容は「直口またはやや内湾する口縁の上端外面に刻み目がある粘土帯を貼りつけて、断面を水平あるいはやや外下がりに仕上げたもの。口縁の少し下にも一条、まれに二条の刻み目ある粘土帯をめぐらす」というもので、東九州に分布する下城式とともに「縄文系（夜臼式）の甕に祖形を求めることができる」と考えられた。この「甕形土器

C類」が、現在の「亀ノ甲タイプ」甕についての共通した認識であろうと思われる。

また、西健一郎氏（西1982,1983,1985）と藤尾慎一郎氏（藤尾1984）は、佐賀平野を含む周辺地域の編年を行い広域編年の中における在地土器の時間的位置付けを明確にし、土器の様相についても言及している。

このほか、東中川忠美氏（東中川1986）と田平徳栄氏（田平1991）は、久保泉丸山遺跡や礫石遺跡から出土した資料を中心に、緻密な型式学的分析に基づく佐賀平野の編年案を提示している。

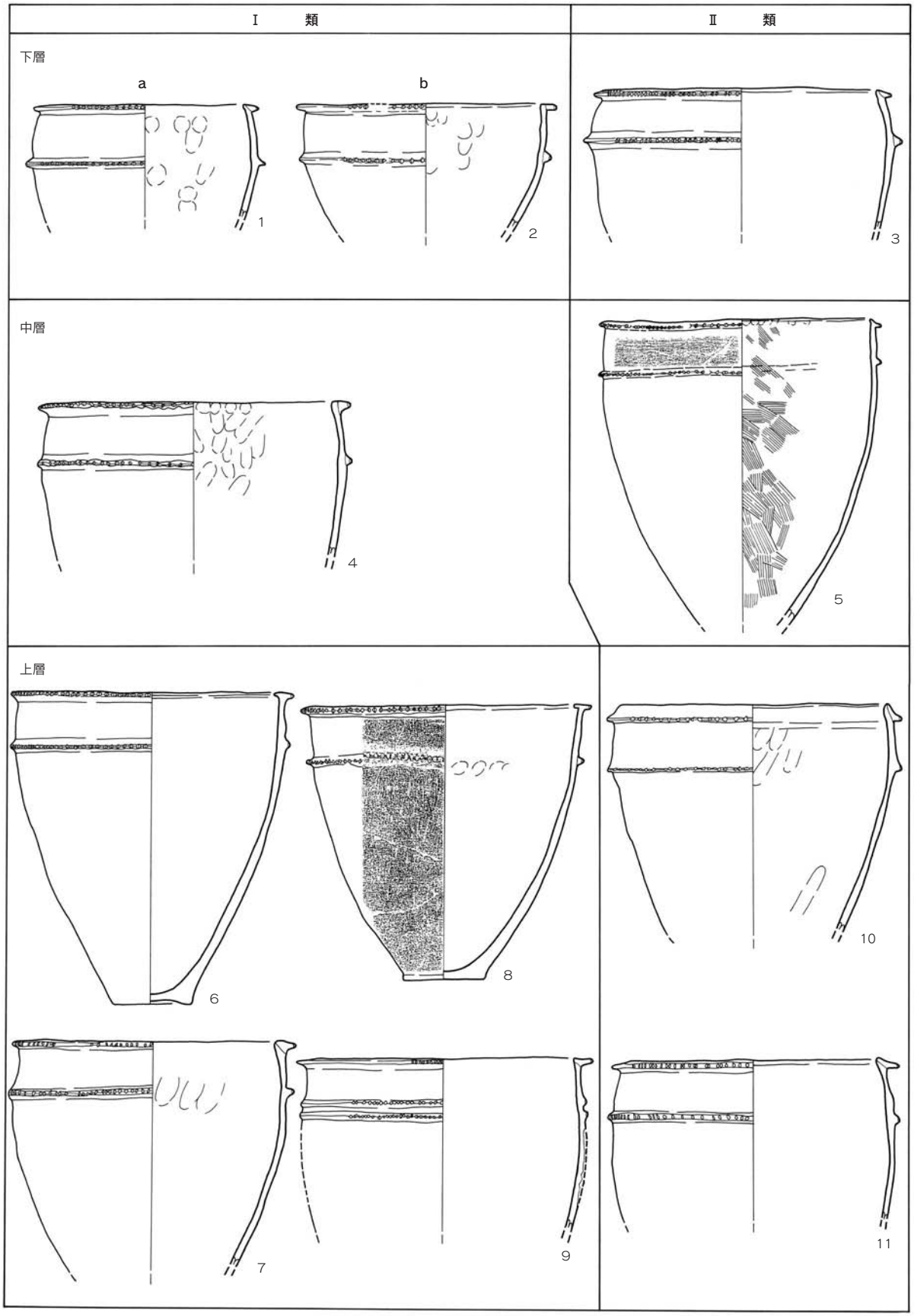
上記の編年案に、福岡平野との併行関係を明らかにするため、山崎純男氏（山崎1980）と吉留秀敏氏（吉留1994）による板付式土器の編年案を加え、各編年を対照[3]させたのが表5である。

さて、SD0001環壕出土土器の時間的位置付けであるが、下層出土土器では、甕では、第19図4,5のように突帯上面を水平に仕上げる「亀ノ甲タイプ」甕の特徴がみられる。壷はB類が大半を占め、口頸部最小径が、A類に比べてやや低い位置に下るものが多く、頸胴部は段を消失し沈線によって区画される。また、沈線は部分的に断絶しており区画意識の退化傾向が窺える。以上のような特徴は、藤尾編年のⅣ期、福岡平野では板付Ⅱb期、吉留編年の8式等に相当する。しかし、甕口縁突帯に肥大化する特徴が表出していないこと、壷の胴部最大径位置が胴中位より下にあると推定されるものが大半を占め、頸胴部に三角突帯を貼付するものが出現していないこと、底部はa類にあたる円盤貼付状の形状の個体がまだ多く残存する等の古い様相も認められる点から、やや時期幅をもたせ、福岡平野の板付Ⅱa式新相～板付Ⅱb式前半、吉留編年の7・8式、熊本では西編年のⅢ期（斉藤山Ⅱ式）に併行すると判断した。

中層と上層の出土土器は、甕の口縁部突帯は肥大化し、口縁は大径化、底部は小径化傾向が見て取れる。また、第14図12～14のように体部に突帯を2条貼付するものや、底部では第14図19のように端部が帯状に張り出す厚手のものが少数ではあるが認められる。壷は、下層ではみられなかったC類が主体を占めるとともに、第15図24のように下層に類似した体部で口縁部を強く折り曲げた形状のものが少量みられる。頸胴部は三角突帯を貼付するものが出現する。胴部は、最大径の位置が胴中、上位へと上昇し、第15図28のように文様（無軸羽状文）を施文するものがみられるが概ね無文化傾向が強まる。底部は中・上層ともにb類を主体とするが、体部と底部の境界が不明瞭なc類の比率が高まる。これらの特徴から藤尾編年のⅤ期、福岡平野の板付IIb期後半～前期末頃（中期初頭を含む可能性を残す[4]）、吉留編年の9式に併行すると考えている。

<table>
<tr><th colspan="2">福岡平野</th><th colspan="2">熊本</th><th colspan="4">佐賀平野</th></tr>
<tr><th>山崎（1990）</th><th>吉留（1994）</th><th colspan="2">西（1982,1983,1985）</th><th>藤尾（1990）</th><th>東中川（1986）</th><th>田平（1991）</th><th>SD0001環壕</th></tr>
<tr><td rowspan="2">夜臼I式</td><td>1式</td><td rowspan="2">I</td><td>上南部式</td><td rowspan="2">I</td><td rowspan="2">I・II</td><td rowspan="2">I・II</td><td rowspan="8"></td></tr>
<tr><td rowspan="2">江津湖式</td></tr>
<tr><td>夜臼IIa式</td><td>2式</td><td rowspan="5">II</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="4">II</td><td rowspan="4">III</td><td rowspan="4">III・IV</td></tr>
<tr><td rowspan="3">夜臼IIb式
板付I式</td><td>3式</td><td rowspan="4"></td></tr>
<tr><td>4式</td></tr>
<tr><td>5式</td></tr>
<tr><td rowspan="2">板付IIa式</td><td>6式</td><td rowspan="2">斉藤山I式</td><td rowspan="2">III</td><td rowspan="3">IV</td><td rowspan="3">V</td></tr>
<tr><td>7式</td><td rowspan="2">III</td><td rowspan="2">斉藤山II式</td><td rowspan="2">下層</td></tr>
<tr><td rowspan="2">板付IIb式</td><td>8式</td><td>IV</td></tr>
<tr><td>9式</td><td>IV</td><td></td><td>V</td><td></td><td>VI</td><td>中層
上層</td></tr>
</table>

表5　土器編年対照表



第22図　「亀ノ甲タイプ」甕の形態変遷図

最後に、SD0001環壕で層位的に出土した「亀ノ甲タイプ」甕の形態変遷を理解するために図22を提示して説明を加える。また、甕の口縁部に貼付された突帯の形態から以下のような分類をおこなった。

Ⅰ類　口縁部突帯を、口唇と水平に成形したもの。上向きの三角突帯を貼付したIa類と、断面蒲鉾形の突帯を貼付するIb類に細分する。ともに突帯と器壁を一体的に成形する。

Ⅱ類　口縁部突帯を外下がりに成形したもの。

下層から上層へ移行することにより生じる形態変遷を整理すると以下のとおりである。

○Ⅰ・Ⅱ類ともに口縁部突帯が肥大化し、肥大した突帯を確実に器壁へ貼付するため、入念で強い指押えやナデが器壁内面に加えられる。結果として6や8のように口唇の一部が内面に張り出した形状のものがみられる。

○Ⅰb類とⅡ類には、9や11のように、突帯を器壁上面に覆い被せるように貼付する手法が出現する。
この手法は口唇と突帯を一体的に成形する意識が、下層段階より更に強まったため出現すると推察する。

○口縁は丁寧に成形され、下層に比べて口縁の歪みも少なく[5]平坦に仕上げられる。

○突帯に施される刻みは、下層に比べて浅く小さな刻みを疎らに施す。刻みはO字形刻み及びV字形の刻みが多い。また、刻みを施さない突帯もみられ、次第に刻みは簡略化される傾向にある。

○口径分布域（表3）から、上下層ともに、甕を製作する際には複数の口径規格が想定されていたと推定する。最も個体数が集中するのは、両層とも口径21cm前後であるが、次いで多く分布するのは、下層ではやや小口径の17～18cm程であるのに対して、上層では比較的大口径の25～26cm程で、次第に比較的大型（口径21cm以上）の甕を製作する傾向が強まる。また、上層では、下層に対して口径分布域が広範に及ぶ。このような口径分布にみられる傾向は、甕の容量にも反映される可能性があると考える。
底径は、上層では7.0～7.5cmを頂点として、そこから小径方向（特に6.0～7.0cmに個体数が多く集まる）に下層より多くの個体が分布しており、小径化傾向が認められる。

○9のように、体部に複数条の突帯を貼付するものが出現する。

○体部の調整は、下層では斜位または横方向のナデ調整であるが、上層になると8のように縦方向の調整を施すものが少量みられるようになる。

○底部形態は、上、下層ともにc類が主体である（表2）が、上層ではd類が大幅に増加してc類と同様の比率を占める。このことから、次第に胴部と底部の境界が不明瞭となることが層位的に確認できた。

このほか、上層では、同一個体内での色調差（色ムラ）が少なく、黒斑は境界部まで色調が明瞭で壷と類似した様相を示すものが確認できる。このことは、焼成技法の変遷過程を考えるうえで興味深い特徴である。

「亀ノ甲タイプ」甕の中に時期差があることは、亀ノ甲遺跡の報告書中で既に指摘[6]されていることではあるが、その内容について層位的な資料により検証できたことは大きな成果となった。

以上、SD0001環壕出土土器について、器種組成や形態的変遷等について分析した成果をまとめてきた。

本来は土器の分析を通して、弥生時代の社会や製作集団の性格、流通のあり方などの問題に取り組むべきところであるが、力不足のため言及できていない。これらの問題が、今後の調査と研究により解明され、今回提示した分析結果がその一助となれば幸いである。

註

1)　宇野隆夫氏の論文（宇野1994）の中で提示されている口縁部計測法を参考として残存個体数を算出した。本来は、破片数計測法と併用して検証を行うべきであるが時間的都合により断念した。

2)　形態識別作業は大量の資料を対象とするため、複数の者が分担して実施した。このため、形態分類は、個人差による

識別の誤差を極力少なくし、同様の識別結果が得られる範囲に止めた。

甕の突帯形状や刻み手法並びに壷の頸部最小径位置や胴部形態、文様については型式学的考察を行ううえで有効な分類が可能であろうと考える。

また、各分類の特徴を共有する個体がいくつかみられるが、これらはより多い特徴を持つ類に分類した。

3) 併行関係とした各編年案は、実際には、各々設定してある時期の内容に相違点が存在し、厳密には併行関係とは言い切れない。また、上層の土器群の一部は中期初頭（城ノ越式）まで下る可能性がある。

4) 上層出土土器として、2-3アゼ間集中出土地点の土器群を分析対象とした、この土器群は、前期後半の土器様相に中期初頭（城ノ越式）の特徴を併せもつ。ただ、出土状況から比較的短期間に廃棄されたと考えられ、複数型式に及ぶ時間幅は考えづらい。むしろ前期末から中期初頭への移行期に廃棄されたと考えるほうが自然である。また現状では、佐賀平野で城ノ越式に相当する良好な資料（量的保証を伴った一括性の高い資料）がみられず、中期初頭の土器様相に不明な点が多い。よって、上層出土土器の時間的位置付けについては曖昧な表現に止まらざるを得なかった。

5) 上層出土の土器は、甕・壷ともに、下層のものより土器製作の面で規格性に富み、精緻に製作される中期の土器にちかい様相が窺える。また、壷の文様施文については沈線が断絶したり重複する箇所が多く、前期の文様施文技法の退化傾向が認められる。これらの特徴は、上層出土土器と中期の土器との時間的位置関係を示唆していると思われる。

6) 亀ノ甲遺跡報告書に、「土器は1号溝内とその南地区1号竪穴の出土土器に時期的な若干のずれが認められる」との記載がある。両遺構ともに「亀ノ甲タイプ」甕に相当する甕形土器C類（亀ノ甲遺跡報告書中の分類）が出土している。

また、同様の内容を西健一郎氏（西1982）、藤尾慎一郎氏（藤尾1984）が指摘し、検討を加えている。

参考文献

石川日出志　1988　「縄文と弥生土器」『季刊考古学』23

宇野隆夫　1994　「食器計量の意義と方法」『国立歴史博物館研究報告』40

小田富士雄　1972　「入門講座弥生土器」『考古学ジャーナル』77

小林正史　1992　「器種組成からみた縄文土器から弥生土器への変化」『北陸考古学』2

小林正史　2000　「北部九州における縄文・弥生土器の野焼き方法の変化」『青丘学術論集』17

中島直幸　1982　「初期稲作期の凸帯文土器」『森貞次郎博士古稀記念　古文化論集』

西健一郎　1982　「斉藤山遺跡出土刻目突帯文土器の再検討」『九州文化史研究所紀要』27

西健一郎　1983　「下江津湖湖底遺跡出土刻目突帯文土器の検討」（一）『九州文化史研究所紀要』28

西健一郎　1985　「下江津湖湖底遺跡出土刻目突帯文土器の検討」（二）『九州文化史研究所紀要』30

藤尾慎一郎　1984　「弥生時代前期の刻目突帯文系土器」『九州考古学』59

藤尾慎一郎　1991　「水稲農耕と突帯文土器」『横山浩一先生退官記念論集』II

森貞次郎・岡崎敬　1961　「福岡県板付遺跡」『日本農耕文化の生成』

山崎純男　1980　「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』

横山浩一・藤尾慎一郎　1986　「宇木汲田遺跡1984年度調査出土の土器について」『九州文化史研究所紀要』31

吉留秀敏　1994　「板付式土器成立期の土器編年」『古文化談叢』32

唐津市教育委員会　1982　『菜畑遺跡』唐津市文化財調査報告5

佐賀県教育委員会　1986　『久保泉丸山遺跡』佐賀県埋蔵文化財調査報告書第84集

佐賀県教育委員会　1989　『礫石遺跡』佐賀県埋蔵文化財調査報告書第91集

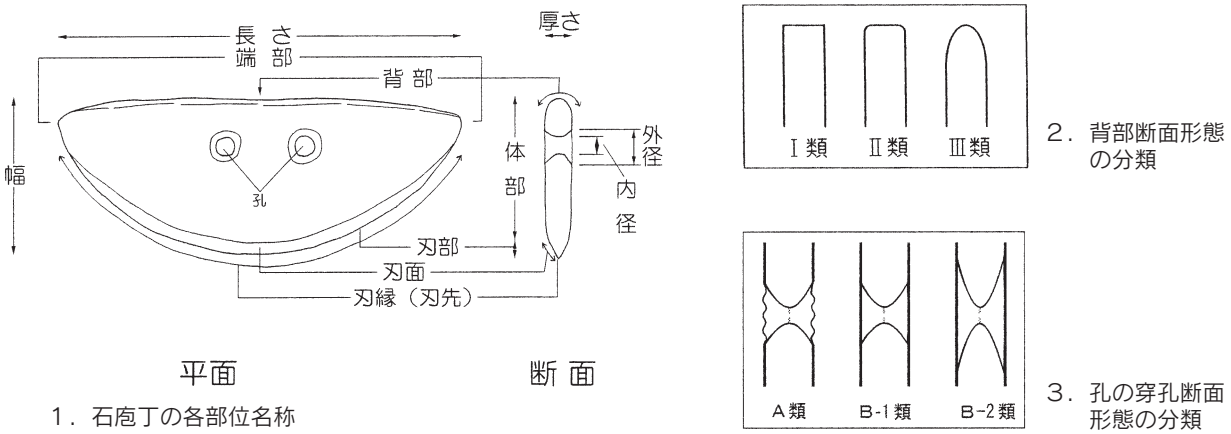
佐賀県教育委員会　1992　『吉野ヶ里遺跡』佐賀県埋蔵文化財調査報告書第113集

八女市教育委員会　1964　『亀ノ甲遺跡』八女市教育委員会

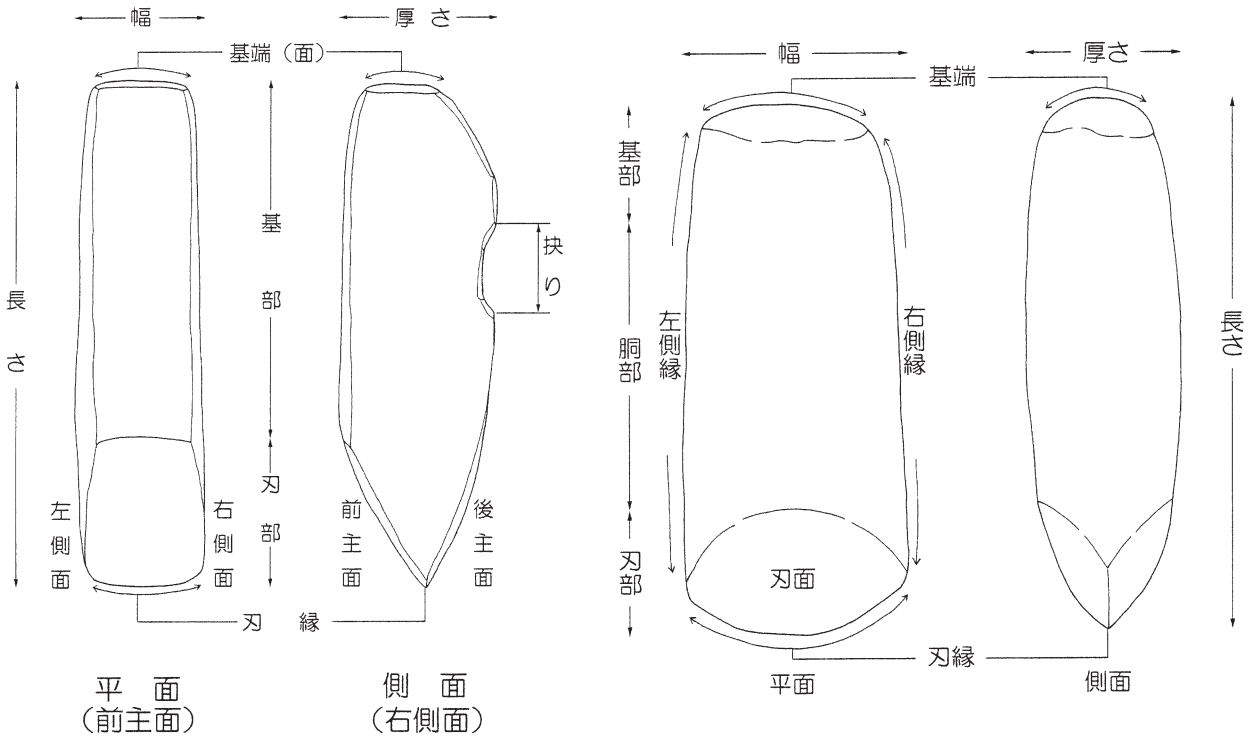
第５章　田手二本黒木地区Ⅱ区SD0001環壕出土石器の概要

今回報告を行うSD0001環壕から出土した石器関連の遺物の総数は計369点である。この点数の中には剥片石器製作の際に生じた剥片等も含まれており、それらを除いた石器の総数は224点となる[1)]。

本章では、SD0001環壕より出土した各石器について、図化したもの[2)]を中心にそれぞれ器種ごとに説明を行う。各石器の環壕内での出土位置、および法量等については表13の石器一覧表を参照していただきたい。



第23図　石庖丁の各部位名称(平井1991)と背部断面形態・孔の穿孔法断面形態による分類



第24図　太形蛤刃石斧・柱状片刃石斧の各部位名称(平井1991を一部改変)

第1節　大陸系磨製石器類

今回報告を行う大陸系磨製石器およびその他の磨製石器類には、石庖丁（19点）、石鎌（4点）、石剣（3点）、磨製石鏃（1点）、太形蛤刃石斧（39点）、縄文系石斧（1点）、柱状片刃石斧（5点）、扁平片刃石斧（9点）、紡錘車（3点）、砥石（14点）がある。以下、その順に説明を行う。なお、石器の説明を行うにあたっての各部位等の用語に関しては、23・24図で示すとともにその出典を示したが、一部改変した部分もある。

（1）石庖丁（第25・第26図、巻頭図版13、図版1・2）

石庖丁は19点出土し、15点が粘板岩ホルンフェルス[3]製、3点が赤紫色泥岩[4]製、1点が片岩製である。ここではそのうちの15点について図化を行った。

石庖丁に関する記述にあたっては、特徴的な背部断面形態と孔の穿孔法およびその断面形態についてそれぞれ便宜的に分類した上で説明を行う。

まず背部断面形態は、背部が平坦で角が稜をなすものをⅠ類、角が隅丸形のものをⅡ類、角を持たず丸くおさまるものをⅢ類とした（23図－2）。また、孔に関してはその穿孔方法の違いから、体部両面からの敲打を行った後に、両側からの回転穿孔によって孔を作り出しているものをA類、敲打を行わず、体部両面からの回転穿孔のみによって孔を作り出しているものをB類とし[5]、またさらにB類を、内径と外径の差が5mm未満と小さいものをB-1類に、内径と外径の差が5mm以上と比較的大きいものをB-2類と分類した（23図－3）。また、石庖丁の各部位の名称は、23図－1に示したとおりである。

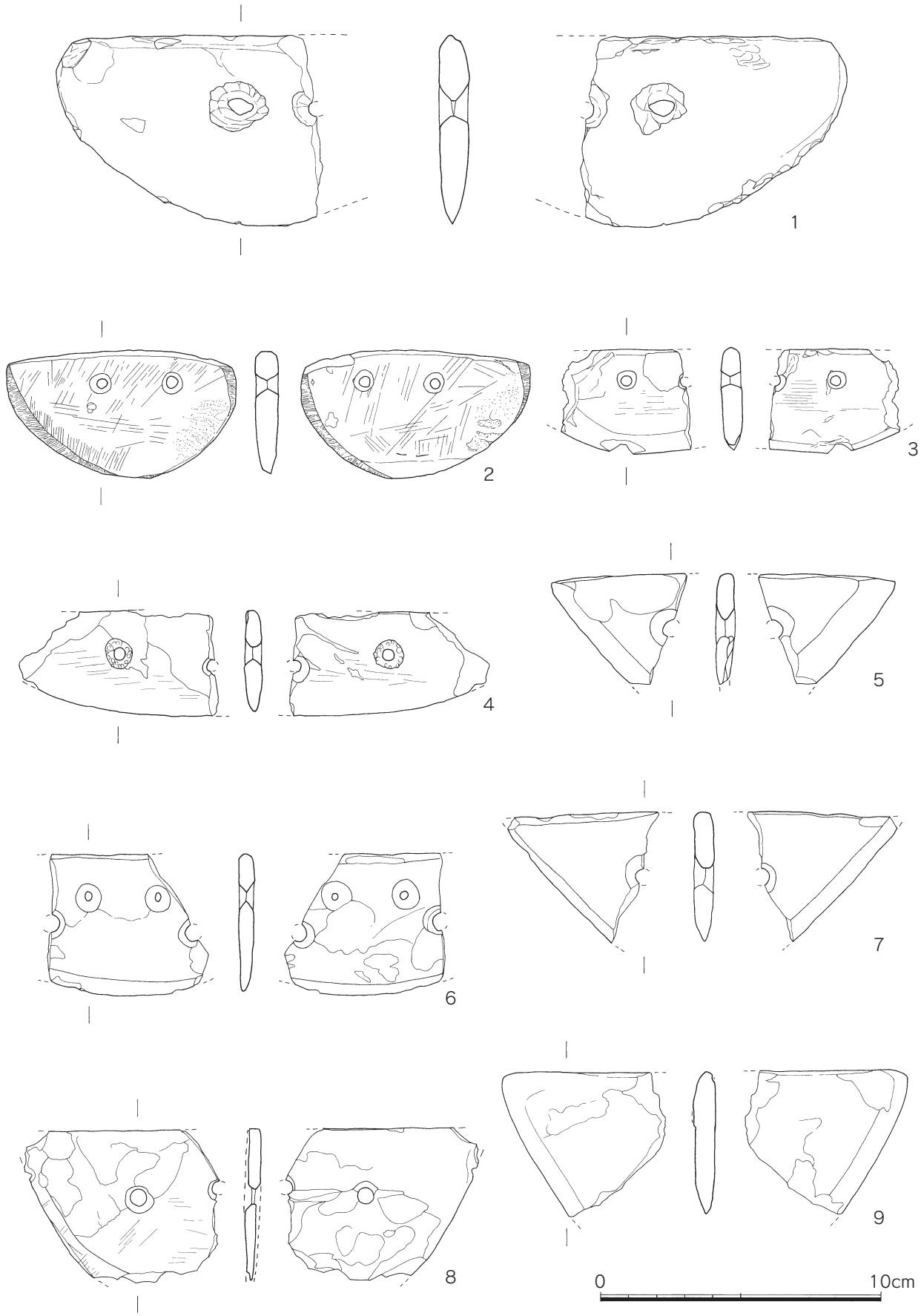
1は、片岩を素材とする。背部から孔を通って刃部にかけて割れ、全体の約1/2が残存する。表面は若干風化が進み、研磨痕等は確認できない。幅が6.8cmとやや大型の外湾刃半月形を呈し、最大厚は1.1cmとかなり厚い。刃は左右対称の両刃で、背部はⅢ類である。また、縦断面は紡錘形を呈する。孔はB-2類。表面の色調は灰白色である。

2～4の石庖丁の素材は全て赤紫色泥岩である。

2は、長さ8.2cm、幅4.5cm、最大厚0.7cm、孔端3.4･2.4cm、内径0.3･0.4cm、外径0.7･0.7cm、孔間2.3cm、背孔1.1･1.1cmの完形品である。全面に研磨痕が残り、研磨は体部表面では不定方向に、刃部では刃縁に対してほぼ直交方向に行われる。全体的に小型で、外湾刃半月形を呈する。背部は若干湾曲する。また刃は、刃部の中央で刃付けが交互になりそれぞれ片刃をなすが、両端部付近では体部両面から研磨を行い両刃となる特徴的な形態を呈する。また、刃面が見える方は表にしても裏にしても向かって左側である。背部はⅡ類である。縦断面は体部ではほぼ一定の厚さを保ち、刃部で薄くなる。孔はB-1類。また、体部両表面の一部にはあばた状の敲打痕が残る。表面の色調は暗紫色である。

3は、両端部が欠損し、2孔を含む中央部分のみが残存する。一方は背部から孔を通って刃部にかけてほぼ直線的に割れ、もう一方は背部から孔を通らずに刃部にかけて割れる。体部および刃部には横方向への研磨痕が明瞭に残る。残存部分から推定される形態は、幅が狭く横方向に細長い外湾刃半月形である。刃は左右対称の両刃で、背部はⅡ類である。縦断面は孔の下部付近で最大厚となる紡錘形を呈する。孔はB-1類。表面の色調は一方の体部表面が暗紫色、他方は淡赤紫色である。

4は、両端部を欠損し、2孔を含む中央部分のみ残存する。一方は背部から孔を通って刃部にかけて割れ、他方は背部から孔を通らず刃部にかけて割れる。また、表面の一部は剥離欠損する。体部の表面には横方向への研磨痕が全体的に残る。残存部分から推定される形態は、幅が狭く横方向に細長い外湾刃半月形である。また、刃は左右対称の両刃で、背部はⅢ類である。縦断面は孔付近で最大厚となる紡錘形を呈する。孔はA類であり、



第25図　SD0001環壕出土石庖丁①（1/2）

今回報告する石庖丁のうち孔がA類のものはこの1点のみである。表面の色調は全体的に暗紫色で、一部に淡紫色の縞状模様がみられる。

5～15の石庖丁の素材は全て粘板岩ホルンフェルスである。

5は、背部から孔を通って刃部にかけて割れ、全体の約1/3のみが残存する。表面の風化が進み、研磨痕等は確認できない。石庖丁の形態は、刃部が直線的であることから三角形状を呈するものと思われ、比較的小型である。刃は左右対称の両刃で、背部はⅠ類である。縦断面は体部ではほぼ一定の厚さを保ち、刃部で薄くなる。孔はB-2類。表面の色調は黄灰色である。

6は、背部から下側のそれぞれの孔を通って刃部にかけて割れ、両端部を欠損する。表面の風化が進み、研磨痕等は確認できない。残存部分から推定される形態は、若干横方向に細長い外湾刃半月形である。刃は左右対称の両刃で、背部はⅡ類である。縦断面は体部でほぼ一定の厚さを保ち、刃部で薄くなる。また、孔は計4つある。実測図左側で右下の１孔がB-1類、残りの孔はB-2類である。上側の2孔と下側の2孔がそれぞれ対をなすものと思われ、下側の2孔は刃部にかなり近い位置にある。また、上側の2孔の孔間は2.5cmとほぼ標準的であるのに対し、下側の2孔の孔間は5.1cmとかなり広い。表面の色調は一方の体部表面が黄灰色、他方は赤褐色である。

7は、背部から孔を通って刃部にかけて割れ、全体の約1/3のみが残存する。表面の風化が進み、研磨痕等は確認できない。石庖丁の形態は、刃部が直線的であることから三角形状を呈するものと思われる。刃は左右対称の両刃で、背部はⅠ類である。縦断面は体部でほぼ一定の厚さを保ち、刃部で薄くなる。孔はB-2類。また、体部表面の色調は黄灰色であるのに対し、背部は比較的風化が進んでいないため黒色で、褐色の細かい斑点がみられる。

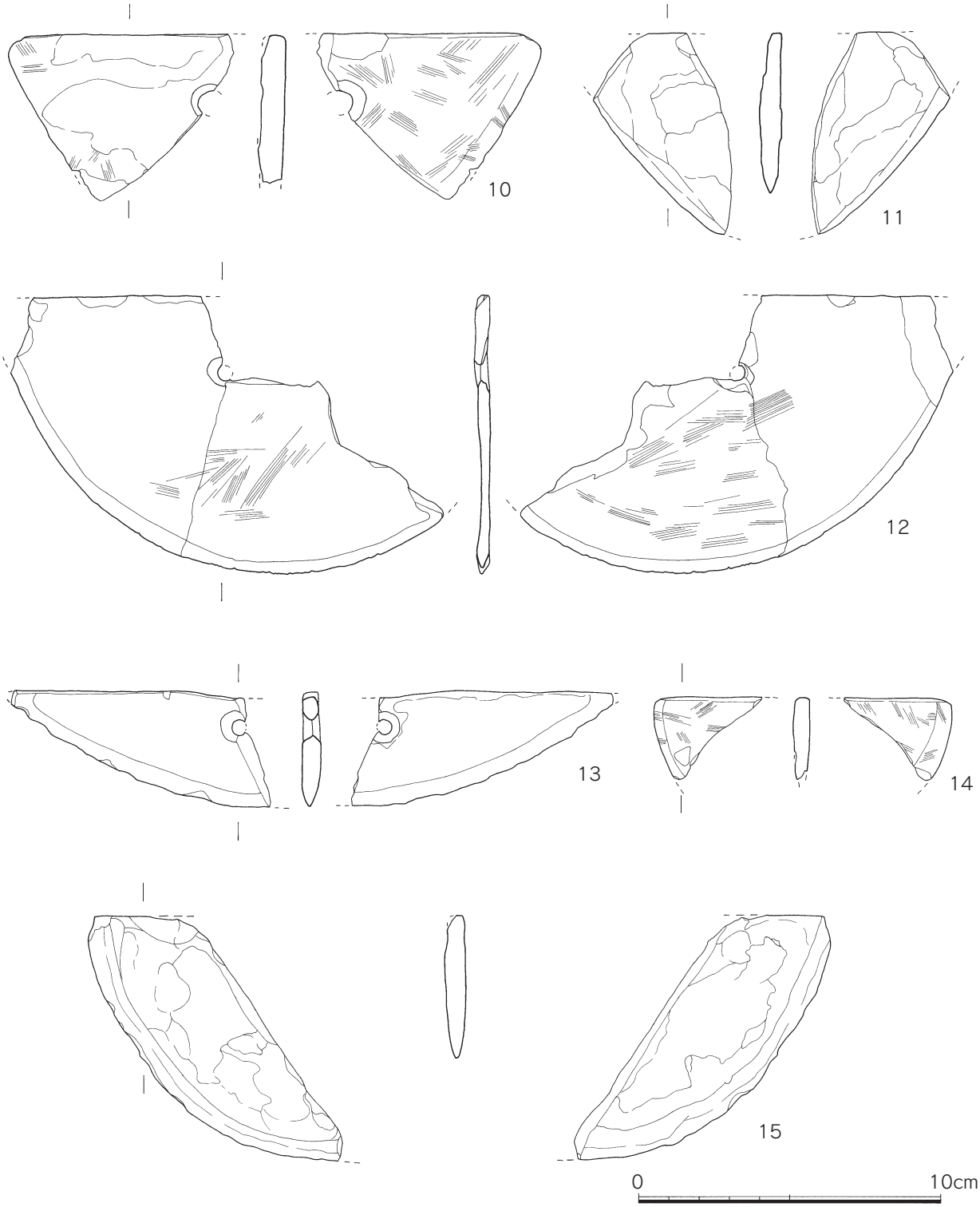
8は、2孔を含む全体の約1/3が残存するが、両体部表面は大部分が剥離欠損する。また、背部から孔を通って刃部方向に割れるとともに、別の横方向への割れによって刃部の大部分を欠損する。刃部では刃縁に対して直交方向への研磨痕が、体部では不定方向への研磨痕が明瞭に残る。全体的な形態は、刃部が直線的であることから三角形状を呈するものと思われる。刃は左右対称の両刃で、背部はⅠ類である。また、縦断面は背部よりも孔の部分の方が若干厚い。孔はB-1類。表面の色調は黄灰色である。

9は、背部から孔を通って刃部にかけて割れ、全体の約1/3のみが残存する。表面の風化が進み、研磨痕等は確認できない。石庖丁の形態は、刃部がほぼ直線的であることから三角形状を呈するものと思われる。刃は左右対称の両刃で、背部はⅡ類である。表面の色調は黄灰色である。

10は、背部から孔を通って刃部にかけて割れ、全体の約１/3のみが残存する。一方の体部はほぼ全面にわたって表面が剥離欠損する。また、もう一方の体部表面には不定方向への研磨痕が残る。石庖丁の形態は、刃部が直線的であることから三角形状を呈するものと思われる。刃は左右対称の両刃で、背部はⅠ類である。縦断面は、孔の付近で最大厚となる紡錘形を呈する。孔はB-2類。表面の色調は灰色である。

11は、背部から孔を通らずに刃部にかけて割れ、端部も欠損する。また、体部表面は大部分が剥離欠損する。石庖丁の形態は、刃部が直線的であることから三角形状を呈するものと考えられ、大型の部類に入る。刃は左右対称の両刃で、背部はⅠ類である。表面の色調は黄灰色である。

12は、幅が9cmをこえる大型の石庖丁である。背部から孔を通って刃部にかけて割れ、全体の約2/3が残存する。また、残存部分も孔から刃部にかけて割れ、2片となったものが接合したものである。また、体部両面では不定方向への研磨痕が、刃部では横方向への研磨痕が明瞭に残る。石庖丁の形態は、大型の外湾刃半月形を呈し、最大厚は0.4cmと薄い。刃は左右対称の両刃で、背部はⅠ類である。縦断面は体部ではほぼ一定の厚



第26図　SD0001環壕出土石庖丁②（1/2）

さを保ち、刃部で薄くなる。孔はB-1類。表面の色調は黒色で、褐色の細かい斑点がみられる。

13は、背部から孔を通って刃部にかけて割れ、全体の約1/2が残存する。表面の風化が進み、研磨痕等は確認できない。残存部分から推定される石庖丁の形態は、幅が狭く横方向に細長い外湾刃半月形である。刃は左右対称の両刃で、背部はⅠ類である。縦断面は体部ではほぼ一定の厚さを保ち、刃部で薄くなる。孔はB-2類。表面の色調は黄灰色である。

14は、背部から刃部にかけての割れによって大部分が欠損し、一方の端部のみ残存する。表面には不定方向への研磨痕が残る。刃は左右対称の両刃で、背部はⅠ類。表面の色調は灰色である。

15は、背部から孔を通らず刃部にかけて斜め方向に割れ、全体の約1/3のみが残存する。表面の風化が進み研磨痕等は確認できない。残存部分から推定される石庖丁の形態は比較的大型の外湾刃半月形である。刃は左右対称の両刃で、背部はⅠ類。表面の色調は黄灰色である。

小　　結

石庖丁に使用されている石材は、片岩、赤紫色泥岩、粘板岩ホルンフェルスの3種類で、そのうち全体の約80%を粘板岩ホルンフェルスが占める。この粘板岩ホルンフェルスの原産地については現在のところ不明である。吉野ヶ里遺跡では、この石材を用いた石器の未製品や製作の際に生じる剥片等はほぼ出土していないことから、この粘板岩ホルンフェルス製石庖丁は、他遺跡から製品として搬入された可能性が高い。また、赤紫色泥岩は北九州市域から筑豊地域にかけて分布する関門層群中の脇野亜層群に産出するものである。SD0001環壕から出土した赤紫色泥岩製石庖丁3点は、肉眼観察では福岡県飯塚市立岩遺跡群において製作された石庖丁の石材と極めて類似し、また、左右交互片刃の石庖丁は、立岩遺跡群内から少なからず出土しており、これら3点は立岩遺跡群で製作されたものである可能性が高いと考えられる。

出土位置についてみてみると、下層からは2点、中･上層からは15点の石庖丁が出土している。石材別では、下層から出土しているものは粘板岩ホルンフェルス製石庖丁のみであり、吉野ヶ里遺跡において最も早い時期に使用・廃棄された石庖丁は粘板岩ホルンフェルス製のものであったことが分かる。また、環壕の中･上層の時期では、引き続き粘板岩ホルンフェルス製の石庖丁が多く使用・廃棄されるとともに、赤紫色泥岩・片岩製石庖丁も少数ながら使用・廃棄され始めたことが分かる。

また、各石庖丁は使用される石材によってそれぞれ特徴的な形態をもつ。粘板岩ホルンフェルス製石庖丁の特徴としてあげられる点は以下のとおりである。

①他の石材の石庖丁と比べて体部の厚さが薄いものが存在する。

SD0001環壕から出土した石庖丁の体部の厚さを石材別に見てみると、最大厚0.5cm以下という薄い石庖丁は全て粘板岩ホルンフェルス製である。

②背部断面形態はⅠ類が多数を占める。

背部断面形態が観察できる粘板岩ホルンフェルス製石庖丁全11点のうち9点がⅠ類である。赤紫色泥岩・片岩製石庖丁には背部断面形態がⅠ類のものはなく、Ⅰ類という背部断面形態が粘板岩ホルンフェルス製石庖丁に特徴的であることが分かる。

④孔の穿孔法・断面形態はB-2類が多数を占める。

孔が観察できる粘板岩ホルンフェルス製石庖丁7点（計側可能箇所10ヶ所）のうち5点（計側可能箇所7ヶ所）がB-2類である。1点のみ出土している片岩製石庖丁の孔の形態もB-2類であるが、赤紫色泥岩製石庖丁は3点ともB-2類ではない。

⑤刃部が直線的で全体の形態が三角形状を呈するものが多い。

粘板岩ホルンフェルス製石庖丁のうち、刃部が直線的で全体の形態が三角形状を呈すると考えられるものは6点存在（5・7・8・9・10・11）する。なお、他石材製の石庖丁には三角形状を呈するものは無い。以前から指摘されているように、このような三角形状の石庖丁の存在は前期段階の石庖丁の特徴をよくあらわしているといえよう。（下條1975など）

次に、赤紫色泥岩製石庖丁における特徴的な形態のものとして、2の左右交互片刃の石庖丁を挙げることができる。これは先述したように、刃部の中央で刃付けが交互になりそれぞれ片刃をなすものである。日本出土のこの形態の石庖丁については森貞次郎氏（森1942）や西谷正氏（西谷1973）によって体系的な整理がなされている。森氏や西谷氏によってすでに論じられているように、左右交互片刃の石庖丁は朝鮮半島南部地域（主に全羅道、忠清道、慶尚道地域）で多く出土しているものである。また、孫晙鎬氏による朝鮮半島出土石庖丁に関する最近の研究（孫2002）でも、三角形を呈し、刃付けが左右交互になる石庖丁は松菊里文化段階にあらわれる、朝鮮半島南部地域に特徴的な形態の石庖丁とされている。今回報告するこの石庖丁についても朝鮮半島南部地域からのなんらかの影響を想定したいところである[6)]。この形態を呈する石庖丁は北部九州地域でも他に出土例がある[7)]が、先述のとおり特に飯塚市の立岩遺跡群での出土例が多い。

また、片岩製石庖丁は、体部の厚さが1.1cmとかなり厚く、それに比例して幅も6.8cmと広く大型である。この特徴は片岩のやや脆いという石質の欠点を補うためではないかと考えられる。

最後に、石庖丁の破損および廃棄の様相について見てみたい。SD0001環壕から出土した計19点の石庖丁のうち完形で出土したものは1点のみで、他は全て破片で出土した。「石庖丁を決定的な廃棄にいたらしめる破損は、背部から刃部をつらぬく折損である」（合田2003）と指摘されているように、破片資料のほとんどがそのような割れ方によって破損した個体である。このような決定的な破損が、穂摘具としての本来の機能を果たしている最中に生じるとは考えにくい。また、敲打具への一時的な転用を示すと思われる、いわゆる「背潰れ痕」等も確認できないことから、どのような理由でこのような破損が生じたのかは不明である。可能性としては、鈍くなった刃部を再研磨する際に破損した可能性が最も高いのではないかと思われる[8)]。また、SD0001環壕中から石庖丁の破片同士が接合し完形となる例は皆無であったことから、破損は環壕埋没後の土圧等によるものではなく、廃棄される以前に生じたものである。

（2）石鎌（第27図、図版2）

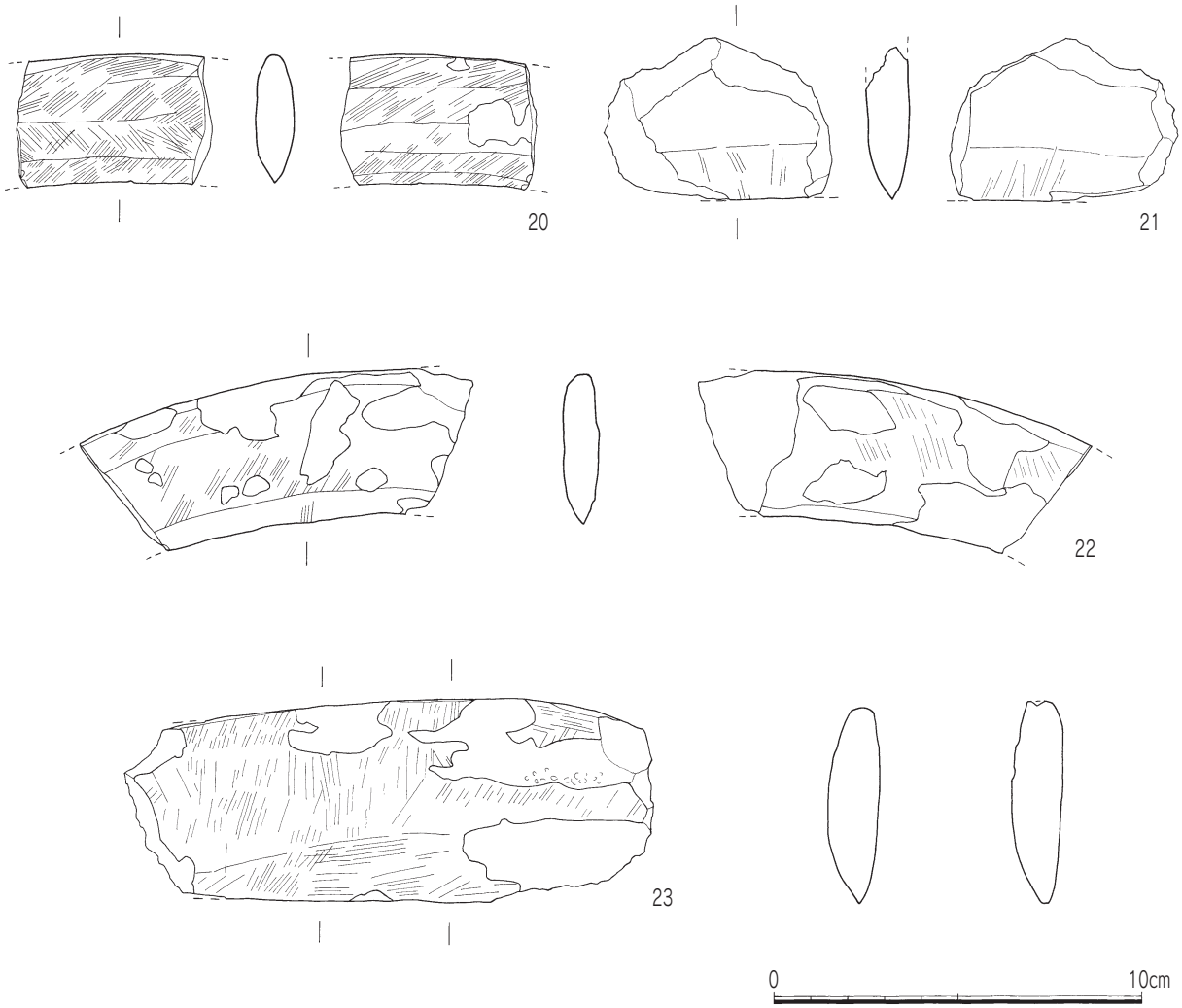
石鎌は4点出土しており、全点図化を行った。石鎌に使用されている石材は1点が細粒安山岩、2点が粘板岩ホルンフェルス、1点が粘板岩である。

20は、細粒安山岩を素材とする。2ヶ所で背部から刃部にかけて割れ、体部の一部（残存長5.3cm）のみ残存する。全体的に体部が若干内湾する。体部表面には、全面にわたって長軸に対して斜め方向への明瞭な研磨痕が残り、鈍い光沢を持つ。また、体部には研ぎ分けの稜線がみられる。縦断面は体部中央で最大厚となる紡錘形を呈し、背部は研磨によって平坦に仕上げる。刃は偏両刃で、刃縁には若干の刃こぼれが見られる。表面の色調は灰色で、白色の粒状模様がみられる。

21は、粘板岩ホルンフェルスを素材とする。刃部から体部にかけての一部が残存する。表面の風化が進み研磨痕等は確認できない。縦断面は体部中央で最大厚となる紡錘形を呈する。刃はほぼ左右対称の両刃で、表面の色調は灰色である。

22は、粘板岩ホルンフェルスを素材とする。2ヶ所で背部から刃部にかけて割れ、先端部および基部を欠損する。全体的に体部が若干内湾する。縦断面は体部中央で最大厚となる紡錘形を呈し、背部断面は角丸形である。刃は左右対称の両刃で、表面の色調は黒灰色～赤褐色である。

23は、粘板岩を素材とする。基端から約14cmの部分まで残存し、先端部を欠損する。また、体部では長軸に対してほぼ直交方向への研磨痕が、刃部ではほぼ平行方向への研磨痕が明瞭に残る。また、一部には研磨の前に行ったものと考えられる敲打の痕跡が残る。縦断面は体部中央付近で最大厚となる紡錘形を呈し、背部は



第27図　SD0001環壕出土石鎌(1/2)

研磨で平坦に仕上げる。また、基端は研磨されず剥離整形したままの状態で、表面は若干潰れたようになっている。刃は偏両刃を呈するが、特に基端から約9cmのところまでは明瞭な刃を作り出しておらず、この部分に木柄を装着したものと考えられる。表面の色調は黒灰色である。

小　　結

石鎌の石材は全4点中2点が、SD0001環壕出土の石庖丁や石剣、紡錘車の石材として多く使用される粘板岩ホルンフェルスを素材としており、それらの器種との間の石材選択に共通性が見られる。また、細粒安山岩、粘板岩はSD0001環壕出土石器の中では石鎌のみに使用される石材である。出土位置については、4点全てが中･上層からの出土である。また、全てが破片資料のため全体をうかがえる資料はないが、23のように比較的大型のものから、20のように小型のものまで存在する。また、石鎌の出土数は石庖丁の出土数19点に対して4点と数量的に少ない。破損に関してみると、21以外の石鎌は全て、背部から刃部へかけて直線的に割れているという共通性がある。このような割れがどのような理由で生じたのかは不明であるが、石庖丁と同様に、刃部の再研磨の際に破損した可能性も考えられる。

（3）石剣（第28図、図版2）

石剣は全部で3点出土し、全点図化を行った。使用されている石材は、2点が粘板岩ホルンフェルス、1点が珪質層灰岩である。

24は、切先部の破片である。粘板岩ホルンフェルスを素材とする。切先の先端部から4.7cmの部分で長軸に対しほぼ直交方向に割れ、基部側を欠損する。表面には研磨を行うが、風化のためその方向等は確認できない。鎬は明瞭ではなく、横断面は凸レンズ状を呈する。刃は左右対称の両刃で、表面の色調は黄灰色である。

25は、有茎の石剣である。粘板岩ホルンフェルスを素材とする。茎部端から6.8cmの部分で長軸に対してほぼ直交方向に割れ、切先側を欠損する。茎部端も含めた全面が研磨で仕上げられる。石剣の中央部分には、身部から茎部端まで縦方向に明瞭な稜線を持つ鎬が入り、横断面は菱形を呈する。茎の部分は、長さ1.9cm、幅1.9cm、厚さ0.7cmである。また、刃は左右対称の両刃である。長沼孝氏の石剣の分類（長沼1986）に拠ると「Ⅰb類で、茎の長さが2cm以下の短剣状のもの」に相当する。表面の色調は黄灰色である。

26は、有茎の石剣である。珪質層灰岩を素材とする。茎部端から6.5cmの部分で長軸に対して直交方向に割れ、切先側を欠損する。表面は茎部端を含めた全面が研磨によって仕上げられる。また、鎬は両面ともに明瞭でなく、身部の横断面は中央部分に最大厚をもつ凸レンズ状を呈する。茎の部分は長さ1cm、幅2.1cm、厚さ0.7cmである。刃は左右対称の両刃で、一部に刃こぼれが見られる。長沼氏の分類に拠ると25の石剣と同様に「Ⅰb類で、茎の長さが2cm以下の短剣状のもの」に相当する。また、表面の色調は灰白色である。

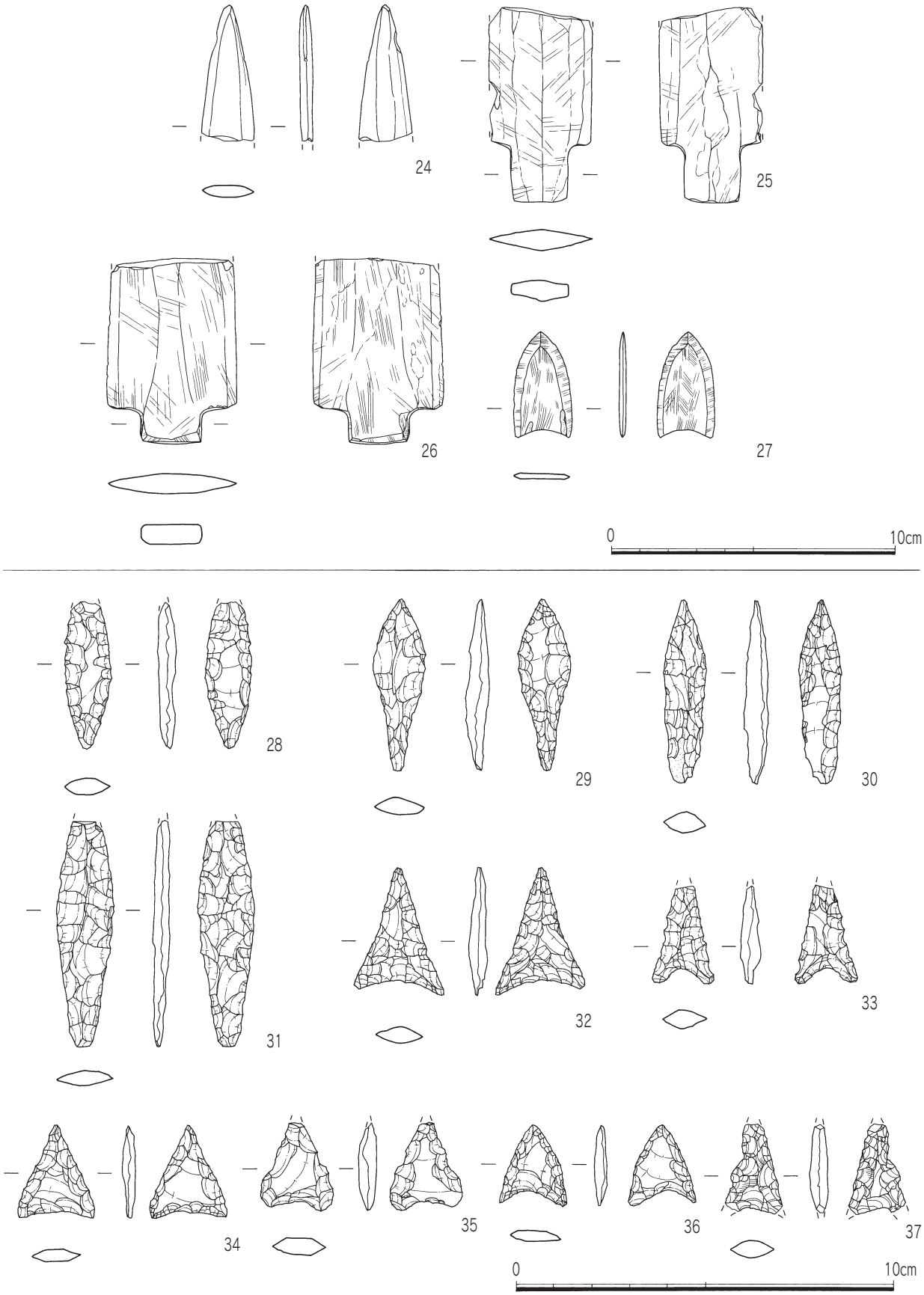
小　　結

石剣は計3点出土しているが、そのうち2点の石材は粘板岩ホルンフェルスで、SD0001環壕出土の石庖丁や石鎌、紡錘車における石材選択との共通性が認められる。残りの1点は珪質層灰岩とされるが、扁平片刃石斧に用いられている珪質層灰岩とは質感･色調が若干異なる。出土位置については3点ともに中･上層からの出土である。石剣の形態に関しては、基部が残存する2点はどちらも長沼氏の石剣の分類によるⅠb類に相当し、サイズに関しても2点に類似性が認められる。また、その素材の特性に規制されるのか、どちらも厚さが比較的薄い。破損に関してみると、3点とも石剣の長軸に対して直交する方向に割れており、共通性が認められる。

（4）磨製石鏃（第28図、図版3）

27は、長さ3.8cm、幅2.0cm、厚さ0.2cm、重さ2.5gの珪質凝灰岩を素材とする完形品である。基部は浅い凹基で、丁寧な研磨によって作り出されている。全体の厚さは0.2cmとかなり扁平である。表面は全体に丁寧な研磨が行われ、体部では長軸に対してほぼ平行方向への研磨痕が、刃部では刃縁に直交する方向への研磨痕が明瞭に残る。また、特に刃部は先端部から左右に研ぎ分けが行われ、先端部には研ぎ分けの稜線が明瞭に残る。また、刃部には若干の刃こぼれが見られる。表面の色調は、体部は黒灰色で、刃部には灰色と黒灰色の葉理が縞状にみられる。

なお、SD0001環壕からは打製石鏃が10点出土しているのに対し、磨製石鏃はこの1点のみの出土である。



第28図　SD0001環壕出土石製武器類(1/2)・(2/3)

（5）太形蛤刃石斧(第29～33図、巻頭図版12、図版4～6)

太形蛤刃石斧は全部で39点出土し、磨製石器類の中では出土数が最も多い。使用されている石材は20点がカンラン石玄武岩、1点がヒン岩、18点が細粒砂岩である。ここでは、そのうちの21点について図化を行った。説明を行うにあたっての各部位の名称は、24図に示したとおりである。

38～47の太形蛤刃石斧の素材は全てカンラン石玄武岩である。

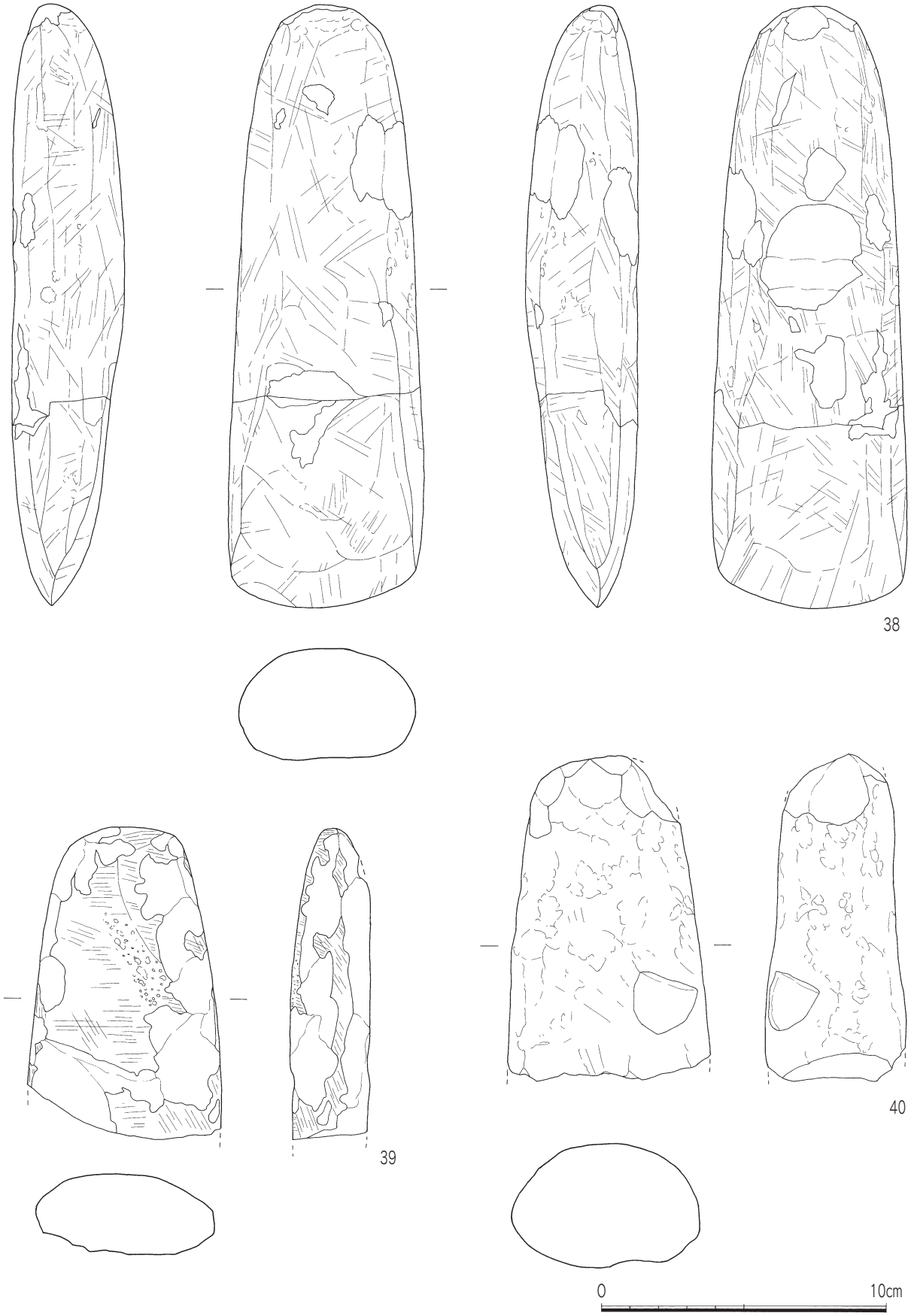
38は、全長21cm、幅6.8cm、厚さ3.5cm、重さ954.9gで、完形に復元できる。刃縁から約7.5cmの部分で基部側と刃部側の二つに割れる。全体的な形態としては刃部が最も幅広で、基部にむかって徐々にすぼまる形態を持ち、基部は円基である。また、横断面は扁平な楕円形を呈し、厚みと幅の比率は、厚みを1とした場合、幅は約2である。刃部の研磨は長軸に対して、45～90°に近い方向で行われ、胴部から基部にかけても同様の方向に研磨を行う。また、両側縁部には敲打整形の際に表面に残る凹凸が研磨を行った後でも明瞭に残るのに対し、両主面にはそのような敲打整形の痕跡が残っていないことから、側縁部よりも主面側に、より丁寧な研磨を行ったことが分かる。また、基端には整形時のものと考えられる敲打痕が残る。刃部は使用のためか左右対称ではなく、片減りした偏刃を呈する。また、刃部の両側縁は研磨によって面取りされ、研ぎ分けの稜線をもつが、胴部から基部にかけての側縁は面取りされず丸みを持つ。また、刃部には刃こぼれが見られないことから、刃部の研ぎ出し後あまり使用されないままに破損し、廃棄されたものと考えられる。表面の色調は明灰色で、研磨を行った部分には鈍い光沢も残る。

39は、基端から約10cmの部分で長軸に対してほぼ直交する方向に割れ、刃部側を欠損する。全体的な形態としては、基部に向かって徐々にすぼまる形態を持ち、基部は若干丸みをおびた平基である。横断面はかなり扁平で、厚みと幅の比は厚みを1とした場合、幅は約2.3である。また、一方の主面では長軸に対してほぼ直交方向へ研磨を行い、側縁部にも研磨を行うが、一部に整形時に剥離したままの状態を残す。また、もう一方の主面は一部に研磨を行うのみで、ほとんどが整形時に剥離したままの状態である。また、特に中央部は剥離整形も行わず原石の自然面を残す。表面の色調は灰色である。

40は、基端から約11cmの部分で長軸に対してほぼ直交方向に割れ、刃部側を欠損する。全体的な形態としては、基部に向かって徐々にすぼまる形態を持ち、基部は若干丸みを帯びた平基である。横断面はほぼ正楕円形を呈し、厚みと幅の比は、厚みを１とした場合、幅は約1.4である。また両主面、側縁部には研磨を行わず敲打整形の痕跡のみ残り、基部の一部は剥離欠損する。表面の色調は灰白色である。基端には剥離欠損や潰れたような痕跡があることから、石斧破損後に敲石等に再利用された可能性が高い。

41は、一方の主面の基端より約17cmの部分、もう一方の主面の基端から約6cmの部分にかけて割れ、刃部側を欠損する。基端付近も一部剥離欠損する。全体的な形態としては、両側縁がほぼ平行する形態を持ち、基部は若干丸みを帯びた平基である。横断面はほぼ正楕円形を呈し、復元値を用いると厚みと幅の比は、厚みを1とした場合、幅は約1.6である。研磨は、主面では長軸に対して約45°の斜めの方向に、側縁部では長軸に対してほぼ平行方向に行うが、基部側は研磨が丁寧ではなく敲打整形の痕跡が残る。特に、研磨を行った部分は風化があまり進んでおらず、表面の色調は黒灰色で、鈍い光沢をもつ。また、基端および刃部側の破面が若干潰れたようになっていること、基端からの剥離欠損が見られることから石斧破損後に敲石等に再利用された可能性が高い。

42は、基端から約7cmの部分で長軸に対してほぼ直交方向に割れ、刃部側を欠損する。また、残存部分でも表面が一部剥離欠損する部分がある。全体的な形態としては、基部に向かって徐々にすぼまる形態を持ち、基部は若干丸みを帯びた平基である。横断面は若干扁平で、厚みと幅の比は厚みを1とした場合、幅は約1.7であ



第29図　SD0001環壕出土太形蛤刃石斧①（1/2）

る。研磨は、両主面では不定方向へ行うが、側縁部では研磨は行われず敲打整形の痕跡が明瞭に残る。表面の色調は灰色である。

43は、基端から約7cmの部分で長軸に対してほぼ直交方向に割れ、刃部側を欠損する。全体的な形態としては、基部に向かって徐々にすぼまる形態をもち、基部は円基である。横断面は若干扁平で、復元値を用いると厚みと幅の比は厚みを1とした場合、幅は約1.8である。両主面には研磨痕が残るが、側縁部では研磨は行われず敲打整形の痕跡が明瞭に残る。表面の色調は明灰色である。

44は、基部側および刃部側を大きく欠損し、胴部（残存長11.9cm）のみが残存する。全体的な形態としては両側縁がほぼ平行する形態を持ち、現状ではどちらかが基部側か刃部側かの判断は難しい。横断面はほぼ正楕円形を呈し、厚みと幅の比は厚みを1とした場合、幅は約1.6である。また、研磨を全面にわたって長軸に対して斜めの方向に、不規則に行う。表面の色調は明灰色である。また、実測図で下側となっている部分の破面の一部はやや潰れたようになっており、石斧破損後に敲石等に再利用された可能性が高い。

45は、基部側及び刃部側を大きく欠損するとともに、一方の主面も長軸方向に抉れるように欠損する。また、もう一方の主面も上下から一部が剥離欠損する。現状ではどちらが基部側か刃部側かの判断は難しい。横断面はほぼ正楕円形を呈し、復元値を用いると、厚みと幅の比は厚みを1とした場合、幅は約1.5である。研磨を全面にわたって長軸に対して約45°に近い斜めの方向で行い、側縁部にも丁寧な研磨を行う。表面の色調は明灰色である。また、実測図で下側となっている側の破面の一部はやや潰れたようになっており、石斧破損後に敲石等に再利用された可能性が高い。

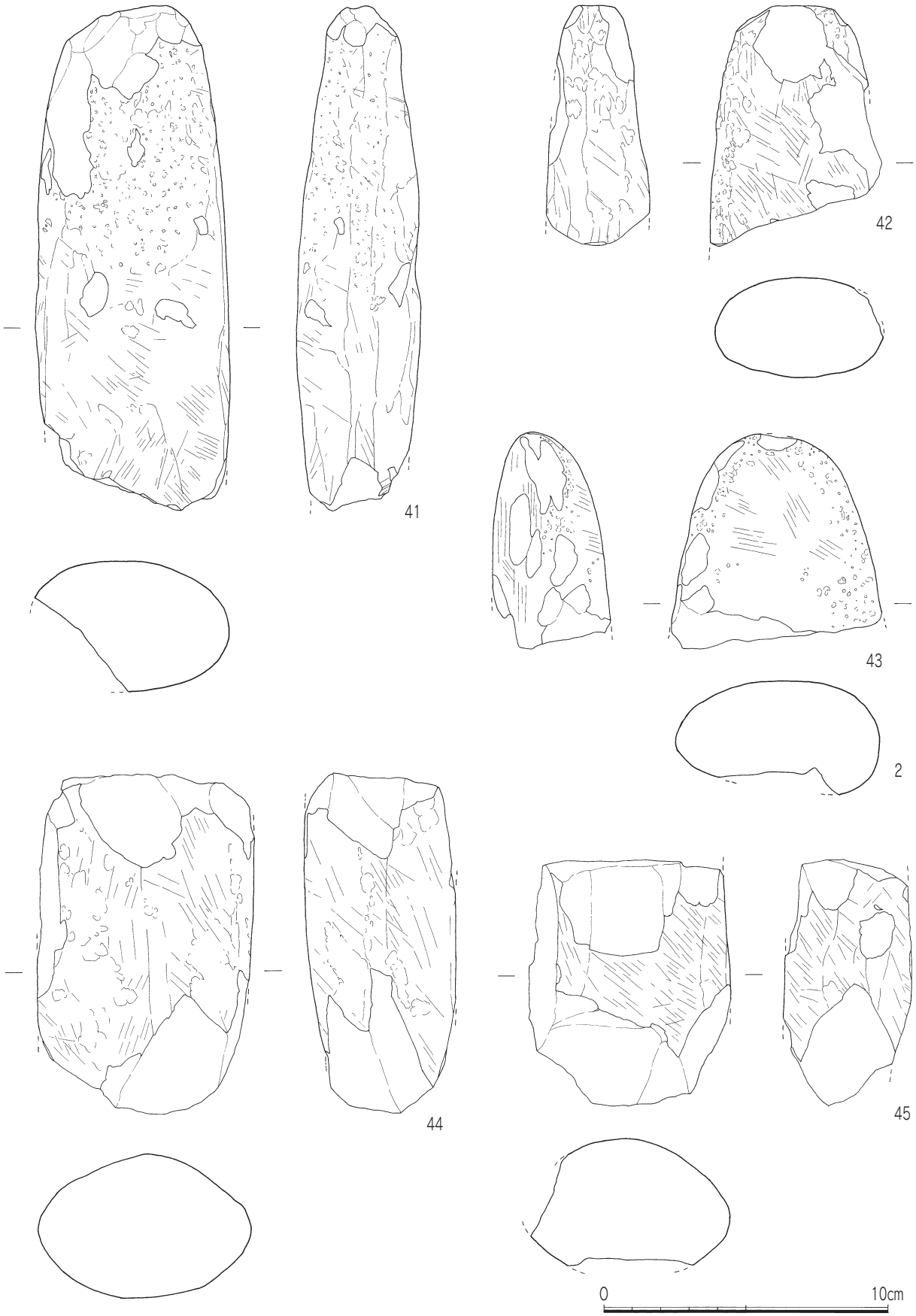
46は、基部側および刃部側を大きく欠損するとともに一方の側縁部も欠損し、胴部（残存長4.8cm）のみが残存する。割れは長軸に対して直交する方向にほぼ直線的に入り、また側縁部の割れは長軸に対してほぼ平行する方向に入る。現状ではどちらが基部側か刃部側かの判断は難しい。また横断面はほぼ正楕円形を呈し、復元値を用いると厚みと幅の比は、厚みを1とした場合、幅は約1.4である。また、研磨は主面では長軸に対してほぼ平行方向に、側縁部では長軸に対して約45°に近い斜めの方向に丁寧に行う。表面の色調は明灰色である。

47は、基部側および刃部側を大きく欠損し、胴部（残存長9.8cm）のみが残存する。現状ではどちらが基部側か刃部側かの判断は難しい。横断面は若干扁平で、厚みと幅の比率は、厚みを1とした場合、幅は約1.8である。研磨を全体にわたって長軸に対して約30～45°に近い斜めの方向に丁寧に行う。表面の色調は明灰色である。

48は、残存長12.9cm、幅6.7cm、厚さ3.8cm、重さ495.3gで、ヒン岩を素材とする。一方の主面の基端から約13cmの部分より、もう一方の主面の基部側に向けて斜めに割れ、刃部を欠損する。全体的な形態としては、基部に向かって徐々にすぼまる形態を持ち、基部は円基である。横断面は若干扁平で、厚みと幅の比は厚みを1とした場合、幅は約1.8である。全体的に敲打整形を行ったのち基端から約8cmの部分より下側に研磨を行い、刃部を作り出す。刃部以外の部分には研磨を行わず、敲打整形の痕跡がそのまま残る。表面の色調は淡灰色で、風化はあまり進んでいない。また刃部側の破面は全体的に潰れたようになっており、石斧破損後に敲石等に再利用された可能性が高い。

以下、49～58の太形蛤刃石斧の素材は全て細粒砂岩である。

49は、残存長14.1cm、幅6.3cm、厚さ4.4cm、重さ603.2gである。一方の主面の基端から約14cmの部分よりもう一方の主面の基部側に向けて斜めに割れ、刃部を欠損する。全体的な形態としては、基部に向かって徐々にすぼまる形態を持ち、基部は円基である。横断面はほぼ正楕円形を呈し、厚みと幅の比は、厚みを1とした場合、幅は約1.4となる。全体に敲打整形を行ったのち、基端から約8cmの部分より刃部側には長軸に対



第30図　SD0001環壕出土太形蛤刃石斧②（1/2）

してほぼ平行する方向に研磨を行う。また、刃部以外の部分は研磨を行わず、敲打整形の痕跡が明瞭に残る。但し、基端は全体的に磨られ、またその磨られた部分中には敲打の痕跡も残るが、それが整形時のものか、あるいは石斧破損後の磨石・敲石等としての再利用を示しているのかの判断は難しい。表面の色調は灰緑色である。

50は、基部側および刃部側を大きく欠損するとともに一方の主面側半分も欠損し、胴部の一部（残存長10.8cm）のみが残存する。両側縁はほぼ平行しており、現状ではどちらが基部側か刃部側かの判断は難しい。主面には研磨を行わず敲打整形の痕跡のみが残るが、側縁部は一部研磨を行い、平坦面となる。表面の色調は青灰色である。

51は、胴部の一部で、2つの破片が接合したものである。横断面は扁平な楕円形を呈する。一方の主面には研磨を行うが、側縁部ともう一方の主面には研磨を行わず敲打整形の痕跡がそのまま残る。表面の色調は灰緑色である。

52は、刃部側と基部側を大きく欠損し、刃部に近い側の胴部の一部（残存長5.3cm）のみが残存する。横断面はかなり扁平で、厚みと幅の比率は、厚みを1とした場合、幅は約2.5である。また、残存する主面の半分より上方には研磨を行わず敲打整形の痕跡がそのまま残り、半分より下方には研磨を行う。そのことによってこの破片が刃部に近い部分であることが分かる。表面の色調は淡黄色である。

53は、胴部の一部で、一方の主面側の表面に近い部分のみが残存し、また残存する主面側の表面も大きく剥離欠損する。主面・側縁部には研磨を行わず、敲打整形の痕跡がそのまま残る。表面の色調は暗青灰色である。

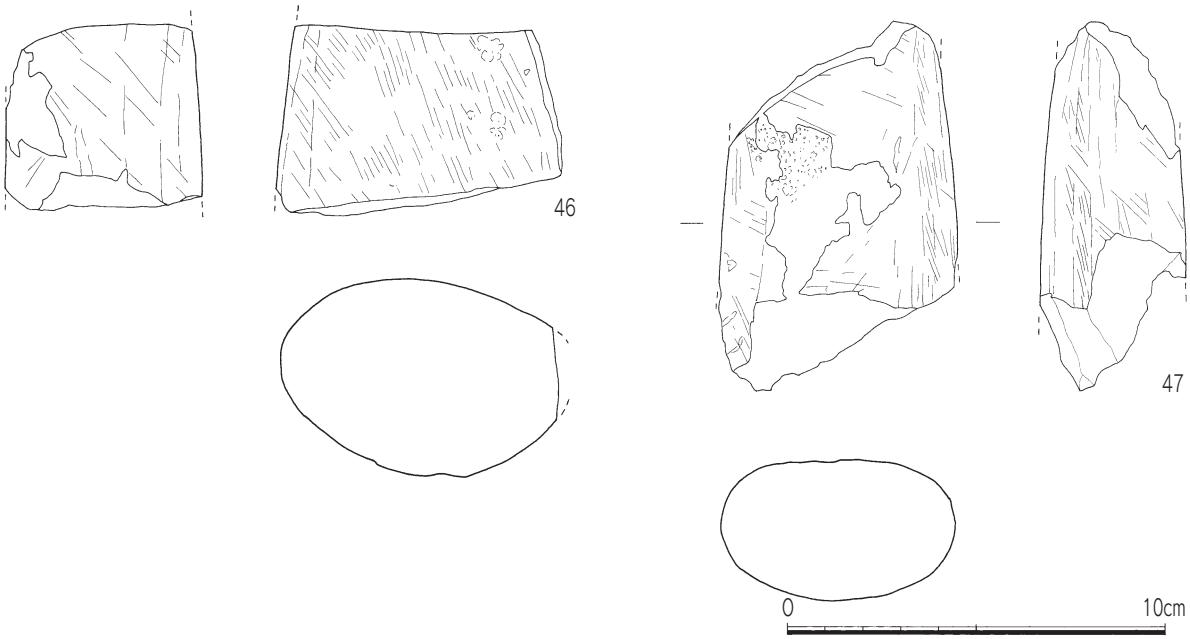
54は、残存長14.2cm、残存幅6.1cm、厚さ3.2cm、重さ316.5gである。一方の主面の基端から約14cmの部分より基部側に向かって大きく割れ、刃部と胴部の一部を欠損する。また、基端も一部剥離欠損する。横断面は若干扁平で、厚みと幅の比は厚みを1とした場合、幅は約1.9である。表面には、敲打整形の痕跡がそのまま残り、刃部側の一部にのみ長軸に対してほぼ直交方向への研磨痕が残る。表面の色調は黒色から暗赤褐色で、特に黒色の斑点がみられるのが特徴的である。

55は、基端から約7cmの部分で長軸に対してほぼ直交方向に割れ、刃部側を欠損する。全体的な形態としては、基部に向かってややすぼまる形態をもち、基部はやや丸みをおびた平基である。また、横断面は若干扁平で、厚みと幅の比は、厚みを1とした場合、幅は約1.7である。研磨は、一方の主面では長軸に対してほぼ直交方向に、もう一方の主面では長軸に対して約45°に近い斜めの方向に行う。側縁部にも研磨を行うが、あまり丁寧ではなく研磨の後にも敲打整形の痕跡が明瞭に残る。表面の色調は暗緑灰色で、特に黒色の斑点がみられるのが特徴的である。

56は、側縁部から長軸に対してほぼ直交する方向に、そして刃縁から長軸に対してほぼ平行する方向に割れ、刃部の約半分のみが残存する。刃縁には刃こぼれは見受けられない。また、研磨は残存部分の全体にわたって行われており、刃部では長軸に対して約45°に近い斜めの方向に、刃縁付近は刃縁に対してほぼ平行に行う。側縁部にも研磨を行うものの一部敲打整形の痕跡が残る。表面の色調は黒灰色である。

57は、刃部の一部（残存長3.2cm）のみが残存するとともに、両側面部の一部それぞれが残っている。また、刃縁の部分も大部分剥離欠損し、刃縁のうち長さ約3cmの部分のみが残存する。表面には研磨痕が明瞭に残り、特に刃部両側面は研磨によって面取りされ研ぎ分けの稜線をもつ。表面の色調は暗緑灰色から暗赤褐色で、特に黒色の斑点がみられるのが特徴的である。

58は、刃縁のほぼ中心付近から側縁部に向けて斜めに割れ、刃部の一部（残存長6.4cm）のみ残存する。研磨を全体にわたって行い、刃縁付近では長軸に対して約70°の方向で行う。側縁部にも研磨を行うものの、一



第31図　SD0001環壕出土太形蛤刃石斧③（1/2）

部敲打整形の痕跡が残る。また、刃縁には刃こぼれがいくつも認められる。表面の色調は黒灰色で、特に黒色の斑点がみられるのが特徴的である。

小　　結

太形蛤刃石斧に使用されている石材は、火成岩系のカンラン石玄武岩・ヒン岩と堆積岩系の細粒砂岩の二つに大別され、石材別の数量比では、カンラン石玄武岩51%、ヒン岩3%、細粒砂岩46%となる。このうち、カンラン石玄武岩については肉眼観察では福岡市西区の今山・毘沙門山などで産出するものと推定され、今回報告するカンラン石玄武岩製の太形蛤刃石斧についても学史上著名な今山遺跡、あるいはその周辺の遺跡で製作されたものと考えられる。

また、全て同質のカンラン石玄武岩とは異なり、細粒砂岩はその石斧表面の色調から4つのタイプに分けられる[9)]。つまり、

①暗緑灰色系で、その中に黒色の斑点がみられるもの（54･55･57･58）

②青灰色系のもの（50･53･61･75）

③黒灰色や灰緑色系のもの（49･51･56･63･68･72）

④淡黄色系のもの（52･59･64･74）

である。これらの細粒砂岩は、他の遺跡から出土する太形蛤刃石斧にもよく使用される石材であるが、原産地あるいは製作地等については不明である。また、これらの石材を用いた太形蛤刃石斧の未製品や剥片等は吉野ヶ里遺跡において出土していないことから、製品として搬入されたのは明らかである。

出土位置については、11点が下層から、23点が中･上層から出土している（不明5点）。石材別では、カンラン石玄武岩製石斧・細粒砂岩製石斧は上･中層、下層両方から出土しており、またヒン岩製石斧１点は上層から

第32図　SD0001環壕出土太形蛤刃石斧④（1/2）

第33図　SD0001環壕出土太形蛤刃石斧⑤・縄文系石斧（1/2）

の出土である。特に、カンラン石玄武岩製の太形蛤刃石斧は下層から5点出土しており、今山遺跡等で製作された石斧が下層の時期（板付IIa新段階）以前には吉野ヶ里遺跡にもたらされていたことが分かる。

また、形態については、38の石斧を除く全てが破片資料のため、全体の形態が不明であるが、ほとんどのものは刃部が最も幅広で基部に向かって徐々にすぼまる形態を呈する。また、基部の形態は円基が主体をなし、これらは前期段階の太形蛤刃石斧の特徴をあらわしているといえよう。また、表6に厚さと幅の相関を示したが、この図から見てとれるように、最大幅は約5.5～8cmの間に、最大厚は約3～5.5cmの範囲におさまる。出土位置別の太形蛤刃石斧の特徴としては、石材の違いに関わらず、下層出土の資料（39･42･50･52･55など）は中･上層出土の資料に比べて厚さが薄く、また比較的粗雑なつくりをしているものが多い。

また、太形蛤刃石斧の最終調整である研磨の施し方には大きく4つのパターンが認められる。すなわち、

A類:石斧のほぼ全体に研磨を行うもの（AⅠ類:38･45･46･47　AII類:39･44･55･73）

B類:刃部と主面のみに研磨を行うもの（BⅠ類:42･43　BII類:なし）

C類:刃部と側縁のみに研磨を行うもの（CⅠ類:なし　CII類:41･50）

D類:刃部のみに研磨を行うもの（DⅠ類:52･63･72･75　DII類:48･49･54）

である。またそれぞれ、研磨の程度によって、「Ⅰ:研磨が丁寧に行われ前工程の敲打整形の痕跡（凹凸）がほとんどみえないもの」と、「II:研磨が行われるが、その下に前工程の敲打整形の痕跡（凹凸）がみえるもの」の2つに分けられる。石材別の各数量をみると、カンラン石玄武岩ではA類が7点、B類が2点、C類が1点で、ほとんどの個体は敲打整形後に主面、あるいは側縁部に研磨を行っていることが分かる。しかし、それとは対照的に細粒砂岩･ヒン岩はA･C類が1点ずつあるのみで、D類が7点と多数を占め、敲打整形後には刃部以外にはほとんど研磨を行わず、敲打整形時の凹凸が残ったままのものが多いことが分かる。このように石材によって研磨の施し方に違いが見られるが、このような違いは機能的なものではなく、その違いについては、特にA･B類などは研磨することによってあらわれる色調や光沢など見かけ上の効果を狙った可能性も考えられよう。

最後に石斧の破損および廃棄の様相について見てみたい。今回報告する太形蛤刃石斧はそのほとんどが破片で出土したもので、使用による破損等によって最終的に環壕内に廃棄されたものである。廃棄された石斧の遺存状態にもいくつかのパターンが存在する。そこで、太形蛤刃石斧の破損パターンを以下のように大きく5つに分類する[10)]。

Ⅰ類:完形品。その中でも全く破損が無いものをⅠA類に、破損するが接合し完形となるものをⅠB類とした。今回、報告する太形蛤刃石斧にはⅠA類は無く、ⅠB類が1点(38)ある。

II類:胴部で石斧の長軸に直交する方向に割れ、基部側のみが残存するもの。(39･40･41･42･43･48･49･54･55･73)

Ⅲ類:胴部で石斧の長軸に直交する方向に割れ、刃部側のみが残存するもの。(56･57)

Ⅳ類:刃部と基部が失われ、胴部のみが残存するもの。(44･45･46･47･50･51･52･63･64)

Ⅴ類:小破片などその他のもの。(53･58･59･60･61･62･65･66･67･68･69･70･71･72･74･75･224)

である。

このうちII・Ⅳ類に含まれるものは基端や破面を作用部として、敲石等に再利用したと考えられるものが多い。また、数量的には小破片であるⅤ類が最も多いが、それ以外では基部側が残存するII類や胴部のみ残存するⅣ類が多いのに対し、完形品のⅠ類､刃部が残存するⅢ類が少ないのが特徴的であるといえる。また、特徴的な破損として、45の石斧に見られるように、長軸方向に主面が長く抉れるように破損したものがある。どのような力の作用によってこのような破損をするのかは不明であるが、このような特徴的な破損をした太形蛤刃石

斧は他の遺跡でもよく見られるもので、太形蛤刃石斧の使用法･破損の契機等を示す可能性がある。

（6）縄文系石斧（第33図、図版6）

76は、長さ8.1cm、幅4.3cm、厚さ2.5cm、重さ122.6gの蛇紋岩を素材とする縄文系の両刃石斧である。刃縁、一方の側縁部、および基部の一部を欠損するがほぼ全形をうかがえる。両側縁は平行し、基部は平基である。表面は全体的に不定方向への研磨により仕上げるが、側縁部には敲打整形時のものと思われる痕跡が一部残る。横断面は若干扁平な楕円形を呈し、厚みと幅の比は、厚みを1とした場合、幅は約1.7である。表面の色調は蛇紋岩特有のやや緑色の強い緑白色である。

SD0001環壕からは縄文系の石斧はこの1点のみしか出土していない。太形蛤刃石斧などに対して補助的に使用されたものと思われる。

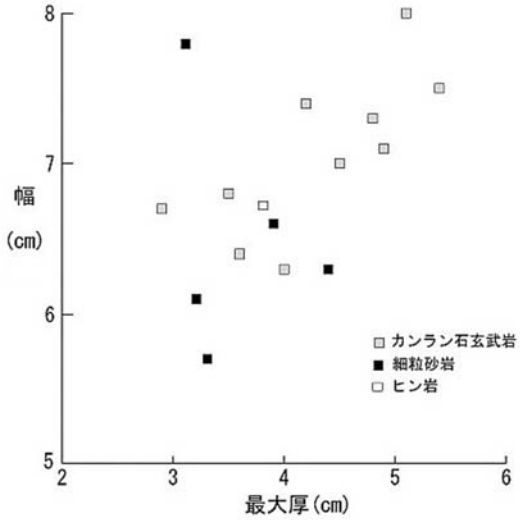


表6　太形蛤刃石斧石材別の幅と厚さの相関

（7）柱状片刃石斧（第34図、図版7）

柱状片刃石斧は全部で5点出土し、そのうちの2点について図化を行った。使用されている石材は3点が珪質層灰岩、2点が砂岩である。説明にあたっての各部位の名称は24図に示したとおりである。

77は、砂岩を素材とする。長軸に対して平行および直交する方向に割れ、基部と抉りの一部のみが残存する。抉りはあまり明瞭には作られていないが、抉り部にのみ丁寧な研磨を行うのに対し、他の部分には明瞭な研磨を行わない。また、それぞれの面は若干外湾する。表面の色調は青灰色～黄灰色である。

78は、珪質層灰岩を素材とする。刃縁から長軸に対して平行方向に、また側面部から長軸に対して直交方向に割れ、基部および刃部の約半分を欠損する。そのため抉りの有無は不明である。全ての面に丁寧な研磨を行い、それぞれ平坦面をなすが側面部のみ若干ふくらむ。研磨痕は前主面と後主面において特に明瞭に残り、研磨はそれぞれ長軸に対して直交方向に行う。また、後主面では刃縁から約1.5cmの範囲に、長軸に対して平行する方向へ入る細かい線状痕がいくつも認められる。また、片刃の形成角度は約55°で、前主面と刃部の間の稜は明瞭である。平面形、横断面形、刃部形などの諸特徴から、この石斧は下條信行氏による柱状片刃石斧の分類（下條1997）のうちB型式に該当するものである。また、表面の色調は淡黄緑色で、光沢を残す。

小　　結

柱状片刃石斧の出土数は全5点と石斧類の中では少ない。石材は珪質層灰岩を使用するものが3点と最も多く、石材の選択において扁平片刃石斧との共通性が認められる。出土位置については、2点が下層から、3点が中･上層からの出土である。また、全体の形態がうかがえるものはないが、先述したように、78の石斧は下條氏の分類のB型式に該当するもので、氏によるとB型式は板付Ⅱ式段階に盛行するものとされており時期的にも合致する。破損については、77･78の石斧ともに葉理に沿った長軸方向への割れ、およびそれに直交する方向への

第34図　SD0001環壕出土柱状片刃石斧・扁平片刃石斧（1/2）

割れによって破損しており、共通性がみられる。

（8）扁平片刃石斧（第34図、図版7）

扁平片刃石斧は全部で9点出土しており、石斧類の中では太形蛤刃石斧に次ぐ出土数である。ここでは全点の図化を行った。ここで扁平片刃石斧としたものは基本的に、下條氏によって挙げられた扁平片刃石斧の諸特徴（下條1996）を持つものであるが、ここでは下條氏によって縄文小形片刃石斧（J形）とされた石斧（87・88）も含めて説明を行う。また、使用されている石材は、5点が珪質層灰岩、1点が珪質凝灰岩、3点が粘板岩である。説明にあたっての各部位の名称は24図の柱状片刃石斧の部位名称を基本とした。

82は、珪質層灰岩を素材とする。刃部および一方の側面部から基部にかけて割れ、大部分を欠損する。また、残存部分も中心付近で長軸方向への割れで２つに割れたものが接合したものである。前後主面では、研磨を長軸に対して直交方向に行うが、側面は素材の自然面をそのまま残す。縦断面は、若干基端付近が薄くなる凸レンズ状を呈し、横断面は前・後主面が平行し、側面はややふくらんだ形態を呈する。また厚さが1.4cmと、他の扁平片刃石斧よりも若干厚い。表面の色調は緑白色である。

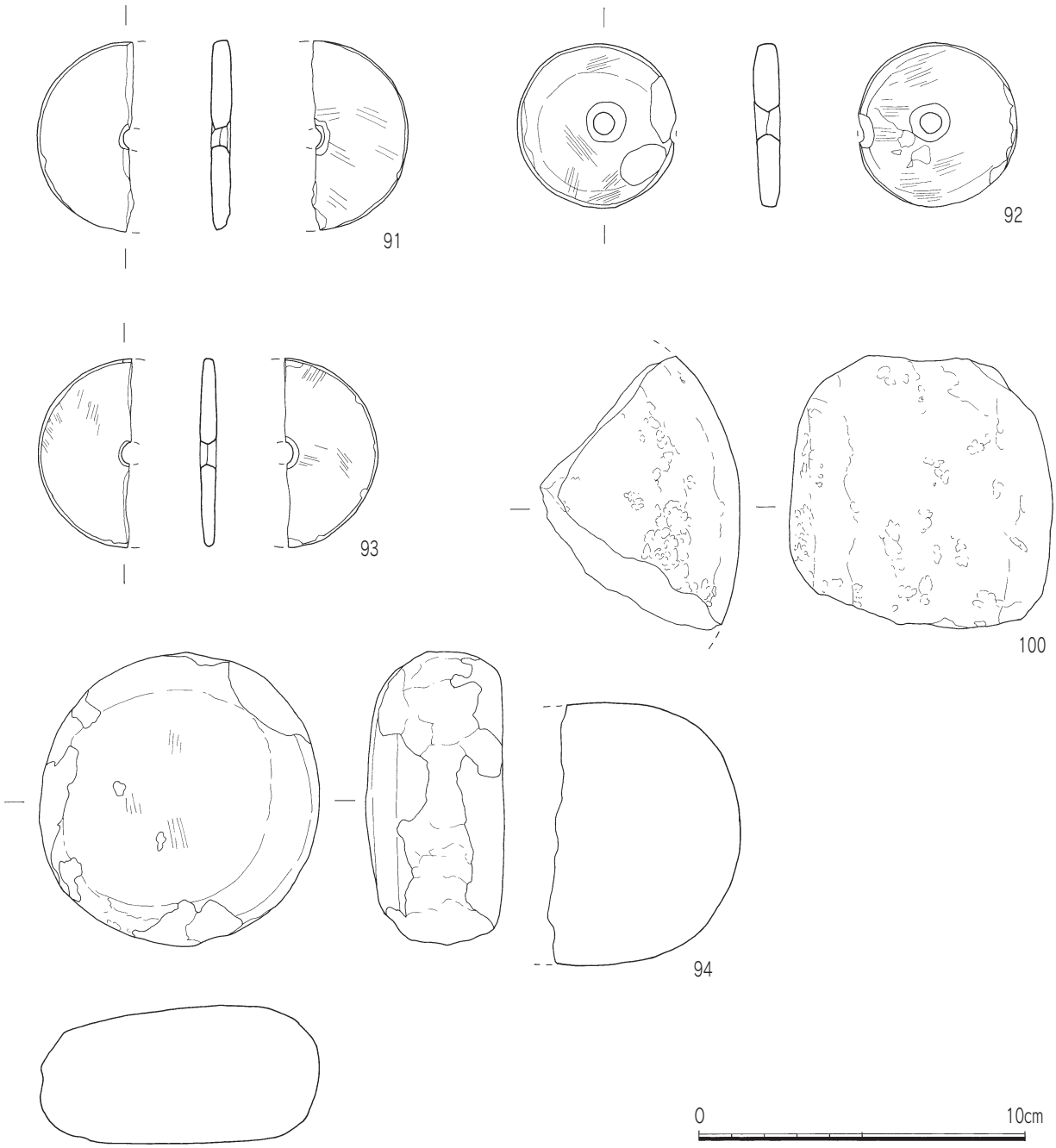
83は、長さ8.2cm、幅2.5cm、厚さ0.8cm、重さ32.6gで、珪質層灰岩を素材とする。基端の一部を欠損するがほぼ完形である。それぞれの面は長軸に対して約45°に近い斜めの方向に丁寧な研磨を行い、それぞれ平坦面をなす。全体的に縦に細長い形態をもち、両側面はほぼ平行する。また、縦断面は若干湾曲し、基部付近で最大厚を持ち、刃部に向かって若干薄くなる形態を持つ。横断面は長方形を呈する。下條氏の分類（下條1996）ではＨＩ-2式に属する。片刃の形成角度は約30°で、刃縁に刃こぼれは見受けられない。また、刃部と前主面の間の稜はあまり明瞭ではない。表面の色調は淡緑白色である。

84は、珪質層灰岩を素材とする。基端から刃部にかけて長軸方向に割れ、大部分を欠損する。風化のため研磨痕はほとんど確認できない。前後主面、基部、および側面の刃部に近い部分は研磨によって平坦面をなすが、側面の基部側約半分は素材の自然面をそのまま残す。縦断面は若干湾曲し基端から基部にかけてはほぼ平行で、横断面は長方形を呈する。また、前主面側の基端から約0.4cmの部分には幅約0.3cm、深さ約0.1cmの浅い溝が長軸に対して直交方向に入る。片刃の形成角度は約50°で、刃部と前主面の間の稜はあまり明瞭ではない。表面の色調は暗緑白色である。

85は、長さ5.3cm、幅2.7cm、厚さ1.1cm、重さ31gで、珪質層灰岩を素材とする。基端の一部が欠損するがほぼ完形である。基端の欠損は、基端面に加わった力によって刃部側に向けて欠損する。全ての面に丁寧な研磨を行い、各面を平坦に仕上げ、両側面はほぼ平行する。また、縦断面は基端付近に最大厚を持ち、刃部に向かって徐々に薄くなり、また、横断面は長方形を呈する。下條氏の分類ではH1-2式に属する。片刃の形成角度は約55°で、刃縁に刃こぼれは見受けられない。また、刃部と前主面の間の稜は比較的明瞭である。表面の色調は緑白色で、鈍い光沢が残る。

86は、長さ5.3cm、幅3.4cm、厚さ0.7cm、重さ20.1gで、珪質凝灰岩を素材とする、石剣の身部の破片を再加工した完形の扁平片刃石斧である。表面はかなり風化が進んでおり研磨痕等は確認できない。前後主面の中心にそれぞれ長軸方向に鎬が見られることから、元々は石剣の身部であったことがわかる。石剣が破損した後、一辺は研磨によって片刃を作り刃部とし、もう一辺も研磨によって平坦面をつくり基端部としている。また、元々石剣の刃部であった両側縁部にも研磨を行い平坦に仕上げる。片刃の形成角度は約50°で、刃縁には刃こぼれは見られない。また、刃部と前主面の間の稜はあまり明瞭ではない。表面の色調は淡黄色である。

87は、長さ4.2cm、幅1.9cm、厚さ0.8cm、重さ8.9gで、粘板岩を素材とする。両側面は研磨を行い平坦面とし、ほぼ平行するが、前後主面は研磨の痕跡が不明瞭である。また、基部側が刃部に比べ若干狭くなる形態



第35図　SD0001環壕出土紡錘車・磨石・敲石（1/2）

を呈するとともに、胴部中央部に最大厚を持つ。下條氏の分類ではJ（縄文）形に属するものである。表面の色調は淡黄緑色である。

88は、残存長4.4cm、幅2.2cm、厚さ0.9cm、重さ15.7gで粘板岩を素材とする。素材・形態ともに87の石斧と極めて類似する。両側面・基部には研磨を行い、平坦面をなすが、前後主面には明瞭な研磨の痕跡は見られない。また、両側面はほぼ平行する。下條氏の分類ではJ（縄文）形に属するものである。表面の色調は淡黄緑色である。

89は、粘板岩を素材とする。前後主面の表面の大部分と基端を欠損する。他の扁平片刃石斧に比べて幅が

7.4cmとかなり広い。また、残存部分から推定して、それぞれの面は研磨によって平坦面をなしていたものと思われ、両側面はほぼ平行する。また、右側面部の一部には敲打痕と思われる痕跡が残る。片刃の形成角度は約45°で、刃部と前主面の間の稜はあまり明瞭ではない。表面の色調は暗灰色である。

90は、珪質層灰岩を素材とする。基端から約7.5cmの部分より側面部にかけて割れ、刃部と一方の側面部を欠損する。全面に研磨を行い、それぞれ平坦面をなす。厚さは1.9cmと他の扁平片刃石斧と比べてかなり厚く、大型の部類に入る。表面の色調は乳白色で、他の扁平片刃石斧の葉理が長軸に対して平行に入るのに対し、葉理は若干斜めに入る。

小　　結

扁平片刃石斧に最も多く使用されている石材は珪質層灰岩で、全9点中5点を占める。これは、柱状片刃石斧と同様の傾向で、両器種間における石材選択に共通性が認められる。また、出土位置については、89の大型の扁平片刃石斧のみが下層より出土している以外は、そのほとんどが中･上層出土である。形態的には、下條氏の分類によるＨＩ-2式に属するものが多く、また大型とされる幅4.5cm以上のものは89の石斧のみで、ほとんどが小型、あるいは中型のものである。また、破損についてであるが、破損しているものは珪質層灰岩に特徴的な葉理に沿って長軸方向に割れているが、完形に近いもの（83･85･86･87･88）も半分以上を占め、他の石器がほぼ全て破片で出土するのとは異なる様相を見せている。これら完形に近いものは刃も鋭く、また長さ等も十分なものもあり、まだ使用に十分耐えうると思われるものである。なぜこの状態で廃棄に至ったのかについては不明だが、他の遺跡の資料についても扁平片刃石斧は完形で出土するものが比較的多く、他の石斧とはそのライフサイクルが異なるようである。

（９）紡錘車（第35図、図版7）

紡錘車は3点出土しており、全点の図化を行った。使用されている石材は片岩、粘板岩ホルンフェルス、細粒砂岩の3種類である。

91は片岩を素材とする。側面部から中央の孔を通ってほぼ直線的に割れ、全体の約1/2が残存する。表面は側面部も含めて全面にわたって研磨を行う。横断面は長方形を呈する。孔は両側からの回転穿孔によって穿孔される。また、表面の色調は灰白色である。

92は直径5.0cm、孔径0.7cm、最大厚0.8cm、重さ35.7gで、粘板岩ホルンフェルスを素材とする。欠けている部分もあるが、ほぼ完形である。表面は側面部も含めて全面にわたって研磨を行う。横断面は孔付近が最大厚を持ち、側縁部にいくにしたがいやや薄くなる。孔は両側からの回転穿孔によって穿孔される。また、表面の色調は黒色で褐色の細かい斑点がみられる。

93は細粒砂岩を素材とする。側面部から中央の孔を通ってほぼ直線的に割れ、全体の約1/2が残存する。表面は側面部も含め全面にわたって研磨を行う。横断面は孔付近が最大厚を持ち、側縁部にいくにしたがいやや薄くなる。孔は両側からの回転穿孔によって穿孔される。また、表面の色調は黒灰色である。

小　　結

紡錘車に使用されている石材は3点とも異なり、石材の選択に共通性は見られない。そのうち、92の紡錘車の石材は石庖丁や石鎌、石剣の石材と共通する粘板岩ホルンフェルスであり、器種をこえた石材の共通性が認められる。また、出土位置の分かる91･92の2点はどちらも下層からの出土である。形態的な特徴としては、91と93の紡錘車がどちらも直径が5.7cm、孔径0.7cm、厚さ約0.5cmとほぼ全く同形であることがあげられる。紡錘車の製作にあたって何らかの基準があった可能性も考えられる。

（10）砥石（第36～37図、図版9）

砥石は14点出土しており、そのうちの10点について図化を行った。使用されている石材は、砂岩が10点と最も多く、他には珪質凝灰岩が2点、安山岩、アプライトがそれぞれ1点ずつある。砥石目の観察には村田裕一氏、および土屋みづほ氏の観察法（村田2002､土屋2004）を参照しながら、30倍の顕微鏡下で砥石目の観察を行い、JISで規格化されているサンドペーパーの粒子サイズと比較した[11)]。また砥石の使用痕については村田氏による分類（村田2002）に拠った。

210は、砂岩を素材とする。一方（実測図で上方）が欠損し、もともとは長軸方向にさらに長かったものと思われる。全体の横断面は三角形を呈し、それぞれの面（計3面）を砥面として使用する。砥面はそれぞれ長軸方向に中央部分がくぼむ形態をもち、横断面は浅いU字状を呈する。砥石目はサンドペーパーの粒子サイズと比較するとほぼ100番に相当し、荒砥に属するとともに、その大きさから置き砥であると考えられる。砥面のうち一面にはRA2に相当する使用痕[12)]が長軸方向に入るが、残りの2面には顕著な使用痕は見られない。また、表面の色調は全体的に黄褐色で、その中に赤褐色の縞状模様がみられる。

211は、珪質凝灰岩を素材とする。実測図で上方と下方の部分は欠損しており、元々は長軸方向にさらに長かったものと思われる。残存部分では一方は幅が狭く薄く、もう一方に向かうにつれ、幅が広がるとともに若干厚みも増す形態を呈する。また、欠損部分を除く計4面を砥面として使用し、横断面はより広い砥面をもつ表裏2面が、中央部分が若干くぼむ形態を呈する。砥石目はサンドペーパーの粒子サイズと比較するとほぼ1200番に相当し、仕上げ砥に属する。砥面はそれぞれ平滑で、顕著な使用痕等は見受けられない。また、表面の色調は緑灰色である。

212は、砂岩を素材とする。平面は長台形を呈し、計6面のうち5面を砥面として使用する。特に砥面のうち2面は長軸方向に中央部分がくぼみ、横断面は浅いU字状を呈する。砥石目はサンドペーパーの粒子サイズと比較するとほぼ180番に相当し、中砥に属するとともに、その大きさから置き砥であると考えられる。砥面はそれぞれ平滑で、顕著な使用痕等は見られない。また、表面の色調は全体的に黄褐色で一部黒色の部分もある。

213は、砂岩を素材とする。表裏2面を砥面として使用し、側面部は2面（実測図で左・下側）が欠損しており不明であるが、それ以外の側面部は砥面として使用しない。砥石目はサンドペーパーの粒子サイズと比較するとほぼ180番に相当し、中砥に属する。砥面のうちの1面には残存長約5.0cmのA1に相当する使用痕[13)]が長軸方向に入るが、もう1面の砥面には明瞭な使用痕は認められない。また、表面の色調は赤褐色である。

214は、安山岩を素材とする。平面は長方形を呈し、計6面のうち1面のみを砥面として使用する。表面の色調は明灰色である。磨石等の可能性もあるが、ここでは砥石として分類した。

215は、砂岩を素材とする砥石である。実測図で下側の部分は欠損し、残存部分の表面の約2.5×2cmの部分のみを砥面として使用する。また、全体の横断面は楕円形を呈する。砥石目はサンドペーパーの粒子サイズと比較するとほぼ180番に相当し、中砥に属する。砥面は平滑で、顕著な使用痕等は見られない。また、表面の

色調は赤褐色である。

216は、砂岩を素材とする。欠損した面以外の表裏面、側面2面の計4面を砥面として使用する。砥面のうち最も広い1面は長軸方向に中央部分が若干くぼみ、横断面は浅いU字状を呈する。砥石目はサンドペーパーの粒子サイズと比較するとほぼ240番に相当し、中砥に属する。砥面はそれぞれ平滑で、顕著な使用痕等は見られない。また、表面の色調は赤褐色である。

217は、珪質凝灰岩を素材とする。欠損した1面以外の計5面のうち表裏2面と側面部2面の計4面を砥面として使用する。全体の横断面は中央部が表裏両面から浅くくぼみ、凹レンズ状を呈する。砥石目はサンドペーパーの粒子サイズと比較するとほぼ1200番に相当し、仕上げ砥に属する。それぞれの砥面には顕著な使用痕等は見られない。また、表面の色調は緑灰色である。

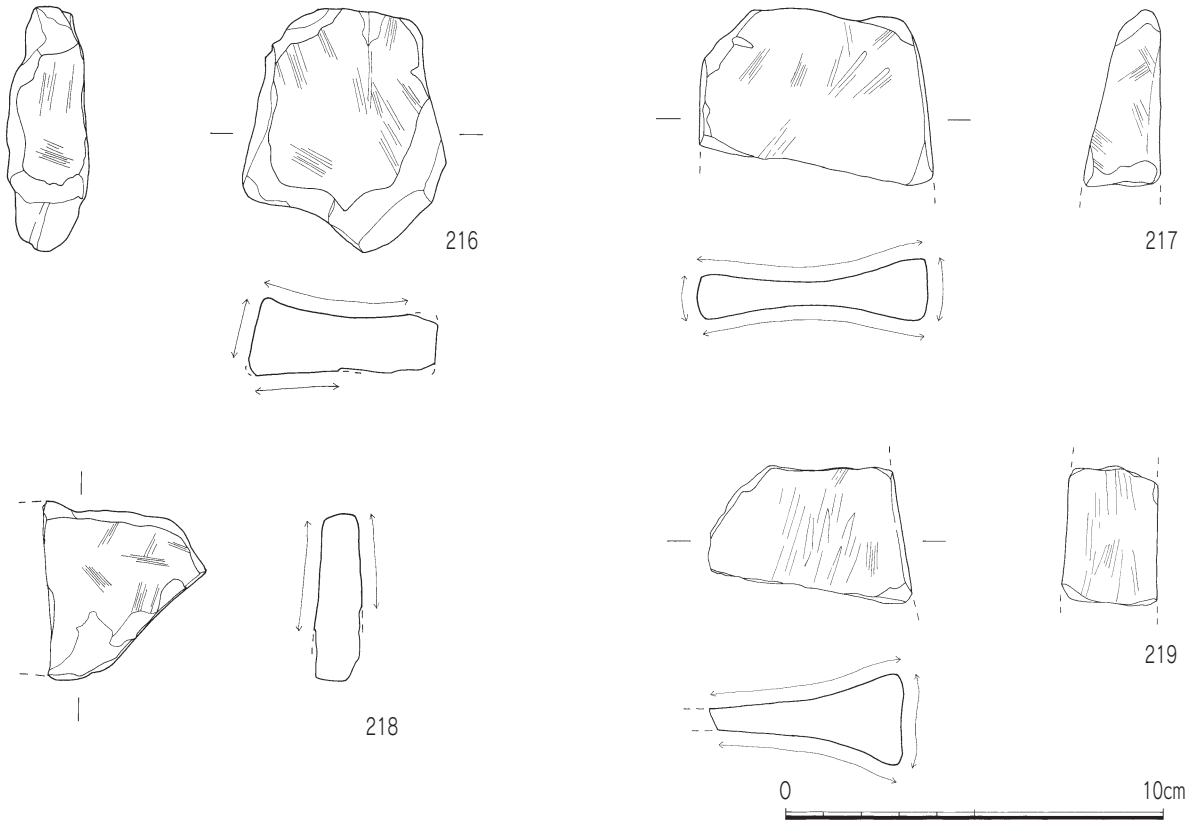
218は、砂岩を素材とする。最大厚が1.3cmと全体的に平らで、表裏2面を砥面として使用する。砥石目はサンドペーパーの粒子サイズと比較するとほぼ240番に相当し、中砥に属する。砥面はそれぞれ平滑で、顕著な使用痕等は見られない。また、表面の色調は赤褐色である。

219は、砂岩を素材とする。表裏面および、側面部の計3面を砥面として使用する。全体の横断面は側面部が最も厚く、中央部分は表裏両面からくぼみ凹レンズ状を呈する。砥石目はサンドペーパーの粒子サイズと比較するとほぼ240番に相当し、中砥に属する。表裏2面の砥面にはRA2に相当する使用痕が長軸方向に入るが、側面部には顕著な使用痕は認められない。また、表面の色調は黄褐色である。

小　結

砥石として使用されている石材は14点中10点を砂岩が占め、それらは荒砥あるいは中砥として使用される。また2点のみの出土であるが、珪質凝灰岩製砥石はどちらも砥石目の細かい仕上げ砥である。出土位置については、3点が下層から、10点が中・上層からの出土である（不明1点）。砥石の大きさは、置き砥と考えられる大ぶりの砥石から手持ち砥と考えられる小さめの砥石まで多様である。形態的にはほぼ全てが不定形であるが、211･217･219などは側面と側面が互いに稜をなして接していることから定形砥石（村田2002）としてよいものと考えられる。また、砥面は使用のために磨り減り、断面が浅いU字状になっているものが多い。完形で出土したのは214の砥石1点のみで、他は全て欠損した状態で出土した。

第36図　SD0001環壕出土砥石①（1/2）



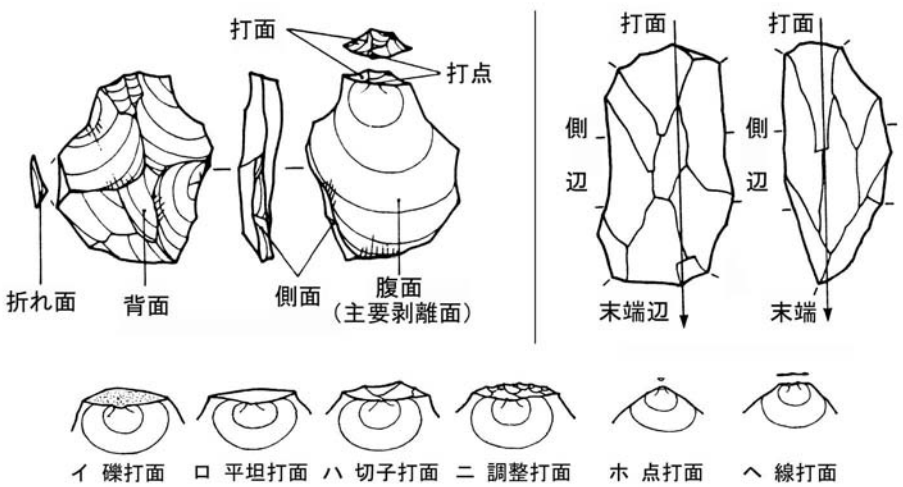
第37図　SD0001環壕出土砥石②（1/2）

第２節　剥片石器・礫石器

（１）はじめに

打製石器類には、石鏃（10点）、スクレイパー（25点）、二次加工のある剥片（32点）、微細剥離痕を有する剥片（47点）、楔形石器（1点）、石核（32点）、剥片（97点）がある。また、礫石器には、磨石・敲石（11点）と石皿（2点）がある。砥石については、大陸系磨製石器との関係を考慮して本章第1節で報告した。

剥片石器の記載方法　石鏃以外の剥片石器については、打面を上に向けた状態での背面を左側、腹面（主要剥離面）を右側に配置した状態を基準とし、打面、左側辺、右側辺、末端辺などとして説明する[14]（第38図）。ただし、剥片石器実測の際に明確なレイアウトの基準を設けなかったために、上記の基準を満たしていないものがある。これらについては、実測図左側を表面、同右側を裏面とし、「表面右側辺」、「裏面下辺」などとして説明する。ただし、その場合でも、打面の位置が分かり、背面と腹面を区別できるものについては、適宜括弧書きで補足する。例えば、背面を右側に配置したものは「裏面（背面）右側辺」や「表面（腹面）左側辺」などとなる。また、打面を下に向けて配置したものは「表面下辺（打面）」や「表面右側辺(背面左側辺)」などとなる。



第38図　剥片を構成する面と辺及び打面形状（竹岡2003第3・6図を改変して引用）

（２）打製石鏃（第28図、図版3）

打製石鏃は10点出土している。9点がサヌカイト[15]製、1点が黒曜石製（37）である。大きく凸基式と凹基式に分けられる。

28は凸基無茎式で平面形は柳葉形である。器体下半は周縁のみに浅い調整剥離を施しており、表裏両面ともに素材面を残している。先端部を欠損している。身部横断面形は凸レンズ形である。

29は凸基有茎式。背面（表面）には、身部中央部までおよぶ深い調整剥離を施しており、素材面を残していない。腹面（裏面）右半には深い調整剥離を施しているが、左半は浅い調整剥離を施して整形しており、素材面を残している。身部横断面形は凸レンズ形、茎部断面形は菱形である。

30は凸基無茎式で平面形は柳葉形である。器体上半は表裏両面ともに身部中央部までおよぶ深い調整剥離を施して整形しており、先端部は細く尖るように作り出している。下半は腹面（裏面）左半に素材面（主要剥離面）を残している。また、背面（表面）には器体中央の稜線上に礫面を残している。身部横断面形は厚みのあ

る凸レンズ形である。

31は凸基無茎式で平面形は柳葉形である。表裏両面ともに身部中央部までおよぶ大きく深い調整剥離を施した後に、部分的に小さく浅い調整剥離を施して仕上げており、素材面を残していない。先端部を欠損している。基端面は礫面である。横断面形は凸レンズ形である。

32は凹基式で基部の抉りは浅い。表裏両面ともに身部中央部までおよぶ深い調整剥離を施した後に、小さく浅い調整剥離を施して整形しており、素材面を残していない。左右両側辺ともやや内湾する。脚端部を尖らせているが、一方の脚部先端はわずかに欠けている。横断面形は凸レンズ形である。

33は凹基式で基部の抉りは比較的深い。表裏両面ともに大きく深い調整剥離を施しており、裏面左半中央部付近に素材面を残している。左右両側辺は鋸歯状を呈し、脚端部は丸くおさめている。先端部を欠損している。横断面形は厚みのある凸レンズ形である。

34は凹基式で基部の抉りは浅い。表裏両面とも周縁のみに浅い調整剥離を施しており、特に裏面には大きく素材面を残している。左右両側辺はほぼ直線形を呈するが、先端部は細く尖るように作り出している。脚端部を尖らせている。横断面形は扁平な六角形である。

35は凹基式で基部の抉りは浅い。表裏両面とも周縁のみに調整剥離を施しており、素材面を残している。調整剥離は粗く、全体的に加工度が低いため未製品の可能性がある。脚端部は丸くおさめている。横断面形は扁平な六角形である。サヌカイト製だが石材の質はやや粗い。

36は凹基式で基部の抉りは比較的深い。表裏両面とも周縁のみに浅い調整剥離を施して、やや左右非対称となる形状に仕上げており、素材面を大きく残している。左右両側辺はわずかに外湾し、脚端部を尖らせている。横断面形は薄手の凸レンズ形である。

37は凹基式で基部の抉りは浅い。表裏両面ともに身部中央部までおよぶ大きく深い調整剥離を施した後に、小さく浅い調整剥離を施して整形している。裏面の中央部やや下方に素材面を残している。一方の縁辺（表面左側辺）にはノッチ状に抉れた箇所があり、平面形の左右のバランスが取れていないため、未製品あるいは失敗品の可能性もある。また、先端部と両脚端部を欠損するが、一方の脚端部（裏面右脚端部）は折れた後に再加工を施している。その結果、脚端部は尖らずに直線状を呈している。横断面形は厚手の凸レンズ形である。

小　　結

凸基式石鏃、凹基式石鏃ともに、薄手の剥片を素材としたものは、器体中央部の厚みを減らす必要がないため、周縁のみに浅い調整剥離を施して仕上げており、表裏両面に素材面を大きく残している（28・34～36）。一方、厚手の剥片を素材としたものは、器体中央部の厚みを減らして器体のバランスを取るために、身部中央部までおよぶ大きく深い調整剥離を施しており、素材面をほとんど残していない（31～33・37）。ただし、29・30のように、表面には身部中央部までおよぶ深い調整剥離を施して素材面を残さないが、裏面には大きく素材面を残しているものもある。これは調整剥離を施さずとも横断面形のバランスが取れていたためであるが、特に29の場合は、素材剥片の鋭い縁辺を意図的に刃部に取り込んだ可能性も考えられる。このように凸基式石鏃、凹基式石鏃ともに、基本的には素材剥片の形状を生かして製作された状況を示している。

（3）スクレイパー（第39～43図、巻頭図版14、図版8、11）

剥片の縁辺に、その長さの1/2以上におよぶ連続的な二次加工を施して刃部[16)]を作り出した剥片石器をスクレイパーとした。25点出土しており、23点を図化した（第39図106～108、第40図109・110、第41図112～118、第42図119～123、第43図124～127・129・130）。123・129・130が黒曜石製の他はサヌカイト製である。

106は比較的大型の横長剥片（礫打面）を素材とする。末端辺（下辺）に背腹両面から調整剥離を施しているが、素材剥片の縁辺の形状を大きく変えておらず、刃部は波状（W字状）を呈する。打面（上辺）にも腹面側からノッチ状の二次加工を施しており、整形剥離と考えられる。

107は長幅比1対1程度の剥片（礫打面）を素材とする。表面下辺（背面左側辺～末端）に背腹両面から入念に調整剥離を施して、外湾する弧状の刃部を作り出している。概ね腹面から背面に向かって調整剥離を施した後に、背面から腹面に向かって調整剥離を施すという手順である。表面上辺（背面右側辺）にも背腹両面から二次加工を施しており、小さく浅い剥離面が連続している。断面形状の鋭さからみて刃部調整の可能性が高いが、整形加工あるいは刃潰し加工の可能性もある。表面左側辺（打面）にも表裏に二次加工を施しているが、打瘤（バルブ）の除去など形状を整えるための整形剥離であるとともに、刃潰しの意図もあると考えられる。

108は長幅比1対1程度の剥片（礫打面）を素材とする。表面（腹面）右側辺から下辺（末端辺）にかけて、背腹両面から調整剥離を施して刃部を作り出している。また表面左側辺には微細剥離痕が見られ、使用痕の可能性があり、打面を除くほぼ全周を刃部として使用したと考えられる。

109は剥片素材の石核（主に横長剥片を剥離した残核）をスクレイパーに転用したものである。表面右側辺に裏面側から調整剥離を施して、やや鋸歯状となる刃部を作り出している。

110は横長剥片（礫打面）を素材とする。背面（表面）左側面も礫面である。腹面（裏面）末端辺右半に背面側から調整剥離を施して刃部を作り出している。

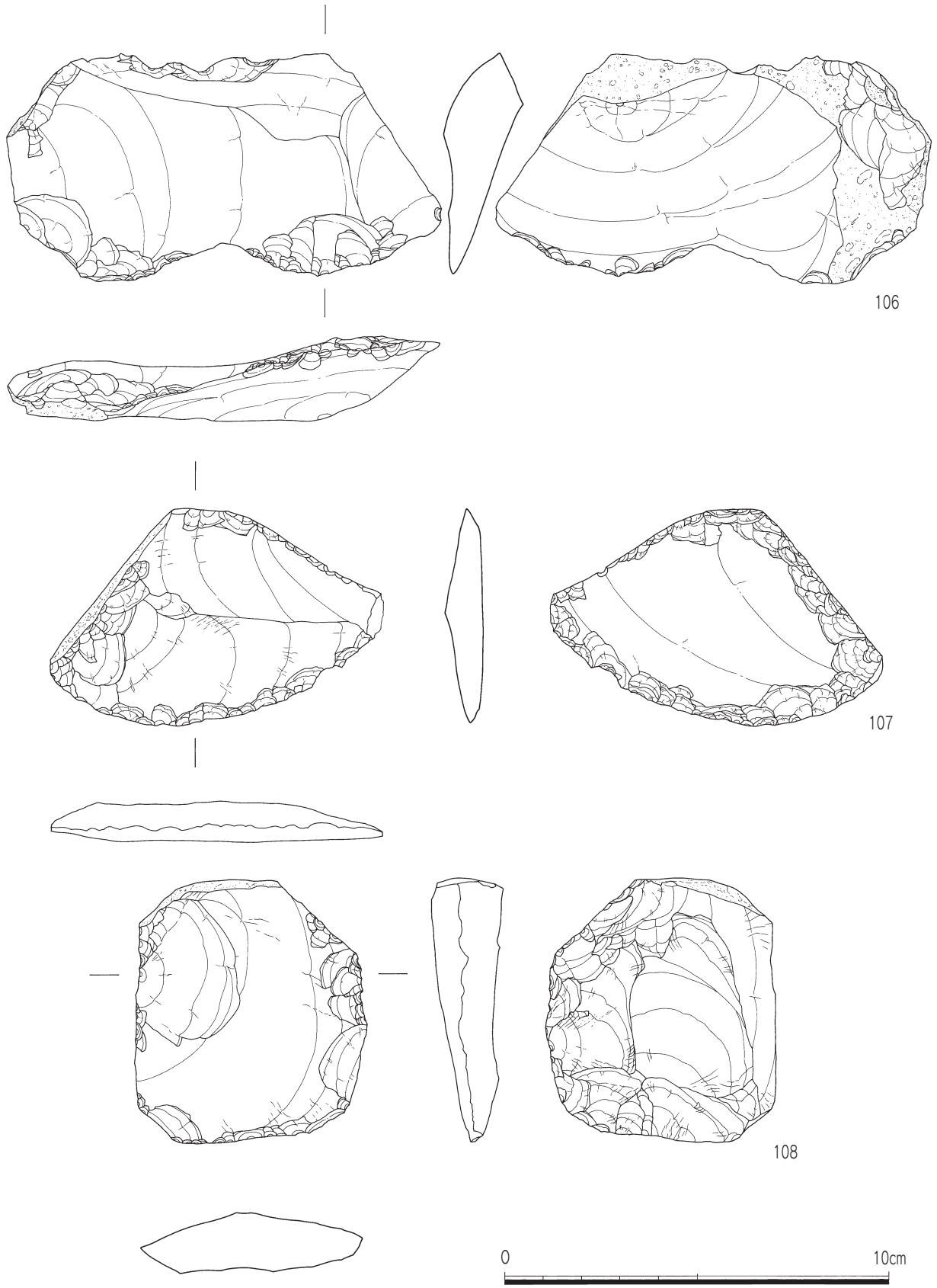
112は横長剥片（礫打面）を素材とする。打面を除くほぼ全周に二次加工を施している。末端辺に背腹両面から施された二次加工は刃部調整と見られるが、それに接する背面（表面）左側辺下半と右側辺に施された二次加工はやや粗く、整形剥離と考えられる。また、腹面（裏面）右側辺上半に潰れたような微小な剥離面が連続しており、背面側から刃潰し加工を施した可能性がある。

113は横長剥片（礫打面。打面を下に向けてレイアウトしている）を素材とする。上辺（末端辺）は折れ面であり、左右両側辺に二次加工を施している。表面右側辺（背面左側辺）の二次加工は主に腹面側から施されたやや粗いものであり、整形剥離あるいは刃潰し加工の可能性がある。表面左側辺（背面右側辺）には背腹両面から比較的入念な調整剥離が施されており、やや内湾する刃部が作り出されている。

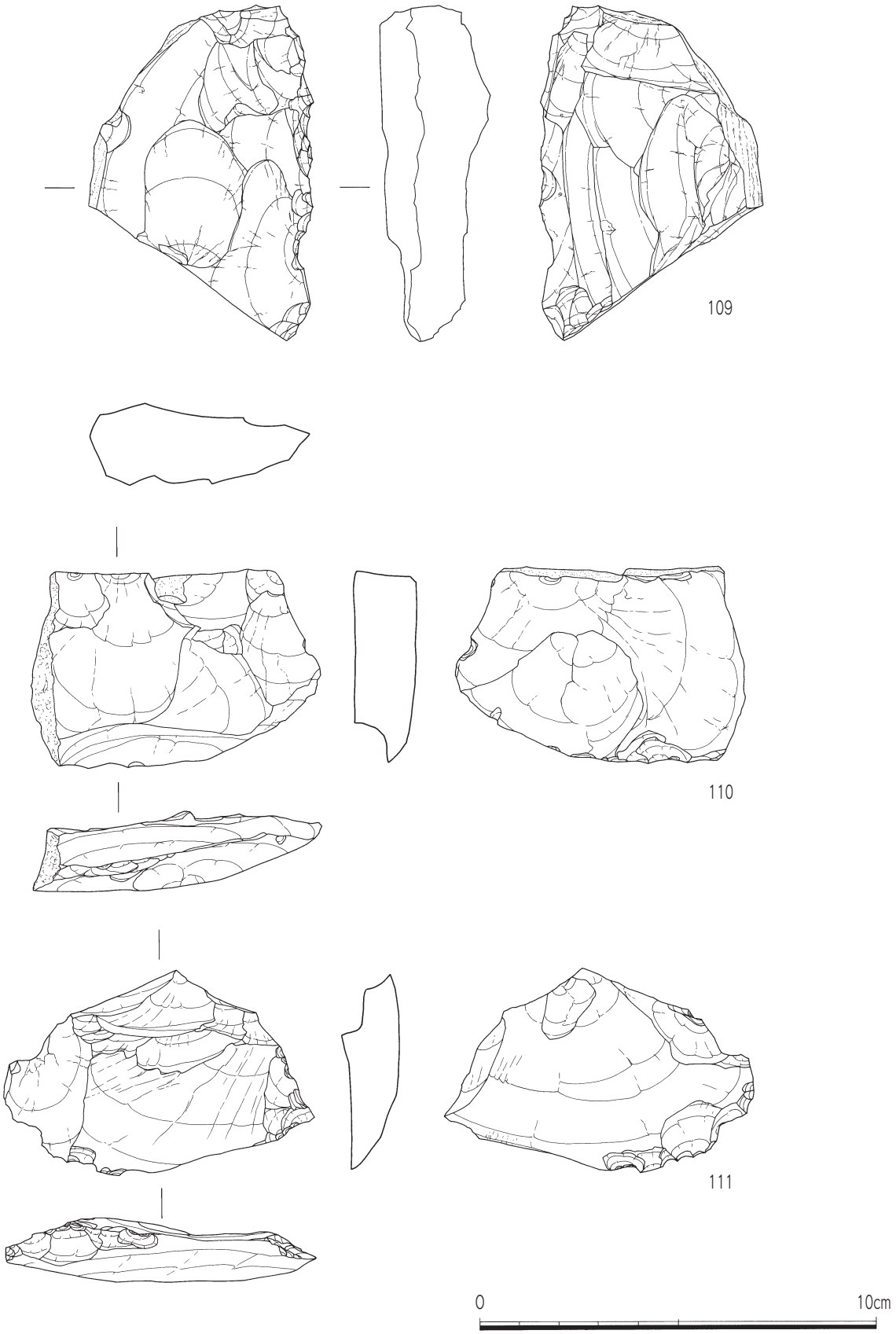
114は素材剥片の形状が不明である。表面右側辺に主に裏面側から調整剥離を施して鋸歯状の刃部を作り出している。調整剥離はやや粗く、ノッチ状を呈する箇所もある。裏面左半に見られる礫面（点描箇所）は節理面の可能性がある。

115は厚みのある縦長剥片（礫打面）を素材とする。折れ面となっている末端辺（下辺）に背面（表面）側から急角度の調整剥離を施して刃部を作り出している。また、意図は不明であるが、背面右側辺にも部分的に二次加工を施している。

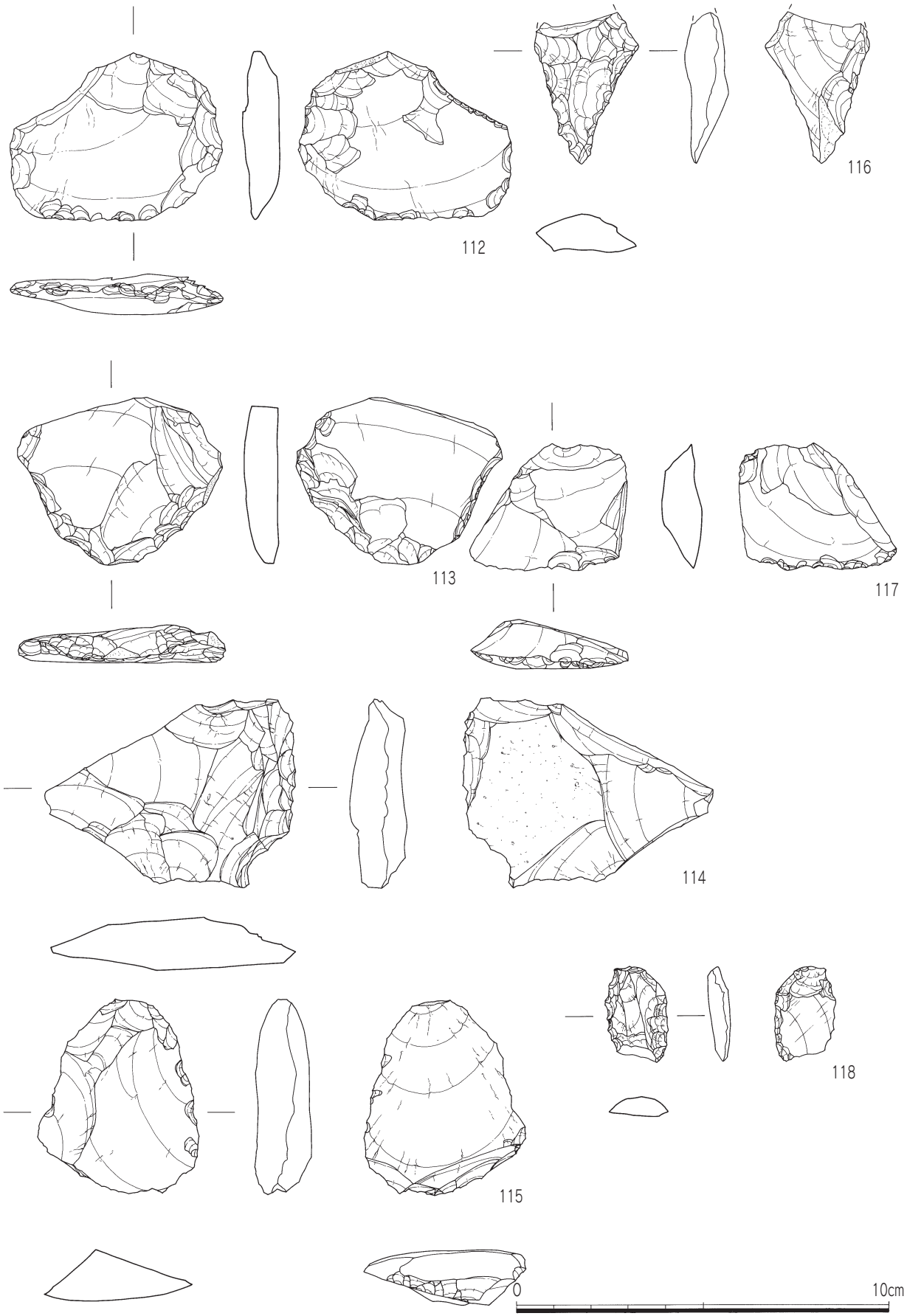
116は素材剥片の形状が不明である（横長剥片か）。三辺に二次加工を施しているが、上辺は折れている。左右両側辺を刃部と考えることもできるが、表面左側辺の二次加工はやや粗く、若干鋸歯状を呈する。また、下端は錐状に尖っているが、錐として使用した状況を示すような痕跡は見られない。形態が尖頭状を呈すること



第39図　SD0001環壕出土スクレイパー①（2/3）



第40図　SD0001環壕出土スクレイパー②・二次加工のある剥片（2/3）



第41図　SD0001環壕出土スクレイパー③（2/3）

や素材の大きさなどから見て、石鏃未製品の可能性もある。

117は横長剥片を素材とする。末端辺（下辺）に調整剥離を施して刃部を作り出している。背面（表面）側は末端辺右半に腹面側から調整剥離を施しており、腹面（裏面）側は末端辺全体に背面側から小さく浅い調整剥離を施している。

118は小型の横長剥片を素材としたものか。表面左右両側辺を中心として、ほぼ全周に二次加工を施している。表面右側辺には背腹両面から二次加工を施しているが、他は腹面側からのみ施している。二次加工を施した部位や素材の大きさからみて、石鏃未製品の可能性もある。

119は縦長剥片（礫打面）を素材とする。背面（表面）右側辺下半と末端辺（下辺）の2/3程度に、背腹両面から調整剥離を施して刃部を作り出しており、刃部端を錐状に尖らせている。また、背面右側辺上部には背腹両面から、左側辺上半には腹面側から小さく浅い調整剥離を施していることから、両側辺も刃部として利用された可能性がある。

120は横長剥片を素材とする。表面右側辺（背面打面側の縁辺）に、上半は背腹両面から、下半は腹面（裏面）側から調整剥離を施してやや外湾する刃部を作り出している。裏面左側辺（腹面打面側の縁辺）上半に施した粗い二次加工は、バルブの除去など整形剥離の可能性がある。

121は横長剥片を素材としたものか。表面下辺に背腹両面から調整剥離を施して刃部を作り出している。左・右・上辺は折れ面である。

122は表面左側辺から上辺にかけての縁辺と裏面下辺とに、いずれも主に片面側から比較的粗い調整剥離を施して刃部を作り出している。裏面上辺に剪断面が見られ、対向する縁辺の一部に潰れ（図中矢印で示した箇所）が認められることから、楔形石器（あるいは両極打法を用いた石核）をスクレイパーに転用したものと考えられる。

123は縦長剥片（礫打面）を素材とする。背面（表面）右半に大きく礫面を残している。腹面（裏面）右側辺の上部と下部に背面側から調整剥離を施しており、同辺中部には微細剥離痕が見られるため、刃部作出のための調整剥離は連続しないものの、腹面右側辺全体を刃部とみなすことができる。また、背面右側辺の上半には微細剥離痕が見られ、腹面左側辺下半には背面側から調整剥離を施していることから腹面左側辺全体を刃部とみなすことができる。末端部を欠損している。

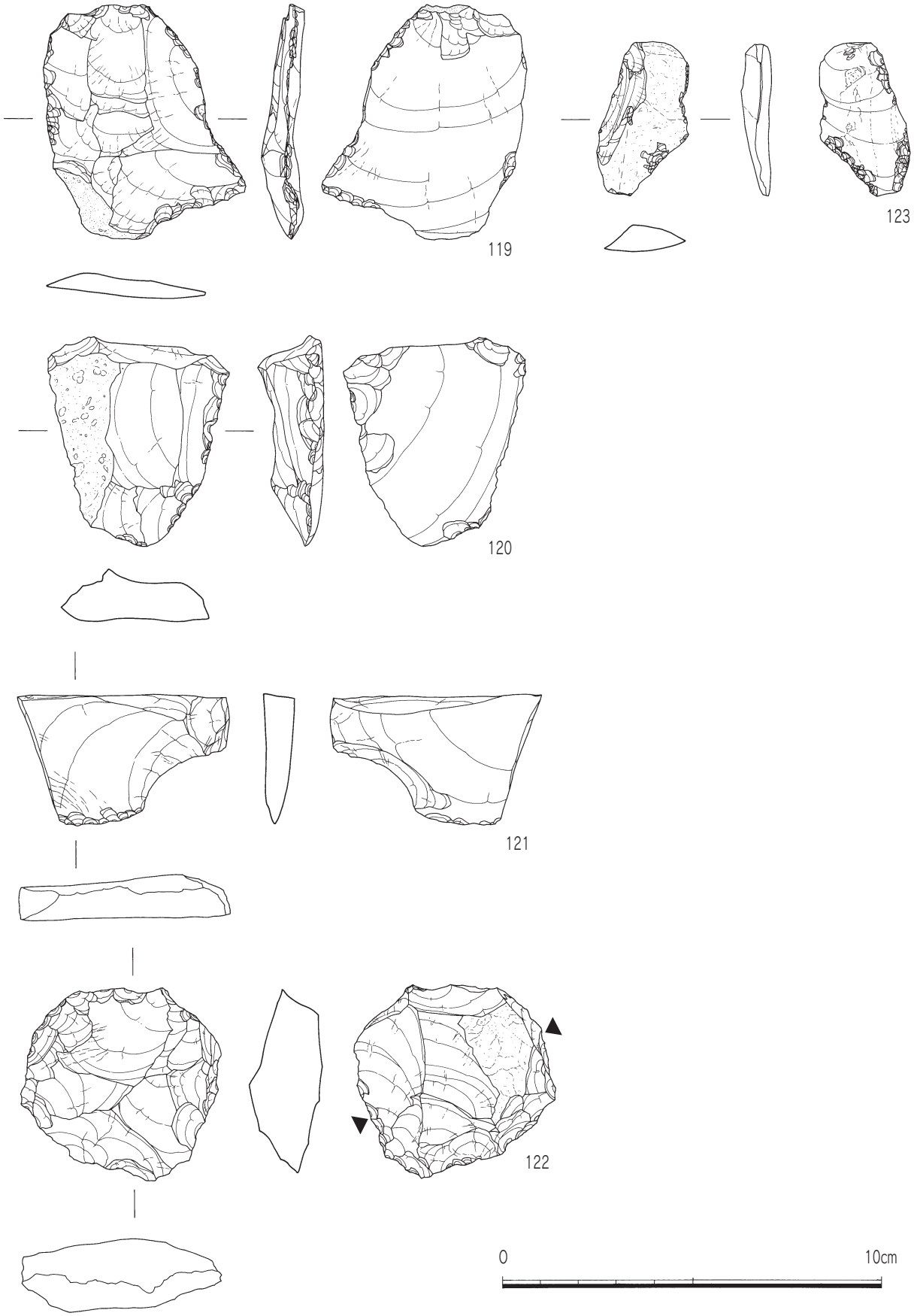
124は横長剥片を素材とする。末端辺（表面下辺）全体に腹面（裏面）側から二次加工を施している。ただし、刃部とみなされる鋭い縁辺は末端辺左半に限られるため、末端辺右半（折れ面）に施された急角度の二次加工は整形剥離あるいは刃潰し加工と考えられる。

125は横長剥片を素材とする。表面（背面）右側辺（末端辺)に、主に裏面（腹面)側から調整剥離を施して刃部を作り出している。表面左側辺（打面側の縁辺）に腹面側から施された比較的粗い二次加工は、打瘤（バルブ）を除去して形状を整えるための整形剥離と見られる。

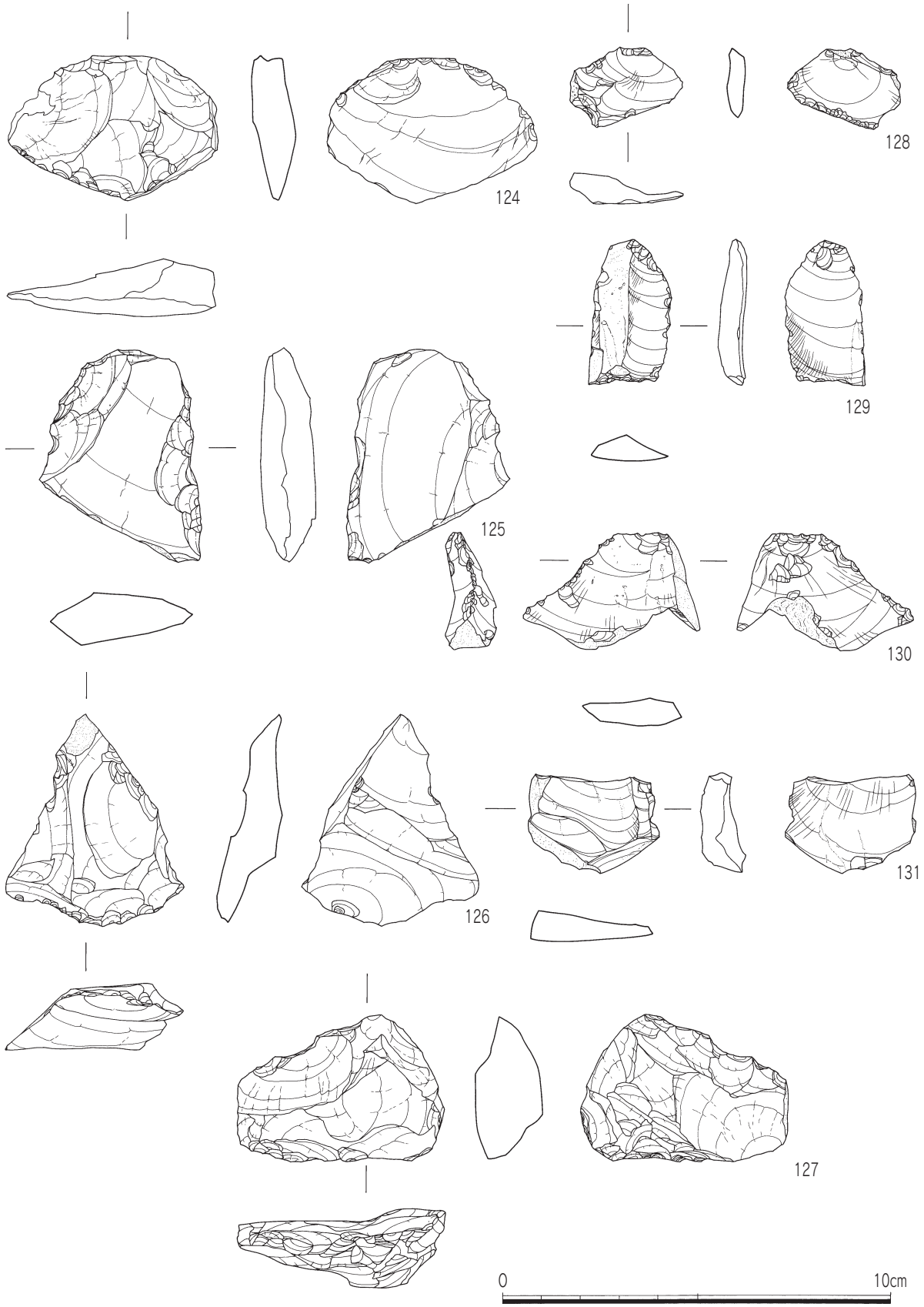
126は不定形剥片を素材とする。表面下辺に裏面側から調整剥離を施して外湾する鋸歯状の刃部を作り出している。表面左右両側辺上部にも部分的に二次加工を施しているが、意図は不明である。

127は両面加工石器状の石核（残核）をスクレイパーに転用したと考えられるものである。裏面上・下辺に、主に表面側から急角度の調整剥離を施して刃部を作り出している。

129は縦長剥片（礫打面）を素材とする。背面（表面）左半に大きく礫面を残している。末端辺（下辺）全体に腹面（裏面）側から急角度の調整剥離を施して、やや内湾する刃部を作り出している。背面右側辺には微細剥離痕が見られ、使用痕の可能性がある。



第42図　SD0001環壕出土スクレイパー④



第43図　SD0001環壕出土スクレイパー⑤・微細剥離痕を有する剥片

130は厚みのある横長剥片（礫打面）を素材とする。背面（表面）右側面および下面は礫面である。腹面（裏面）右側辺全体に背腹両面から小さく浅い調整剥離を施して刃部を作り出している。

小　　結

今回スクレイパーとして報告した剥片石器は、刃部の形状や角度、刃部が作り出された位置、二次加工の方法や種類などの属性を検討することで細分が可能と考えられる。本報告では刃角の計測など詳細な分析は行っていないため、ここでは分析しえた項目について述べる。

①素材剥片の形状　サヌカイト製は、横長剥片11点、長幅比1対1の剥片2点、縦長剥片2点、石核（残核）を転用したもの2点、両極剥片（楔形石器転用）1点、不明4点（うち横長剥片の可能性のあるもの3点）である。黒曜石製は縦長剥片2点、横長剥片1点である。スクレイパーの素材剥片としては、主にサヌカイト製の横長剥片を用いているようであるが、定形的な剥片にこだわることなく、手頃な大きさ・形状の剥片を素材として利用したものと考えられる。後述するように、剥片剥離技術に定形的な様相を認めにくいこととも一致する。

②刃部の形状　刃部と認定した縁辺（箇所）の延べ数は、不明確なものも含めて36縁辺（箇所）ある。刃部の形状は直線状のもの（21辺）が多いが、外湾するもの（10辺）、内湾するもの（3辺）、波状を呈するもの（2辺）などが見られ、その中には鋸歯状を呈するものがあるなど多様性に富んでいる。刃部の数は1個体に1箇所設けたものが多いが、複数の刃部を併せ持つものも見られる。基本的には、ある程度の長さの鋭い縁辺に調整剥離を施して刃部とするか、あるいは調整剥離を施さずにそのまま刃部として利用すると考えられるため、横長剥片の場合は主に末端辺を、縦長剥片の場合は主に左右の側辺を刃部として利用したものと考えられる。ただし、今回報告したスクレイパーの場合、素材とした剥片が比較的不定形で規格性に乏しいため、刃部として利用可能な鋭い辺を優先的に利用する形がとられたものと考えられる。サヌカイト製にせよ黒曜石製にせよ総じて加工度は低く、素材の形状を大きく改変していないため、結果として多様な形状のスクレイパーが製作された状況が窺える。

③刃部調整　刃部調整は、背腹両面から施したもの（17辺）と、背面あるいは腹面のどちらか片面側からのみ施したもの（17辺）とがある。片面側からのみ調整剥離を施したもののうち、調整剥離の方向が分かるものには、腹面から背面に向かって調整剥離を施したものが4辺、背面から腹面に向かって調整剥離を施したものが6辺あり、特に規則性はないようである。また、108や129のように調整剥離を施して作り出した刃部と、剥片の鋭い縁辺をそのまま利用した刃部を併せ持つものもある。

④使用石材　サヌカイト製が23点と多く、黒曜石製は3点である。使用石材にサヌカイトが多く用いられた理由としては、(1) 本遺跡には大型の黒曜石石材がほとんど持ち込まれていないようであり、比較的大型で長い刃部を備えたスクレイパーの素材としうる黒曜石製剥片を得にくかったこと、(2) 黒曜石に比べて鋭さに欠けるが粘りがあるというサヌカイトの石質がスクレイパーに適していたことなどが考えられる。

⑤素材剥片の打面形状　サヌカイト製は礫打面9点、平坦打面1点、打面部側の折れ（あるいは切断）などによって打面形状が不明なもの13点であり、黒曜石製は礫打面3点である。

（4）二次加工のある剥片（RF）

ここでいう二次加工のある剥片（retouched flake）とは、スクレイパーのように縁辺の1/2以上に及ぶ連続的な二次加工を施して長い刃部を作り出したものではなく、縁辺に部分的な二次加工を施したものである。31点出土している。黒曜石製17点、サヌカイト製14点。2点図化した（第40図111・第43図131）。

第40図111は横長剥片を素材とする。背面末端辺（表面下辺）右端および背面右側辺下部に腹面（裏面）側から調整剥離を施して錐状の刃部を作り出している。また、腹面末端辺右半には主に背面側から比較的粗い二次加工を施している。サヌカイト製。

第43図131は上半が折れており、素材の形状は不明であるが、背面（表面）右側辺に腹面（裏面）側から粗い調整剥離を施して抉り部（ノッチ）を作り出している。黒曜石製。

小　　結

二次加工のある剥片には、(a) スクレイパーや微細剥離痕を有する剥片とともに刃器（切削具）として使用されたものの他に、(b) 140（未実測）のように石鏃未製品と考えられるものもある。折れ面を持つものが多いことから、他器種の破損品あるいは失敗品が含まれている可能性もある。また、(c) 第43図131のように抉り部を作り出したものもあり、抉入石器（ノッチ）として分類し得るものも含んでいる。抉り部は一箇所の場合もあれば、複数箇所に施す場合もある。さらに、(d) 微細剥離痕を有する縁辺と二次加工を施した縁辺とが複合するものもある（データベース中でＲ・ＭＦとした8点）。

このように、今回分類した「二次加工のある剥片」は一器種として限定できない様々な内容を含んでいるため、今後再分析・細分類を行う必要がある。

①素材剥片の形状　黒曜石製は縦長剥片6点（35%）、横長剥片8点（47%）、長幅比1対1の剥片2点（12%）、不明1点（5%）である。サヌカイト製は縦長剥片2点（14%）、横長剥片11点（79%）、不明1点（7%）である。

②素材剥片の打面形状　黒曜石製は礫打面6点（35%）、平坦打面3点（18%）、不明8点（47%）である。サヌカイト製は礫打面5点（36%）、平坦打面1点（7%）、切子打面1点（7%）、不明7点（50%）であり、折れなどによって、打面形状が不明なものが多い。

（5）微細剥離痕を有する剥片（MF）

剥片の縁辺に微細剥離痕（microflaking scars）が見られるものである。47点あり、黒曜石製が31点、サヌカイト製が16点である。上述した「二次加工のある剥片」の（d）も微細剥離痕を有する剥片に含めることもできるが、今回は二次加工の有無で区別した。第43図128は横長剥片（礫打面）の腹面末端辺（裏面下辺）全体に微細な剥離痕が連続して認められるものである。黒曜石製。

小　　結

本器種は主に黒曜石製剥片の鋭利な縁辺を利用した石器といえる。こうした微細剥離痕は、剥片の鋭利な縁辺に調整剥離を施すことなく使用した際に生じた刃こぼれ（使用痕）の可能性が考えられる。しかし、剥片剥離の際に偶発的に生じた微細剥離痕や、土中に埋没・堆積する過程で生じた微細剥離痕などを含んでいる可能性もある。現状では微細剥離痕の認定は肉眼観察にとどまっており、微細剥離痕が形成された部位や形状、寸法なども含めた詳細な検討が必要である[17)]。

①素材剥片の形状　黒曜石製は縦長剥片24点（77%）、横長剥片5点（16%）、長幅比1対1の剥片2点（7%）である。サヌカイト製は縦長剥片4点（25%）、横長剥片8点（50%）、長幅比1対1の剥片4点（25%）である。

②素材剥片の打面形状　黒曜石製は礫打面27点（87%）、点打面2点（6%）、平坦打面1点（2%）、不明1点（3%）である。サヌカイト製は礫打面6点（38%）、平坦打面1点（6%）、線打面2点（12%）、不明7点（43%）

である。

（6）楔形石器

①縁辺に潰れ状の剥離（階段状剥離）、②剪断面、③両極剥離が見られる剥片石器であるが、石核の可能性もある。スクレイパーの項で述べた第42図122と209（未実測）の2点がある（データベースでは第42図122をスクレイパーとして計上）。209は一辺に潰れたような細かい階段状剥離が見られ、両側には剪断面が形成されている。一方の縁辺には粗い調整剥離が施されており、122と同様にスクレイパーとしても使用された可能性がある。

（7）石核（図版11）

32点出土しているが、石核かどうか判断に迷うものもある。黒曜石製18点、サヌカイト製14点。肉眼観察であるが、黒曜石の多くは伊万里市腰岳産、サヌカイトは多久・老松山産と考えている。黒曜石には白色の斑晶を殆ど含まないものと、多く含むものとがある。データベース中で原石としたものは小型の黒曜石礫であり、吉野ヶ里集落に石器石材として持ち込まれたが、剥片剥離を行うには小さすぎると判断されたためにそのまま廃棄されたものであろう。サヌカイトは礫面の形状や風化の度合い、ガラス質の強弱などによって数種類に分けられる。

黒曜石製石核　推定される剥片剥離技術は以下のとおりであるが、残核や剥片の観察から導き出したものであり、今後接合作業などを進めて改めて剥片剥離技術を復元する必要がある[18)]。

・残核の寸法や側面が礫面に覆われた剥片の寸法から見て、素材には一辺が5～6㎝程度の小型の角礫や亜角礫が用いられたと考えられる。

・石核調整や打面調整は行っておらず、打面は基本的に礫面を利用している。剥離面打面（無調整）も礫打面に比べて少ないが見られる。

・残核に残された剥離面を見る限り、作業面は固定的であるが、打面は浮動的である。すなわち作業面の周囲を巡るように打面（打点）を移動させながら剥片剥離を進めた状況を呈するものが多く、寸詰まりの縦長剥片や横長剥片が剥離されている。比較的整った角柱状の礫を素材とした場合には、90°あるいは180°の打面転位を行って剥片剥離を進め、不定形な礫の場合には多方向から求心状に剥片剥離を進めたものとみられる。ただし、素材とした礫の形状にかかわらず、剥片剥離作業が進行するにつれて、剥離される剥片は小型化するとともに不定形なものとなる。

・剥片剥離がある程度進んだ段階以降も打面調整は行われず、剥離に適した平坦な礫面を優先的に打面として選択する形で剥片剥離作業を進めている。剥片剥離作業の進め方、ひいては石核（残核）や剥離される剥片の形状は、素材とした礫の形状に左右されたといえる。ただし、同一打面で連続的に剥離された状況を示す縦長剥片があることから、比較的整った角柱状の礫を素材とした場合には、剥片剥離の初期段階には打面を固定して縦長剥片の剥離作業を進め、作業が進行して初めに設定した打面での剥離作業が困難になると、作業面を固定したまま打面を転位したものと考えられる。また、剥離面打面の剥片も少数見られることから、頻度は少ないものの作業面と打面を交替させて剥片を剥離することもあったようである。

サヌカイト製石核　黒曜石製石核と同じく接合作業を行っていないため、今後の再検討が必要であるが、次のような特徴が見られる。

・比較的小型（大きいものは拳大程度）で板状を呈する剥片素材の石核（残核）が多く、石核周囲の平坦な礫

面、折れ面、先行する剥離面を打面に利用し、石核の表・裏面（背面・主要剥離面）を作業面とする。そして、石理に沿う形で主に不定形横長の剥片を剥離している。打面は浮動的で作業面の周囲を巡るように多方向から剥片剥離を進めるものが多い[19)]。

・打面と作業面を交替させながら剥片剥離を進めた結果、残核形状が厚手の両面加工石器状を呈するものもある。

・他に縦長剥片を連続的に剥離した石核や、両極打法を用いて剥片剥離を行った可能性がある石核（252。未実測）がそれぞれ1点ずつある。

黒曜石に比べて、より無作為（ランダム）な剥片剥離が行われたという印象を受ける。

（8）剥片

97点出土している。黒曜石製剥片74点、サヌカイト製剥片23点である。

①剥片形状（表7）　黒曜石製剥片は縦長剥片46点（62%）、横長剥片23点（31%）、長幅比1対1の剥片3点（4%）、不明2点（3%）である。縦長剥片が高比率を占めるが、長幅比が1対1に近い寸詰まりのものが多い。また長さ、幅ともに5cm以下におさまる小型のものが多いことも特徴である。

サヌカイト製剥片は横長剥片17点（74%）、縦長剥片4点（17%）、長幅比1対1の剥片1点（4%）、不明1点（4%）となる。横長剥片が高比率を占め、黒曜石製剥片に比べ大型のものが多い傾向がみられる。

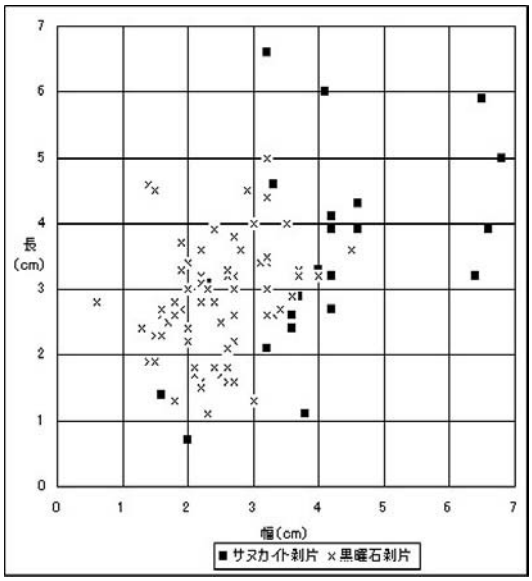


表7　出土剥片の長幅比

②打面形状　黒曜石製剥片は礫打面49点（66%）、平坦打面6点（8%）、切子打面3点（4%）、線打面2点（3%）、点打面2点（3%）、不明12点（16%）である。サヌカイト製剥片は礫打面8点（33%）、平坦打面5点（21%）、切子打面1点（4%）、線打面1点（4%）、点打面1点（4%）、不明8点（33%）である。

石核の項でも述べたが、黒曜石製剥片の打面形状は礫打面（風化した自然の剥離面を含む）が多く、打面調整は基本的に行っていないようである。また、上下左右のいずれかに礫面を残す剥片が多く、大きくても一辺が6cm程度の礫を素材として剥片剥離を進めた状況が窺える。比較的寸詰まりではあるが縦長の剥片を指向して剥片剥離を行ったものと考えられる。サヌカイト製剥片は横長剥片が多いが、規格性に乏しい。また、剥離の際にうまく力が抜けなかったため（別の技術的側面あるいは石質の影響などがあるのかもしれない）か、階段状剥離を生じたものや、折れ面を持つ剥片も多い。また、こうした剥片は打瘤（バルブ）の発達が弱い傾向がある。

（9）磨石・敲石（第35図94・95・図版8）

円礫・楕円礫を素材とし、磨り面や敲打痕が認められるものを磨石・敲石とした。磨り面、敲打痕ともに認められる複合的なものもある。また、砥石との区別が困難なものもある。11点出土しており、2点を図化した。

出土した磨石類はいずれも磨り面がかなり磨耗しており、使い込まれた様子が窺える。なお、磨・敲石類には、食物調理用だけでなく、98（敲石。未実測）のように赤色顔料の破砕に用いられたものがある。小型の楕円礫を素材とし、両端を中心に側面を巡るように敲打痕が認められ、その一部に赤色顔料が付着している。

94は磨・敲石。円礫を素材とする。両面の平坦な面を磨り面として利用しており、両面ともかなり磨耗している。また側面全体を巡るように敲打痕が認められる。

95は磨石。円礫を素材としたものであるが大きく破損しており、1/4ほどが残存している。円礫の全面を磨り面として利用していたものと考えられる。

（10）石皿

1点のみの出土である。両面とも使用のために平滑になっているが、大きく破損している。側面は全て剥離面に覆われており、意図的に分割あるいは破砕された可能性もある。

（11）おわりに

以上、SD0001環壕から出土した打製石器と礫石器の一部について報告した。剥片・石核を除いた剥片石器の器種構成は石鏃の他は、スクレイパー、二次加工のある剥片、微細剥離痕を有する剥片が主体となっており、数は少ないが楔形石器や石錐が見られる。出土層位的には下層と上・中層の出土数に大きな差は認められず、前期後半を通じて剥片石器の利用状況に大きな変化はなかったものと見られる。

本遺跡出土のスクレイパーは、総じて加工度が低く、雑多・簡素な印象をうけるものであり、日常的に使われた万能切削具的性格を持つものと考えている。特に微細剥離痕を有する剥片は、使い捨て的に使用されたものかもしれない。石器類の詳細な出土状況が不明であるため、どれほどの一括性があるものか計りかねるが、福岡平野の弥生時代前・中期遺跡と比較して剥片石器の出土数は多いと見られる[20)]。これは、大規模な石材原産地である多久・老松山（サヌカイト）、腰岳（黒曜石）に距離が比較的近いことが一つの要因として考えられるが、日常的に使用する利器については完全に鉄器化するには至っていない状況をも示しているのであろう。継続的に整理作業を進めて、当遺跡における中期以降の打製石器の変遷についても明らかにしたいと考えている。また、本報告では中途半端な分析となったが、本遺跡からは多数の石核や剥片が出土しており、当該期の剥片剥離技術[21)]や石器製作技術を復元する上で多くの情報を与えてくれる資料であることを改めて指摘しておきたい。

註

1）今回報告を行なう石器は、ＳＤ0001環壕の中でも特に田手二本黒木地区Ⅱ区内にかかる部分（ＳＤ0001環壕のうち、１～８アゼ部分）から出土したものである。これに続く田手二本黒木地区Ⅲ区内のＳＤ0001（ＳＤ0336）環壕からも平成13・14年度の調査において多量の遺物が出土している。その中には石器が少なからず含まれるが、現在整理作業中のため、その報告は、今後順次行なっていく予定である。なお、石器「1点」の認定について本報告書では便宜上その大小に関わらず、破片1点を石器1点として換算している。

2）実測図を作成するにあたっては、残りのよいもの、あるいは細片であっても重要であると考えられたものを優先的に行うこととし、その結果224点の石器中107点に関して図化を行った。図化を行っていない石器に関しては、表13のSD0001環壕出土石器一覧表に各石器の石材・法量・出土位置・観察所見等を含めて載せている。参照していただきたい。

3) ここで述べる粘板岩ホルンフェルスとは、層状に剥離しやすい性質をもつ堆積岩で、風化しやすく、新鮮な面は黒色を呈するが、風化すると表面はざらつき色調も黄灰色に変化してしまうという特徴をもつ。九州における前期の石庖丁に特徴的な石材とされる頁岩質砂岩（下條1975等）、あるいは安山岩質凝灰岩ホルンフェルス（福岡市教育委員会1992等）等と肉眼観察ではほぼ同一の石材である。

4) ここで述べる赤紫色泥岩とは、赤紫色に近い色調を呈する堆積岩で従来輝緑凝灰岩と呼称されてきた（立岩遺跡調査委員会1977など）石材と肉眼観察では、同一のものである。粘板岩ホルンフェルスに比べ剥離性は弱く、比較的丈夫な印象を受ける。

5) 敲打穿孔を行っていても、その後の回転穿孔によって敲打の痕跡がなくなってしまった可能性もあるが、ここでは敲打の痕跡が見受けられないものについては全てB類とした。

6) しかし、西谷氏がすでに指摘しているとおり、朝鮮半島出土の例は刃面が見えるほうが常に右側であるのに対し、日本出土のものは常に左側であるという違い、あるいは時期差等も見られるなど単純に両者を結びつけるわけにはいかないようである。今後更なる両地域の資料の比較検討が必要である。

7) 西谷正氏の論文（西谷1973）および全栄来氏の論文（全1991）で取り上げられた資料の他に、管見にあがったものとして、福岡県飯塚市夫婦石遺跡（飯塚市教育委員会1995（p17第13図-83･84･85、p19第15図-103･105･108･109･111･112））、佐賀県鳥栖市安永田遺跡（鳥栖市教育委員会1985（p219 第171図-5､p410第345図-1）、佐賀県教育委員会2002（第1分冊p126 図2-80-16））、佐賀県鳥栖市大久保遺跡（佐賀県教育委員会2001（第3分冊ｐ143図11-96-16･20））や福岡県北九州市高津尾遺跡18区（財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室1993（p73第80図-18））の例がある。夫婦石遺跡例は前期末～中期前半、安永田遺跡例は中期後半、大久保遺跡例は中期中頃のものである。

8) 研磨の際には水を使用するため、特に空隙率の高い堆積岩では、水が石の中に入り込み、そのため石器が破損しやすくなる可能性が考えられるためである。参考として、対馬の若田石硯の職人である斎藤茂人氏より、硯製作において硯が最も破損しやすいのは水を用いる研磨の際であるとの話を伺った。単純な比較類推はできないが、大多数の石庖丁も若田石硯も石材は堆積岩であるため、少なからず類似性はあるものと考える。

9) この分類はあくまでも肉眼観察をもとにした、石斧の風化した表面の色調の違いによる分類であり、必ずしも岩石学的な分類とは一致しない。

10) 石斧の破損パターンを分類するにあたっては、麻柄一志氏による石斧の破損パターンの分類（麻柄1988）を参考とした。

11) 便宜上、120番までを粗砥、180番から400番までを中砥、600番以上を仕上げ砥として分類した。

12) RA2の使用痕とは、「使用痕A（砥面を薄く削り取ったような傷痕の総称）が反復することによって形成される傷痕で、うね状の凸凹を呈する」（村田2002）とされるものである。

13) A1の使用痕とは、「砥面を薄く削り取ったような傷痕で、断面形はV字状の溝の片側面の傾斜が緩くなった「レ」状になる。溝断面の開口角度は90度未満になる。」（村田2002）とされるものである。

14) 石器の記述に際しては、加藤晋平・鶴丸俊明1991『図録石器入門事典　先土器』柏書房、旧石器文化談話会編2001『増補改訂旧石器考古学辞典』学生社、竹岡俊樹2003『旧石器時代の型式学』学生社などを参考とした。

15) 今回の報告では石材名称としてサヌカイトという名称を用いた。他にサヌキトイド、無斑晶質安山岩などと呼ばれる。

16) ただし、刃部の認定基準に曖昧さが残る。この点について森本晋氏は「不定形な石器に対して、「剥片石器」、「刃器」、「スクレイパー」といった用語が用いられることもあるが適切な用語ではない。「刃」を持つ「石器」を「刃器」や「スクレイパー」と呼ぶならば、そこには「刃」の定義が不可欠である。「刃」と細部調整との対応関係を示さなくてはな

らない。細部調整を持たない縁辺を「刃」と呼ぶのか、そのうちのある角度の部分だけを指すのかどうか。細部調整を施している部分を「刃部」と呼ぶならどういう細部調整をどの程度まで施していたらよいのか。極厚形細部調整を施した縁辺も「刃部」に含めるのかどうかを示す必要がある。」として問題提起している〔森本1985〕。本報告ではこの問いに対する明確な答えを用意できなかった。また、本文中で「刃潰し加工」と表現したものは、石器を手指で保持して使用する状況を想定した際に、剥片の鋭い縁辺から手指を保護するために施したと考えられる二次加工のことであるが、「整形剥離」あるいは「刃部調整」との区別は主観性が強い。二次加工の種別については今後、より明確で客観性の高い分類基準・定義を設けたい。

森本晋1985「6. 不定形な石器」『弥生文化の研究5　道具と技術』雄山閣。

17) 微細剥離痕の認定および微細剥離痕が生じた要因の解明については、顕微鏡下での観察・分析なども含めて、今後改めて検討すべき課題といえる。

御堂島正1996「「微細剥離を有する剥片」の再検討－偶発剥離の可能性－」『旧石器考古学』、石器文化研究会。

18) なお、SD0001環壕切合い部出土品であり、本稿で紹介した石器類と時期が異なる可能性があるが、ここで紹介しておきたい石核が2点ある。拳大（成人男性）程度の比較的大型の角礫を素材とし、平坦な礫面を打面（単設）として連続的に縦長剥片を剥離したものである。打点は石核の周りを巡るようにして半円形状に動く。図化していないが、そのうちの1点と縦長剥片が接合した。SD0001環壕出土資料も含めて接合作業を本格的に行えば、接合資料は増加する可能性がある。

19) 竹広文明氏は、剥片剥離技術や石器組成などを詳細に分析し、先史時代の中国・四国・近畿地方におけるサヌカイト利用の歴史を復元している。吉野ヶ里遺跡でみられるサヌカイトの剥片剥離技術は、中国・四国・近畿地方で縄文時代後期以降に特徴的に見られる「洗谷型剥片剥離技術」と共通する点が多い。当遺跡出土石器についても今後より詳細な分析を行い、緻密な比較検討作業を進めたい。

竹広文明1988「中国地方縄文時代の剥片石器　－その組成・剥片剥離技術－」『考古学研究』第35巻第1号、考古学研究会。

竹広文明2003『サヌカイトと先史社会』渓水社。

20) 以下の文献に挙げられている遺跡と比較した。

吉留秀敏編1991『比恵遺跡群（10）』福岡市教育委員会。

吉留秀敏2002「北部九州弥生時代中期の剥片石器」『究班Ⅱ－埋蔵文化財研究会25周年記念論文集－』埋蔵文化財研究会。

吉留秀敏2003「弥生時代開始期の石器技術－石鏃について－」『立命館大学考古学論集Ⅲ　家根祥多さん追悼論集』立命館大学考古学論集刊行会。

21) 時代や地域を異にするが、北部九州の縄文時代後期から弥生時代中期における剥片剥離技術について検討した論考から重要と思われる部分を引用する。

小畑弘己氏は福岡市比恵遺跡群の報告書（吉留編1991）中で弥生時代前期の石器群を分析しており、「黒曜石は佐賀県伊万里市腰岳産と思われる5cm前後の小角礫を使用している。石核から復元される剥片剥離の方法は、石核の自然面および剥離面打面（無調整）から打面を頻繁に転移させながら剥離を行うもので、縄文晩期以来西北九州でみられる「無作為」もしくは「アトランダム」と称されてきた剥離法と同じものである。剥片もその90%以上が打面や背面に原礫の表皮を残し、5cmを越えるものは無く、背面に残された剥離面も90度や180度の交錯した方向からのものが複数存在しており、この剥離法を裏付けている。」と報告している。

また、時期は大きく異なるが、小畑氏が田村遺跡（浜石哲也編1987『田村遺跡2』福岡市教育委員会）で復元し

た縄文時代後期後葉の剥片剥離技術の特徴とも一致する部分がある。すなわち「(1) 素材に計3～5cm大の角礫が用いられる、(2) 打面転移が頻繁に行なわれる、(2) 打面調整は認められないといったことがあげられる。この結果、形状や大きさの均質でない自然面を多く残した小型の剥片が生産されている」ことである。

吉留秀敏氏は、縄文時代晩期末（弥生時代早期）から前期初頭の石丸・古川遺跡で見られる剥片剥離技術の特徴をまとめている（吉留2003）が、吉野ヶ里遺跡で見られる黒曜石の剥片剥離技術と共通する点が多い。また、氏は板付遺跡と四箇船石遺跡の石器を分析し、弥生時代中期中葉の石器技術を復元している（吉留2002）。「剥片剥離技術（石材は腰岳産黒曜石が主体をなす：筆者註）は、石核、剥片からまず縦長剥片を指向するものが窺える。これは前期以来の傾向とみてよい。縦長剥片は寸詰まりで厚手・幅広のものが主であり、削器など切削具としての利用が第一義と見られる。（中略）次に不整形の横長剥片を剥出するものがある。これは石核調整剥片も多いが（中略）周囲からの剥離により幅広剥片を剥出するものである。不整形横長剥片についても切削具としての利用が認められる。石鏃の素材としては目的剥片の存在が不明である。この時期の資料には縦長横長両者が認められ、大きさ、厚みなどの条件を満たせば何れも利用すると考えられる。なお、僅かではあるが、剥離面の一部に熱剥離痕が認められる剥片がある。こうした例は比恵遺跡の弥生時代前期後半にもあり、偶然被熱されたとみるより、剥離過程で熱を加える行為（工程）があった可能性も指摘できる。」とまとめている。時期は異なるが、やはり吉野ヶ里遺跡の剥片剥離技術と共通するものといえる。また、熱を受けたと考えられる黒曜石礫や剥片は吉野ヶ里遺跡でも見られる。火熱を利用した剥片剥離、石器製作技術が存在したのかどうかを含めて今後検討を要する問題といえる。

参考文献

麻柄一志　1988　「神子柴型石斧の機能－破損と石質に関するノート－」『旧石器考古学』37旧石器文化談話会

合田茂伸　2003　「近畿地方出土の「内彎刃」石庖丁再論」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢』

下條信行　1975　「未製石器よりみた弥生時代前期の生産体制」『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会

下條信行　1994　『弥生時代・大陸系磨製石器の編年網の作製と地域間の比較研究』平成5年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書

下條信行　1996　「扁平片刃石斧について」『愛媛大学人文学会創立二十周年記念論集』愛媛大学人文学会

下條信行　1997　「柱状片刃石斧について」『伊達先生古稀記念　古文化論叢』伊達先生古稀記念論集編集委員会

全 栄 来　1991　「東アジア磨製石器の系譜と編年」『韓国青銅器時代文化研究』新亜出版社

孫 晙 鎬　2002　「韓半島出土半月形石刀の変遷と地域相」『先史と古代』17　韓国古代学会

武末純一　1987　「石庖丁の計測値」岡崎敬先生退官記念事業会編『東アジアの考古と歴史』中　同朋舎出版

土屋みづほ　2004　「（6）砥石」京都府埋蔵文化財調査研究センター編『市田斉当坊遺跡－京都府遺跡調査報告書第36冊－』

長 沼 孝　1986　「1.石の武器」金関恕/佐原眞編『弥生文化の研究』9　雄山閣出版

西 谷 正　1973　「三角形石庖丁について」『考古学論叢』1　別府大学考古学研究会

平 井 勝　1991　『弥生時代の石器』　ニュー・サイエンス社

村田裕一　2002　「工具－砥石」北條芳隆・禰宜田佳男編『考古資料大観－石器・石製品・骨角器－』9　小学館

森貞次郎　1942　「古期弥生式文化に於ける立岩文化期の意義」『古代文化』第13巻7号　古代学協会

報告書

飯塚市教育委員会　1995　『夫婦石遺跡』飯塚市文化財調査報告書第20集

北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1993　『高津尾遺跡6（18区の調査）』北九州市埋蔵文化財調査報告書第129集

佐賀県教育委員会　2001　『柚比遺跡群1』佐賀県文化財調査報告書第148集

佐賀県教育委員会　2002　『柚比遺跡群2』佐賀県文化財調査報告書第150集

立岩遺跡調査委員会　1977　『立岩遺跡』河出書房新社

鳥栖市教育委員会　1985　『安永田遺跡－佐賀県鳥栖市に所在する安永田遺跡銅鐸鋳型出土地点の調査』鳥栖市文化財調査報告書25集

福岡市教育委員会　1992　『比恵遺跡群（11）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第289集

第６章　吉野ヶ里遺跡弥生時代前期環壕（SD0001）の石器組成について

田手二本黒木地区Ⅱ区SD0001環壕からは、合計で224点の石器が出土した。その全体の石器組成を円グラフで示したのが表8である。組成の中で最も大きな割合を占めるのは、「加工具1」として分類した[1)]スクレイパーなどの剥片石器類である。合計で104点出土し、石器組成全体の46.4%を占める。次に大きな割合を占めるのは、「伐採･加工具」として分類した太形蛤刃石斧などの各種石斧類である。合計で54点出土し、全体の24.0%を占める。続いて、「収穫具」として分類した石庖丁･石鎌が合計で23点出土し全体の10.3%を、次に「狩猟具･武器」として分類した石剣･石鏃、そして「加工具2」として分類した砥石がそれぞれ合計で14点ずつ出土しており、全体の6.3%ずつを占める。残りは、「調理具」として分類した磨石･敲石･石皿が合計12点の出土で全体の5.4%を、また「紡績具」として分類した紡錘車が合計3点の出土で全体の1.3%を占める。

全体に占める各石器類の割合を見ると、最も特徴的であるといえるのは「加工具1」（スクレイパー､RF､MF､R･MF）の出土数の多さである。これは、弥生時代前期においては、前段階の縄文時代に引き続きこのような剥片石器類が相当数使用されていたことを示していよう。また同時に、その使用方法、つまり使い捨て的･便宜的(expedient)な使用法によって廃棄される量が多くなり、その結果グラフにあらわれているように石器組成において大きな割合を占めることになったということも当然考えられる。次に大きな割合を占めるのが「伐採･加工具」（太形蛤刃石斧･縄文系石斧･柱状片刃石斧･扁平片刃石斧）であるが、その中でも伐採用と考えられる太形蛤刃石斧の出土数が39点と最も多い。このことは、一面では伐採活動が盛んであったという解釈も可能だが、一面では打撃力･衝撃力によって木を切り倒すという作業に伴う破損率の高さによるものという解釈も可能であろう。太形蛤刃石斧に対して量的には少ないながらも加工斧と考えられる柱状片刃石斧･扁平片刃石斧も一定数出土していることから、様々な木材加工も集落内で行われていたことが想定される。また、「収穫具」とした石庖丁･石鎌は、他の遺跡での組成と同様、石鎌より石庖丁のほうの比率が高い。石庖丁･石鎌はそれぞれにおいて破損率がそれほど異なるとは考えられないことから、この比率は当時の収穫具の組成をそのまま示している可能性が高いといえる。また、「狩猟具･武器」の中では特に石鏃の出土数が同時期の他の遺跡と比べて少ないようである。また、石製漁具は全く出土しておらず、石錘等を用いた漁撈は積極的に行われなかったことが窺われる。

次に、時期別の組成について環壕下層と中･上層に分けて検討したい[2)]。表9は下層出土の石器組成である。出土石器数は計54点である。そのうち、「加工具1」の割合が最も多く合計で33点出土し、全体の61.1%を占める。次に「伐採･加工具」が合計13点出土し、全体の24.1%を占め、その中でも太形蛤刃石斧の割合が高い。また、「収穫具」は石庖丁が2点のみの出土で、石鎌は出土していない。このような環壕下層の石器組成の特徴としては、まずやはり「加工具1」の割合の高さをあげられよう。これは先述したとおり、まず時期的なもの、そして便宜的な石器であるということがその理由としてあげられる。また、収穫具が中･上層と比べてきわめて少ないのも特徴的である。その他、「狩猟具･武器」も全く出土していないのも特徴的であるといえよう。

次に、表10で示したのが環壕中･上層の石器組成である。出土石器数は計121点である。石器出土数は下層に比べて2倍以上となっている。下層の組成と比べてその割合が大きく変化しているのは「加工具1」、「収穫具」および「狩猟具･武器」である。中･上層の組成では「加工具1」は下層に比べてその割合が約半分に低下し、「収穫具」の割合は約5倍上昇しており、また、「狩猟具･武器」が組成に入るのはこの時期からである。また、「伐採･加工具」などは割合的にはそれほど変化がないが、出土数自体は下層の時期と比べて2倍以上上昇している。

以上簡単にではあるが、SD0001環壕出土の石器の組成について概観した。今後、吉野ヶ里遺跡における中期･後期の石器組成との時期的な比較検討の中で、鉄器への転換やその普及も含めた様々な問題について考えていきたい。また、吉野ヶ里遺跡の各地点ごとに石器組成が変化するのか否か等についても今後検討すべき課題である。

註

1）石器の分類については国立歴史民俗博物館　1996『農耕開始期の石器組成1』における石器分類に拠った。

2）環壕内出土でも出土層位に関する注記がなかった石器に関しては石器組成グラフの対象からは外している。

参考文献

国立歴史民俗博物館　1996　『農耕開始期の石器組成1･2』　国立歴史民俗博物館資料調査報告書7

TDN-Ⅱ　SD0001環壕出土
石器組成グラフ

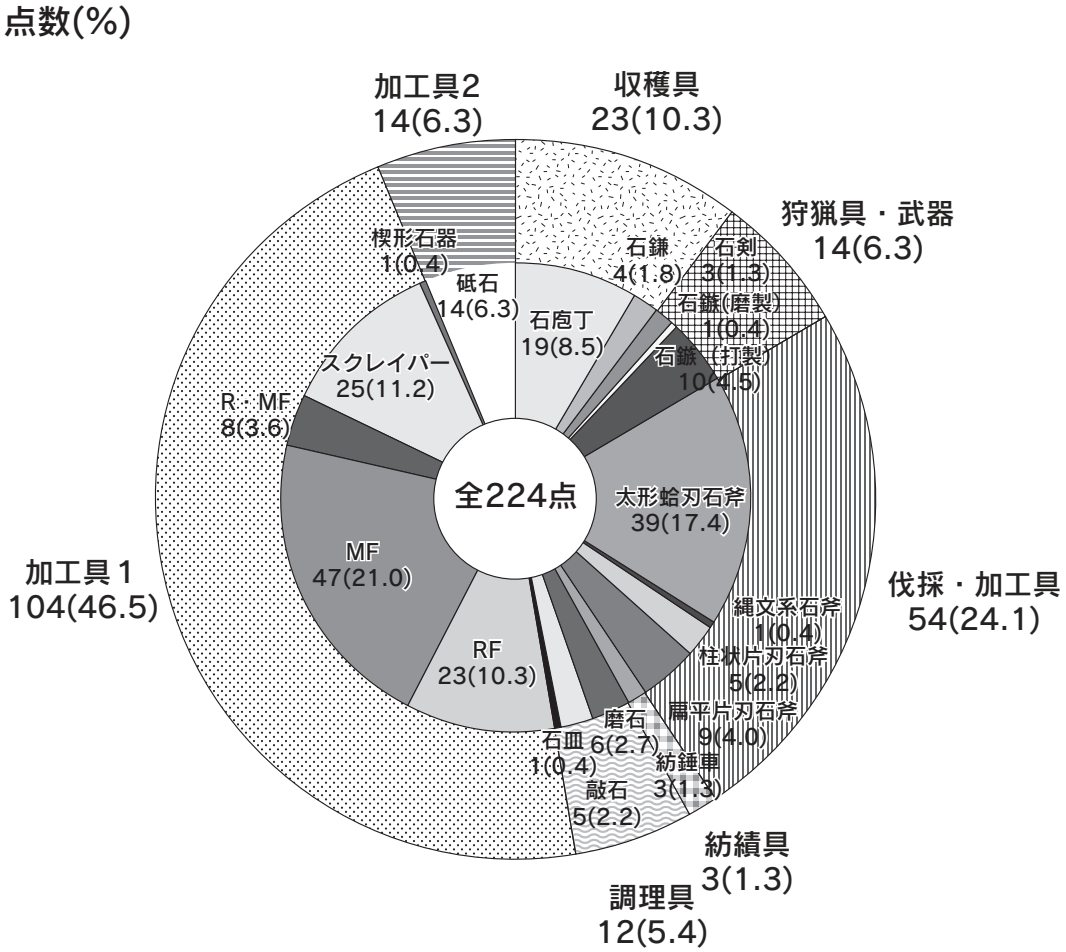


表8　SD0001環壕出土石器の組成

下層出土の石器組成

点数（%）

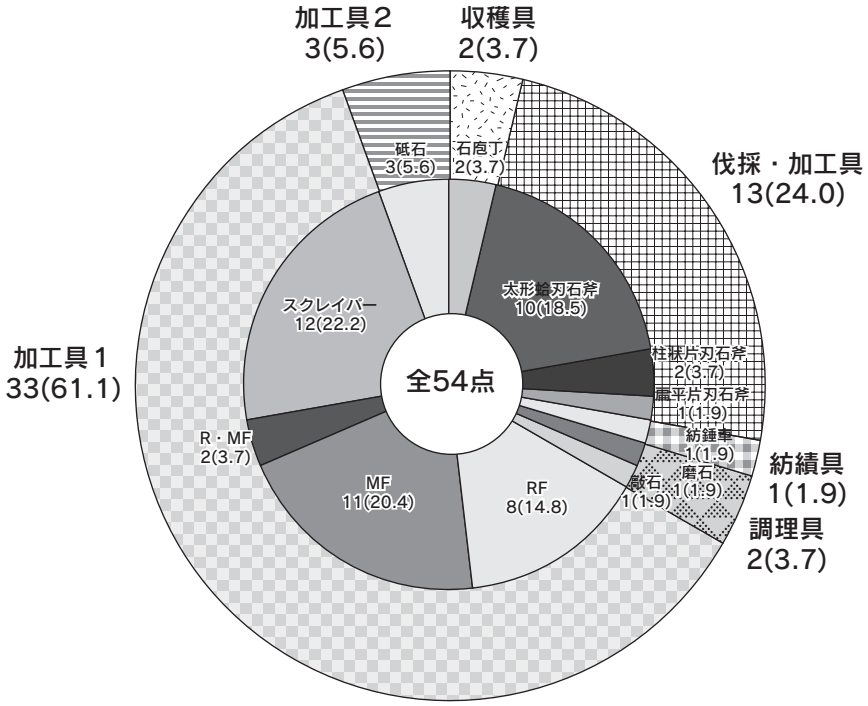


表9　SD0001環壕下層出土石器の組成

上・中層出土の石器組成

点数（%）

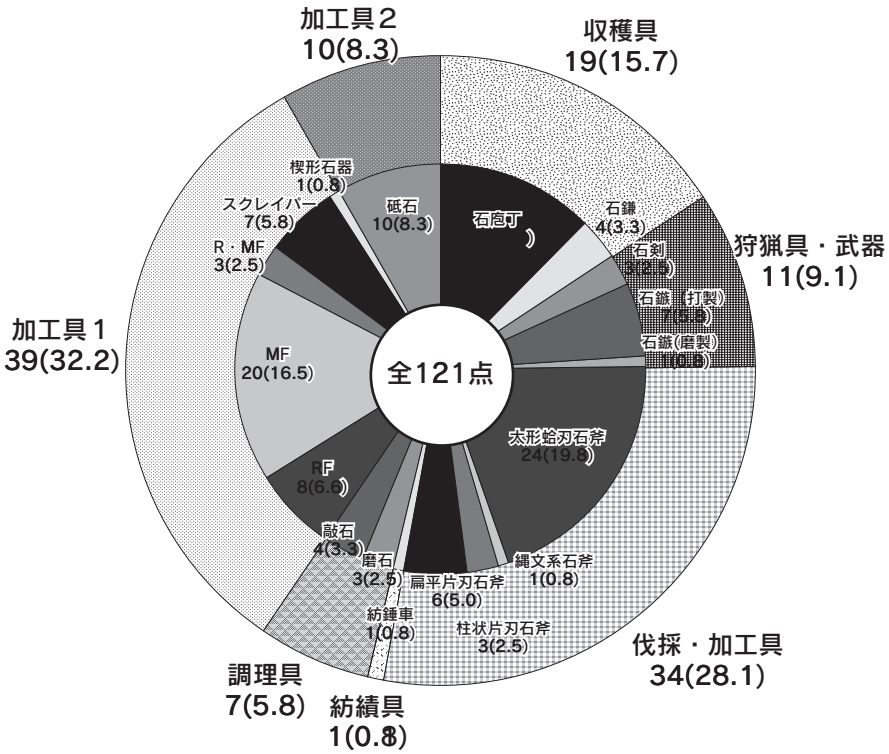


表10　SD0001環壕上・中層出土石器の組成

第７章　田手二本黒木地区Ⅱ区SD0001環壕出土石器の石材

第5章で述べた石器の肉眼鑑定の結果を、成果表として表11にまとめた。石材の肉眼鑑定は、北九州市立自然史・歴史博物館の藤井厚志氏の協力を得た。以下これを説明するため各節をもうけながら、基礎報告の概略を述べることにしたい。表11は石器の種類を縦軸において作成し、石材を横軸に火成岩、堆積岩、変成岩の順でまとめた。さらに、これらの石材を利用した石器工房と石材分布を、第44図に示したので合わせて参照していただきたい。

（1）吉野ヶ里遺跡周辺の地質

第2章の地理的環境で佐賀県下の地質や地勢と遺跡立地を概観したが、再度、基本報告の前に吉野ヶ里遺跡周辺の主要岩石分布と石材利用についてふれておきたい。

佐賀県を代表する脊振山系は、花崗岩類に覆われている。この東部域の裾に洪積世の礫層からなる丘陵が発達していて、この表層は鳥栖ロームなどの粘土質土壌で覆われている。この一つに、吉野ヶ里遺跡の集落は営まれていた。この環境で石材としての有効利用は、花崗岩の風化礫転用の敲石、磨石、石皿、台石などが考えられる。

また天山西南裾部に片岩や蛇紋岩が分布し、部分的にサヌカイトが露出している。この裾部の平地を隔てた多久周辺にもサヌカイトが分布していることは周知である。多久付近から西側は新生代の第三紀層に火山岩が貫入している地形が続いている。この中で伊万里市の腰岳が、黒曜石の産地としてよく知られている。蛇紋岩は縄文時代の石斧、サヌカイトや黒曜石は旧石器時代から剥片石器類に多用され、片岩類は花崗岩と同様の利用が予測される。

東側の筑後川中上流の両岸は、花崗岩類や片岩類が広く分布している。花崗岩類は、石器では、やはり風化礫転用の石器利用が考えられ、他に石棺や石室に利用がうかがえる。片岩類は石庖丁や石斧類の一部に利用されていた可能性が予測される。いずれにしても、これらは各小地域毎の自給品（在地産）として作られた石器と考えられる。

このようななか、現在知られている西九州の遺跡では、旧石器時代から弥生時代にかけて、石材産出地兼工房跡としては考えられるが、大陸系磨製石器の大量生産遺跡として知られている遺跡はみあたらない。

以上、このような表層地質を背景におきながら、前期環壕出土石器の石材についてまとめる作業を進めることにしたい。以下、次の節では具体的に付けられた名称の選択内容から述べていく事にした。

（2）岩石の名称

肉眼鑑定の結果、得られた岩石の名称を生成過程別にまとめた。

火成岩は細粒安山岩、安山岩、サヌカイト（讃岐石）、カンラン石玄武岩、ヒン岩、黒曜石である。堆積岩は赤紫色泥岩、粘板岩、珪質粘板岩、珪質層灰岩、珪質凝灰岩、粘板岩ホルンフェルス、細粒砂岩、砂岩である。変成岩は片岩と蛇紋岩である。

なお、堆積岩類は熱変成を受けていて変成岩に含める場合があるが、ここでは関門層群脇野亜層群の生成過程を考慮し堆積岩に位置付けている。

（3）岩石の生成過程毎の石器

以下に、岩石の生成過程毎に利用された石器をまとめた。

1火成岩　伐採石斧、石鎌、打製石鏃、剥片石器に利用されている。

2堆積岩　石庖丁、石鎌、石剣、磨製石鏃、伐採石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、紡錘車、砥石に利用されている。

3変成岩　石庖丁、縄文系石斧、紡錘車に利用されている。

（4）器種毎の石材

ここでは、器種毎に石材を一覧した。

具体的に石庖丁は、粘板岩ホルンフェルス、赤紫色泥岩、片岩。石鎌は、細粒安山岩、粘板岩、粘板岩ホルンフェルス。磨製石剣は、粘板岩ホルンフェルス、珪質層灰岩。磨製石鏃は、珪質粘板岩。伐採石斧は、カンラン石玄武岩、細粒砂岩、ヒン岩、蛇紋岩。柱状片刃石斧は、珪質層灰岩、砂岩。扁平片刃石斧は、珪質層灰岩、珪質凝灰岩、粘板岩。紡錘車は、粘板岩ホルンフェルス、細粒砂岩、片岩。砥石は、砂岩、珪質凝灰岩。剥片石器は、サヌカイトと黒曜石である。

（5）石器生産地

ここでは主要石材の、岩種、利用器種、周知の石器生産遺跡、岩石の時期概略をまとめた。

1カンラン石玄武岩　伐採石斧生産地として知られる福岡県福岡市今山（標高85.9m）の今山遺跡のものとみられる。概観は灰色や暗灰色で粉をふいたように表面がザラついている。手に持つと白く汚れる。芯部は黒灰色で、石基中に黒色カンラン石の長方形結晶が看取できる。発掘調査出土遺物の多くに円礫の自然面を残していることから、今山の斜面や海岸部に分布している、30～40㎝大で長めの円礫利用が主体とみられている。年代は、カリュウムアルゴン法によると新生代第三紀鮮新世の時代で、火山岩頸をつくる溶岩である。

2赤紫色泥岩　赤紫色石庖丁の石材として知られる福岡県飯塚市立岩の立岩遺跡のものとみられる。概観は赤紫色や暗赤紫色が多くみられ、部分的に灰緑色もみられる。表面は光沢をもったり、なめらかに仕上がっている。風化した例では白色化している。芯部は各々同色である。基質中に、岩片、長石、石英の砂粒が散点的にみられることがある。石質は緻密なため、刃付けした場合に研ぎ上げが鋭利に仕上げられる。特に目立つのは、浮石質の細礫が含まれる場合で、その部分が風化によってボロボロととれ、くぼみをもつ場合がある。この浮石礫は、生成過程に起因している。それは、火山活動の中で、砂や泥が堆積中に、同時に火山灰が降灰し堆積したものである。つまり、古脇野湖の淡水中で堆積したからである。

採集地候補は立岩遺跡から6㎞ほどの、笠置山（かさぎやま、標高425m）周辺が知られている。年代は中生代白亜紀で、関門層群中の古脇野亜層群中に産出される。

3珪質層灰岩や珪質凝灰岩、珪質粘板岩　2と同層産出のものとみられる。北九州市八幡東区槻田の高槻遺跡の片刃石斧類などが弥生時代前期末から生産しているようで、時期的に近く、同類の可能性をもつ。高槻遺跡や高見遺跡周辺の板櫃川や金山川では、脇野亜層群が露出し、砂岩や頁岩のホルンフェルスの転礫が豊富な所である。この他遠賀川流域では金剛山周辺が知られる。

（6）石材産地

ここでは主要石材の、岩種、利用器種、石材の採集候補地、岩石の時期概略をまとめた。

1.蛇紋岩　　カンラン石が変成したものが多く、比較的軟質で加工しやすい石質であったとみられる。濃緑色のものが多く、比較的鋭利に仕上げられている。縄文時代から伐採石斧や片刃石斧類に多用されている。

佐賀県では、天山（標高1046m）裾部の小城（おぎ）町～多久（たく）市～厳木（きゅうらぎ）町付近の北側にみられる。福岡県では、三郡山（標高937m）の北側に分布している。このどちらかの可能性があるとみられるが、前者は直線距離約25km、後者は約50kmと天山裾部の方が近い。年代は古生代のものである。

2.サヌカイト（讃岐石）　　旧石器時代からの剥片石器や縄文時代の打製石鏃などの石材として利用され、「多久産サヌカイト」の名称で知られる。本来は四国讃岐地方に産した無斑晶質安山岩に限定されているが、考古学では、化学的根拠をもたず「サヌカイト」を通称名として使用している。岩質の特徴は、古銅輝石の斑晶を含むことである。

大半の表面は風化し、灰色か灰白色である。また、小穴が連続したような気泡状のくぼみの自然面を残す例があり、芯部は暗灰か黒色である。薄く割れる性質をもち、剥片の先端部分はそのまま刃部として使用できる形状と強度をもつ。石器に残った自然面からすると、十数～20cm大の礫か小割りにした角礫が利用されているようで、転礫利用と半加工礫利用がうかがわれる。分布は佐賀県三日月町老松山（おいまつやま、標高84m）や多久市鬼ノ鼻山（標高434.6m）一帯に多い。年代は、新生代第三紀中新世である。

3.黒曜石　　サヌカイト同様で、各時代の石器に常用されていた。佐賀県伊万里市の有田川と伊万里川の間の腰岳（標高487m）が「腰岳産黒曜石」として有名である。自然が造るガラスで、不純物により黒色や暗黒灰色などに変色している。また、気泡状の自然面を残すものがある。特に腰岳産は他の礫片を全く含まないため、剥離が比較的思い通りに成ったものとみられる。当然、割れ口が鋭利で、動植物を加工するための剥片石器には最も適した素材である。出土遺物の自然面などから推定すると、主に5cm前後の角礫・亜角礫が利用されている。年代は、新生代第三紀鮮新世の有田流紋岩類に含まれる。ちなみに大分県姫島の灰色の黒曜石はみられない。

4.片岩　　分布は、佐賀県内では天山南西裾部の蛇紋岩の分布域に近接した地域に分布している。片状に割れる性質から、薄身に仕上げることは可能であるが、赤紫色泥岩などと比べると厚みを増している。それは、細かく砕けるように欠けていく性質があるためとみられ、刃部の鋭利さに欠ける。また、緻密さに欠け、耐久性には差があるとみられる。本遺構出土の石庖丁や紡錘車に利用されている。

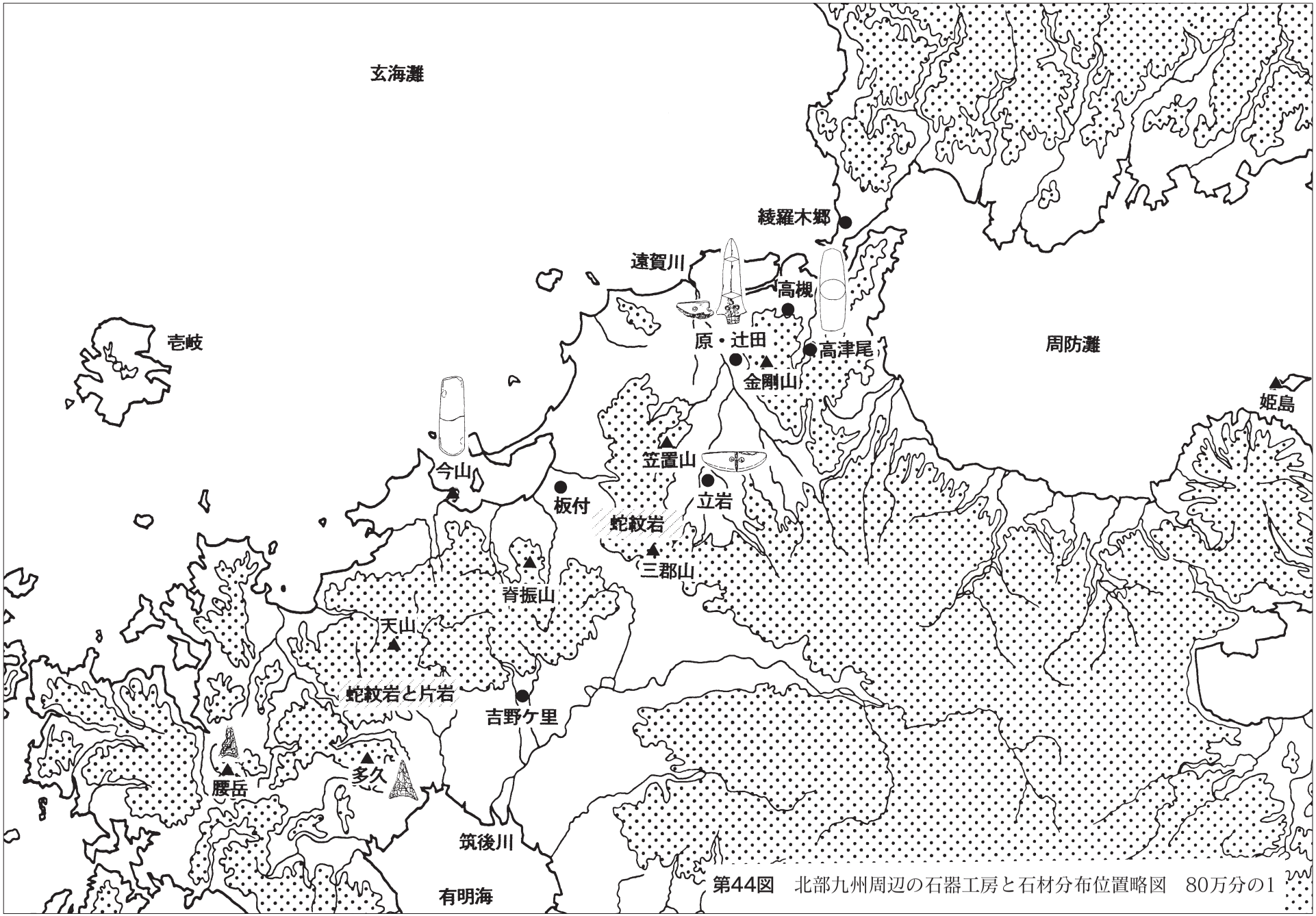
（7）産地不明石器

ここでは主要石材の内、岩種、利用器種、産地、採集候補地域を予測できる石材もあるが、特定作業はこれからの石材もあげた。

1.砂岩　　砥石に多用されている。新生代第三紀のものである。酸化色を呈し、表面はザラつく。荒い目で、組織が肉眼で確認でき、ＪＩＳ規格のサンドペーパーの100番～1000番の目に近い。最上の仕上げ砥石ではなく、どちらかといえば、研いだ線条痕が残る中・荒砥石である。

佐賀県西部の多久市付近から伊万里市付近にかけて広範囲に分布していて、この地域が採集地の可能性があると予測されるが、特定はこれからである。当然、近距離地から選択されたとみられる。

2.粘板岩ホルンフェルス　　石庖丁、石鎌、石剣、紡錘車などに多用されている。風化している表面は黄白色に酸化し、芯部は黒色を示す。石庖丁などは小片が多く、風化しやすく、細かく欠ける性質で、割れやすいようである。特徴は節理が発達していて、薄く割れやすく、石庖丁などは、厚さ数mmの刃部や体部に明確な節理が残ることである。



第44図　北部九州周辺の石器工房と石材分布位置略図　80万分の1

表層分布での位置や石器生産地は特定できていない。また、この石材利用の石器分布は、吉野ヶ里遺跡に限らず福岡平野から佐賀平野までと広範囲にみられる。しかしながら、北部九州や西九州では、現在のところ、この石材を利用した工房は知られていない。

3.細粒砂岩　本遺構出土の伐採石斧の半数を占めている。表面は光沢をもつほど緻密で、刃部の仕上げは比較的鋭利である。全体的に、灰緑色や黒灰色で、目立つのは、2同様に刃部に節理がでるように石材を利用し、黒色の斑点をもつ例がある。粘板岩ホルンフェルス同様に表層分布や石器生産地は特定できていない。しかしながら、脇野亜層群に含まれる可能性が多少あるものの、現在のところ北部九州では、この石材を利用した工房は知られていない。むしろ、2の粘板岩ホルンフェルスと同域分布の可能性を探っている。

（8）小　結

以上の様に、石材の鑑定結果をまとめた。再度、吉野ヶ里遺跡を中心に、東西側の地域の石材分布と遺跡との位置関係を、第44図で概観してみたい。東側は考古学上でいう「北部九州」の周知の産地である。西側は今回の報告にあたり、吉野ヶ里遺跡が位置する「西九州」の産地である。具体的には、今後の研究の基礎資料となるように、「石材の特定」「石材分布範囲と採取候補地」「石器生産地との位置関係」「生産と流通」を視点に掲げた。

1.　東側－北部九州

（5）であげた周知の伐採石斧と片刃石斧類の石器生産地である。これらは工房と石材産地が同じ地域か近接した位置関係である。石材は、第三紀の今山産カンラン石玄武岩と遠賀川上下流の脇野亜層群産の砂岩頁岩類のホルンフェルスである。代表的遺跡は立岩や高槻遺跡である。ただ、これらの大量生産は、前期末から中期にかけて限定的である。したがって、前期中頃までさかのぼった時期の生産については可能性があるものの、具体的な実証はこれからである。

2.　西側－西九州

（6）で掲げた石材の蛇紋岩、サヌカイト、黒曜石は、旧石器時代あるいは縄文時代から利用された石材である。特に後二者は、多久周辺と腰岳に産する周知の石材と剥片石器である。これは、前述の石器生産地としての位置付けというより、石材産地としての位置付けであり、有力な採集候補地である。

つまり、石材の供給地であり、石器の大量生産は知られていないことから、任意的な自給生産が予測される。また、蛇紋岩の産地とともに縄文系石斧の生産地は特定できていない。これらは、伝統的な素材利用の石器である。

3.　産地不明石器

（7）の第三紀の砂岩は砥石の主体を占め、粘板岩ホルンフェルスは石庖丁の主体を占め、細粒砂岩の伐採石斧は、半数を占めている。砥石の石材産地は、佐賀県西部に分布している第三紀層の中から選択採集されたものとみている。それは、伝統的なサヌカイトや黒曜石がこの地から採集され運ばれているからである。後二者は、石材と石器ともに産地不明であるが、この二者は量的に主体を占めていることから、大量生産の結果と考えられる。

この他、片岩製の石庖丁や紡錘車は「吉野ヶ里産」とでもいうべき、在地の石材を利用した石器である。また、安山岩類の石器も同類とみられる。

	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2
石材／石器	玄	細安	安	ヒ	サ	黒	粘H	細砂	粘	赤	珪粘	珪層	珪g	砂	片	蛇
石庖丁							*			*					*	
石鎌		*					*		*							
石剣							*					*				
磨製石鏃											*					
伐採石斧	*			*				*								
縄文系																*
柱状片刃												*		*		
扁平片刃									*			*	*			
紡錘車							*	*							*	
砥石													*	*		
敲石																
磨石			*	*												
石皿			*													
打製石鏃					*	*										
RF					*	*										
MF					*	*										
R・MF					*	*										
削器					*	*										
掻器					*	*										

注）玄＝玄武岩、細安＝細粒安山岩、安＝安山岩、ヒ＝ヒン岩、サ＝サヌカイト、黒＝黒曜石、粘H＝粘板岩ホルンフェルス、細砂＝細粒砂岩、粘＝粘板岩、赤＝赤紫色泥岩、珪粘＝珪質粘板岩、珪層＝珪質層灰岩、珪g＝珪質凝灰岩、砂＝砂岩、片＝片岩、蛇＝蛇紋岩の略

表11　吉野ヶ里遺跡にみられる石器の石材

参考資料

松本達郎他　1962「北部九州の地質」『日本地方地質誌－九州地方』朝倉書店

岡崎敬他　1977『立岩遺跡』福岡県飯塚市立岩遺跡調査委員会　河出書房新社

折尾学　1981「今山・今宿遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集 福岡市教育委員会

西村裕二朗他　1991『山口県の岩石図鑑』第一学習社

宇野慎敏　1996『高槻遺跡第8地点』北九州市埋蔵文化財調査報告書第192集 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

梅崎惠司　1999「福岡県北九州市の弥生時代石器の素材」『研究紀要』第13号 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

木太久守　2000『高槻遺跡第9地点』北九州市埋蔵文化財調査報告書第242集 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

柴尾俊介　2000『高槻遺跡第10地点』北九州市埋蔵文化財調査報告書第246集 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

梅崎惠司　2000「弥生時代北部九州の今山型と高槻型伐採石斧の生産と流通」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版

岩永雅彦　2003「腰岳の現状」『StoneSources』No.1石器原産地研究会

下條信行　2003『道具の生産流通と地域関係の形成』古代学協会中国四国合同大会（四国支部第17回）研究発表要旨古代学協会中国四国支部

岩永雅彦　2004「佐賀県多久・小城地域における原産地遺跡の調査・研究歴」『西九州のサヌカイト産地と石材利用』石器原産地研究会 第4回研究集会レジメ

梅崎惠司　2004「無文土器時代と弥生時代の石器生産」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会50周年記念論文集　考古学研究会

梅崎惠司　2004『高見遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第326集 北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室

第８章　まとめ

まとめとして、各章の主な内容を箇条書きにした。

1　SD0001環壕とその年代

SD0001環壕の土層は、大きく上・中・下の3層に分層できる。環壕出土土器の分析から上・中層と下層の2期に大別される。下層は、板付IIa式新段階から板付IIｂ式前半の土器が、中・上層は、板付IIb式後半から前期末（一部中期初頭に下る）の土器が伴う。このSD0001環壕は前期には掘削され、中期初頭には、ほぼ、埋没していたと見られる。

出土する甕は、「亀ノ甲タイプ」が主体を占め、如意状口縁を持つ板付系の甕は少ない。

2　大陸系磨製石器

大陸系磨製石器は10種類前後の組成をもつ石器群である。本遺構の石器は、およそ勢揃いしている。形態からみて特徴的なのは、やや大型の薄身の粘板岩ホルンフェルス製三角形石庖丁や扁平で円基の今山産と細粒砂岩製の伐採石斧である。これは、北部九州中期の背部直線形石庖丁（立岩産）や断面円筒形の伐採石斧（中期の今山産や高槻産）と比較して、ともに前期の形態的特徴をもつものである。

2　剥片石器

石鏃を除くと石匙などのような定型石器はなく、不定型な剥片石器類のみである。全体として必要部位のみを剥離加工している石器が主体で、縄文時代の石匙のように全面を丁寧に加工していることはない。加工痕や使用痕をもつ石器は、機能優先の不規則な調整剥離をもつ万能切削具であり、微細剥離痕を有する剥片は使い捨て的利用が想定された。これらは総じて打製石器の最終形態を示していると見られる。

4　石器組成

勢揃いした大陸系磨製石器の占有率は43.2%で、伝統的な縄文系石器は、56.7%でやや上回っている。具体的には、石庖丁が8.5%、伐採石斧が17.4%、打製石鏃4.5%、スクレイパー類46.5%である。弥生系石器と縄文系石器が半々の割合からすると、まさに、縄文時代から弥生時代への狭間の最中にあることを示していると言えよう。

5　吉野ヶ里遺跡と工房や石材産地との距離

吉野ヶ里遺跡から周知の今山遺跡、立岩遺跡、高槻遺跡との直線距離は40km、40km、80kmである。在地の腰岳、多久との各距離は50km、25km程である。円を描くと、半径50km以内に大半が入ることになり、最大直径100kmの範囲となる。このような位置関係は、弥生時代前期の集落と周辺社会との関係を窺うための具体的な距離観を示している。

以上、吉野ヶ里遺跡における弥生時代前期の環壕から出土した石器すべてについて網羅した。その内容は、大陸系磨製石器と伝統的な剥片石器がおよそ半々の割合であった。もう少し大陸系磨製石器が、上回っていると予想したが意外な結果であった。しかしこれこそが伝統に根付いた、地域社会の様相を示したものと認識した。また、今山産伐採石斧をはじめ立岩産石庖丁が示した、北部九州西部とのかかわり、そして遠賀川を越えた東北部九州の高槻遺跡とのかかわりを示す可能性も見出した。また、産地不明石器を明示し、遺物自体の検証も十分行えたものと考えているが、課題を掲げる結果となった。

これらは生産と流通という視点から弥生時代の地域社会の具体像を、明らかにしていく基本資料となりえる成果である。今後、中期や後期の整理作業が進展した時点での比較作業を行いたいものである。さらに、工房跡や大量生産の形跡などの状況証拠が周辺で検出されたならば、再検討の根拠ともなりえると期待している。

附　　吉野ヶ里遺跡出土品データベースの作成

1. データベース作成の経緯

吉野ヶ里遺跡では、20年近く続く長期の発掘調査で、土器や石器、木器をはじめとする多くの遺物が出土している。これらの出土した貴重な遺物は、研究や展示公開など多方面で活用していくことが望まれるが、現在その数量の膨大さから多くの遺物に関して十分な活用がなされていない。

そうした状況の中、平成15年4月、前年度から始まった発掘調査で撮影されたリバーサルフィルムのデジタル化保存に並行して、遺構や遺物のデータベース構築の構想がもちあがった。遺物や写真の貸し出しの迅速化、そして、どの遺物が何点、どの地区のどの遺構から出土したか、それらを確実に把握する為のデータベースが求められた。その第1段階として、当時3,000点余りについて、手書きでの台帳整理がなされていた「石製品」を取り上げることとなった。

2. データベースの作成方法（図1参照）

データベースは市販のソフトのFileMaker Pro5.5（後に6.0へバージョンアップ）を使用した。

作成手順は、洗浄が終了した石製品の整理番号を書いたカードと、出土遺構名、取上年月日等を書いたカードと共に1点ずつ袋詰めし、整理番号順に並べ、遺物台帳を作成する（手書き）。そして遺物台帳のデータと、実測図があるものについてはその情報（図面番号、実測スケール等）をMicrosoft EXCELに入力し、表データを作成する。次にFileMakerでデータベースのレイアウトを組み、作成したデータをインポートする。これで文字のデータは完成である。

画像データは、まず遺物の写真撮影を実施する。撮影方法は厚みや大きさを考慮してデジタルカメラ（図4参照）とスキャナ（図3参照）を使い分け、遺物1点につき表裏2面撮影した。その後、取り込んだ画像を加工し、スケールを入れ、整理番号に対応したファイル名をつけて保存する。そして既に文字データが完成したデータベースに作成した画像データをインポートする。適当な点数ごとにこの手順を繰り返し、作成する。

2. 吉野ヶ里遺跡出土品データベースのメリット・デメリット

データベースを組む際にFileMakerを選択した理由は、ソフトを使用するにあたって特殊なパソコン操作の知識を必要としない点にある。さまざまなレイアウトを視覚的に組むことができるので、表形式やカード形式など、その時必要とする形式でのデータの出力が容易である。実際に吉野ヶ里遺跡では、このデータベースを基に遺物貸し出しの際の遺物チェックリストとして、写真を大きく掲載したレイアウトをつくり、2004年度より試験的に利用している。

データの内容については、『吉野ヶ里遺跡出土石製品データベース』では1点1点について情報の項目を大きく次の5つにわけ、それぞれについて細分化し構成した。

① **出土位置情報**・・・・・地区名、調査区名、遺構名等

② **遺物情報**・・・・・・・整理番号、器種名、材質、時期、観察所見等

③ **遺物画像**・・・・・・・遺物2面写真、トレース画像等

④ **実測図情報**・・・・・・実測図の有無、図面番号、スケール等

⑤ **保管場所情報**・・・・・収納箱番号、移動履歴等

こうすることで、検索条件を限定でき、情報の絞り込みが容易になった。

しかし一方、市販ソフトを使うことで、ソフトとしての容量、処理能力の限界に対して調整がきかないというデメリットは避けようがなく、その調整は、現状ではデータ自体の掲載方法、整理等で対応するしか方法がない。実際、今回のデータベースでも1点につき2面分の写真を掲載すると、9000点の時点で約1.2GBの容量を要求した。このため、レイアウト（図2参照）を改良し、遺物画像を1面とし、重要遺物のみ2面撮影した写真を加工し1枚にして掲載することにした。これにより容量は約半分になり、動作性も向上した。この後も項目等、細かな修正を加えながら現在に至っている。

もう一つの問題点は、FileMakerから異なるデータベースへ乗り換える際、データの移行がスムーズに行えるのかという問題である。これについては、定期的にデータベースそのもののバックアップはもとより、文字データをEXCEL形式でデータベースより出力し、画像ファイルと共にCD-R等の大容量メディアにバックアップする方法を実施している。

4. 作成開始から今日までの経過

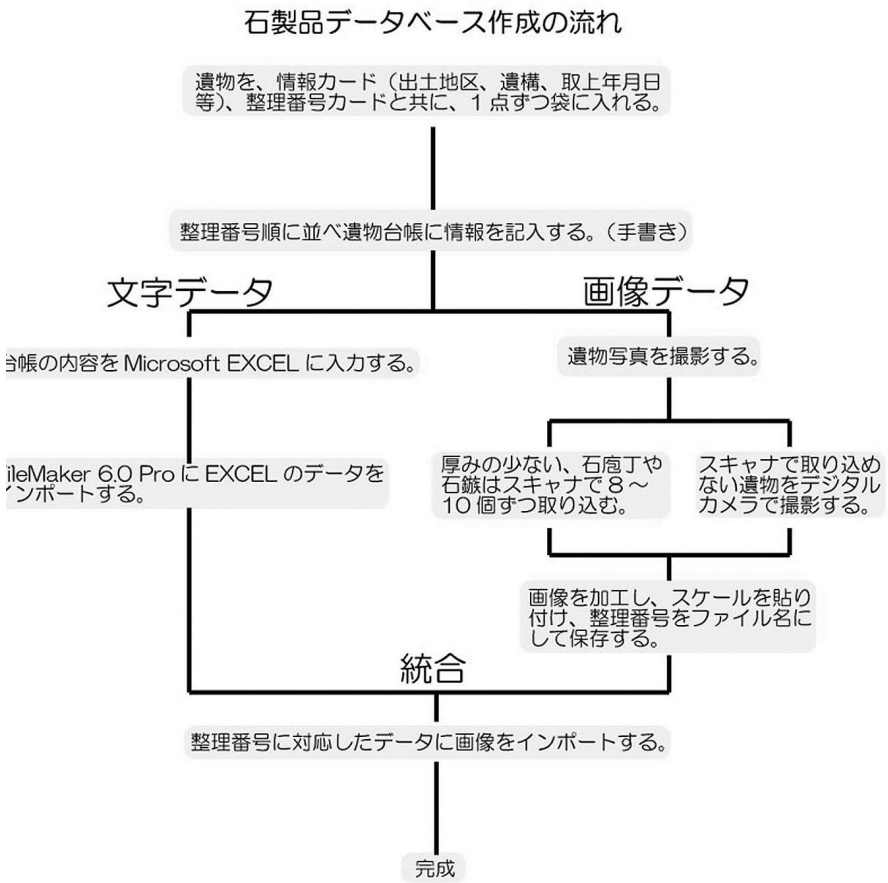
当初存在した約3000点の石器台帳分のデータベースは平成15年7月に完成した。研究者に石器の器種や石材等の詳細な判定を依頼した。しかし、その後遺物の再整理により、多数の石器が未整理であることが判明し、新たにデータの追加を実施し、現在（平成16年4月時点）約10,000点のデータベースとなった。

この過程において、点数の増加に伴い、データ登録手順をよりスピーディーにする為に、当初1点につき2面、デジタルカメラでの撮影を行っていたのを、厚みの少ないもの（石庖丁、石鏃等）はスキャナの原稿台に保護用のOHPシートを敷き、8～10点並べて表裏取り込む方法へと移行した（図3参照）。こうすることで写真撮影にかかる時間が短縮された。しかし、厚みのある遺物（石斧、砥石等）についてはスキャナで取り込むと画像が暗くなり、先端部に大きなひずみが生じてしまうため、従来通り1点ずつデジタルカメラで撮影している（図4参照）。また先述したが、容量を考慮して、2面撮影する場合も遺物を限定して、1面の撮影でデータを作成することにした。こうして作成したデータを基に、研究を行った今の時点での成果が、今回の報告書である。

5. 課題と展望

「石製品データベース」でこれからの遺物整理の指針が整いつつある中、これから土器や木器、青銅器等他の遺物の整理を手がけていく上で課題となる点は、まずその数量であろう。現在実測を終えている遺物だけで約18,000点存在し、その90%は土器である。これらの遺物の情報を着実に積み上げ消化していかなければ遺物全体の把握は不可能である。また市販のソフトで組んでいるとはいえ、データ作成の手順を覚えるにはある程度の期間を要するため、常に遺物整理をおこなう人材を確保することと、パソコンを使った作業を迅速かつ確実に行える人材の育成が必要となる。

もう一つの課題は、完成した遺物や遺構のデータベース、それぞれの関連付けを、どのように整理していくかということである。現在、実測を終えた遺物には一点ずつ県の登録番号がつけられ管理されている。この台帳を遺物管理の基盤とし、データベースを作成した。しかし遺物点数が膨大でこのデータベースに写真や実測図を挿入することが困難なため、この下に分類（土器、石器、木器等）されたデータベースを写真入りで作成し、相互の関連付けを行っている。一方、遺構情報については、平成14年度から16年度にデジタル化されたリバーサルフィルムの画像をもとに、調査時の遺構一覧表の情報と統合しデータベース化を急いでいる。しかし、これらの情報の間に現在のところ関連付けは行われていない。遺構からでも遺物からでも互いの情報を引き出



第１図　データベース作成の流れ

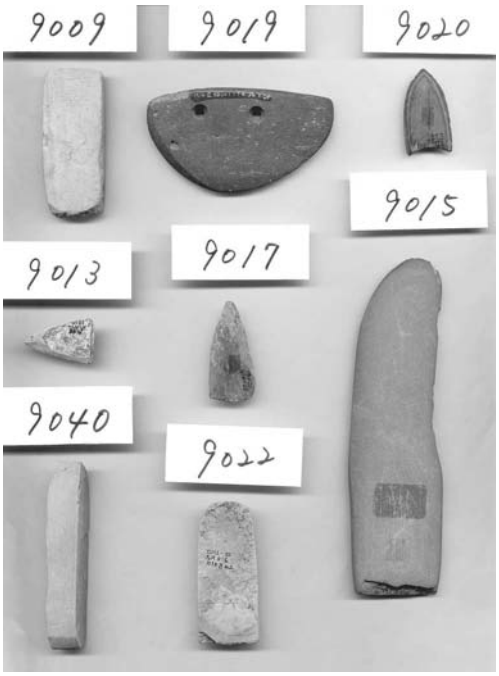
第2図　データベースの基本レイアウト

せるようにしなければ、従来の管理システムの領域を脱しないと考える。そのためには、データの容量やレイアウト、遺物そのものの収納方法、データ作成手順などを検討しながら、情報を着実に積み上げていかなければならない。そして、このデータベースがこれからの調査はもちろん、公開や研究等、幅広く対応できる管理システムを築く基盤となるよう、より高い精度のシステムを構築しなければならない。

6. 構築環境と仕様

データベース開発環境は下表のとおりである。(2004年4月末現在)

PC環境	
PC	Gateway PC Series Genuine Intel x86 Family 6 Model 8 Stepping 10
OS	Microsoft Windows 98 Second Edition
HD	95GB(C:20GB D:10GB E:65GB)
Memory	256MB
文字データ処理	Microsoft Office 2000 EXCEL
画像データ処理	Adobe PhotoShop 6.0
データベース仕様	
Soft	ファイルメーカー Pro 6.0
件数	10,000件
容量	615MB（644,956,160 Byte）



第2図　スキャナ取り込み画像

第4図　デジタルカメラ撮影画像

表12　SD0001環壕出土土器一覧表

挿図番号 登録番号	出土位置	器種	形態	突帯刻み	法　量（cm）		調　整		色　調		備　考
7-1 04003083	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	A	小D 小V	外口径 残存器高	23.1 20.3	内外面	ナデ	内外面	にぶい褐色	口縁に肥厚した三角突帯貼付
7-2 04003078	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	A	0（刺突）	外口径 残存器高	27.2 13.1	内外面	ナデ	内外面	暗褐色～淡褐色	口縁に肥厚した三角突帯貼付 体部内外面に黒斑
7-3 04003198	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	A	小D 小V	外口径 残存器高	26.9 17.5	内外面	ナデ	内外面	暗褐色～淡褐色	口縁に肥厚した三角突帯貼付 胴部外面煤付着
7-4 04003045	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	A	小D 小V	外口径 残存器高	27.2 15.7	内外面	ナデ	内外面	淡褐色	口縁に肥厚した三角突帯貼付 体部内外面に黒斑
7-5 04003072	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	A	小D 小V	外口径 残存器高	27.0 12.0	内外面	ナデ	内外面	暗褐色～淡褐色	口唇に下垂れの突帯貼付
7-6 04003091	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	A	小D 小V	外口径 残存器高	24.8 19.8	内外面	ナデ	内外面	明褐色	口唇に肥厚した突帯を貼付し平坦に成形　体部内外面に黒斑
7-7 04003085	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	B	小O	外口径 残存器高	25.0 20.5	内外面	ナデ	内外面	褐色	口唇に肥厚した突帯を貼付し平坦に成形　胴部内外面煤付着
7-8 04003195	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	A	小V	外口径 残存器高	29.6 13.1	外面 内面	ナデ 摩滅	内外面	淡褐色	口唇に肥厚した突帯を貼付し平坦に成形　体部外面に黒斑
7-9 04003075	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	A	小D 小V	外口径 残存器高	32.6 20.2	内外面	ナデ	内外面	暗褐色～淡褐色	口唇に肥厚した突帯を貼付し平坦に成形　体部内外面に黒斑
8-10 04003089	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	Ac	小O 小V	外口径 器高 底径	21.6 30.3 7.4	内外面	ナデ	内外面	にぶい褐色	口唇に肥厚した突帯を貼付し平坦に成形。
8-11 01005204	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	Ac	小O 小V	外口径 器高 底径	24.3 27.3 7.7	内外面	ナデ	内外面	暗褐色～淡褐色	口唇に肥厚した突帯を貼付し平坦に成形。
8-12 01005203	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	Ad	小O 小V	外口径 器高 底径	25.3 28.0 7.0	内外面	ナデ	内外面	暗褐色	口唇に肥厚した突帯を貼付し平坦に成形　口縁内面黒斑　体部内外面煤付着
8-13 04003074	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	A	小D 小V	外口径 残存器高	25.3 9.4	内外面	摩滅	内外面	橙褐色	口唇に肥厚した突帯を貼付し平坦に成形
8-14 04003191	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	壷	A	D	外口径 残存器高	22.0 9.0	内外面	ナデ	内外面	淡褐色	口縁に蒲鉾形の突帯貼付　口縁外面工具調整痕　体部外面に黒斑
8-15 04003087	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	A	D O	外口径 残存器高	24.9 20.7	内外面	ナデ	内外面	淡褐色	口縁に蒲鉾形の突帯貼付
816 04003088	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	A	V	外口径 残存器高	31.5 9.3	外面 内面	摩滅 ナデ	内外面	淡褐色	口縁に蒲鉾形の突帯貼付
8-17 04003193	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	C2	浅く細い 刻み	外口径 残存器高	26.0 18.3	内外面	ナデ	内外面	淡褐色	口唇外端に浅小な刻み
9-18 04003155	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	c	－	底径 残存器高	8.1 7.6	外面 内面	摩滅 ナデ	内外面	淡黄橙色～淡橙色	－
9-19 04003069	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	c	－	底径 残存器高	6.0 9.5	内外面	摩滅	内外面	明褐色	上げ底　穿孔有　断面に粘土紐接合痕

挿図番号 登録番号	出土位置	器種	形態	突帯刻み	法　量（cm）		調　整		色　調		備　考
9-20 04003196	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	c	－	底径 残存器高	6.4 17.2	内外面	ナデ	内外面	淡褐色	－
9-21 04003187	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	d	－	底径 残存器高	6.6 6.0	内外面	摩滅	外面 内面	灰白色～淡黄色橙色 灰黄褐色	－
9-22 04003077	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	d	－	底径 残存器高	7.7 20.0	外面 内面	刷毛目 ナデ	内外面	暗褐色～淡褐色	胴部から底部方向へ刷毛目調整
9-23 04003068	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	d	－	底径 残存器高	6.6 16.0	外面 内面	摩滅 ナデ	内外面	明褐色	底部厚手で上げ底　体部外面黒斑
9-24 04003157	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	d	－	底径 残存器高	4.5 5.4	内外面	ナデ	内外面	淡赤褐色～にぶい橙色	上げ底
9-25 04003086	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	d	－	底径 残存器高	6.0 14.0	内外面	ナデ	内外面	淡褐色	－
9-26 04003171	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕	e	－	底径 残存器高	8.1 7.6	外面 内面	摩滅 ナデ	内外面	淡褐色～橙色	厚手で帯状に端部が張り出す　底面に窪み有り
10-27 04003070	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	壷	D	－	外口径 残存器高	14.0 8.8	外面 内面	磨き 磨き、ナデ	内外面	明褐色	口唇面状に成形　頚胴部に突帯貼付
10-28 04003071	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	壷	D	－	外口径 残存器高	15.8 10.0	外面 内面	磨き 磨き、ナデ	内外面	明褐色	口唇面状に成形　口頚部に沈線　頚部外面に突帯貼付
10-29 04003080	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	壷	B	－	外口径 残存器高	20.2 14.1	内外面	ナデ	内外面	淡褐色～橙色	口唇面状に成形　口頚部に浅い沈線を施す
10-30 04003192	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	壷	D	－	外口径 残存器高	23.9 7.8	外面 内面	ナデ、磨き ナデ	内外面	淡褐色	口唇面状に成形　口頚部に浅い沈線を施す　沈線は部分的に断絶する
10-31 04003064	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	壷	B	－	外口径 残存器高	23.9 12.8	外面 内面	磨き 摩滅	内外面	褐色	口唇面状に成形　口頚部と頚胴部に浅い沈線を施す
10-32 04003199	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	壷	D	－	外口径 残存器高	22.2 29.1	外面 内面	磨き 磨き	内外面	淡褐色	口唇面状に成形　頚胴部に浅い沈線を施す
10-33 04003200	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	壷	－	－	残存器高	25.3	外面 内面	磨き 磨き、ナデ	内外面	淡褐色	口頚部、頚胴部、胴部に沈線を施す
10-34 04003158	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	壷	－	－	残存器高	25.3	外面 内面	磨き ナデ	外面 内面	灰白色～淡黄色橙色 灰白色	－
10-35 04003060	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	壷	c1	－	残存器高	25.3	内外面	磨き	内外面	暗褐色	－
11-36 04003061	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	壷	－	－	残存器高	21.5	外面 内面	磨き ナデ	内外面	明褐色	口頚部に浅い沈線を施す
11-37 04003062	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	壷	－	－	残存器高	19.8	外面 内面	磨き ナデ	内外面	褐色	胴部最大径が同高上位に位置すると推定される
11-38 04003092	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	壷	A	－	残存器高 底径	14.0 9.0	外面 内面	磨き ナデ	内外面	明褐色	－

挿図番号 登録番号	出土位置	器種	形態	突帯刻み	法　量（cm）		調　整		色　調		備　考
11-39 04003063	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	壷	c1	－	残存器高 底径	14.7 6.0	外面 内面	磨き ナデ	内外面	褐色	底面端部から胴部下位に黒斑
11-40 04003065	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	壷	c1	－	残存器高 底径	16.1 8.5	外面 内面	磨き ナデ	内外面	淡褐色	内底部に調整工具痕残存
11-41 04003067	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	壷	b	－	残存器高 底径	21.7 9.2	外面 内面	磨き ナデ	内外面	褐色	内底部に調整工具痕残存
11-42 04003201	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	甕棺	－	－	残存器高	26.0	外面 内面	磨き、ナデ 磨き、ナデ	内外面	灰白色～灰黄褐色 褐灰色	頚部は内傾しつつ立ち上がり、胴部中位より下に重心を有する器形か。頚胴部に沈線を施す
12-43 04003006	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	鉢	－	－	外口径 器高 底径	14.0 12.5 3.8	内外面	摩滅	内外面	明黄褐色	底面端部から胴部下位荷黒斑　体部外面の一部に煤付着
12-44 04003172	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	鉢	－	－	外口径 器高 底径	11.5 7.9 5.5	内外面	摩滅	内外面	にぶい黄橙色	－
12-45 04003076	2-3アゼ上層 （遺物集中出土地点）	蓋	－	－	摘み径 残存器高	6.2 12.0	内外面	ナデ	内外面	暗褐色～淡褐色	摘み端部から体部と内面に黒斑
13-1 04003026	2-3アゼ上層	甕	A	小D 小V	外口径 残存器高	23.0 17.6	外面 内面	ナデ 磨き	内外面	暗褐色	口縁に肥厚した三角突帯貼付　体部外面黒斑　体部内外面に煤付着
13-2 04003030	2-3アゼ上層	甕	A	小D 小V	外口径 残存器高	24.7 12.3	外面 内面	ナデ ナデ、刷毛目	内外面	褐色	口縁に肥厚した三角突帯貼付　体部内外面に黒斑
13-3 92001422	2-3アゼ上層	甕	A	小O	外口径 残存器高	20.2 20.4	内外面	ナデ	内外面	褐色	口縁に肥厚した三角突帯貼付　体部内外面に黒斑
13-4 01005211	2-3アゼ上層	甕	A	小O 小V	外口径 器高 底径	23.0 28.2 8.7	内外面	ナデ	内外面	暗褐色	口縁に肥厚した三角突帯貼付　体部内外面に黒斑
13-5 04002993	2-3アゼ上層	甕	A	小V	外口径 残存器高	25.9 11.1	内外面	ナデ	内外面	暗褐色～淡褐色	口縁に肥厚した三角突帯貼付　体部外面に黒斑
13-6 04003038	2-3アゼ上層	甕	A	小V 小D	外口径 器高 底径	34.0 35.8 9.1	内外面	ナデ	内外面	淡褐色	口縁に肥厚した三角突帯貼付
13-7 04003094	2-3アゼ上層	甕	A	小V	外口径 器高 残存器高	32.7 39.1 7.1	内外面	ナデ	内外面	橙色	口縁に肥厚した三角突帯貼付　体部外面に黒斑
14-8 04002974	2-3アゼ上層	甕	A	小D 小V	外口径 残存器高	24.9 13.6	内外面	ナデ	内外面	明褐色	口唇に下垂れの突帯貼付　体部内外面に黒斑
14-9 04003042	2-3アゼ上層	甕	A	小O	外口径 残存器高	23.5 19.0	内外面	ナデ	内外面	明黄褐色	口唇に下垂れの突帯貼付　体部内外面に黒斑
14-10 04002971	2-3アゼ上層	甕	A	小O	外口径 器高	25.6 19.0	内外面	ナデ	内外面	にぶい褐色	口唇に下垂れの突帯貼付　体部内外面に黒斑
14-11 04003132	2-3アゼ上層	甕	A	小O 小V	外口径 器高 底径	25.1 23.9 7.2	外面 内面	工具ナデ？ （痕残存） ナデ	内外面	暗褐色～淡褐色	口縁に蒲鉾形の突帯貼付し平坦に成形　体部外面に黒斑　体部内外面に煤付着
14-12 04003179	2-3アゼ上層	甕	A	小V	外口径 残存器高	28.0 16.0	内外面	摩滅	外面 内面	にぶい黄橙色 橙色　淡橙色	口縁に蒲鉾形の突帯貼付し平坦に成形　胴部に2条の突帯貼付

挿図番号 登録番号	出土位置	器種	形態	突帯刻み	法　量（cm）		調　整		色　調		備　考
14-13 92001423	2-3アゼ上層	甕	A	小D 小V	外口径 残存器高	25.0 11.7	内外面	ナデ	外面 内面	淡褐色～暗褐色 淡褐色	口唇に肥厚した突帯を貼付し平坦に成形 胴部に2条の突帯貼付。体部内外面に黒斑
14-14 04002961	2-3アゼ上層	甕	A	小O 小D	外口径 残存器高	35.4 14.0	内外面	ナデ	内外面	淡褐色	口縁に肥厚した三角突帯貼付　胴部に2条の突帯貼付
14-15 04002990	2-3アゼ上層	甕	B	D V	外口径 残存器高	22.9 13.9	内外面	ナデ	内外面	暗褐色～淡褐色	口縁部に肥厚した三角突帯を貼付
14-16 04003016	2-3アゼ上層	甕	C1	小D 小V	外口径 残存器高	22.6 5.4	内外面	ナデ	内外面	淡褐色	口唇中央から外端部にかけて浅い刻みを施す
14-17 04003017	2-3アゼ上層	甕	C2	小D 小V	残存器高	4.5	外面 内面	刷毛目 摩滅	内外面	淡褐色	口縁強く外反し、内面に稜線有　口唇中央から外端部にかけて浅い刻みを施す
14-18 04002995	2-3アゼ上層	甕	d	－	底径 残存器高	6.7 10.4	外面 内面	磨き ナデ	内外面	明黄褐色	上げ底　穿孔有　底面に種子（籾？）圧痕有
14-19 04003011	2-3アゼ上層	甕	e	－	底径 残存器高	6.7 10.4	内外面	ナデ	内外面	明黄褐色	厚手、底面に窪み有り　三角突帯貼付
15-20 92001433	2-3アゼ上層	壷	Bb	－	外口径 器高 残存器高	6.5 9.9 4.0	外面 内面	磨き 磨き、ナデ	内外面	淡褐色	口頸部、頸胴部、胴部に浅い沈線を施す　底部上げ底
15-21 04003020	2-3アゼ上層	壷	B	－	外口径 残存器高	8.1 3.4	内外面	磨き	外面 内面	淡褐色 明黄褐色	口頸部に浅い沈線を施す。沈線は部分的に断絶する。
15-22 04003019	2-3アゼ上層	壷	－	－	残存器高	5.6	外面 内面	磨き ナデ	内外面	褐色	口頸部に突帯貼付
15-23 92000657	2-3アゼ上層	壷	C	－	外口径 器高 底径	7.6 14.6 3.8	外面 内面	磨き 磨き、ナデ	内外面	明褐色	口頸部に突帯貼付　体部内外面黒斑、
15-24 92001425	2-3アゼ上層	壷	－	－	外口径 残存器高	11.6 8.9	内外面	ナデ	外面 内面	暗灰色 淡褐色	口縁部強く折れる　体部外面から口縁部内面にかけて丹塗（黒色）
15-25 04003113	2-3アゼ上層	壷	－	－	残存器高	4.1	外面 内面	磨き ナデ	外面 内面	浅黄色　灰黄色 浅黄橙色	沈線による重弧文帯有
15-26 04003114	2-3アゼ上層	壷	－	－	残存器高	3.4	外面 内面	摩滅 ナデ	外面 内面	にぶい黄橙色 浅黄橙色	突帯貼付による山形文帯有
15-27 04003021	2-3アゼ上層	壷	c1	－	底径 残存器高	8.1 7.6	内外面	ナデ	内外面	明黄褐色	厚手、底面に窪み有り　三角突帯貼付
15-28 04002989	2-3アゼ上層	壷	A	－	外口径 残存器高	21.3 17.7	外面 内面	磨き、ナデ ナデ、刷毛目	内外面	淡褐色	口縁外面下位肥厚させ段を形成　頸部に平行縦沈線文　胴部に無軸羽状文　体部外面黒斑
15-29 04002987	2-3アゼ上層	壷	C	－	外口径 残存器高	18.6 12.9	外面 内面	磨き ナデ	内外面	暗褐色～淡褐色	口頸部、頸胴部に浅い沈線を施す
15-30 04002972	2-3アゼ上層	壷	C	－	外口径 残存器高	17.0 13.5	外面 内面	磨き ナデ	内外面	暗褐色	頸胴部に浅い沈線を施す
15-31 04002980	2-3アゼ上層	壷	C	－	外口径 残存器高	16.8 11.6	内外面	ナデ	内外面	明褐色	口頸部、頸胴部に浅い沈線を施す

挿図番号 登録番号	出土位置	器種	形態	突帯刻み	法　量（cm）		調　整		色　調		備　考
15-32 04002978	2-3アゼ上層	壷	C	－	外口径 残存器高	13.0 10.5	外面 内面	磨き ナデ	内外面	黒褐色	胴部が強く張り出す器形か 頸胴部と胴部に浅い沈線を施す
15-33 04003022	2-3アゼ上層	壷	C	－	外口径 残存器高	15.1 16.3	外面 内面	磨き、ナデ ナデ	内外面	淡褐色	口頸部、胴部に浅い沈線を施す 頸胴部に突帯貼付
15-34 92001426	2-3アゼ上層	壷	C	－	外口径 残存器高	14.8 9.2	外面 内面	磨き 磨き、ナデ	外面 内面	暗褐色 褐色	体部外面から口縁部内面にかけて丹塗(黒色) 頸部に斜格子文を彩文により施文 口頸部に浅い沈線　頸胴部に突帯貼付 口唇部断面に粘土紐接合痕が確認できる
15-35 04002966	2-3アゼ上層	壷	C	－	外口径 器高 底径	13.4 27.0 6.5	外面 内面	ナデ、摩滅 磨き、ナデ	内外面	白褐色	口頸部に浅い沈線　頸胴部に突帯貼付 上げ底　体部外面黒斑
16-36 01005202	2-3アゼ上層	壷	Ac1	－	外口径 器高 底径	17.8 32.9 6.5	外面 内面	磨き 磨き、刷毛目 摩滅	内外面	明黄褐色	頸胴部有段 胴部最大径位置が胴部高上位に位置する
16-37 04002982	2-3アゼ上層	壷	－	－	残存器高	10.4	内外面	摩滅	内外面	暗褐色	胴部強く張り出す 口頸部、頸胴部、胴部に浅い沈線を施す
16-38 04002985	2-3アゼ上層	壷	－	－	残存器高	18.2	外面 内面	磨き ナデ	内外面	明褐色	口頸部に突帯貼付胴部に浅い沈線を施す　体部外面黒斑
16-39 04003005	2-3アゼ上層	壷	b	－	底径 残存器高	6.5 8.7	外面 内面	磨き ナデ	内外面	淡褐色	底面厚手で上げ底底面に窪み　三角突帯貼付　底面に調整工具痕
16-40 04003043	2-3アゼ上層	壷	－	－	底径 残存器高	4.8 7.4	外面 内面	磨き ナデ	外面 内面	淡褐色　明黄褐色 淡褐色	底面厚手でやや突出した形状 底面に調整工具痕
16-41 04003048	2-3アゼ上層	壷	－	－	底径 残存器高	6.6 16.5	外面 内面	磨き ナデ	内外面	明褐色	底面厚手でやや突出した形状 底面に調整工具痕有　体部外面に黒斑
16-42 04002975	2-3アゼ上層	鉢	B	－	外口径 残存器高	16.0 11.6	内外面	ナデ	内外面	赤褐色　灰褐色	内外面に丹塗
16-43 04002952	2-3アゼ上層	鉢	A3	－	残存器高	6.2	内外面	磨き、ナデ	内外面	暗褐色	体部に突帯貼付
16-44 04002976	2-3アゼ上層	高杯	－	－	残存器高	7.5	内外面	摩滅	内外面	白褐色	杯脚接合部に突帯貼付 杯部断面に粘土紐接合痕が確認できる
16-45 04003009	2-3アゼ上層	蓋	－	－	摘み径 残存器高	5.8 6.6	内外面	ナデ	内外面	淡褐色	摘み端部と体部内面に黒斑
16-46 04003007	2-3アゼ上層	蓋	－	－	摘み径 残存器高	6.6 16.8	外面 内面	刷毛目、ナデ ナデ	内外面	白褐色	摘み端部と体部内面に黒斑
16-47 04003034	2-3アゼ上層	蓋	－	－	摘み径 器高 底径	5.4 10.5 24.5	内外面	ナデ	内外面	淡褐色	器高は低く裾拡がりな形状 体部内面に黒斑
16-48 04003035	2-3アゼ上層	蓋	－	－	摘み径 残存器高	6.1 8.3	内外面	ナデ	内外面	淡褐色	摘み頂部平坦
16-49 04003037	2-3アゼ上層	蓋	－	－	摘み径 残存器高	5.7 8.7	内外面	磨き	内外面	黒褐色	摘み端部が外方に張り出す

挿図番号 登録番号	出土位置	器種	形態	突帯刻み	法　量（cm）		調　整		色　調		備　考
17-1 04003186	2-3アゼ中層	甕	C	無刻	外口径 残存器高	25.7 8.8	内外面	ナデ	内外面	灰白色	先端尖った無刻みの三角突帯を口唇部貼付
17-2 04003131	2-3アゼ中上貝層	甕	C	小V	外口径 残存器高	24.6 26.5	内外面	ナデ （工具痕有）	外面 内面	灰白色　にぶい黄橙色 灰白色	下垂れの三角突帯を口唇部に接して貼付する。胴部内外面に煤付着
17-3 04003185	2-3アゼ北半中層	甕	A	V	外口径 残存器高	25.6 14.0	内外面	ナデ	外面 内面	にぶい橙色　灰黄褐色 にぶい橙色　淡橙色	胴部内外面に煤付着　胴部外面に黒斑
17-4 04003104	2-2Bアゼ中央部貝集中部分中層下一括	甕	A	小D 小V	外口径 残存器高	25.9 13.2	内外面	ナデ	外面 内面	浅黄橙色　灰黄褐色 にぶい黄橙色　灰黄褐色	やや幅広で背の高い突帯を貼付 胴部突帯部に黒斑
17-5 04003142	2-2Bアゼ 中層下一括	甕	A	小V	外口径 残存器高	27.3 13.1	内外面	ナデ	外面 内面	橙色　にぶい黄橙色 淡橙色　にぶい黄橙色	口縁部に肥厚した突帯を貼付 口縁部外面に黒斑
17-6 04003119	2-2Bアゼ中央中層 下部一括	甕	C2	V	外口径 残存器高	27.4 17.2	内外面	ナデ	外面 内面	浅黄橙色 淡黄色	口唇面状に成形　外端部刻み
18-7 04002956	2-2Bアゼ中央中層 下部一括	壷	－	－	残存器高	5.1	外面 内面	磨き、ナデ ナデ	外面 内面	黒褐色 暗褐色	外面黒色化　彩文（山形文）の痕跡。 頸部外面に突帯貼付　内面黒斑
18-8 04003103	2-2Bアゼ中央中層 下部一括	壷	－	－	残存器高	4.6	外面 内面	磨き ナデ	外面 内面	褐灰色 にぶい黄橙色　灰黄褐色	口頸部に突帯貼付
18-9 04003154	2-2Bアゼ中央中層 下部一括	壷	－	－	残存器高	2.9	外面 内面	磨き ナデ	外面 内面	明褐色 浅黄橙色	外面に丹塗（赤彩）貝殻重弧文を施す
18-10 04003111	2-3アゼ北半中層	壷	C	－	外口径 残存器高	16.2 14.6	外面 内面	ナデ、磨き ナデ	外面 内面	灰褐色　にぶい黄橙色 浅黄橙色	口頸部・頸胴部・胴部に浅い沈線を施す
18-11 04003106	2-2Bアゼ中央中層 下部一括	壷	C	－	外口径 残存器高	16.1 10.6	外面 内面	磨き 磨き、ナデ	外面 内面	浅黄橙色 にぶい橙色　浅黄橙色	口唇部面状に成形 頸胴部に浅い沈線を施す
18-12 04003159	2-3アゼ北半中層	壷	－	－	残存器高	6.4	外面 内面	磨き 磨き、ナデ	外面 内面	明褐灰色　灰白色 浅黄橙色　灰白色	重弧文の退化した文様帯有
18-13 04003102	2-2Bアゼ中央中層 下部一括	壷	C	－	外口径 残存器高	17.7 10.4	内外面	摩滅	内外面	橙色～浅黄橙色	口唇部を面状に成形 頸部外面に突帯貼付
18-14 92001428	2-3アゼ中層	壷	C	－	外口径 残存器高	17.6 9.9	外面 内面	磨き 磨き、ナデ	外面 内面	明褐色　暗褐色 淡褐色	口唇部を面状に成形　口頸部に沈線　頸胴部に突帯貼付　頸部に彩文による斜格子文を施す。
18-15 92001429	2-3アゼ中・北部中層	壷	b	－	残存器高 底径	21.7 8.2	外面 内面	磨き、ナデ ナデ	内外面	淡褐色～暗褐色	頸胴部間に山形文又は重弧文の退化した文様帯有　胴部外面下位から底面にかけて黒斑
18-16 04003101	2-2Bアゼ中央中層 下部一括	壷	c2	－	残存器高 底径	5.3 7.2	内外面	摩滅	外面 内面	浅黄橙色 にぶい黄橙色　灰黄褐色	上げ底 底面から体部外面と内底部に黒斑
19-1 92001417	5-6アゼ下部	甕	A	小V	外口径 残存器高	19.6 7.6	外面 内面	ナデ ナデ	外面 内面	暗褐色 黄褐色	－
19-2 04003162	5-6アゼ下部	甕	A	小V	外口径 残存器高	22.3 14.3	外面 内面	ナデ ナデ	外面 内面	浅黄橙色　褐色 浅黄橙色	－
19-3 92001440	4-5アゼ下部	甕	A	小V	外口径 残存器高	23.5 11.9	外面 内面	ナデ ナデ	内外面	黄褐色　褐色	－

挿図番号 登録番号	出土位置	器種	形態	突帯刻み	法　量（cm）		調　整		色　調		備　考
19-4 92001414	5-6アゼ下部	甕	A	小V 小O	外口径 残存器高	17.6 9.6	外面 内面	ナデ 摩滅	内外面	暗黄褐色	口唇と平坦に突帯貼付
19-5 04003160	5-6アゼ下部	甕	A	V	外口径 残存器高	22.8 11.5	外面 内面	ナデ ナデ	外面 内面	浅黄橙色　橙色 黄橙色　灰褐色	口唇と平坦に断面蒲鉾形の突帯貼付
19-6 04003177	6-7アゼ下部	甕	A	小V	外口径 残存器高	22.8 11.8	外面 内面	ナデ ナデ	外面 内面	浅黄橙色　にぶい褐色 灰白色　にぶい橙色	口唇部を摘み出して突帯状に仕上げた可能性有　胴部内外面に煤付着
19-7 04003176	6-7アゼ下部	甕	B	V	外口径 残存器高	19.9 7.1	外面 内面	ナデ ナデ	外面 内面	灰白色　灰褐色 浅黄橙色	体部外面に黒斑
19-8 04003127	4-5アゼ下部	甕	B	小V	外口径 残存器高	22.0 11.3	外面 内面	ナデ ナデ	外面 内面	暗褐色 黄褐色	－
19-9 04003127	2-3アゼ下部 （貝層より下部）	甕	C1	V	外口径 残存器高	23.0 9.8	外面 内面	摩滅 摩滅	外面 内面	灰白色　にぶい橙色 灰白色　にぶい黄橙色 淡褐色	口唇先端部に浅小な刻み　膨らみを有する体部　内面に煤付着
19-10 92001413	5-6アゼ下部	甕	C2	小V	外口径 残存器高	23.3 7.0	外面 内面	ナデ ナデ	内外面	黄褐色	口縁部強く外反する　口縁内面に稜有
19-11 92001441	4-5アゼ下部	甕	C2	小V V	外口径 残存器高	23.4 17.8	外面 内面	刷毛目？ 摩滅	内外面	黄褐色	口縁部短く外反　口縁内面に稜有
19-12 04003182	4-5アゼ下部	甕	b	－	底径 残存器高	7.8 5.9	外面 内面	摩滅 ナデ	外面 内面	浅黄橙色 明褐灰色	体部内面に煤付着
19-13 04003128	2-3アゼ （貝層より下部）	甕	c	－	底径 残存器高	7.6 13.0	内外面	摩滅	外面 内面	にぶい黄橙色 にぶい橙色	底面穿孔
19-14 04003147	5-6アゼ下部	甕	d	－	底径 残存器高	7.3 5.0	外面 内面	ナデ ナデ	外面 内面	灰白色 明褐灰色	底面穿孔
20-15 04003130	6-7アゼ下部	壷	A	－	外口径 残存器高	7.9 7.7	外面 内面	緻密な磨き ナデ	外面 内面	明褐色～褐灰色　橙色 灰白色	外面から内面肩部にかけて丹塗（赤彩の痕跡が部分的に残存）　肩部有段
20-16 04003138	6-7アゼ下部	壷	b	－	底径 残存器高	5.2 9.7	外面 内面	磨き ナデ	内外面	橙色～にぶい橙色	肩部が胴部最大径位置にあり、鋭角に屈曲し直接頸部に接合する　肩部と頸部に沈線
20-17 01005209	6-7アゼ下部	壷	A	－	外口径 残存器高	8.2 8.3	外面 内面	摩滅 ナデ	内外面	褐色～褐灰色	肩部に凹線　頸部に沈線
20-18 04003152	5-6アゼ下部	壷	B	－	外口径 残存器高	12.6 6.6	内外面	ナデ	外面 内面	灰色 浅黄橙色	頸部に沈線
20-19 04003151	5-6アゼ下部	壷	－	－	残存器高	4.0	内外面	ナデ	外面 内面	橙色 褐灰色	肩部に重弧文帯
20-20 04003167	アゼ下部	壷	－	－	残存器高	3.8	外面 内面	磨き ナデ	外面 内面	にぶい橙色 明褐灰色	肩部破片　貝殻重弧文を施す
20-21 04003166	6-7アゼ下部	壷	無頸	－	残存器高	4.0	外面 内面	磨き 摩滅	内外面	にぶい黄橙色	無頸壷。肩部に細沈線による重弧文。
20-22 04003137	6-7アゼ下部	壷	B	－	外口径 残存器高	17.4 8.6	外面 内面	磨き 磨き	外面 内面	にぶい橙色 浅黄橙色	頸部に沈線

挿図番号 登録番号	出土位置	器種	形態	突帯刻み	法　量（cm）		調　整		色　調		備　考
20-23 04003135	6-7アゼ下部	壷	B	−	外口径 残存器高	15.8 10.1	外面 内面	磨き 磨き	内外面	にぶい橙色	頸部に沈線
20-24 92001403	6-7アゼ下部	壷	B	−	外口径 残存器高	20.5 6.4	外面 内面	磨き ナデ	内外面	にぶい黄橙色	口唇部外面に黒斑
20-25 04003134	6-7アゼ下部	壷	B	−	外口径 残存器高	27.4 6.6	外面 内面	磨き 磨き、ナデ	外面 内面	浅黄色 浅黄橙色	口唇部外端に粘土帯貼付
20-26 92001439	4-5アゼ下部	壷	−	−	残存器高	6.7	外面 内面	磨き ナデ	内外面	明褐色	山形文帯。横位に赤色彩文の可能性有
20-27 04003126	4-5アゼ下部	壷	−	−	残存器高	7.5	外面 内面	磨き ナデ	外面 内面	にぶい橙色　明褐灰色 灰白色　にぶい橙色	肩部に重弧文帯　胴部に明瞭黒斑
20-28 04003129	4-5アゼ下部	壷	−	−	残存器高	9.5	外面 内面	磨き ナデ	外面 内面	にぶい褐色～灰褐色 灰褐色	頸部に沈線　肩部に重弧文。肩部上位に縦位の彩文痕跡
20-29 04003150	5-6アゼ下部	壷	−	−	残存器高	6.6	外面 内面	磨き ナデ	内外面	浅黄橙色	肩部に沈線
20-30 04003123	4-5アゼ下部	壷	−	−	残存器高	13.6	外面 内面	磨き、摩滅 ナデ	内外面	灰白色	肩部に沈線
20-31 04003148	5-6アゼ下部	壷	a	−	底径 残存器高	11.4 2.3	外面 内面	ナデ 剥離	外面 内面	浅黄橙色 灰色	底面に葉脈痕残存
20-32 04003206	6-7アゼ下部	壷	a	−	底径 残存器高	7.1 3.3	外面 内面	磨き ナデ	外面 内面	浅黄橙色　灰白色 灰色	底面に磨き調整
20-33 04003139	6-7アゼ下部	壷	b	−	底径 残存器高	6.9 4.6	外面 内面	ナデ 摩滅	外面 内面	浅橙色 浅黄橙色　浅橙色	−
20-34 04003203	6-7アゼ下部	壷	c1	−	底径 残存器高	8.3 3.8	外面 内面	磨き 剥離	外面 内面	にぶい橙色 橙色	−
21-35 04003161	5-6アゼ下部	鉢	−	−	残存器高	4.2	内外面	緻密な磨き	外面 内面	橙褐色 黒褐色	体部屈曲　口唇部面状に成形　内面黒色化の可能性有
21-36 04003165	6-7アゼ下部	鉢	−	−	外口径 残存器高	21.8 3.6	内外面	緻密な磨き	外面 内面	灰白色　橙色 灰白色	口縁部及び体部僅かに屈曲　口唇部面状に成形
21-37 04003136	6-7アゼ下部	鉢	−	−	残存器高	4.9	内外面 口唇～口縁外面	緻密な磨き ナデ	外面 内面	黒色 鈍い黄橙色	口縁部外反　外面黒色化の可能性有
21-38 92001436	4-5アゼ下部	鉢	−	−	外口径 残存器高	28.8 13.9	内外面	磨き、ナデ	外面 内面	淡褐色 明褐色　黒褐色	口縁部外反　内外面丹塗（赤彩）痕残存　内面黒色化の可能性有
21-39 04003141	6-7アゼ下部	鉢	−	−	外口径 残存器高	15.0 5.1	外面 内面	摩滅、磨き？ ナデ	外面 内面	にぶい黄橙色 灰白色	−
21-40 04003164	6-7アゼ下部	鉢	−	−	外口径 残存器高	28.7 10.9	内外面	磨き	外面 内面	明褐灰色 浅黄橙色	口唇部面状に成形
21-41 92001438	4-5アゼ下部	鉢	−	−	外口径 残存器高	33.4 6.0	内外面	ナデ	内外面	明褐色	体部に断面三角形の突帯を弧状に貼付

挿図番号 登録番号	出土位置	器種	形態	突帯刻み	法　量（cm）		調　整		色　調		備　考
21-42 04003122	4-5アゼ下部	鉢	－	－	外口径 器高 脚径	9.0 8.3 4.5	外面 内面	（体部）ナデ （脚部）磨き ナデ	外面 内面	灰白色 黒褐色 灰白色	脚台付
21-43 04003121	4-5アゼ下部	高杯	－	－	残存器高	10.3	外面 内面	磨き？ 摩滅	外面 内面	灰白色～灰褐色 灰白色～明褐灰色	杯部内面に二次焼成痕有
21-44 04003183	4-5アゼ下部	高杯	－	－	残存器高 脚径	10.2 10.3	外面 内面	磨き 摩滅	外面 内面	灰白色　灰色 灰白色	脚裾端部に粘土帯を貼付 脚裾端部に黒斑
21-45 04003184	4-5アゼ下部	高杯	－	－	残存器高 脚径	11.8 11.3	外面 内面	磨き 摩滅	内外面	灰白色	－
21-46 04003054	5-6アゼ下部	高杯	－	－	残存器高	9.2	内外面	磨き	内外面	淡褐色	脚部外面下位に黒斑
21-47 04003174	6-7アゼ下部	高杯	－	－	残存器高	5.3	外面 内面	磨き 剥離	外面 内面	にぶい赤橙色～褐灰色 明赤灰色～赤灰色	－
21-48 04003175	6-7アゼ下部	高杯	－	－	残存器高	4.8	外面 内面	摩滅 ナデ	外面 内面	浅黄橙色　淡橙色 赤橙色	－
21-49 0400314	5-6アゼ下部	高杯	－	－	残存器高	4.7	内外面	ナデ	外面 内面	にぶい橙色 にぶい黄橙色	－
21-50 04003173	6-7アゼ下部	高杯	－	－	残存器高 脚径	10.1 15.8	外面 内面	磨き ナデ	外面 内面	淡橙色 淡橙色～淡赤橙色	－
21-51 04003207	6-7アゼ下部	蓋	－	－	摘み径 残存器高	5.7 5.2	内外面	ナデ 磨き	内外面	浅黄橙色　灰褐色	摘み端部外方に張り出す

表13　SD0001環壕出土石器一覧表

石庖丁

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	石　材	法　量（cm、g）									出土位置	部　位	備　考
					長	幅	最大厚	孔　端	内　径	外　径	孔　間	背　孔	重　量			
1	－	25-1	1-1	片岩	(9.2)	6.8	1.1	6.8	0.6	1.8	2.8	2.7	(106.6)	1アゼ北上部		背部：Ⅲ類　孔：B-2類
2	－	25-2	1-2	赤紫色泥岩	8.2	4.5	0.7	3.4/2.4	0.3/0.4	0.7/0.7	2.3	1.1/1.1	45.3	1アゼ北上部		背部：Ⅱ類　孔：B-1類
3	－	25-3	1-3	赤紫色泥岩	(4.4)	3.8	0.7	－	0.4	0.7	2.3	1.2	(19.7)	2～3アゼ上面		背部：Ⅱ類　孔：B-1類
4	－	25-4	1-4	赤紫色泥岩	(7.1)	3.7	0.6	－	0.4	1	3.4	1.6	(23.7)	2～3アゼ上部		背部：Ⅲ類　孔：A類
5	－	25-5	1-5	粘板岩ホルンフェルス	(4.8)	(4.0)	0.7	4.2	0.6	1.4	－	1.8	(14.0)	1アゼ北上部		背部：Ⅰ類　孔：B-1類
6	－	25-6	1-6	粘板岩ホルンフェルス	(5.6)	5.0	0.6	－	0.3/0.3 0.6/0.6	1.0/1.0 1.2/1.0	2.5 5.1	1.6 2.6	(26.3)	1アゼ北上部		背部：Ⅱ類　孔：B-1・B-2類
7	04002119	25-7	1-7	粘板岩ホルンフェルス	(4.8)	(4.5)	0.7	4.5	0.5	1.1	－	2.3	(20.5)	6～7アゼ下		背部：Ⅰ類　孔：B-2類
8	－	25-8	1-8	粘板岩ホルンフェルス	(6.5)	(5.5)	0.6	－	0.6	0.9	2.9	2.5	(27.2)	1アゼ北上部		背部：Ⅰ類　孔：B-1類
9	04002105	25-9	1-9	粘板岩ホルンフェルス	(5.3)	(5.1)	0.8	6.0	－	－	－	2.1	(31.7)	5～6アゼ上部		背部：Ⅱ類
10	04002098	26-10	1-10	粘板岩ホルンフェルス	(7.3)	(5.5)	(0.9)	6.4	0.7	1.5	－	2.2	(43.5)	4～5アゼ上部		背部：Ⅰ類　孔：B-2類
11	04002067	26-11	1-11	粘板岩ホルンフェルス	(3.9)	(6.7)	(0.7)	－	－	－	－	－	(20.6)	2～2Bアゼ中層下		背部：Ⅰ類
12	－	26-12	1-12	粘板岩ホルンフェルス	(14.3)	9.2	0.4	－	0.5	0.8	－	2.6	(81.1)	2～2Bアゼ間中央部南側　中層一括(貝群内)		背部：Ⅰ類　孔：B-1類
13	－	26-13	2-13	粘板岩ホルンフェルス	(7.7)	3.5	0.7	7.5	0.5	1	－	1.1	(28.8)	3～4アゼ		背部：Ⅰ類　孔：B-2類
14	04002097	26-14	2-14	粘板岩ホルンフェルス	(3.6)	(2.7)	0.5	－	－	－	－	－	(5.2)	4～5アゼ上部		背部：Ⅰ類

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	石　材	法　量（cm、g）									出土位置	部　位	備　考
					長	幅	最大厚	孔　端	内　径	外　径	孔　間	背　孔	重　量			
15	－	26-15	2-15	粘板岩ホルンフェルス	(3.8)	(5.7)	0.8	－	－	－	－	－	(46.9)	2～3アゼ上部		背部：Ⅰ類
16	－	－	－	粘板岩ホルンフェルス	(4.5)	(3.5)	0.5	－	－	－	－	－	(10.8)	2～2Bアゼ間　北半部中央下部一括	背部付近	背部は若干外湾する。表面には横方向の研磨痕が明瞭に残る。表面の色調は黒色で褐色の細かい斑点がみられる。
17	－	－	－	粘板岩ホルンフェルス	(7.1)	(3.3)	0.5	－	－	－	－	－	(12.1)	不明	刃部付近	刃縁が約4cm残存。刃部は左右対称の両刃。表面の色調は灰色。
18	－	－	－	粘板岩ホルンフェルス	(5.5)	(3.0)	(0.3)	－	－	－	－	－	(8.3)	1アゼ北上部	破片	残存長5.5cmの破片。表面の色調は黄灰色。
19	－	－	－	粘板岩ホルンフェルス	(4.0)	(2.7)	(0.5)	－	－	－	－	－	(6.3)	4～5アゼ上部	刃部付近	刃縁が約4cm残存。刃部は左右対称の両刃。表面の色調は黄灰色。

石　鎌

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	石　材	法　量（cm、g）				出土位置	部　位	備　考
					長	最大幅	最大厚	重　量			
20	04002078	27-20	2-20	細粒安山岩	(5.3)	3.5	1.0	(36.9)	2～3アゼ上部		－
21	－	27-21	2-21	粘板岩ホルンフェルス	(6.2)	(4.4)	1.2	(46.3)	2Aアゼ第3層		－
22	04002077	27-22	2-22	粘板岩ホルンフェルス	(10.9)	4.0	1.0	(65.9)	2～3アゼ上部		－
23	04002131	27-23	2-23	粘板岩	(14.2)	5.6	1.4	(179.7)	2～3アゼ上部		－

石　剣

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	石　材	法　量（cm、g）				出土位置	部　位	備　考
					長	最大幅	最大厚	重　量			
24	04002124	28-24	2-24	粘板岩ホルンフェルス	(4.7)	(1.8)	(0.4)	(5.2)	2～3アゼ上層No6(下)(約50cm下)		－
25	04002023	28-25	2-25	粘板岩ホルンフェルス	(6.9)	3.7	0.7	(25.0)	1アゼ北上部		－

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	石　材	法　量（cm、g）				出土位置	部　位	備　考
					長	最大幅	最大厚	重　量			
26	04002024	28-26	2-26	珪質層灰岩	(6.5)	4.6	0.7	(36.5)	2～3アゼ上部		－

石　鏃

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	石　材	法　量（cm、g）				出土位置	部　位	備　考
					長	最大幅	最大厚	重　量			
27	04002073	28-27	3-27	珪質粘板岩	3.8	2.0	0.2	2.5	2～3アゼ上層		－
28	04002033	28-28	3-28	サヌカイト	(3.9)	1.2	0.4	(2.3)	2～3アゼ上部		－
29	04002030	28-29	3-29	サヌカイト	4.5	1.4	0.6	2.6	2～3アゼ上層No.38 (40cm下)		－
30	04002034	28-30	3-30	サヌカイト	4.9	1.1	0.6	3.2	2～3アゼ上部		－
31	04002032	28-31	3-31	サヌカイト	(6.0)	1.5	0.4	(3.6)	2～2Bアゼ中層下		－
32	04002025	28-32	3-32	サヌカイト	3.3	2.3	0.5	1.9	2～3アゼ		－
33	04002027	28-33	3-33	サヌカイト	(2.6)	1.6	0.6	(1.3)	2～3アゼ上部		－
34	04002031	28-34	3-34	サヌカイト	2.4	2.0	0.3	1.1	2～2Bアゼ中央部中層		－
35	04002028	28-35	3-35	サヌカイト	(2.3)	1.9	0.5	(1.9)	2～2Bアゼ中央部中層		－
36	04002026	28-36	3-36	サヌカイト	2.1	1.8	0.3	1.0	不明		－
37	04002029	28-37	3-37	黒曜石	(2.3)	(1.5)	0.5	(1.3)	2～2Bアゼ中央部中層		－

太形蛤刃石斧

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	石　材	法　量（cm、g）				出土位置	部　位	備　考
					長	最大幅	最大厚	重　量			
38	04002037	29-38	4-38	カンラン石玄武岩	21.0	6.8	3.5	954.9	1アゼ北部		破損：Ⅰb類　研磨：AⅠ類
39	04002110	29-39	4-39	カンラン石玄武岩	(11.1)	6.7	2.9	(345.0)	5～6アゼ下部		破損：Ⅱ類　研磨：AⅡ類
40	04002128	29-40	4-40	カンラン石玄武岩	(11.4)	7.1	4.9	(606.2)	1アゼ北上部		破損：Ⅱ類　研磨：D類？
41	04002127	30-41	4-41	カンラン石玄武岩	(17.2)	(6.8)〈7.0〉	4.5	(810.5)	2～3アゼ上部		破損：Ⅱ類　研磨：CⅡ類
42	04002120	30-42	4-42	カンラン石玄武岩	(7.8)	(6.1)〈6.4〉	3.6	(251.5)	6～7アゼ下部		破損：Ⅱ類　研磨：BⅠ類
43	04002061	30-43	4-43	カンラン石玄武岩	(7.5)	7.4	4.2	(327.1)	1アゼ北上部		破損：Ⅱ類　研磨：BⅠ類
44	04002129	30-44	5-44	カンラン石玄武岩	(11.9)	7.5	5.4	(773.8)	2Aアゼ第3層		破損：Ⅳ類　研磨：AⅡ類
45	04002082	30-45	5-45	カンラン石玄武岩	(8.7)	(7.1)〈7.3〉	(4.3)〈4.8〉	(424.8)	2～3アゼ上部		破損：Ⅳ類　研磨：AⅠ類
46	04002083	31-46	5-46	カンラン石玄武岩	(4.8)	(7.2)〈8.0〉	5.1	(345.1)	2～3アゼ上部		破損：Ⅳ類　研磨：AⅠ類
47	04002117	31-47	5-47	カンラン石玄武岩	(9.8)	6.3	4.0	(295.6)	6～7アゼ		破損：Ⅳ類　研磨：AⅠ類
48	04002134	32-48	5-48	ヒン岩	(12.9)	6.7	3.8	(495.3)	4～5アゼ上部		破損：Ⅱ類　研磨：DⅡ類
49	04002075	32-49	5-49	細粒砂岩③	(14.1)	6.3	4.4	(603.2)	2～3アゼ上部		破損：Ⅱ類　研磨：DⅡ類
50	04002112	32-50	5-50	細粒砂岩②	(10.8)	6.9	(3.4)	(379.1)	5～6アゼ下部		破損：Ⅳ類　研磨：CⅡ類
51	04002059	32-51	6-51	細粒砂岩③	(8.1)	(6.2)	3.4	(206.6)	3～4アゼ		破損：Ⅳ類　研磨：D類？

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	石　材	法　量（cm、g）				出土位置	部　位	備　考
					長	最大幅	最大厚	重　量			
52	04002113	32-52	6-52	細粒砂岩④	(5.3)	7.8	3.1	(169.5)	5～6アゼ下部		破損：Ⅳ類　研磨：ＤＩ類
53	04002107	32-53	6-53	細粒砂岩②	(7.0)	7.4	(1.8)	(132.2)	5～6アゼ上部		破損：Ⅴ類　研磨：D類？
54	04002132	33-54	6-54	細粒砂岩①	(14.2)	6.1	3.2	(316.5)	2～3アゼ上部		破損：Ⅱ類　研磨：DⅡ類
55	04002109	33-55	6-55	細粒砂岩①	(7.7)	5.7	3.3	(227.0)	5～6アゼ下部		破損：Ⅱ類　研磨：AⅡ類
56	04002091	33-56	6-56	細粒砂岩③	(5.3)	(6.5)	(3.6)	(152.6)	3～4アゼ		破損：Ⅲ類
57	04002085	33-57	6-57	細粒砂岩①	(3.2)	7.7	(3.1)	(59.4)	2～3アゼ上部貝層		破損：Ⅲ類
58	04002064	33-58	6-58	細粒砂岩①	(6.4)	(5.4)	(3.2)	(76.1)	1アゼ北下部		破損：Ⅴ類
59	－	－	－	細粒砂岩④	(5.5)	(4.4)	(1.5)	(38.4)	不明	Ⅴ類（刃部）	刃縁は約3cmが残存。表面には研磨痕が明瞭に残っており、刃縁付近では長軸に対して直交方向に、それ以外の部分は長軸に対してほぼ平行方向に研磨が行われている。表面の色調は黄褐色。
60	－	－	－	カンラン石玄武岩	(4.7)	(1.8)	(2.4)	(17.6)	3～4アゼ上部	Ⅴ類（胴部側縁部）	長軸に対してほぼ平行する研磨痕が明瞭に残る。表面の色調は明灰色。
61	－	－	－	細粒砂岩②	(8.7)	(5.2)	(1.0)	(58.0)	1アゼ北上部	Ⅴ類（胴部表面）	胴部の主面表面の破片。表面には全体に敲打痕が残る。表面の色調は青灰色。
62	－	－	－	カンラン石玄武岩	(6.5)	(3.8)	(2.2)	(57.2)	5～6アゼ下部	Ⅴ類（刃部）	刃縁は残っていない。側面部は面取りして稜をなす。表面には不定方向への研磨痕が明瞭に残る。表面の色調は明灰色。
63	－	－	－	細粒砂岩③	(4.3)	6.3	(3.3)	(206.4)	1アゼ北上部	Ⅳ類（胴部）	主面・側縁は研磨を行わず敲打整形の痕跡が残る。表面の色調は灰褐色。研磨：ＤＩ類
64	－	－	－	細粒砂岩④	(4.0)	6.6	3.9	(131.8)	2～3アゼ上部貝層	Ⅳ類（胴部）	主面、側縁ともに研磨を行わず敲打整形の痕跡がそのまま残る。表面の色調は黄褐色で、黒色の斑点がみられる。
65	－	－	－	カンラン石玄武岩	(6.6)	(4.7)	(1.3)	(46.6)	2～3アゼ上部	Ⅴ類（胴部）	研磨痕が残る表面部がわずかに残る。表面の色調は明灰色。

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	石　材	法　量（cm、g）				出土位置	部　位	備　考
					長	最大幅	最大厚	重　量			
66	－	－	－	カンラン石玄武岩	(3.2)	(5.9)	(1.9)	(42.5)	4～5アゼ上部	V類（胴部表面）	研磨痕が明瞭に残る。表面の色調は明灰色。
67	－	－	－	カンラン石玄武岩	(4.3)	(2.7)	(4.3)	(61.3)	4～5アゼ上部	V類（胴部側縁部）	研磨痕が明瞭に残る。表面の色調は明灰色。
68	－	－	－	細粒砂岩③	(7.3)	(4.1)	(1.8)	(67.1)	5～6アゼ上部	V類（胴部側縁部）	主面には研磨を行うが、側縁部は敲打整形の痕跡がそのまま残る。表面の色調は灰褐色。
69	－	－	－	カンラン石玄武岩	(4.0)	(5.8)	(0.8)	(28.9)	6～7アゼ下部	V類（刃部表面）	刃縁が約3cm残存。表面には不定方向への研磨痕が明瞭に残る。表面の色調は明灰色。
70	－	－	－	カンラン石玄武岩	(11.4)	6.7	(1.8)	(167.2)	5～6アゼ下部	V類（基端～胴部）	基部は円基。側縁部は研磨を行わず敲打整形の痕跡がそのまま残る。表面の色調は明灰色。
71	－	－	－	カンラン石玄武岩	(5.1)	(5.3)	(1.4)	(46.0)	2～3アゼ上部貝層	V類（刃縁～側面部）	刃縁は約4cmが残存。側面部は面取りして稜をなす。研磨痕が明瞭に残る。表面の色調は明灰色。
72	－	－	－	細粒砂岩③	(13.8)	(8.0)	(1.3)	(179.0)	2Cアゼ6層	V類（胴部主面）	胴部の片側主面表面の破片。主面の2/3は敲打整形の痕跡のみが明瞭に残り、残り1/3には敲打整形の後の研磨痕が残る。残存幅が広いことから復元すれば大型の石斧になると思われる。表面の色調は暗灰緑色。研磨：ＤＩ類
73	－	－	－	カンラン石玄武岩	(5.3)	(4.8)	(3.0)	(90.4)	2～3アゼ上部	II類（基部）	基部は尖基。主面・側縁ともに研磨を行うがやや粗雑。表面の色調は明灰色。研磨：ＡII類
74	－	－	－	細粒砂岩④	(2.1)	(6.7)	3.5	(40.4)	6～7アゼ下部	V類（胴部）	主面には敲打整形の痕跡が残る。側縁部には研磨痕が残る。表面の色調は黄灰色。
75	－	－	－	細粒砂岩②	(11.4)	(8.0)	(1.6)	(153.4)	5～6アゼ下部	V類（胴部～刃部）	側縁部は研磨を行わず敲打整形の痕跡がそのまま残る。表面の色調は暗青灰色。研磨：ＤＩ類
224	－	－	－	カンラン石玄武岩	3.1	1.7	3.2	19.8	4～5アゼ上部	V類（側縁部）	表面には敲打痕のみ残る。表面の色調は灰色。

縄文系石斧

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	石　材	法　量（cm、g）				出土位置	部　位	備　考
					長	最大幅	最大厚	重　量			
76	04002076	33-76	6-76	蛇紋岩	8.1	4.3	2.5	(122.6)	2～3アゼ上部		－

柱状片刃石斧

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	石　材	法　量（cm、g）				出土位置	部　位	備　考
					長	最大幅	最大厚	重　量			
77	－	34-77	7-77	砂岩	(8.3)	(5.0)	(2.4)	(165.5)	5～6アゼ上部		－
78	04002102	34-78	7-78	珪質層灰岩	(9.4)	(1.9)	4.1	(133.8)	4～5アゼ下部		－
79	－	－	－	砂岩	(4.3)	(3.8)	2.0	(56.1)	2～3アゼ上部	前主面～刃部	後主面は研磨して平坦に仕上げる。前主面は研磨を行わず敲打整形の痕跡が明瞭に残る。前主面と刃部の間の稜線は明瞭ではない。側面部は外湾する。表面の色調は灰褐色。
80	04002058	－	－	珪質層灰岩	(4.5)	(2.4)	2.7	(43.1)	1アゼ北上部	基部	残存部の全ての面を研磨して平坦に仕上げる。層灰岩の葉理が長軸に対して若干斜めに入る。表面の色調は乳白色。
81	－	－	－	珪質層灰岩	(4.0)	(3.9)	(0.7)	(14.6)	1アゼ北下部	破片	前主面か後主面と推定される研磨された部分がごくわずかに残存。表面の色調は緑灰色。

扁平片刃石斧

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	石　材	法　量（cm、g）				出土位置	部　位	備　考
					長	最大幅	最大厚	重　量			
82	04002074	34-82	7-82	珪質層灰岩	(5.6)	(2.9)	1.4	(36.7)	2～3アゼ上部		－
83	04002093	34-83	7-83	珪質層灰岩	8.2	2.5	0.8	32.6	3～4アゼ上部		－
84	04002096	34-84	7-84	珪質層灰岩	7.0	(1.3)	(0.7)	(14.3)	4～5アゼ		－
85	04002092	34-85	7-85	珪質層灰岩	5.3	2.7	1.1	31.0	3～4アゼ上部		－
86	04002095	34-86	7-86	珪質凝灰岩	5.3	3.4	0.7	20.1	4～5アゼ		－
87	04002060	34-87	7-87	粘板岩	4.2	1.9	0.8	8.9	1アゼ北上部		－
88	04002079	34-88	7-88	粘板岩	(4.4)	2.2	0.9	(15.7)	2～3アゼ上部		－

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	石　材	法　量（cm、g）				出土位置	部　位	備　考
					長	最大幅	最大厚	重　量			
89	04002101	34-89	7-89	粘板岩	(6.5)	7.4	1.1	(78.4)	4～5アゼ下部		－
90	04002108	34-90	7-90	珪質層灰岩	(7.4)	3.7	1.9	(111.7)	5～6アゼ上部		－

紡錘車

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	石　材	法　量（cm、g）				出土位置	部　位	備　考
					長	孔　径	最大厚	重　量			
91	04002094	35-91	7-91	片岩	5.7	0.7	0.6	(17.4)	3～4アゼ下部		－
92	04002072	35-92	7-92	粘板岩ホルンフェルス	5.0	0.7	0.8	(35.7)	2～3アゼ		－
93	04002088	35-93	7-93	細粒砂岩	5.7	0.7	0.5	(12.7)	2～3アゼ　貝層下部		－

磨石・敲石

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	石　材	法　量（cm、g）				出土位置	部　位	備　考
					長	最大幅	最大厚	重　量			
94	04002099	35-94	8-94	ヒン岩	8.8	8.4	4.2	485.8	4～5アゼ上部		－
95	－	－	－	細粒砂岩	(7.7)	(3.4)	3.7	(106.2)	6～7アゼ下部	－	大きく破損。長楕円形の礫を素材としたものか。両面に敲打痕と磨り面が認められる。
96	－	－	－	アプライト質花崗岩	10.2	9.9	7.4	1390.2	2～3アゼ上層 No.53～56下	－	砥石の可能性もある。平坦な一面に光沢が見られ使用面と考えられる。
97	－	－	－	アプライト質花崗岩	17.2	10.3	7.7	2405.8	2～3アゼ上部	－	大型の楕円礫を素材とし、平坦な二面を磨り面として使用している。磨耗は著しい。
98	－	－	－	アプライト質花崗岩	7.5	5.4	3.5	209.0	3～4アゼ	－	小型楕円礫を素材とし、両端を中心に敲打痕がみられる。敲打痕の一部に赤色顔料が付着している。
99	－	－	－	ヒン岩	(9.3)	(7.8)	(5.9)	(484.9)	3～4アゼ	－	大きく破損。磨り面はかなり磨耗している。

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	石　材	法　量（cm、g）				出土位置	部　位	備　考
					長	最大幅	最大厚	重　量			
100	04002135	35-100	8-100	ヒン岩	(6.7)	(6.9)	8.0	(481.1)	5～6アゼ上部		－
101	－	－	－	ヒン岩	(5.9)	(4.0)	5.0	(143.5)	4～5アゼ上部	－	大きく破損。一部に磨り面が残存。
102	－	－	－	花崗岩	(7.9)	(5.6)	(4.7)	(279.5)	2～3アゼ上層No.67	－	磨耗したと考えられる滑らかな箇所があり、磨面として使用された可能性がある。端部の敲打痕はやや不明瞭。中央の凹みは非人為的。
103	－	－	－	花崗岩	(9.2)	5.6	5.3	(402.7)	5～6アゼ下部	－	両端に敲打痕がみられる。
104	－	－	－	ヒン岩	(9.0)	(2.4)	(4.9)	(114.6)	2～3アゼ上部	－	側縁部の一部のみ残存。一部に磨り面あり。

石皿

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	石　材	法　量（cm、g）				出土位置	部　位	備　考
					長	最大幅	最大厚	重　量			
105	－	－	－	安山岩	(10.5)	(7.9)	5.7	(668.9)	2～3アゼ上層 No.13	－	両面とも使用のために平滑になっているが、大きく破損している。側面は全て剥離面で構成されており、意図的に破砕された可能性もある。

スクレイパー・MF・RF・R/MF

石器番号	遺　物登録番号	挿図番号	図版番号	材　質	法　量（cm、g）				長幅比	打面※	剥片形状	出土位置	部　位	備　考
					長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)						
106	04002130	39-106	8-106	サヌカイト	5.9	11.3	2.0	114.2	0.5	礫	横長	2～3アゼ		スクレイパー。
107	04002084	39-107	8-107	サヌカイト	6.1	6.2	1.0	44.7	1.0	礫	1対1	2～3アゼ上部貝層		〃
108	04002118	39-108	8-108	サヌカイト	7.2	7.0	1.8	74.6	1.0	礫	1対1	6～7アゼ		〃
109	04002137	40-109	8-109	サヌカイト	5.6	8.4	2.8	27.7	0.7	－	－	1アゼ北上部		〃
110	04002068	40-110	8-110	サヌカイト	4.9	7.3	1.9	80.7	0.7	礫	横長	2～3アゼ		〃

石器番号	遺物登録番号	挿図番号	図版番号	材質	法量（cm、g）				長幅比	打面※	剥片形状	出土位置	部位	備考
					長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)						
111	04002103	40-111	10-111	サヌカイト	5.2	7.8	1.5	52.3	0.7	－	横長	4～5アゼ下部		RF。
112	04002063	41-112	10-112	サヌカイト	4.5	5.7	1.1	30.4	0.8	礫	横長	1アゼ北下部		スクレイパー。
113	04002069	41-113	10-113	サヌカイト	4.5	5.6	1.0	24.8	0.8	礫?	横長	2～3アゼ		〃
114	04002140	41-114	10-114	サヌカイト	6.7	5.0	1.5	42.9	1.3	－	－	5～6アゼ下部		〃
115	04002139	41-115	10-115	サヌカイト	5.2	4.3	1.5	30.1	1.2	礫	縦長	6～7アゼ下部		〃
116	04002087	41-116	10-116	サヌカイト	4.1	2.8	1.1	8.4	1.4	－	－	2～3アゼ上部貝層		〃
117	04002090	41-117	10-117	サヌカイト	3.4	4.2	1.3	15.6	0.8	－	横長	2～2Bアゼ西北半部 下層上部　一括		〃
118	04002100	41-118	10-118	サヌカイト	1.7	2.5	0.6	2.8	0.7	－	横長	4～5アゼ上部		〃
119	04002070	42-119	10-119	サヌカイト	6.2	5.4	0.9	23.1	1.1	礫	縦長	2～3アゼ		〃
120	04002057	42-120	10-120	サヌカイト	4.7	5.6	1.7	38.9	0.8	?	横長	1アゼ北上部		〃
121	04002066	42-121	10-121	サヌカイト	3.4	5.6	1.1	20.5	0.6	－	横長	2～2Bアゼ北半部 中層下部一括		〃
122	04002115	42-122	10-122	サヌカイト	5.0	4.9	2.0	52.0	1.0	－	両極剥片	5～6アゼ下部		〃
123	04002122	42-123	10-123	黒曜石	4.0	2.3	0.8	5.6	1.7	礫	縦長	6～7アゼ下部		〃
124	04002121	43-124	10-124	サヌカイト	3.7	5.4	1.5	24.5	0.7	平坦?	横長	6～7アゼ下部		〃

石器番号	遺物登録番号	挿図番号	図版番号	材質	法量（cm、g）				長幅比	打面※	剥片形状	出土位置	部位	備考
					長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)						
125	04002138	43-125	10-125	サヌカイト	4.1	5.5	1.4	27.7	0.7	－	横長	2～3アゼ		スクレイパー。
126	04002123	43-126	10-126	サヌカイト	5.4	4.6	1.7	21.0	1.2	－	－	6～7アゼ下部		〃
127	04002116	43-127	10-127	サヌカイト	3.7	5.3	2.0	34.1	0.7	－	－	5～6アゼ下部		〃
128	04002071	43-128	10-128	黒曜石	2.1	2.9	0.5	2.7	0.7	礫	横長	2～3アゼ		MF。
129	04002114	43-129	10-129	黒曜石	3.7	2.1	0.7	4.8	1.8	礫	縦長	5～6アゼ下部		〃
130	04002065	43-130	10-130	黒曜石	3.0	4.5	1.3	10.3	0.7	礫	横長	2～2Bアゼ中央部中層下部　一括		〃
131	04002141	43-131	10-131	黒曜石	3.5	2.8	0.9	7.9	1.3	－	－	6～7アゼ下部		RF。
132	－	－	－	サヌカイト	3.4	4.7	1.3	22.6	0.7	切子	横長	1アゼ北上部	－	RF(?)。背面左側辺に調整剥離を施したものか。
133	－	－	－	サヌカイト	4.8	7.4	1.6	51.6	0.6	礫	横長	3～4アゼ下部	－	RF(?)。左側辺（打面左側）に調整剥離を施しノッチ状に整形した可能性あり。
134	－	－	－	黒曜石	3.5	3.5	0.7	10.7	1.0	礫	1対1	2～3アゼ	－	RF(?)。右側辺に粗い調整剥離を施し鋸歯状の刃部を作出している。
135	－	－	－	サヌカイト	3.2	5.6	1.4	24.2	0.6	－	横長	2～3アゼ	－	RF。末端辺に部分的に調整剥離を施している。打面側は折れている。
136	－	－	－	サヌカイト	2.7	3.5	0.7	7.3	0.8	－	横長	2～3アゼ	－	RF。二辺に調整剥離を施している。打面と左右辺は折れている。
137	－	－	－	黒曜石	3.5	5.2	1.4	18.6	0.7	－	横長	2～3アゼ	－	RF。バルブを除去するかのように、上辺（打面）に調整剥離を施す。
138	－	－	－	黒曜石	2.2	3.8	0.9	7.0	0.6	礫	横長	2～3アゼ	－	RF。末端辺左右端と右側辺下端に調整剥離を施す。

石器番号	遺物登録番号	挿図番号	図版番号	材質	法量（cm、g）				長幅比	打面※	剥片形状	出土位置	部位	備考
					長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)						
139	－	－	－	サヌカイト	4.0	7.3	1.7	44.1	0.5	礫	横長	2～3アゼ	－	RF。左側辺三分の二、右側辺下半、末端辺右四分の一、打面（上辺）の計四箇所に調整剥離を施す。打面（上辺）の調整剥離は刃潰し的なものか。
140	－	－	－	サヌカイト	3.3	3.6	1.2	10.2	0.9	－	－	2～3アゼ	－	RF。全周に両面から粗い調整剥離を施している。石鏃未製品か。
141	－	－	－	黒曜石	1.6	3.3	0.4	1.8	0.5	－	横長	2～3アゼ上部貝層	－	RF。末端辺の一部に調整剥離を施す。打面側は折れている。
142	－	－	－	黒曜石	2.5	3.9	1.1	12.0	0.6	－	横長	2～3アゼ貝層下部	－	RF。末端辺に調整剥離を施す。打面側は折れている。
143	－	－	－	黒曜石	3.8	3.8	1.4	9.7	1.0	－	1対1	5～6アゼ下部	－	RF。二辺に調整剥離を施しノッチ状に整形している。
144	－	－	－	サヌカイト	3.1	2.4	0.8	6.7	1.3	平坦	縦長	5～6アゼ下部	－	RF(?)。左側辺中位に部分的に調整剥離を施したものか。
145	－	－	－	黒曜石	2.1	2.1	0.8	4.3	1.0	礫	1対1	5～6アゼ下部	－	RF。末端辺の一部に調整剥離を施す。刃角は大きく掻器的。
146	－	－	－	黒曜石	3.5	3.3	1.1	12.2	1.1	平坦	縦長	2～2Bアゼ中央部 中層下部　一括	－	RF。末端辺と左側辺に部分的に調整剥離を施す。
147	－	－	－	黒曜石	1.7	4.4	1.4	10.4	0.4	礫	横長	2～2Bアゼ中央部 中層下部　一括	－	RF。上辺（打面）及び右側辺に、部分的に調整剥離を施す。
148	－	－	－	サヌカイト	4.0	3.0	0.7	10.9	1.3	－	縦長?	2～2Bアゼ中央部 中層下部　一括	－	RF。二辺に部分的に調整剥離を施す。打面側は折れている。
149	－	－	－	黒曜石	2.2	2.7	0.7	3.3	0.8	－	横長?	2～2Bアゼ中央部 中層下部　一括	－	RF。右側辺中位に調整剥離を施しノッチ状に整形している。打面側は折れている。
150	－	－	－	黒曜石	1.4	2.8	1.1	3.1	0.5	礫?	横長	2～2Bアゼ中央部 中層下部　一括	－	RF。縁辺に調整剥離を施しノッチ状に整形している。
151	－	－	－	サヌカイト	1.9	3.6	0.7	6.3	0.5	－	横長?	2～2Bアゼ中央部 中層下部　一括	－	RF。左側辺に調整剥離を施しノッチ状に整形している。打面側は折れている。
152	－	－	－	黒曜石	3.2	2.1	0.7	3.5	1.5	礫?	縦長	6～7アゼ下部	－	RF。右側辺上位と末端辺に調整剥離を施しノッチ状に整形している。

石器番号	遺物登録番号	挿図番号	図版番号	材質	法量（cm、g）				長幅比	打面※	剥片形状	出土位置	部位	備考
					長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)						
153	－	－	－	サヌカイト	3.6	3.8	1.4	12.9	0.9	礫	横長	1アゼ北上部	－	MF。左側辺に微細な剥離がみられる。
154	－	－	－	黒曜石	3.6	1.8	0.8	4.1	2.0	礫	縦長	3～4アゼ上部	－	MF。左側辺に微細な剥離がみられる。
155	－	－	－	サヌカイト	3.8	4.3	1.4	11.0	0.9	－	横長	3～4アゼ上部	－	MF。末端辺に微細な剥離がみられる。打面側は折れている。
156	－	－	－	黒曜石	3.6	2.2	0.4	2.6	1.6	礫	縦長	3～4アゼ上部	－	MF。右側辺に微細剥離がみられる。
157	－	－	－	サヌカイト	2.8	5.5	2.0	28.6	0.5	－	横長?	6～7アゼ	－	MF。断面三角形を呈する剥片の鋭い稜上に微細な剥離がみられる。
158	－	－	－	サヌカイト	3.0	5.7	0.8	12.6	0.5	－	横長	2～3アゼ、3～4アゼ上部	－	MF。末端辺に微細な剥離がみられる。打面側は折れている。
159	－	－	－	サヌカイト	4.4	3.4	1.0	12.0	1.3	線	縦長	2～2Bアゼ中央部中層一括（貝群内）	－	MF。左側辺に微細な剥離がみられる。
160	－	－	－	サヌカイト	4.3	4.0	0.8	11.8	1.1	－	縦長?	2～2Bアゼ北半部中層下部一括	－	MF。右側辺に微細な剥離がみられる。
161	－	－	－	サヌカイト	4.4	5.6	1.1	20.7	0.8	平坦	横長	2～3アゼ	－	MF。右側辺に微細な剥離がみられる。
162	－	－	－	黒曜石	2.8	3.0	0.5	3.8	0.9	礫or平坦	横長	2～3アゼ	－	MF。末端辺および左側辺に微細な剥離がみられる。右側辺は礫面。打面は自然に形成された剥離面を利用した可能性有り。
163	－	－	－	黒曜石	3.4	3.5	0.7	8.0	1.0	礫	1対1	2～3アゼ	－	MF。末端辺に微細な剥離がみられる。
164	－	－	－	黒曜石	3.0	2.8	1.3	7.1	1.1	礫	縦長	2～3アゼ	－	MF。打面を除く鋭い縁辺に微細な剥離がみられる。
165	－	－	－	黒曜石	3.7	3.0	1.0	10.9	1.2	礫	縦長	2～3アゼ	－	MF。右側辺に微細な剥離がみられる。打面と末端は礫面。
166	－	－	－	黒曜石	3.7	4.4	0.7	8.3	0.8	礫	横長	2～3アゼ	－	MF。背面は礫面に覆われている。左側辺と末端辺に微細な剥離がみられる。

石器番号	遺物登録番号	挿図番号	図版番号	材質	法量（cm、g）				長幅比	打面※	剥片形状	出土位置	部位	備考
					長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)						
167	－	－	－	黒曜石	3.9	3.6	0.8	11.9	1.1	礫	縦長	2～3アゼ	－	MF。右側辺に微細な剥離がみられる。
168	－	－	－	黒曜石	3.3	2.8	0.8	6.2	1.2	礫	縦長	2～3アゼ	－	MF。両側辺に微細な剥離がみられる。
169	－	－	－	サヌカイト	2.2	3.9	0.9	4.1	0.6	礫	横長	2～3アゼ	－	MF。右側辺に微細な剥離がみられる。
170	－	－	－	黒曜石	2.9	3.6	0.7	7.9	0.8	礫	横長	2～3アゼ	－	MF。打面は風化した剥離面を利用。末端辺に微細な剥離がみられる。
171	－	－	－	サヌカイト	3.7	3.9	0.8	10.3	0.9	礫	横長	2～3アゼ	－	MF。左側辺と末端辺に微細な剥離がみられる。
172	－	－	－	黒曜石	4.8	3.5	1.3	19.8	1.4	礫	縦長	2～3アゼ	－	MF。右側辺上半に微細な剥離がみられる。背面の剥離面構成から90°の打面転移を行って本剥片を剥離したことがわかる（本剥片剥離以前に小型横長剥片を剥離）。
173	－	－	－	黒曜石	3.4	2.7	0.9	9.6	1.3	礫	縦長	2～3アゼ	－	MF。末端辺に微細な剥離がみられる。背面の剥離面構成から本剥片剥離以前に本剥片と同様の縦長剥片を剥離していることがわかる。直方体の角礫を縦に分割するように連続的に縦長剥片を生産したものであろう。
174	－	－	－	黒曜石	3.7	4.0	1.1	14.9	0.9	礫	横長	2～2Bアゼ中央部 南側中層下　一括	－	MF。打面を除く三辺に微細な剥離がみられる。
175	－	－	－	黒曜石	4.1	2.2	0.8	5.8	1.9	礫	縦長	4～5アゼ上部	－	MF。左側辺に微細な剥離がみられる。
176	－	－	－	黒曜石	3.4	2.6	0.6	5.9	1.3	礫	縦長	2～2Bアゼ北半部 下層下部　一括	－	MF。右側辺に微細な剥離がみられる。
177	－	－	－	黒曜石	4.3	2.5	0.8	6.9	1.7	礫	縦長	2～2Bアゼ中央部 南側中層下　一括	－	MF。左側辺に微細な剥離がみられる。
178	－	－	－	サヌカイト	4.2	5.4	0.6	11.5	0.8	－	横長	2～2Bアゼ西北半部 下層上部　一括	－	MF。左側辺に微細な剥離がみられる。打面側は折れている。
179	－	－	－	黒曜石	4.5	2.5	0.9	7.0	1.8	点	縦長	2～3アゼ上部貝層	－	MF。両側辺に微細な剥離がみられる。
180	－	－	－	黒曜石	3.2	2.1	0.8	5.6	1.5	礫	縦長	2～3アゼ上部貝層	－	MF。両側辺に微細な剥離がみられる。

石器番号	遺物登録番号	挿図番号	図版番号	材質	法量（cm、g）				長幅比	打面※	剥片形状	出土位置	部位	備考
					長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)						
181	－	－	－	サヌカイト	3.6	6.0	1.3	26.5	0.6	礫	横長	2～3アゼ上部貝層	－	MF。末端辺に微細な剥離がみられる。
182	－	－	－	黒曜石	4.5	3.6	0.8	9.7	1.3	礫	縦長	2～3アゼ上部貝層	－	MF。左側辺に微細な剥離がみられる。剥片素材石核（残核）を再利用したものか。
183	－	－	－	サヌカイト	4.2	2.9	0.9	6.4	1.4	－	縦長	2～3アゼ上部貝層	－	MF。末端辺に微細な剥離がみられる。打面部は折れている。
184	－	－	－	黒曜石	3.9	3.8	0.9	10.6	1.0	－	1対1	2～3アゼ上部貝層	－	MF。左側辺に微細な剥離がみられる。上部（打面）は折れている。
185	－	－	－	サヌカイト	2.6	4.0	0.6	6.2	0.7	－	横長	2～3アゼ上部貝層	－	MF。末端辺に微細な剥離がみられる。打面側は折れている。
186	－	－	－	黒曜石	3.4	3.6	0.3	10.0	0.9	平坦	横長	5～6アゼ下部	－	MF。両側辺に微細な剥離がみられる。
187	－	－	－	黒曜石	5.6	3.5	1.0	17.3	1.6	礫	縦長	5～6アゼ下部	－	MF。一縁辺に微細な剥離がみられる。
188	－	－	－	黒曜石	3.1	2.0	0.8	4.8	1.6	礫	縦長	2～2Bアゼ中央部 中層下部　一括	－	MF。右側辺に微細な剥離がみられる。
189	－	－	－	黒曜石	2.6	1.9	0.7	1.8	1.4	礫	縦長	2～2Bアゼ中央部 中層下部　一括	－	MF。両側辺に微細な剥離がみられる。
190	－	－	－	黒曜石	4.4	3.8	0.7	11.7	1.2	礫?	縦長	2～2Bアゼ中央部 中層下部　一括	－	MF。両側辺に微細な剥離がみられる。
191	－	－	－	黒曜石	4.3	2.6	0.9	8.0	1.7	礫	縦長	2～2Bアゼ中央部 中層下部　一括	－	MF。左側辺上半に微細な剥離がみられる。
192	－	－	－	サヌカイト	4.3	4.1	0.7	15.7	1.0	礫	1対1	2～2Bアゼ中央部 中層下部　一括	－	MF。末端辺に微細な剥離がみられる。
193	－	－	－	黒曜石	4.2	4.8	1.2	16.8	0.9	礫	横長	6～7アゼ下部	－	MF。右側辺に微細な剥離がみられる。
194	－	－	－	サヌカイト	4.4	4.4	0.9	16.4	1.0	線	1対1	6～7アゼ下部	－	MF。両側辺に微細な剥離がみられる。

石器番号	遺物登録番号	挿図番号	図版番号	材質	法量（cm、g）				長幅比	打面※	剥片形状	出土位置	部位	備考
					長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)						
195	－	－	－	サヌカイト	5.2	4.3	1.3	21.9	1.2	礫	縦長	6～7アゼ下部	－	MF。末端辺に微細な剥離がみられる。
196	－	－	－	黒曜石	4.0	2.8	0.8	7.8	1.4	礫	縦長	6～7アゼ下部	－	MF。両側辺に微細な剥離がみられる。背面の剥離面構成から、本剥片剥離以前に縦長剥片を連続的に剥離したことがわかる。
197	－	－	－	黒曜石	3.8	2.8	0.7	6.8	1.4	礫	縦長	6～7アゼ下部	－	MF。左側辺上半に微細な剥離がみられる。
198	－	－	－	黒曜石	4.1	2.4	0.8	5.5	1.7	点	縦長	6～7アゼ下部	－	MF。左側辺に微細な剥離がみられる。
199	－	－	－	サヌカイト	4.4	4.4	1.2	20.7	1.0	礫?	1対1	1アゼ北上部	－	R･MF。折れ面に調整剥離を施す。また鋭い縁辺には微細な剥離がみられる。
200	－	－	－	サヌカイト	8.5	4.0	1.2	41.3	2.1	礫	縦長	2～3アゼ上部	－	R･MF。左側辺に粗い調整剥離を施す。右側辺に微細な剥離がみられる。
201	－	－	－	黒曜石	4.6	4.1	1.7	27.6	1.1	－	縦長	2～3アゼ	－	R･MF。打面（上辺）と左側辺上半に粗い調整剥離を施して鋸歯状の刃部を作出。右側辺の一部に微細な剥離がみられる。残核を転用した可能性あり。
202	－	－	－	サヌカイト	5.0	5.2	2.3	27.7	1.0	礫	1対1	2～3アゼ	－	R･MF。側辺の一部に調整剥離。末端辺に微細な剥離がみられる。
203	－	－	－	黒曜石	3.7	4.5	0.5	7.8	0.8	－	横長	2～3アゼ	－	R･MF。横長剥片の右側辺上半に微細な剥離がみられ、下半の一部には粗い調整剥離を施してノッチ状に整形している。打面部は折れている。
204	－	－	－	黒曜石	2.5	2.7	0.8	3.8	0.9	平坦	横長	2～3ｱｾﾞ貝層下部	－	R･MF。長幅比がほぼ同じ剥片。右側辺に調整剥離を施す。左側辺に微細な剥離がみられる。
205	－	－	－	サヌカイト	3.8	6.0	1.4	18.1	0.6	－	横長	2～2Bアゼ中央部 中層下部　一括	－	R･MF。二辺に部分的に調整剥離を施す。一辺には微細な剥離がみられる。
206	－	－	－	黒曜石	4.1	3.7	0.9	8.5	1.1	平坦	縦長	6～7アゼ下部	－	R･MF。左側辺上半に調整剥離を施す。右側辺上半に微細な剥離がみられる。
207	－	－	－	サヌカイト	2.5	4.4	1.0	9.9	0.6	礫	横長	2～2Bアゼ西北半部 下層上部　一括	－	スクレイパー。末端辺に粗い調整剥離を施し刃部を作出。
208	－	－	－	サヌカイト	3.9	2.1	1.3	8.1	1.9	－	－	2～3アゼ貝層下部	－	スクレイパー。折れ面を除く三辺に調整加工を施す。調整加工はやや粗く鋸歯状を呈する。何らかの未製品の可能性有り。

石器番号	遺物登録番号	挿図番号	図版番号	材質	法量（cm、g）				長幅比	打面※	剥片形状	出土位置	部位	備考
					長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)						
209	－	－	－	サヌカイト	5.4	5.3	1.3	42.3	1.0	－	－	2Cアゼ７層	－	二辺に調整剥離がみられるが、刃部調整としてはやや粗い。縁辺の一部に潰れが見られ、裁断面も形成されていることから楔形石器として捉えられる。

砥石

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	石材	法量（cm、g）				出土位置	部位	備考
					長	最大幅	最大厚	重量			
210	04002136	36-210	9-210	砂岩	(8.7)	(7.9)	5.8	(376.7)	5～6アゼ下部		砥石目：100番　RA2の使用痕あり
211	04002104	36-211	9-211	珪質凝灰岩	(9.3)	(5.4)	1.8	(70.0)	5～6アゼ上		砥石目：1200番
212	04002133	36-212	9-212	砂岩	(10.0)	(7.0)	(5.8)	(538.8)	4～5アゼ上部		砥石目：180番
213	04002111	36-213	9-213	砂岩	(8.2)	(4.0)	(2.5)	(130.7)	5～6アゼ下部		砥石目：180番　A1の使用痕あり
214	04002062	36-214	9-214	安山岩	6.7	3.5	2.9	117.8	1アゼ北上部		－
215	04002125	36-215	9-215	砂岩	(6.3)	(5.5)	(3.9)	(186.3)	不明		砥石目：180番
216	04002081	37-216	9-216	砂岩	6.4	5.4	2.1	(72.0)	2～3アゼ上部		砥石目：240番
217	04002106	37-217	9-217	珪質凝灰岩	(6.2)	(4.5)	1.9	(46.2)	5～6アゼ上部		砥石目：1200番
218	04002080	37-218	9-218	砂岩	(5.2)	(4.3)	1.3	(31.1)	2～3アゼ上部		砥石目：240番
219	04002086	37-219	9-219	砂岩	(5.1)	(3.4)	2.5	(42.8)	2～3アゼ上部貝層		砥石目：240番　RA2の使用痕あり
220	－	－	－	花崗質砂岩	4.4	4.4	2.6	58.9	7アゼ南上部	－	サンドペーパーの60番に相当する荒砥。3面を砥面として使用。表面の色調は白色。
221	－	－	－	砂岩	(5.8)	(5.0)	1.4	(62.1)	2～3アゼ上部	－	砥石以外の用途に使われた可能性もあり。

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	石　材	法　量（cm、g）				出土位置	部　位	備　考
					長	最大幅	最大厚	重　量			
222	－	－	－	アプライト	(5.0)	(1.4)	(1.9)	(16.7)	4～5アゼ下部	－	小破片。残存する面のうち一面のみを使用。磨石の可能性もあり。表面の色調は赤褐色。
223	－	－	－	砂岩	(9.5)	(6.0)	(1.8)	(95.9)	2～2Bアゼ中央部中層下部一括	－	サンドペーパーの180番に相当する中砥。一部のみ砥面が残存。表面の色調は赤褐色。

石核

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	材　質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	長幅比	打面※	剥片形状	出土位置	部　位	備　考
225	－	－	11-225	黒曜石	4.1	3.4	1.7	22.2	－	－	－	2～3アゼ	－	作業面以外は礫面に覆われている。作業面を固定して礫の周囲を巡るように求心状に小型の不定形剥片を剥離している。打面調整は行わず平坦な礫面を打面とする。
226	－	－	11-226	黒曜石	6.4	4.9	1.5	45.8	－	－	－	2～3アゼ	－	横長剥片を剥離。作業面を固定して180°の打面転移を行う。打面は礫面と風化剥離面を利用。
227	－	－	11-227	黒曜石	3.5	2.9	1.8	17.3	－	－	－	2～3アゼ	－	小型不定形横長剥片を剥離。作業面を固定して求心状に剥離。
228	－	－	11-228	黒曜石	3.9	3.4	2.3	22.6	－	－	－	2～3アゼ	－	小型横長剥片を剥離。
229	－	－	11-229	黒曜石	2.7	1.5	1.2	6.8	－	－	－	2～2Ｂアゼ間中央部南側中層下一括	－	小型の不定形剥片を連続的に剥離。打面を固定（単設打面）。
230	－	－	11-230	黒曜石	3.9	2.5	2.8	24.7	－	－	－	2～3アゼ上部貝層	－	小型不定形剥片を剥離。
231	－	－	11-231	黒曜石	4.3	3.2	1.5	15.7	－	－	－	2～2Ｂアゼ間中央部南側中層下一括	－	小型の不定形剥片を剥離。打面を固定（単設打面）。
232	－	－	11-232	黒曜石	4.2	2.3	1.4	12.1	－	－	－	2～3アゼ上部貝層	－	小型の角礫を素材とし、平坦な礫面を打面として、作業面を固定して周囲を巡るように求心状に小型不定形剥片を剥離。
233	－	－	11-233	黒曜石	6.1	5.4	2.5	75.9	－	－	－	2～2Ｂアゼ間中央部中層下部一括	－	作業面を固定して、礫の周囲を巡るように不定形剥片を剥離。
234	－	－	11-234	黒曜石	4.5	4.1	2.0	27.9	－	－	－	5～6アゼ下部	－	不定形剥片（横長）を剥離。作業面を固定して、周囲の平坦な礫面を打面として求心状に剥離を進める。
235	－	－	11-235	黒曜石	3.0	2.7	1.4	9.7	－	－	－	2～2Ｂアゼ間中央部中層下部一括	－	小型不定形剥片（横長）を剥離。作業面を固定して、周囲の平坦な礫面を打面として求心状に剥離を進める。

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	材　　質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	長幅比	打面※	剥片形状	出土位置	部　　位	備　　考
236	－	－	11-236	黒曜石	4.6	3.7	2.1	25.0	－	－	－	6～7アゼ下部	－	打面を固定して、小型不定形（縦長）剥片を連続的に剥離。
237	－	－	11-237	黒曜石	4.4	3.1	1.8	25.6	－	－	－	6～7アゼ下部	－	直方体に近い小型角礫の、平坦な礫面を打面として、周囲（二分の一程度）を巡るように打点を移動させながら小型不定形剥片を剥離。
238	－	－	11-238	サヌカイト	4.9	3.8	1.2	24.6	－	－	－	2～3アゼ	－	剥片素材の石核。礫面および先行する剥離面を打面として、小型不定形剥片（横長）を求心状に剥離。
239	－	－	11-239	サヌカイト	5.9	3.2	2.4	43.1	－	－	－	2～3アゼ貝層下部	－	小型の剥片を剥離。剥片素材。礫面を打面として利用。
240	－	－	11-240	サヌカイト	6.9	4.6	1.6	64.1	－	－	－	2～3アゼ	－	剥片素材の石核と考えられ、礫面および先行する剥離面を打面として、小型不定形横長剥片を剥離。
241	－	－	11-241	サヌカイト	7.4	7.2	2.6	102.0	－	－	－	2～3アゼ上部貝層	－	剥片素材の石核。不定形横長剥片を求心状に剥離。先行する剥離面を打面として利用し、両面調整石器状の残核形状を呈する。
242	－	－	11-242	サヌカイト	4.4	3.8	1.9	36.1	－	－	－	2～2Ｂアゼ間中央部中層下部一括	－	打面転移を繰り返しながら不定形（横長）剥片を剥離。礫面および先行する剥離面を打面とする。
243	－	－	11-243	サヌカイト	4.0	3.5	2.0	24.4	－	－	－	6～7アゼ下部	－	礫面を打面として固定し（単設打面）、不定形縦長剥片を連続的に剥離している。
244	－	－	11-244	サヌカイト	6.4	4.5	2.4	68.2	－	－	－	2～2Ｂアゼ間中央部中層下部一括	－	不定形剥片（横長）を剥離。両面で先行する剥離面を打面として利用し、求心状に剥離を進める。両面調整石器状を呈する。
245	－	－	11-245	サヌカイト	5.9	4.6	1.4	33.1	－	－	－	2～2Ｂアゼ間中央部中層下部一括	－	剥片素材石核。小型不定形剥片（横長）を剥離。礫面および先行する剥離面を打面とする。
246	－	－	－	サヌカイト	4.5	4.1	3.0	57.7	－	－	－	1アゼ北上部	－	－
247	－	－	－	サヌカイト	6.0	3.5	2.7	60.6	－	－	－	2～3アゼ上部	－	熱を受けて剥離した可能性あり。
248	－	－	－	黒曜石	4.9	4.3	1.2	18.9	－	－	－	2～3アゼ	－	不定型な礫。小型横長の剥離面が一枚みられる。石質確認時の試し割りか？
249	－	－	－	黒曜石	3.5	2.6	1.4	13.1	－	－	－	2～3アゼ	－	小型亜角礫を素材とする。小型の横長剥片を剥離している。平坦な礫面を打面とし、作業面を固定して90°の打面転移を行っている。

石器番号	登録番号	挿図番号	図版番号	材　質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	長幅比	打面※	剥片形状	出土位置	部　位	備　考
250	−	−	−	サヌカイト	7.8	5.2	2.7	95.8	−	−	−	2〜3アゼ	−	礫面および先行する剥離面を打面として、縁辺を巡るように不定形横長剥片を剥離。
251	−	−	−	黒曜石	3.1	2.7	2.6	15.8	−	−	−	2〜3アゼ	−	明瞭な打点が認められない。熱を受けて割れたものか。
252	−	−	−	サヌカイト	7.3	4.3	2.8	92.3	−	−	−	2〜3アゼ	−	末端辺は潰れており、両極打法を用いて剥片を剥離した可能性がある。
253	−	−	−	サヌカイト	6.0	3.9	1.3	28.7	−	−	−	5〜6アゼ下部	−	剥片素材石核。
254	−	−	−	黒曜石	4.2	2.7	1.8	12.8	−	−	−	2〜2Ｂアゼ間中央部中層下部一括	−	−
255	−	−	−	サヌカイト	5.5	3.7	1.9	34.8	−	−	−	6〜7アゼ下部	−	残核形状は両面調整石器状を呈する。
256	−	−	−	サヌカイト	4.9	2.5	2.2	16.5	−	−	−	6〜7アゼ下部	−	先行する剥離面を打面として、打面転移を繰り返しながら剥離を進める。

註

・法量の数値に（　）を加えているものは残存値を示しており、＜＞を加えているものは復元値を示している。

・法量表では剥片（98点）・原石（2点）・軽石（5点）・不明石器（9点）に関してのデータは省略している。

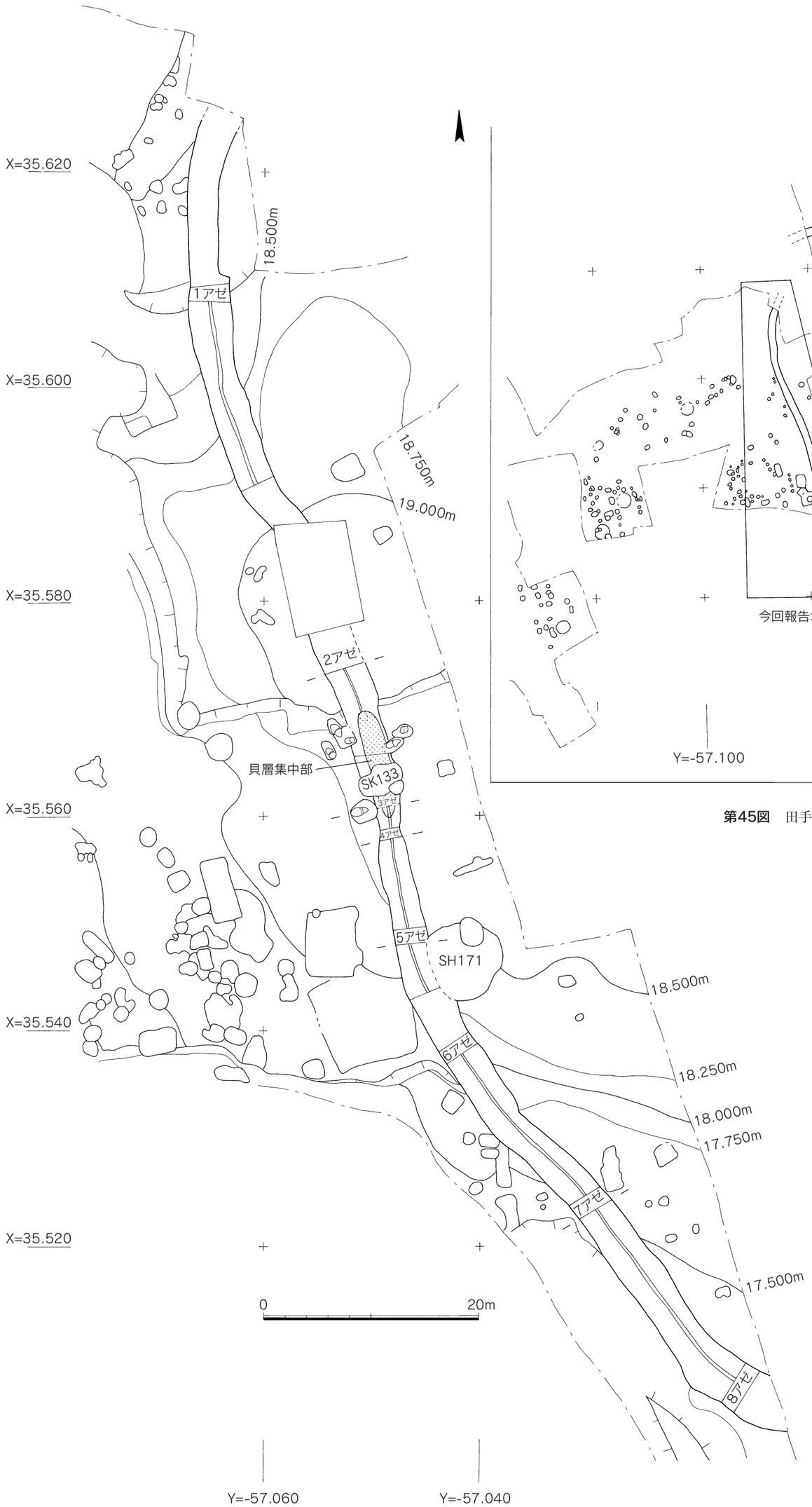
・出土位置に関しては遺物取り上げ時の注記をそのまま記載している。出土位置が不明なものはSD0001としか注記がなかったものである。

・出土位置中でNo〇となっているものは遺物取り上げ時の取り上げ番号である。

・石庖丁の計測に関しては武末純一氏（1987）を参考にした。

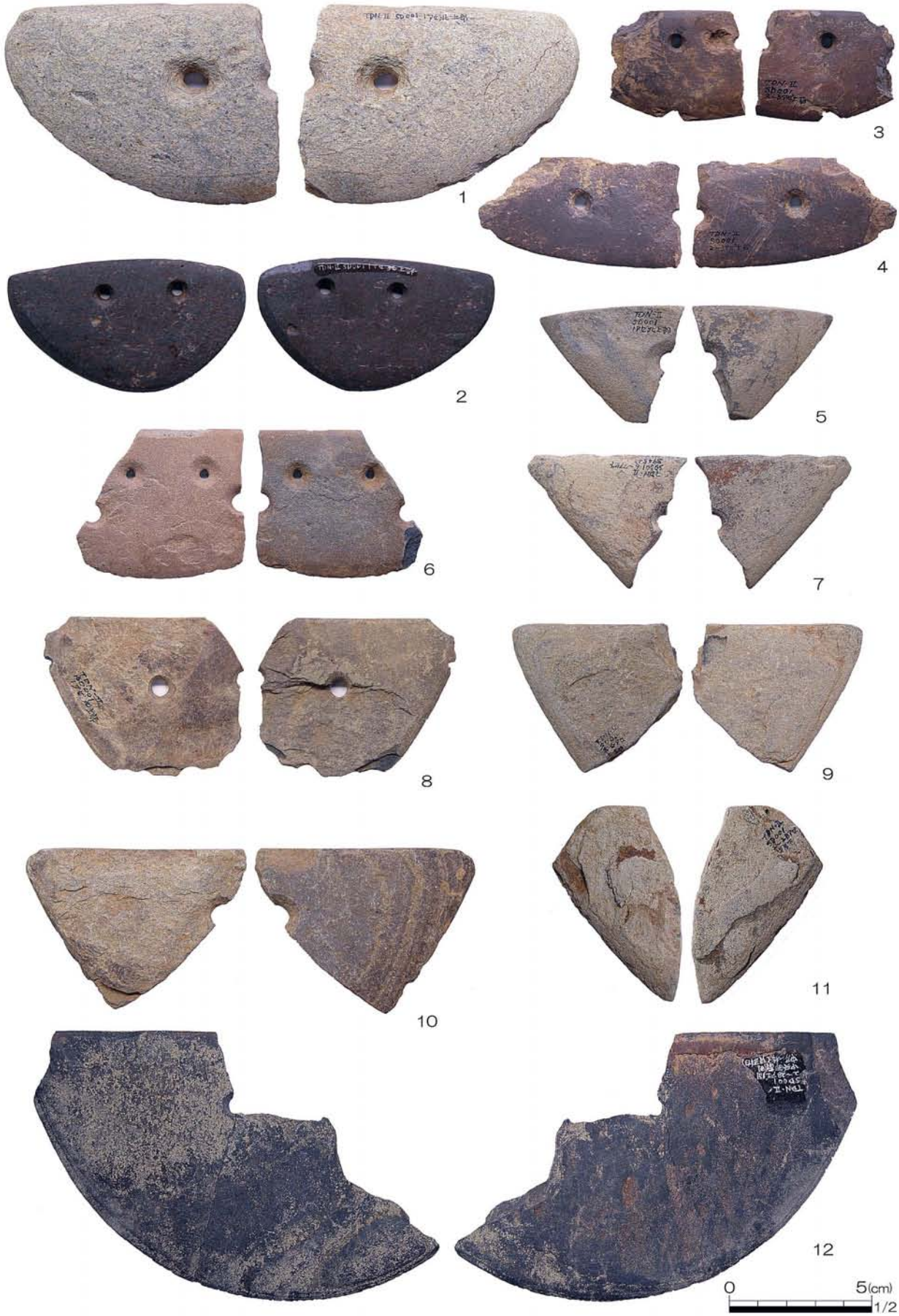
※打面形状は、礫：礫（自然面）打面、点：点打面、平坦：線打面、平坦：平坦打面、切子：切子打面である。

第45図　田手二本黒木地区Ⅱ区前期環壕位置図（1/2,000）



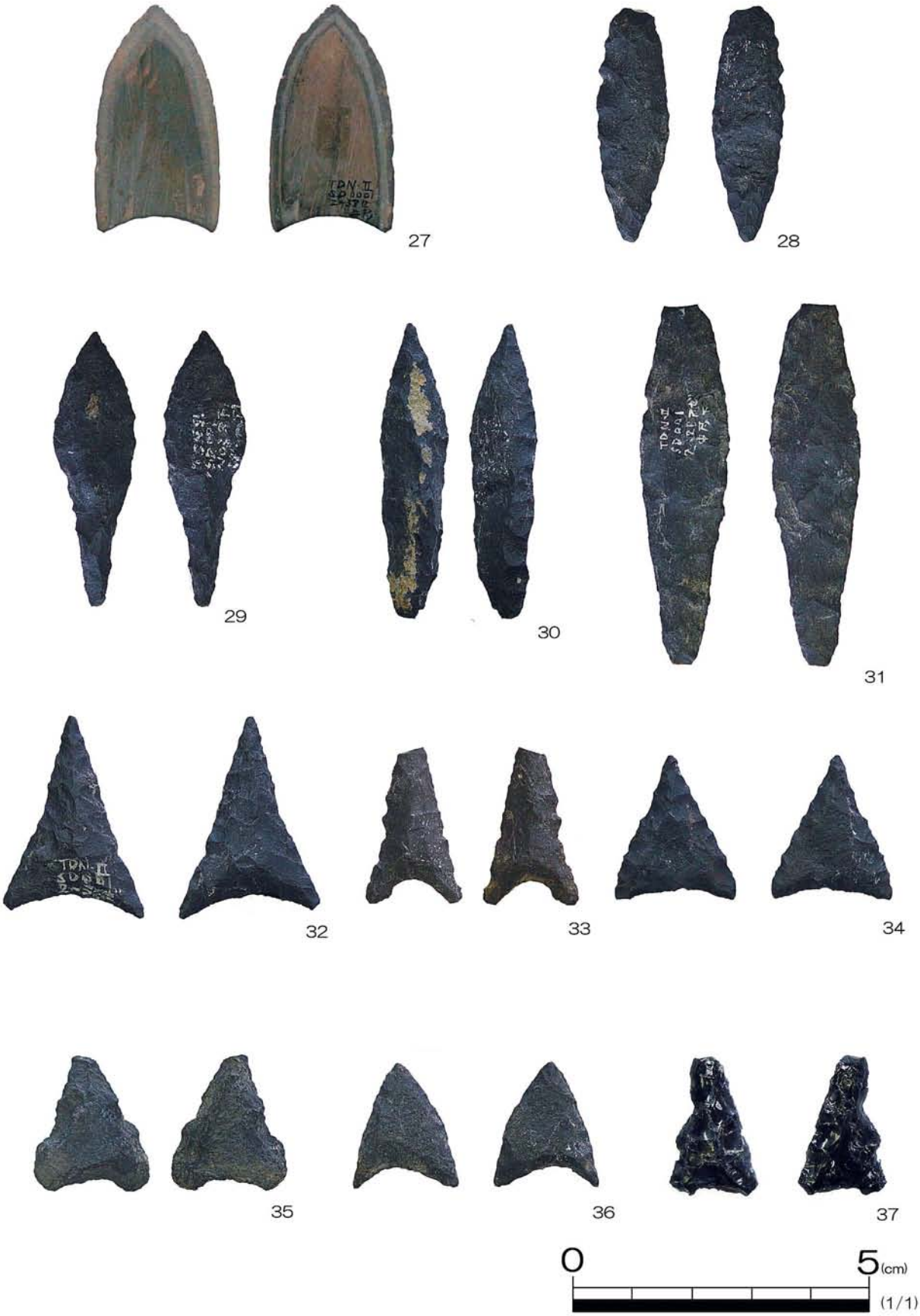
第46図　SD0001環壕付近遺構配置図（1/400）

図　版

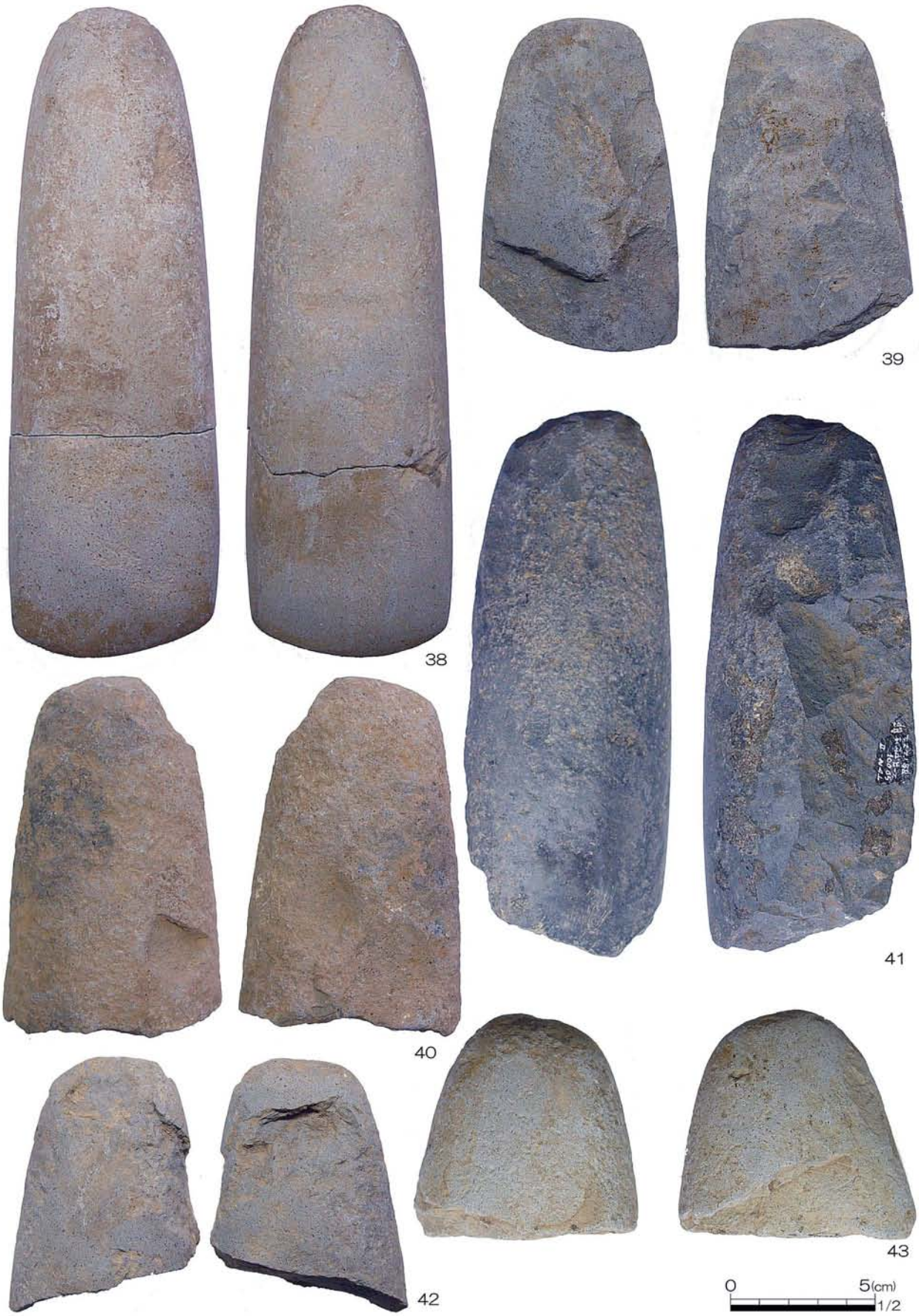


SD0001環壕出土石庖丁①

SD0001環壕出土石庖丁②・石鎌・石剣



SD0001環壕出土磨製石鏃・打製石鏃

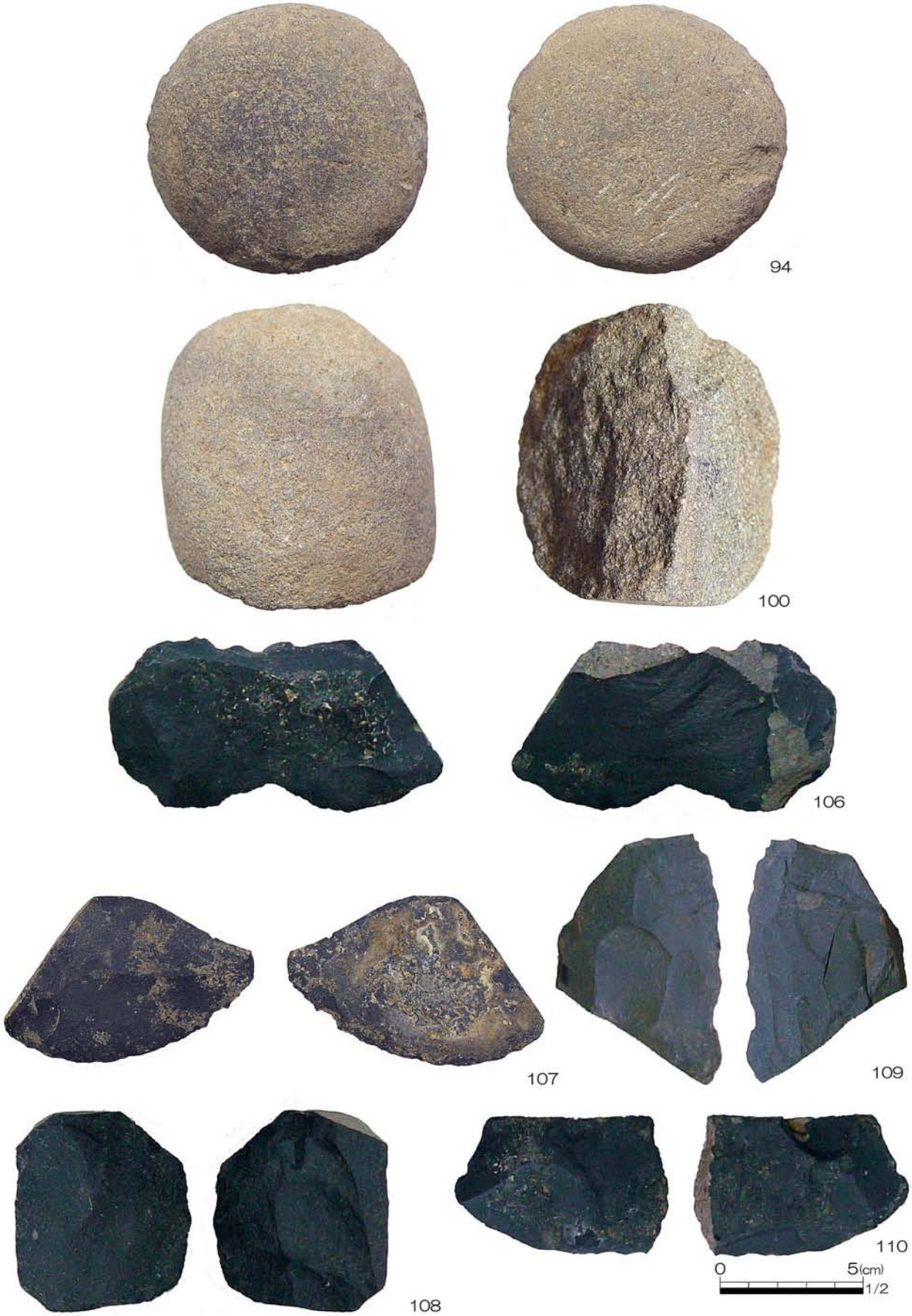


SD0001環壕出土太形蛤刃石斧①

SD0001環壕出土太形蛤刃石斧②

SD0001環壕出土太形蛤刃石斧③・縄文形石斧

SD0001環壕出土柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・紡錘車



SD0001環壕出土磨石・敲石・スクレイパー

SD0001環壕出土砥石

SD0001環壕出土剥片石器

SD0001環壕出土石核

佐賀県文化財調査報告書第163集

吉野ヶ里遺跡

－田手二本黒木地区弥生時代前期環壕出土の土器と石器－

平成17年2月25日印刷
平成17年2月28日発行

編集　佐賀県教育委員会
発行　佐賀市城内一丁目１番地59号
印刷　（株）三光
佐賀県伊万里市大坪町乙4161-1